

語り継ぐ 19

「結」 未災者から未災者へ

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科 19 期生

題名	名前	頁
未来へ向かって	緋田 脩人	1 ～
語り継ぐ	石野 巧	5 ～
忘れない	伊藤 亮斗	9 ～
未災者の語り継ぎ	岩尾 正貴	13 ～
メッセージ	大崎 きらり	17 ～
これからを生きる	角井 歩樹	21 ～
未災者として	川越 彩生	25 ～
防災への第一歩	後藤 芽衣	29 ～
未災者だから分かること	小西 うらら	33 ～
「あの日」から未来へ	小西 甚	37 ～
語り継ぐ	小村 翔大	41 ～
私にできること	塩原 愛渚	45 ～
「未来を生きる私たち」	塩見 勇人	49 ～
次世代へのバトン	白壁 菜乃葉	53 ～
語り継ぐ	瀬合 慶史	57 ～
自分にできること	高橋 茉那	61 ～
語り継ぐ	武田 優	65 ～
語り継ぐ	竹林 剛	69 ～
Share	谷 星良	73 ～
未来のために	津郷 優馬	77 ～
私たちにできること	坪田 莉瑚	81 ～
未災者である私たちにできること	永井 はるひ	85 ～
「つなぐ」	長尾 一千花	89 ～
神戸で生まれ育った者として	中田 愛香	93 ～
「多種多様な語り継ぎ」	中西 剛徳	97 ～
「様々な想い」	中野 千愛	101 ～
大切な「わ」	永松 采和	105 ～
繋ぐ思い	橋本 夢翔	109 ～
次へ	藤澤 和	113 ～
次の世代に語り継ぐ	藤田 恭真	117 ～
3年間の私	藤原 匠	121 ～
語り継ぐ	松浦 幸汰	125 ～
未来に私が語り継ぐ	松浦 結衣	129 ～
防災に関わること	松若 果歩	133 ～
「つないでいく」	柳田 愛実	137 ～
つなぐ	山口 夢摘	141 ～
未災者にできること	山村 俊介	145 ～
過去から未来へ	山本 翔一	149 ～
行動してみる	山本 陽輝	153 ～

未来へ向かって

緋田 脩人

1 はじめに

阪神・淡路大震災が起きてから 28 年という月日が経った。今は私たちのような阪神・淡路大震災を経験していない人が多くなっている。しかし今後南海トラフ巨大地震などの災害によって何らかの被害を受ける可能性がある。その時に過去の教訓を生かす為に、そして阪神・淡路大震災を風化させない為に語り継ぐことが重要である。

2 阪神・淡路大震災当時の母の話

母は当時、神戸市長田区に住んでいた。寝ている時にゴーという音が聞こえて目を覚ました。その直後今まで味わったことのない揺れを感じた。後に、直下型地震で下から突き上げる揺れだったなどと言われるがその時は分からなかった。横のタンスが倒れているのに気づき布団に潜った。揺れの中、隣で寝ていた父が心配しすぐに駆けつけてくれた。その時近隣から「助けてください」という声が聞こえ布団から出た。部屋中のガラスが割れていることに気づき、ちょうど横に置いていたスノーボード用のブーツを履き、階段で 1 階に降りた。その階段は歪んでいた。1 階に降りると部屋の中はタンスやテーブルが散乱していた。そのまま外に出た時に周りの家が倒壊しているのを見て驚いた。生き埋めになっている人もいたので、近所の人たちみんなで力を合かし助け出した。助け出すのに時間がかかり最後の人を助け出す頃にはお昼前になっていた。その頃ニュースでもよく出ていた菅原市場からの飛び火が家の近くまで近づいていて、昼過ぎには全焼してしまった。火が回ってくるまでに少しでも家の荷物を出そうとしたが余震が続いたため倒壊の恐れもあるということで玄関近くの服などしか出せず大切な物をたくさん失った。特に子供のころの写真などが無くなったことはとても残念に思う。その後避難しようと近くの小学校に行ったものの、人が多すぎて入れず、公園で焚火をしながら過ごした。夜に中央区に住む親戚と連絡がつき迎えに来てもらい避難させてもらった。中央区は長田区とは違い倒壊している家も少なく電気も通っていたが、ガスや水道は通っていなかった。親戚の家に着きテレビでニュースを見て、地震の規模の大きさを初めて知った。その後もしばらくの間余震が続いていて家で寝ることが出来ずしばらくみんなで車内にて寝た。

その後、職場の人が食べ物や衣類などを運んでくれてとてもうれしかったことを覚えている。失ったものは、たくさんあるがたくさんの死者が出た中で幸いなことに家族や友人を失わなかっただけでも今思えばよかったと思う。

3 母の話を聞いて

母が長田区に住んでいて家が全焼したというのは聞いたことがあったが、こんなにも詳しく母の阪神・淡路大震災当時の話を聞いたのは初めてだった。1 番被害が大きかった地区の 1 つである長田区で被災した母の話をもっと聞いておけばよかったと思う。母の話を聞いて一番印象に残っているのは私の祖父が家族を守るためにすぐに助けに行ったことだ。まず自分の命を守ることで精一杯の状況の中、家族のためにすぐに駆けつけたのは本当にすごいと思った。とてもカッコいいと思う。私ももし、大きな地震が起きた時には家族を守るような行動ができるようになりたいと強く思うようになった。私の祖父が家族のために行動していたことがとてもカッコよくとても尊敬できる。祖父にもまた話を聞いてみたい。また家が焼けてしまうのは本当にショックだろうなと体験していない私でも話を聞くだけで強く感じた。今回母の話を聞いたけれど、また身近にいる今回話を聞けなかった父や祖父、祖母にも話を聞きたいと思った。

4 環境防災科

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは 2 つある。1 つは中学 3 年生のころの将来の夢が消防士であり、環境防災科に入り消防や防災について学びたいと思ったことだ。もう 1 つはニュースなどで南海トラフ巨大地震の情報を知って、将来大きな確率で起こるといわれる南海トラフ巨大地震から自分の命や大切な人の命を守るために防災について学びたいと思ったことだ。

環境防災科に入ってから約 2 か月休校となったが、休校課題では自分の家を見直すことで自分の家の良いところ、危険な所を改めて確認することができた。1 年生の「災害と人間」の授業では多くの講師

の方に来ていただき話を聞かせていただいた。阪神・淡路大震災の当時の話を聞かせていただき、その方の職業はどのようなことをしているのか、そしてどのように防災、環境と関係しているのかを知ることができた。

私がこれまでの高校生活の中で一番印象に残っているのが消防学校体験入校だ。一年生の時はまだ将来の夢が消防士だったため、とても楽しみな気持ちで消防学校体験入校の日を待っていた。当日行ってみるとそこには厳しい空気があった。消防士の方はいつもこのような訓練をしているのかと圧倒された。規律訓練では大きな声を出し、すばやく行動しないとイケなかった。午後には腕立て伏せが 50 回ほどありとてもしんどかった。想像している何倍もハードだったため、この 1 日はとても楽しかったがそれ以上にしんどかった。そして 2 年生の時は放水訓練など 1 年生の時よりもより実践的な訓練をさせて頂いた。体験したことないようなことばかりでとても楽しかった。消防学校体験をすることでどれだけ消防士の方達がすごいかを体で感じることができ、とてもいい経験になった。1 年生の時には垂水消防署の訓練の体験もすることができた。訓練の内容が難しく全く何もできなかった。このことが消防士になる夢を諦めるきっかけになった。しかし、この訓練を受けることでまた新しい夢を目指すきっかけにもなった。

5 夢と防災

(1) きっかけ

私の将来の夢は理学療法士になることだ。私は 10 年間野球を継続してきた。その 10 年間で私自身を含め怪我をした選手をたくさん見てきた。将来そういった選手の力になりたいと思い理学療法士を目指すことにした。

理学療法士を目指す 1 番のきっかけになった出来事は中学 2 年生の冬頃にある。野球の練習でジャンプをした時に、腰に違和感を覚えた。練習後は歩くだけでも腰に激痛が走ったほどだ。翌日病院へ行くと第五腰椎分離症という診断が出た。それから 3 ヶ月ほどの間リハビリに通った。その時に理学療法士の方はリハビリ中にとても親切に話しかけてくださった。怪我をして落ち込んでいた私は、励ましてくれた理学療法士の方がとてもかっこいいと思い、自分もこのようになりたいと思った。しかし、この頃はまだ消防士になることが夢だった。

そして、高校 1 年生の消防士になることを諦めた時、将来の夢を考えると中学 2 年生の時に抱いた理学療法士になる夢が浮かび上がりそれから理学療法士を目指すことになった。今ではあの時に私の体と心をケアして私を救って下さった方のようになりたいたいと思っている。

(2) 防災への関わり方

私が理学療法士になって防災とどう向き合っていくか考えた時、最初に思い付いたのが発災時にすぐに被災地に駆けつけることだ。過去に起きた熊本地震でも各地から理学療法士が熊本に向かった。私はそこで怪我をした人の治療をしたり避難所で体を動かせていない人と一緒に簡単にできる体操をしたりしていきたいと思っている。災害が影響で怪我をした人は体だけではなく心も傷ついている人が多くいると思う。そのため、私が憧れた理学療法士の方のように治療中に明るく話しかけて心のケアをしたいと思っている。

普通に何も起きていないときにも理学療法士が防災とかかわることがある。例えば、治療中に防災の話をして防災を広めることだ。他にも病院においてある機材などの安全な配置を考えることもできる。そうすることで地震が起きるなどの非常時でも、倒れにくくすることができる。そして、病院内での避難訓練の実施も挙げられる。病院内での避難訓練はあまり行われていない。それだと本当に災害が起きた時に何をすればいいかわかっていない人がたくさんいると思う。なので、私は舞子高校でジュニアリーダーが中心になって考えてくれたようなリアリティが高い避難訓練を行いたい。そうすれば災害時にも強い病院が作れると思うのでそれを目標にしたい。

6 南海トラフ巨大地震

先程私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけの 1 つであると述べた南海トラフ巨大地震の震源地と予測されている南海トラフは、100 年～200 年間隔で、今回予想されているような巨大地震が起きている。政府の地震調査委員会は、2022 年 1 月現在ではマグニチュード 8～9 の巨大地震が今後 40 年以内に 90% の確率で発生すると予測している。神戸市でも最大震度 7 が予測されていて、津波も来るであろうと予想されている。また、最大 30 メートルを超えると想定されている沿岸部もある。四国、近畿、東海などの広い範囲で被害が生じる。最悪の場合、関東から九州にかけての 30 都道府県で今まで経験したことのない

い数の建物が地震によって全壊、半壊したり火事によって焼失したりすると予測されている。地震が起きて避難する人もこれまでの災害とは比べ物にならないくらいの数になる。この人数が避難すると避難所の数が足りない可能性が考えられる。被害を受けた所の復旧費用も過去の災害よりも多くの被害額になるとされている。

被害を少しでも抑えるには防災対策が重要だ。家の耐震化や非常用持ち出し袋を用意するなどいつ災害が起きてもいいように準備しておく必要がある。そして次にハザードマップの確認も自分の命と家族の命や周りの人の命を守るためには必ず必要だ。ハザードマップを確認することによって避難すべき場所を把握出来たり避難場所や避難所への最短ルートが分かったりして少しでも早く避難することができ命を守ることができる。

出典 「みんなで減災『南海トラフの巨大地震による津波高・浸水域等及び被害想定について』
内閣府 防災情報のページ

7 ボランティア

私は部活動をしており忙しく、多くのボランティアに参加できなかったが、毎年参加したのが本多聞小学校で行う本多聞地区の防災訓練のボランティアだ。活動内容は水消火器の使い方を小学生に教えことやVRで土砂災害の映像を小学生に見せるための手伝いなどである。普段あまり小学生と関わることなく、最初は苦戦したが最終的に楽しく活動することができた。それからは小学生との交流がとても楽しみになった。

一番印象に残っているボランティアは全県一斉募金だ。初めきは、募金活動に参加した経験がほとんどなくてとても不安だった。しかも、リーダーとして参加したので本当に大丈夫なのかと焦っていた。しかし、事前に募金の主旨や送り先なども自分たちで考える中で、とてもやりがいを感じることができた。当日は、垂水駅で募金活動を行った。募金箱を持ちながら自分たちで考えたセリフを言い続けた。最初は緊張のせいか用意してきたセリフが出てこなかった。それでもお金を入れてくださる方がたくさんいて、垂水の方たちのやさしさを感じることができた。後半になると言葉がスラスラ出てくるようになり順調にすることができた。たまに「頑張っているね」「偉いね」などといった言葉をかけてくださる方もいた。その言葉でもっと頑張ろうと思うことができた。最終的には多くのお金が集まり垂水区社会福祉協議会に送ることができた。これまであまりボランティアに参加していなかったため、この活動が終わった時に今まで味わったことのない感情が出てきた。人の温かさに触れることができて本当にいい経験になったと思う。募金活動に参加してよかったと思った。

2年生の1.17震災メモリアル行事では自分たちが準備から主体的にやったのでとても記憶に残っている。asariさんの歌を聞いて音楽の力のすごさを体感できた。とても感動した。改めて音楽の力は偉大だと思った。シンポジウムでは雁部さんが防災について熱く語ってくださり、東日本大震災の経験から非常に多くのものを自分のものにして語り継いでいこうという気持ちが伝わってきた。

8 新型コロナウイルス

私がこの舞子高校に入学する直前に日本では新型コロナウイルスが流行しはじめた。インフルエンザなどの感染症は経験してきたが、私はここまでこのような連日ニュースに取り上げられるような感染症は初めてだった。だから私は何が起きているのか全く分からなかった。

1ヶ月ぐらいたつとフェイクニュースが次から次へと出てきた。例えば「マスクがなくなった」「消毒液もなくなる」などのフェイクニュースが出てきた。このようなフェイクニュースが出てくることにより全国民のほとんどが信じてしまい、マスクが店頭においてあると買い込んでしまう客がたくさんいて、本当にマスクや消毒液がなくなってしまうことが起こってしまった。他にも根拠が何もないままマスクを外してもいいなどのフェイクニュースを信じる人が出てきて大きな問題になった。これらのことからSNSの危険性が分かった。他にも新型コロナウイルス感染症にかかった人へのSNSによる誹謗中傷などとても大きな問題が多発した。

また、高校の授業で、新型コロナウイルス感染症も災害の一種と捉える考え方を知った。新型コロナウイルスの感染拡大は今まで誰もが経験したことがない前代未聞の災害だ。しかし、人類がこの新型コロナウイルスに打ち勝つことを私は願っている。

9 終わりに

先ほど紹介したように私の高校生活はずっと新型コロナウイルス感染症と一緒にだった。入学するときは緊急事態宣言が出ていて2か月ほど学校にいけない日が続き、いつになったら学校に行けるのだろうと不安になることもあった。しかし、やっと学校に行くことができ少し遅めに始まった私たちの学校生活だったが入学以前より防災についての知識がはるかについた。これまで学んだことを絶対に自分たちの子どもの世代やその次の世代までつないでいかないといけないという責任があると思っている。将来、災害が起きても「Survivor」「Supporter」となり地域を守りたい。そして大事な人を誰もケガさせず守っていきたいと思う。

語り継ぐ

石野 巧

1 はじめに

阪神・淡路大震災から28年が経った。私は神戸で育っておらず、阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた人も身近にいない。また、育ったまちも神戸ほどの被害は受けていない。そんな私が、阪神・淡路大震災を語ることをしてもよいのかと考えたこともある。しかし、環境防災科で防災を学んだ今、自分には阪神・淡路大震災の経験や教訓を語り継ぐ責任があると思っている。阪神・淡路大震災は神戸だけのものではなく、多くの人が知るべきことである。だから私は、この「語り継ぐ」が、多くの人が防災を学ぶきっかけになってほしいと思っている。

2 友人の母Sさんのお話

これは、阪神・淡路大震災当時、神戸市長田区に住んでおられた、友人の母Sさんの被災体験だ。

地震の時、私は2段ベッドの上で寝ていた。遠くの方から、ゴースという音が近づいてきて、ものすごい揺れが続いた。夜が明けて、ベッドの頭の方を見ると、洋服かけが倒れかかっていた。また、2段ベッドの下で寝ていた母の頭の方には、テレビが落ちてきていた。幸い2人とも怪我はなかったが、もしも母がもう少しテレビの近くで寝ていたらと考えると怖くなった。

明るくなり、外に出て、母が営んでいた店の様子を見に行こうと家を出ると、まちの角の家は潰れてしまっているものが多かった。母の店は、倒れずに立っていたが、数時間後に商店街から火が出て、それがアーケードづたいにどんどん広がり、母の店も燃えてしまった。残念なことに、火を消すための水がなく、母と2人で毛布にくるまって、店が燃えていく様子を見るしかなかった。

この日、空腹に気付いたのは夕方になってからだった。食べるものがなかったからだろう。近所の方が、冷凍の食パンをくれたので、それを焼いて食べた（後ほど出てくるが、電気は使えた）。近所の方が食べ物の買い出しに行ってくれたが、道路は渋滞しており、やっとのことで着いたお店には、ほとんど食べ物はない。

不思議なことに、私が住んでいた久保町は、地震の後でも電気を使うことができた。しかし、ほとんどの電灯が天井からぶら下げるタイプのものだったため、全て落ちて使えなかった。だから、隣の家避難させてもらっていた。そのため、避難所に行かずに済み、暖かい環境で過ごすことができた。しかし、余震が続いていて怖かったため、夜はなかなか眠ることができず、朝、明るくなってから眠ることが多かった。

食事は徐々に、支給されるパンやお弁当、炊き出しなどできちんと摂れるようになった。しかし、水は毎日取りに行かなければならなかった。ガスも水道も、使えるようになるまで相当な時間がかかった。お風呂に入れたのは、地震発生から3～4日後だった。隣の家の方が、自衛隊の用意したお風呂に入るための券を譲ってくれて、それを使ってお風呂に入ることができた。

震災後、区画整理によって、高層のマンションやたくさんのお店ができた。しかし、人が減ってしまい、震災前のような活気はなくなり、閉まったままの店舗も多かった。

家族は無事で、怪我もなく、住む家もあった。しかし、お店の従業員の方や、お客さんは亡くなられた。家が潰れて数時間後に救出された近所の元気なおばあちゃんも亡くなられた。私を可愛がってくれた近所のお兄ちゃんは、先行きが不安だったのか、自殺してしまった。

私の兄は消防士で、震災の日に職場に行くとそのあと何日も帰って来ることができないでいた。やっと帰ってきたと思うと、寝ていたが、その時兄はうなされていた。きっと、助けたくても助けられなかった人や、いろいろな状態の人を見てきたのだろう。

私は、明日何があるかは誰にも分からない。だから、1日1日を大切に過ごしたいと思うし、みんなにもそのようにして過ごしてほしいと願っている。

3 お話を聞いて

私はSさんのお話を聞いて、自分が助かり、住む家があることが必ずしも幸せなことではないと思った。自分の身近な人や大切な人が災害で亡くなってしまうことは、やりどころのない怒りや悲しみ、辛さを感じ、たとえ自分は生き延びたとしても、その生き延びたということが幸せだと感じられないと思って

しまう。もしも自分がそのような状況になったら、耐えられないだろう。Sさんのお話は衝撃的だった。Sさんがこのような経験をしていたことを知らなかったからだ。

このように、自分が知らないだけで、過去に辛い経験をされた方はたくさんいるのかもしれない。それは、決して自分から話したくないようなことだと思う。Sさんにも、このお話を私にすることで、震災時の辛い記憶が蘇ってきて辛い思いをさせてしまったかもしれない。しかし、その辛い経験を話していただくことで、私は震災の教訓を学び、それを多くの人に伝える決心を新たにした。辛い記憶を思い出しながらも私にお話をしてくださったSさんには感謝の気持ちでいっぱいだ。

4 環境防災科に入って

(1) 環境防災科に入った経緯

私が高校の進学先を考え始めたのは、中学3年の春だ。私はもともと外国語や国際関係に興味があったため、高校では英語を専門的に学べるところに進学したいと考えていた。春の時点では、自分の中に環境防災科に進学する選択肢はなかった。そんな私が、環境防災科を選ぶことになった大きな出来事がある。それは、中学3年の夏に行ったオーストラリア研修である。私はこの研修を通して、人と関わることの楽しさを知った。そしてこの研修後、私は将来何になりたいのかが見えてきた。それは、中学校の英語の先生だ。自分の好きな英語と、いろいろな人と関わるができるという2つが結びつき、中学校の英語の先生になりたいと思い始めた。

英語を学ぶなら環境防災科ではなくてもよかった。むしろ他の選択のほうが合っていたのかもしれない。しかし私は、当時の担任の先生とお話をする中で、「先生になるうえで最も大切なことは、生徒の命を守ること」という言葉をもらった。私はその言葉に刺激を受け、防災について学び、様々なボランティアを通して人と関わる経験ができる環境防災科に進学しようと決めた。

(2) 出前授業

私は3年間、多くの出前授業に参加した。出前授業を通して学んだことは、あらゆる立場の人に対して、それぞれに合った関わりをし、相手の立場になって物事を捉えるということである。それぞれの出前授業で、それぞれの対象年齢やニーズ、その学校の子どもたちの特徴があった。私たちはそれに対して、どのようにすれば小・中学生に合った方法で防災を学ぶことができるのか考えた。1つの授業を作ることは、想像以上に大変で、しんどいこともあった。けれども、出前授業のなかでの子どもたちの反応や、想像以上の豊かな発想を見ると、自分たちの伝えたいことが伝わったのだと実感でき、やりがいや達成感を得ることができた。

出前授業を通して、伝える方法はたくさんあることを知った。大切なことは、相手の立場に立って、どのようなアプローチをすると、子どもたちが何か1つでも多くのことを学ぶことができ、自分たちが伝えたいことを伝えられるのかということだ。高校生の間に、いろいろな出前授業に参加させていただき、授業をすることはどのようなことなのか、伝えることの難しさや伝わった時の嬉しさ、いろいろな子供たちとの関わり方を学ぶことができたのは、自分が先生を目指すうえで大きな財産になった。出前授業の機会を提供してくださった先生方、行かせていただいた学校、一緒に出前授業をした仲間には感謝の気持ちでいっぱいだ。この学びを、先生になったときに存分に活かしたい。

(3) 東北訪問

高校2年の冬、私は東北を訪れ、東日本大震災で被災された方々のお話を聞いたり、震災遺構を見たりして、東日本大震災の経験や教訓を学んだ。東北で学んだことや感じたことは、うまく言葉にできないほど大きなものだった。東北にいるときは、写真や動画だけでは分からない、被災地独特の空気があり、感情が大きく揺れ、ここで被災された方々のことを考えると、苦しくなった。想像以上に悲惨な姿の校舎や、過酷な被災体験を聞いて、自分にできることの少なさ、自分の無力さを感じた。どれだけ自分が防災について学んだとしても、災害時結局何もできないのではないかと不安になった。しかし、同時に、その無力さや不安をそのままとどめていても何も変わらないということに気が付き、防災に向き合う姿勢が変わった。

私が東北訪問で特に印象に残ったことは、大川小学校を訪れた時の独特な空気感と、浮かび上がってきた子供たちの姿である。大川小学校を訪れたのは、東北訪問2日目である。1日目、初めて東北に入ったとき、緑がたくさんあって、家もお店もあって、震災があったとは一目見ただけでは思えなかった。しか

し、大川小学校は違った。校舎が震災当時のまま残されており、校舎の周辺にはほとんど建物がなく、大川小学校が孤立しているようだった。また、バスを降りると、空気の冷たさを感じ、大川小学校は静かに、震災の辛さを伝えているように見えた。校舎は大きく損傷し、渡り廊下は倒れていた。語り部の方が、「ここには子どもたちの日常がありました」とおっしゃった。私は、自然と子どもたちが遊ぶ姿や生活する姿が想像でき、その子どもたちを思うと辛くなった。しかし、辛い、悲しいという感情だけで終わらせては、何の意味もないということを学んだ。私は大川小学校に実際に訪れ、被災された方のお話を聞くことで、防災の大切さを実感した。中途半端な気持ちで語り継ぐと言ってはいけないと思った。そのため、今度は自分が、語り部の方から学んだことを伝える側になり、誰かが防災の大切さを知るきっかけにしていきたい。

東北訪問を通して学んだことを一言でいうと、自分にできることをすることの大切さだ。これは災害に対してだけではない。家族や友達など、関わる全ての人はもちろん、自分が悩んでいることや困難なことに対しても、逃げたり避けたりせず、きちんと関わって、考えて、向き合っていくことが何においても大切だと思った。つまり、災害と日常はつながっているということを実感した。この学びを、これからずっと大切にしたい。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は、中学校の英語の先生になることだ。先生としての仕事は、英語を教えることはもちろんだが、何よりも大切なのは、生徒の命を守ることだ。学校は、生徒が安全に、安心して生活できる環境である必要がある。そのために必要なのが、防災教育である。私は、生徒の命を預かる者として、責任をもって生徒を守るとともに、環境防災科で学んだ過去の災害の経験や教訓、被災された方々の生の声を、若い世代に語り継ぎたい。防災教育を通して、みんなが自分の命や大切な人の命の守り方を学んでほしい。

(2) 先生として大切なこと

先生の仕事を一言でいうと、生徒の命を守ることである。そのために、私は、先生になったら、日常的な防災学習の時間を作りたいと考えている。それは、生徒に対してはもちろんだが、同じ教える立場である先生に対しても必要なことだ。なぜなら、先生には子どもを守る責任があり、先生の防災意識が低ければ、生徒の命を守るところか自分の命さえも守ることができないからである。

具体的に取り組みたいことは、少なくとも週に1時間は、防災について考え学ぶ時間を作ることだ。その内容は段階を追って変えていく。初めは、過去にどのような災害があり、そこでどのような被害があったのかを知ることだ。そこから、どのような備えが必要なのか、自分たちにできることは何なのか考える。その中で、どのようなことに困るのか、課題が見えてくるはずだ。そのため、今度はその課題解決のために何ができるのか考える。そのようにして、一人ひとりの防災の意識を高めていきたい。

そして、私が最もしたいのは、被災された方々の生の声を若い世代に語り継いでいくことだ。環境防災科での3年間で、東北にも行かせていただき、被災された方々の生の声をたくさん聞かせていただいた。東北訪問についての節でも述べたが、私は中途半端な気持ちで語り継ぐことをしてはいけないと思っている。私は、これまで聞いてきた被災された方々の生の声を伝えたいと真剣に思っている。これまで聞いてきた被災された方々の生の声を自分の中にとどめるのではなく、一人でも多くの人に伝え続けることで、一人でも多くの方が防災を学ぶきっかけにしてほしい。

(3) 理想の先生像

私の理想の先生像は、中学3年の時の担任の先生だ。それは、生徒が悩んでいたら一緒に悩み、困っていたら少しでも前を向けるように関わったりできる、生徒に寄り添い続けられるような先生だ。私はその先生のおかげで、自分としっかりと向き合えるようになり、自分を大きく変えることができた。その先生は、私にとって憧れの先生像であり、人としても憧れの存在である。

その先生の、先生として最も大切にしていることが、先ほども述べた「生徒を守ること」だった。そのため私も、その先生のように、生徒を守ることを第一に考え、信頼される先生、頼りにされる先生になりたい。

6 終わりに

環境防災科で過ごした3年間は私にとって大きな財産である。自分を取り巻くあらゆる環境に恵まれていたからだ。過去の災害の経験をお話してくださる方、ボランティアの場や機会を提供してくださった方々と環境防災科の先生方、そして、一緒に防災について学び、3年間一緒に過ごしたクラスメイト。このような人たちとの関わりを持てたため、自分が成長できた。私を成長させてくれた方々への感謝の気持ちを、これからの自分の行動で表現したい。そして、誰かの心のよりどころで、誰かを安心させられるような温かい人でありたい。

忘れない

伊藤 亮斗

1 はじめに

阪神・淡路大震災が発生してから28年という年月が経った。もちろん私は震災を経験していない。これからは震災を経験していないどころか震災を知らないという人たちが増えていく。私たち環境防災科は今まで様々な方の話を聞いて、この話をどう語り継いでいくか、どうしたらこの記憶が風化されないのかと考えてきた。この「語り継ぐ」では3年間で振り返りながら、環境防災科で学んできたことを次の世代に継承していくために執筆していく。

2 阪神・淡路大震災

(1) 母の話

当時、母は学生だった。阪神・淡路大震災の前日、夜中までテスト勉強をしていて、こたつで寝てしまっていた。地震の揺れで起きて、最初は何が起きたかわからず、揺れている中、兄の部屋へ行った。インターネットがない時代だったので何が起きたか分からないまま、被害が大きいと知らずにもう一度寝ることになった。起床後、学校に行く準備をして、学校に行こうとすると、隣の家のおじさんが電車が動いてないと知らせてくれて、学校を休むことにした。

神戸市西区にあった自宅は少ししか被害はなく、家の中は食器が少し散らばる程度で済んだが、水道とガスは止まっていた。電気はすぐに回復したので、テレビをつけると長田区が火事になっている様子が写っており、ここで神戸の街がひどいことになっていることを知った。明石市に住んでいた姉の家はなんともなかったため姉の家避難をした。自分の家がある西区や明石市の様子しか見ていなかった母は、学校の登校日で須磨付近を通るときに初めて家が倒れたりしている様子を見た。登校日だったが学校が避難所になっていたため学校には入れず、運動場で話があるだけだった。それから卒業まで暇だったので、神戸市外国語大学で服などの入った物資を運ぶボランティアなどに参加したりした。学校にはほとんど行けず、卒業式は別の学校で行った。

(2) 母の話を聞いて

母の話を聞いて私は、インターネットなどで情報を得ることが大事だと思った。阪神・淡路大震災が発生した時は今ほどインターネット環境が充実していたわけではないので、どこで、どんな被害が起きているかなどの情報を素早く知ることは難しかったと思う。しかし、震災が起きた時よりもインターネット環境が充実してきた今、様々な情報を得ることができる。その中には、間違った情報や嘘の情報もあるだろう。災害が起きたら誤った情報がたくさん飛び交う中、事実と誤った情報の取捨選択をしっかりとできるようにしないといけないと感じた。

(3) 祖父の話

地震で目が覚め、テレビをつけたが最初は何も報道されていなかった。神戸市中央区の神戸市役所に勤めていた祖父は地震などの災害があった時は、市役所に出勤することになっていた。しかし、電車が動いていなかったため西区役所に向かった。西区役所では何も被害がなかったため最初は大丈夫だと思った。しかし、三宮の市役所に電話をしたときに初めてひどいことになっていると知った。それから車で市役所に向かった。柏井紙業のビルが倒れかけている様子や、道中のあちらこちらから煙が出ている様子を横に見ながら市役所についた。市役所は2号館の6階がつぶれていた。祖父が働いていた方の建物は被害が少なく、市役所についてからは、避難している人に物資を届けるために、物資を区役所に配分していく仕事をしていた。その仕事をしている間は市役所で寝泊まりをして、1週間帰ることができなかった。市役所に泊まっている間、夜に余震がよく起きていた。1週間たつと被害状況がわかるようになり、兵庫駅付近や長田区が一面焼けていることが分かった。

一旦家に帰れることになったがすぐに市役所に戻って、物資の配分の仕事を続け、また市役所に泊まる日々が続いた。鳥取県からも物資が届いた。阪神・淡路大震災の前に鳥取県でも地震があり、神戸から物資を送ってくれたことのお返しのような感じだった。仕事をしていくうちに物資も足りるようになり、元の仕事に戻れるようになった。健康保険課で働いていた祖父のもとに、遺児年金の相談がくるようになった。そ

のとき、18歳以下の子どもが大勢親を亡くしていることを知った。

阪神・淡路大震災のあと、地下鉄サリン事件が起き、阪神・淡路大震災からサリン事件に話題が移ってしまい、人々の阪神・淡路大震災への関心が薄れてしまったと感じた。

(4) 祖父の話を聞いて

祖父の話を聞いて私は初めて祖父が、地震があった時に1週間も家に帰らずに仕事をしていたことを知った。サリン事件が起きたことで阪神・淡路大震災への関心が薄れてしまったと感じたという話を聞いて、改めて地震などの災害の記憶の継承は大事だと思った。実際、祖父はもう忘れてしまっていることが多いから記録を残すことは大事だと語っていた。環境防災科に入った以上、阪神・淡路大震災の教訓はもちろん、東日本大震災などの別の震災の教訓も風化させないために語り継いでいかないと感じさせられた。

3 環境防災科

(1) きっかけ

私は、この環境防災科に入るまで防災についてあまり興味はなかった。しかし中学卒業後の進路を考えていた時、仲の良かった先輩が舞子高校の環境防災科に入っていると聞き、どんなところなのかと調べていくと防災を専門に学び、ボランティア活動も盛んに行っているを知った。近いうちに南海トラフ巨大地震という地震が起これとニュースで聞いたことがあったこともあり、防災について学んでおいたほうがいいのか、自分もボランティア活動をしてみたいと思ったことがきっかけで入学を決めた。

(2) 入学後

環境防災科に入学してからの3年間はとても充実した生活を送っていたと思う。3年間同じクラスでみんな仲が良く、楽しい毎日だった。1年生の時は、被災された方や、消防士の方などいろいろな方々に講義をしてもらい、環境防災科でしか聞けないような話を聞いてとてもいい経験になったし、勉強になった。2学期には消防学校への体験入校などで貴重な体験ができた。

2年生になってからは、高校生活にも慣れ、部活の試合がない期間には環境防災科に入ろうと思った理由のひとつでもあった出前授業や募金活動などのボランティアにも参加するようになった。特に出前授業では、リモートでの実施に変更になったこともあったが、人前で話すことが楽しいと感じるようになった。ボランティア活動をするのは少なかったが、貴重な経験になった。

3年生になってからは、授業の一環で将来について考える機会があった。今まで深く将来のことを考えたことがなかったが、自分の将来のことなのでしっかりと考えることができた。

環境防災科に入ってから3年間という時間はとても楽しいものだった。19期生のみんなといろいろなことをして、文化祭や球技大会では団結して盛り上がった。授業は時には楽しく、時に集中して、環境防災科に入ってよかったと思える最高の仲間たちだと思う。

(3) ボランティア

私は部活動の関係でボランティア活動に参加することが少なかった。そんな中でやってきたボランティアではとても楽しく貴重な経験ができた。高校に入学するまでボランティアをしたことがなかった私は、高校1年生のころに募金活動や小学校の防災イベントのお手伝いをするというボランティアに参加した。募金活動では、私がどうすればいいのかわからず困っていると、先輩が優しく教えてくれた。その先輩はとても大きな声を出していて、すごいという感想しか出てこなかった。そんな姿を見ていると私も徐々に声が出てくるようになった。小学校の防災イベントは、部活の先輩たちが代々リーダーを務めてきたボランティアで、先輩がいたということもあり、非常に楽しくボランティアができた。

2年生では、出前授業と募金活動を行った。出前授業では、最初は緊張していたが、私は元々子どもが好きで、誰とでもしゃべることができる性格であるため、小学生とも仲良くなり、一番楽しいと思えるボランティア活動になった。募金活動では、普通科の生徒と一緒にする機会があった。普通科の人たちのほとんどが募金活動をするのが初めてだったので、私が引っ張っていかないといけないと思い始めた。募金活動をやっていくと小さい子どもからお年寄りの方、さらにはお金が今ないからとお金を取りに行ってくれる方までいて、とてもやりがいのあるボランティアだった。募金活動が終わると普通科の人が「環境防災科はすごいな」と言ってくれて、1年生のころに先輩がしてくれたようにみんなを引っ張っていける存在になれたと感じた。

ボランティア活動は得たものがかなり大きかったと思う。募金活動ではたくさんの人たちに声をかけてもらい、非常にうれしかった。出前授業では「すごくよかった」とほめてもらったり「ありがとう」と感謝されたり非常にやりがいを感じることができた。ボランティアをしていく中で、周りを見て行動する力や話す力が身についたと思う。特に出前授業では話す力だけでなく、防災の知識をより深めることができ、小学生や中学生の意見を聞いてこれまで以上に、防災について考えさせられるきっかけになった。

4 夢と防災

(1) 自分の夢

私の将来の夢は理学療法士になることだ。私は野球部に所属していて、試合中に人生で初めての大怪我をしてしまったことがある。そのときに病院で理学療法士の方にすごくお世話になった。そこで、自分と同じように怪我をしてしまい、身体が不自由になってしまった方などをサポートしていきたいと思ったことが理学療法士になろうと思ったきっかけである。

(2) 理学療法士について

理学療法士は、事故や病気で身体に障害や不自由を抱えてしまった人や、身体機能が低下してしまった高齢者などに対して、リハビリテーションを行い、回復のサポートを行う仕事だ。

現在、理学療法士の人数は増えてきており、国家資格をとっても希望する勤務先に就職できない可能性もある。しかし、理学療法士の職域は、高齢化や様々なニーズに伴って拡大し続けており、将来性が高い職業といえる。

理学療法士になるには、国家試験を受け、免許を取得する必要がある。そのためには、「理学療法士及び作業療法士法」に基づき、免許が与えられる国家試験を受けるには、3年以上養成校で学び、必要な知識と技術を身につけなければならない。

(3) 理学療法士と防災

理学療法士の災害時におけるリハビリテーションは2種類ある。1つは、避難所等の現地に赴き、障害者や高齢者などの被災した方の活動性低下を予防するための直接的支援である。もう1つが、被災地の行政などと共に災害対策本部に参加し、避難所からの情報収集、派遣人材の確保、派遣スケジュールなどの調整や情報共有を担っていく間接的支援がある。しかし、過去に理学療法士による支援の例が少なく、避難所に赴き、被災者と身体を動かしたりする程度で人材が少ないことが課題だ。そのため、私が理学療法士になったらこの環境防災科で学んできた災害、防災の知識を活かして自分が先頭にたって周りに防災の知識を広めていったり、積極的にボランティア活動に参加したりして理学療法士と防災をもっと身近なものにし、災害時に理学療法士が活躍していけるようにしていきたい。そのために大切にしていきたいことは、コミュニケーション能力だ。理学療法士は患者さんを支えたりするので体力が必要となる職業だ。しかしそれ以上に必要なのは患者さんとコミュニケーションをとることだ。特に被災されて心に傷を負ってしまった方のサポートするとき身体のケアだけでなく自分から話しかけたりして心のケアもしていきたい。環境防災科での人前でたくさん話した経験や、誰とでも明るく話することができるという自分の性格を活かしていきたい。

理学療法士では防災に関わるのが少ないので、災害が発生し、避難所にいくようなことがあれば患者さんと話したりするときに環境防災科で学んできた防災の知識などを話せていけたらと思う。

5 最後に

「語り継ぐ」を執筆していきながら環境防災科に入ってから3年間を振り返ってみると、非常に楽しいことばかりだった。防災のことを学んだり、環境防災科にしかできない経験もできたりした。その中で私は色々な講師の方や被災者の方から学んできた防災の知識や災害の教訓を風化させず、語り継いでいくことが大切だと考えるようになった。私を含めたくさんの若者は災害を経験していない。そのような人たちに震災の記憶や恐ろしさ、教訓を伝えていかなければならない。近い将来、南海トラフ巨大地震が起きるとされている今、防災に目を向けないといけいない。私たち環境防災科が過去の震災の教訓を伝え、若者だけでなく全員がどうしたら被害を抑えることができるか考えないとまた同じことを繰り返してしまう。そのようなことが起こらないためにも震災の記憶を忘れず次の世代へと語り継いでいき、自分たちで身を守る方法を身につける必要がある。災害はなくすことはできない。だが被害を減らすことはできる。

私たち環境防災科にとって「語り継ぐ」ということは使命だと思う。今までたくさんの人が時間を割い

て私たちに話をしてくれた。話の中には胸が痛くなるような悲しい話もあった。だが同じような気持ちになる人が出ないようにそのような話を忘れるわけにはいかない。これまで聞いてきた話は私にとって貴重な財産だ。忘れないためにはインプットするだけでなく、どんどんアウトプットしていかないとけない。これからはどんな道に進もうとも防災に関わっていき、環境防災科で学んできたことを大切に、未来へ語り継いでいきたい。

未災者の語り継ぎ

岩尾 正貴

1 はじめに

1995年1月17日5時46分に発生した兵庫県南部地震。死者6434名 行方不明者3名(2022年4月現在)を出し、都市を襲った未曾有の大災害となった。この阪神・淡路大震災から防災体制は大きく見直され、それは28年たった現在にまで至る。私は2004年に生まれ、もちろんこの災害を経験していない。神戸市では被災経験のない世代が2021年で5割に達した。阪神・淡路大震災の被災経験のない人が日に日に増えていく中、私は環境防災科生徒、未災者、神戸市民として責任感を持ち、語り継ぐ。

2 祖母の話

(1) 地震発生時

神戸市須磨に住んでいた祖母は地震発生時、布団の中にいた。1月17日の寒い朝を迎え、お弁当を作ろうと布団から出ようと思っていたところ、地震が来た。今までに経験したことのないような強い揺れに驚きながらも布団を被って身の安全を守った。幸いにも、寝室にあったタンスは倒れてこず、ケガをすることはなかった。約15秒間の揺れはとても長く感じた。揺れが収まり、布団から出ると洗面所のものは全て落ち、冷蔵庫は大きく移動していた。食器棚は横開きだったため、食器が落ちてくることはなかった。地震が起こった時、あまりの揺れの大きさに「みんな死ぬのでは」と思った。祖母が被災した地域は、須磨区でも北の方だったため、ライフラインに大きな影響はなかった。しかし、電車が止まり、交通手段が閉ざされたため、祖母と父は船や電車を乗り継ぎ大阪の親戚のもとへ数週間後に避難した。

(2) 阪神・淡路大震災を経験して

阪神・淡路大震災を経験するまでは全く地震に関する備えや知識はなかった。阪神・淡路大震災以前の大きな地震というと関東大震災くらいで、地震というと関東というイメージが少しあったくらいだった。寝室は震災後から物の配置を考え、物が倒れてこないようにしている。震災後1年ほどは震災のことが頭から離れなかった。長田のまちは震災前までは賑やかでよく栄えていたが、最近は人も減り、シャッター街が多くなってしまったのでとても寂しい。

28年は思い返すと、とても早く感じる。最近は昔より地震が多くなっているように感じる。

3 祖母話を聞いて

まず、阪神・淡路大震災から28年がたち、当時の記憶を快く話してくれた事に感謝している。祖母とは阪神・淡路大震災の話を今までしたことがなかったので、知らなかったことも多くあった。話を聞いていくうちに、当時は阪神・淡路大震災が起こるまで、地震に対する認識や備えは0に近かったということが分かった。私は何かしらの備えをしていると思っていたため、祖母が認識さえなかったということには驚いた。また、被災地域によって被災状況が大きく変わってくるということも分かった。同じ須磨区でも南側は大きな被害を受けたにもかかわらず祖母が住んでいた北側の地域ではライフラインを全て使用できたので、自分の住むまちについて知ることや調べておくことは大切だと思った。また、長田のまちについて話を聞いた時は、「今はシャッター街が多くなって悲しい」という何気ない一言が印象的だった。震災前と震災後のリアルな気持ちを聞くことができたので、阪神・淡路大震災の課題はまだ続いているのだと感じた。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を目指そうとしたきっかけは2つある。1つ目は小学校の時にあるテレビ番組を見たことだ。その中では舞子高校環境防災科の先輩が災害用の仮設トイレを組み立てていた。そこで防災について勉強している学校があるということを知った。小さい頃から消防士になりたいという夢があったため、高校に行くなら環境防災科が良いとこのときから考えていた。2つ目はオープンハイスクールに行ったことだ。中学3年生で訪れたオープンハイスクールでは先輩方が堂々とした立ち振る舞いで環境防災科についてプレゼンテーションをしているのを見て、こんな先輩みたいになりたいと思い、入学への意思が

固まった。人前で話すのが苦手な私は多少の不安を持ちつつ、3年間でこの先輩方のように人前で堂々と話せるようになりたいという目標ができた。

(2) 防災出前授業

私が環境防災科に入学して取り組んできた活動は多くある。その中でも継続的に参加してきたものの1つが出前授業だ。先生からの誘いで参加し始めた出前授業では、多くの学びがあった。その中で私が学んできたことを3点に絞って紹介する。

1つ目は「相手のことを知る」ということだ。小中学校へ出前授業に行かせていただくとき、その土地の地理的特徴を確認する。小学校、中学校はどのような場所にあり、そこにはどのようなハザードがあるのかなど、詳しく調べる。また、その学校は過去にどのような防災学習や避難訓練を行っているのかなどを調べ、相手のことを知るところから始めた。実際に相手の地域について理解すると、授業中に小学生や中学生が話し合っている会話が理解できたり、話し合いにアドバイスしたりすることもできた。このように、相手を知ることによってコミュニケーションを円滑にとることができる。

2つ目は「一方的な授業にしない」ということだ。出前授業では間違った知識を教えてはいけないという考えがあるがゆえに正しい知識を一方的に押し付ける授業になってしまうことがある。高校生でも一方的に話をされるだけの授業では興味を持つことができないだろう。小学生や中学生に防災について少しでも興味を持ってもらうためには、高校生との交流が大きなポイントとなる。グループワークの時間を設けたり、高校生が小中学生の会話に入ったり、そのような交流を交えた授業をすると、防災について興味がなかった子でも授業に楽しく取り組んでくれることがある。

3つ目は「目標を決める」ということだ。準備時間に迫られながら進んでいくうちに、自分たちが伝えたかった内容から違う方向に進んでしまうことがある。それを防ぐためにも、チーム内で目標をあらかじめ決めておき、それに沿った授業を作っていくことで出前授業をする意味を確立することができる。

以上3点が特に実践してきた内容である。出前授業をしていくためには出前授業をさせていただく学校、先生方、先輩方そしてチーム内での協力が必要不可欠であり、携わってくださった多くの方々には感謝したい。

(3) 東北訪問

2年生の1月に、2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震の被災地である宮城県に行かせていただいた。東日本大震災は私が防災について興味を持ち出したきっかけともいえる出来事だ。東北訪問に参加させていただくにあたり、多くの想いや目的を持って参加した。

宮城県立多賀城高校との交流では、多賀城高校生に多賀城のまちを案内してもらった。津波波高標識の設置場所や都市型津波が発生した場所の説明など、知らない知識が多くあった。同じ志で防災を学ぶ高校生と交流できたことはとても良い経験になった。

大川小学校訪問では、言葉にならないような想いが込み上げてきた。真冬の1月に行ったということもあり、校庭や裏山には雪が積もっていた。連日ニュースやテレビで見してきた大川小学校へ実際に行き、現地に行かなければわからないことも多くあるなと思った。大川小学校の裏山は校庭から歩いて5分もかからないような場所で、川も思っていたより近かった。正直に述べると、海からの距離を考えるとまさかここまで津波が川を遡上してくるはずがない、そう思ってしまうようなところだった。しかし津波は確かに小学校を襲った。ここまで津波が来たといわれてもなかなか想像できるようなものではなく、自然の脅威を感じた。語り部である佐藤敏郎さんは、大川小学校で子どもを亡くした保護者でありながら、語り部の活動をしている。保護者と元教師という立場からお話をさせていただいた。「学校が生徒の最期の場所にはなってはいけない」、「ハッピーエンドの防災を」など、私たちの心に訴えかけるような語りは、防災について考えを改める機会となった。大川小学校を訪れた日の夜には今野浩行さん、今野ひとみさん夫妻のお話を聞いた。今野さんは大川小学校で子どもを亡くされ、保護者の立場で裁判の原告団長として子どもたちの想いを代弁する形で活動している。裁判に関すること、学校側と遺族側のやり取り、そして11年たった現在の心情など、事細かく私たちにお話ししてくださった。そこで私が感じたのは佐藤さんや今野さん、同じ子どもを亡くされた方でも考えや取り組みは一人一人違うということだ。私は東北訪問に行くまで「遺族」という一括りでしか見ていなかった。しかし、多くの方のお話を聞く中で、一人一人の想いを大切にしていなければいけないと言うことを痛感した。

ワークショップでは他校の高校生と災害時のボランティア活動の課題やその課題に対する解決案につ

いて深く考えることができた。私が参加した東北訪問では、兵庫県、三重県、青森県の三県の高校生が参加した。テーマごとに助言者として東日本大震災を経験した方が高校生たちにアドバイスをしてくださった。私の班は当時社会福祉協議会に所属し、ボランティアセンターを開設していた方にお話を伺った。地域の中학생や高校生が道案内をしたり、物資の運搬をしたりなど、臨機応変に対応してくれたというお話を聞き、災害時において中高生は大きな力になるということが分かった。このことは学校に帰ってきてから中学校へ出前授業に行き、実際に聞いた話を中學生に伝えることができた。

東北訪問に行くまでは多くの不安もあった。他県の災害を経験したこともない高校生が宮城に行って相手の方はどういう気持ちなのだろう、と考えることもあった。しかし、私が出会った方々は全員私たちを快く受け入れてくれた。それどころか舞子高校生には、信頼や期待に溢れているということがすぐに分かった。「あの時は舞子高校の生徒が泥かきをしてくれた」「高校生の力はすごかった」など、先輩方の活動を教えてもらい、その環境防災科として参加させていただいていることに少し誇らしい気持ちになった。それと同時に舞子高校の環境防災科という私たちにはたくさんの期待が込められており、これからの防災を託されているような気がした。

3年生になり、環境防災科としてできる活動は限られてくるが、後輩への引き継ぎを含め、今まで私たちが行ってきた活動を語り継いでいきたいと思う。

5 新型コロナウイルス感染症

2019年に確認された新型コロナウイルス感染症は瞬く間に世界に広がり、私たちの生活を一変させた。

環境防災科19期生の私たちは、2020年に入学式に変わって入学説明会という形で高校生活をスタートさせた。中学校の卒業式は短縮化、例年通りの入学式もなく、入学直後から約2か月間の休校。この状況は「災害」ともいえるだろう。休校期間はステイホームが呼び掛けられていたため、学校の知らない先生から送られてくる、授業を受けたことのない教科の課題などをする、スタディサプリで授業を受けるなどした。学校に行けるようになってからも常にマスク、文化祭は中止、部活動は短縮、試合は中止などコロナの波に振り回される日々だった。

毎日ニュースで感染者数と死亡者数が毎日公開されるのは非日常的な体験だった。次第に感染者の報告が自分の県、市、区、町と私の住んでいる生活圏内に近づいてくるといった感覚はとても怖かった。

そのような中で、環境防災科として何かできることはないかと先生方が模索してくださり、防災うちわをデザインすることとなった。優秀作品はオープンハイスクールやボランティア活動で配られた。ピンチはチャンスという言葉もあるように、視点を変えると2か月間学校に行けなかったからこそできたことも多くあっただろう。オンラインで他校の高校生や防災を専門とする方のお話を聞けたり、小学生に防災学習を行ったりもできた。直接行くことのできない地域の人の話を聞けるというのは防災においてもとても貴重な機会だった。

今後コロナウイルスのようなウイルスが世界中を襲わないという保証はなく、これから新たなウイルスが世界中を襲う可能性は十分にある。だからこそ「ウイルス+地震」、「ウイルス+風水害」などの複合災害にも目を向け、私たちは様々なハザードに備えなくてはならないと思った。

6 将来の夢

私は消防士を目指してこの環境防災科に入学した。入学してから様々な経験をさせていただき、それらに携わってくださった方々には本当に感謝している。自らイベントやボランティア活動にチャレンジできるこの環境は本当に恵まれている。普段の授業、講義、出前授業、募金活動、全国防災会議、東北訪問などの様々な経験から、この学科で『防災』というものを知り、夢が広がった。

私には「人の命を救う」という大きな信念がある。これは東日本大震災がきっかけである。幼稚園から帰ってきたとき、テレビの画面に映し出されたのは見たこともない津波の映像だった。聞いたことのない地名やまちを襲う映像は小さい頃の私に衝撃を与えた。その後、被害状況が明らかになっていき、災害の恐ろしさを知った。小学校、中学校と私の住んでいた地域は阪神・淡路大震災の被害を受けた地域であり、防災教育が盛んに行なわれていた。その影響もあり私は防災に興味を持つと同時に、「人の命を救いたい」そう思うようになっていった。

「人の命を救う」と言っても様々な方法があり、それは消防士のような直接的なものだけでなく、人に避難を促すシステムを作るなどの間接的なものもある。現段階で、将来やりたいことが多くあるため、完全に決まってははいない。しかし、どのような職に就いたとしても、環境防災科で学んだ防災をよりたくさ

んの人に広めることはできる。今後発生することが懸念される南海トラフ巨大地震や首都直下地震、日本海溝・千島海溝付近で発生すると予想されている地震、激甚化している自然災害に多くの人が備えられるようにしていきたい。

7 最後に

私はこの「語り継ぐ」を執筆するにあたり、身近な人から阪神・淡路大震災の話を聞くことができた。しかし、この先10年、20年と年月が経つにつれ、そのようなお話を直接聞ける機会は確実に減っていく。「風化」というのは時間の流れがある限り完全に阻止することはできない。そこで、私たちが過去の話聞き、文章にして語り継ぐことで、これからの災害を知らない世代が過去の災害を知るきっかけになってもらえればと思う。

私はこの「語り継ぐ」で何を語り継がなければいけないのかと自問自答しながら制作を進めていった。阪神・淡路大震災のお話、環境防災科で行ってきた活動、私たち自身が体験したことなど、語り継ぎの内容は多岐にわたる。そのなかでも私が意識したのがこの環境防災科で経験したことや行った活動を通して得た私の思いや、感じたことを多く含めるということだ。「阪神・淡路大震災」と「東日本大震災」をどちらも直接被災したことはない。しかし、実際に被災した人から話を聞いたり、被災地に行って当時の様子を見たり聞いたりすることは今でもできる。だから直接見て、聞いたその率直な想いを書き綴るべきだと思い、執筆した。この「語り継ぐ」を見たあなたが震災・防災・減災について考え直すきっかけとなることを願って「語り継ぐ」の執筆を終える。

メッセージ

大崎 きらり

1 はじめに

私が高校に入学したとき、みんなマスクをつけていた。今もその状況は変わらない。マスクをつけないで友だちと話していたあの頃。たくさんの観客に応援してもらいながら試合をしていたあの頃。今振り返ると当たり前のことが当たり前ではないことに気づく。マスクだけではない。電気がつくこと、毎日温かいご飯が食べられること、いつでも連絡が取れること。これらがいつかは当たり前ではない状況になるかもしれない。今なお続いているコロナ禍という災害と過去に起こった災害に向き合う私たちが今できることとは何だろうか。

2 T先生の阪神・淡路大震災の体験

(1) 地震発生直後

私のクラスの英語担当の先生(T先生)は、当時神戸市須磨区の一軒家に両親と3人で暮らしていた。当時神戸市東灘区にある東灘高校に勤務しており、その日は朝早くから起きていたという。ドンッ!!!ゴォォー!!!下から突き上げられたような揺れと地鳴りがした。T先生のお母さんが寝ていたそばにあったガラスの棚が割れた。家はつぶれなかったが傾き、2階の窓からは黒煙が見えた。地震が起きてすぐの頃は電気もつき、電話もつながっていた。T先生は、割れたガラスの破片を片付け、とても冷静だった。「まさかそんなにひどい地震だったとは……」T先生は、テレビを見るまで阪神・淡路大震災の被害の大きさを実感していなかった。

(2) 勤務先での出来事

交通手段が途絶えていたため、勤務先である東灘高校に行くことができたのは震災からしばらくたった後だった。東灘高校では液状化現象が起きており、昇降口につながっている階段と地面との間には空洞ができていた。震災後初めて東灘高校を見たとき言葉が出なかった。信じられなかった。学校には支援物資が山ほど届き、仕分けは先生たちで行っていた。家の近所の小学校に給水車が来るという情報を聞きつけ、タンクを持ちながら待っていたが4、5時間経っても来ないときもあった。大阪に住んでいる同僚の先生は、お風呂にも入ることができるし普通の暮らしができていたはずなのに、リュックに運動靴姿で出勤されており、被災者の方と同じ心づもりで過ごしていた。

T先生は、東灘高校に通っていた女子生徒2名が亡くなったという情報を耳にした。そのうちの1人は、T先生が担任をしていたクラスの生徒だった。その生徒は国道2号線沿いの家に住んでおり、家族の中でその生徒だけが帰らぬ人となってしまった。遺体安置所では、その生徒が大好きだったくまのプーさんのぬいぐるみとその日着るはずだった体操服が置かれていた。「先生またね」週末の学校終わりに聞いたその生徒の最後の言葉。人と人との出会いや1日1日の日々を大切にしていこうと強く思えたのは、彼女のおかげだとT先生は話してくれた。その生徒の母親とは今でも交流が続いており、毎年お供えの花とメッセージを送っている。

(3) T先生の当時の気持ち

T先生が住んでいた須磨区では同じ区内でも被害の大きさに差があった。名谷の方は被害が少なく、飲食店もいつも通りに営業していた。その一方、T先生はその頃、水を求めて歩き回っている状態であった。T先生は、外食をしている人たちの姿にショックを受けた。

震災後、家から東灘高校へは、同僚の方の親御さんの車に新神戸まで乗せてもらった後、北区に住む同僚の方の車に乗り換え通勤していた。数時間かかっていたため、当時は学校に行くだけで大変だった。頑張らないとという気持ちで必死だったT先生にとって、生徒の姿は心の支えになっていた。数か月後、東灘高校に行くまでのバスや電車などの交通機関が徐々に使えるようになるにつれて希望が見え、その時に復旧してきているのだと実感した。

(4) T先生の今の気持ち

T先生は、スピッツのロビンソンという曲を震災の時に聴いていた。その曲を今聞くと、みんな同じような格好でうつむきながら無言で街を歩いていた光景が脳裏に浮かぶという。また、当時火事の被害が大

きかった鷹取の方は、普通の火事のにおいではなかった。現在きれいになった鷹取の街を見てしみじみに思うそうだ。

生かされた命を自分の経験を伝えることで活かしていきたいとT先生は語った。

3 話を聞いて

初めてT先生の授業を受けたときに、先生は私たちに阪神・淡路大震災で帰らぬ人となってしまった生徒の話をしてくださった。その話に興味を持った私は、後日、T先生から詳しい話を聞かせていただいた。はじめはそんなに長く話すつもりではなかったけれど、気が付くと1時間以上も先生と話していた。T先生は、私と話しているうちに当時の様々な記憶を思い返したようで、「こんなこともあってね……。そうそうあんなこともあってね……」とたくさん語ってくれた。私はその時に、様々なことを知ることができてうれしく思う一方で、涙目になっている先生を見て、つらい過去の記憶をたくさん思い返せてしまったんだか申し訳なく思ってしまった。

私は、このことを同じクラスの友だちに話した。すると、その子はこう言ってくれた。「その気持ち私も分かる。でも、実際に東北を訪れた時に、東日本大震災で家族を亡くされた語り部さんの話を聞いて考えが変わってん。その語り部さんは、『つらい過去の経験を普段は思い出したくないけど、こうやって誰かに語っている時、その家族のことを思い出してその瞬間一緒にになれる』そう言っててん。自分たちは、つらい記憶を思い返せてしまって申し訳ないなって暗く捉えてしまうけど、語っていただいたその人にとってはこの語り継ぐ時間って家族と一緒にになれるめっちゃ大切な時間やねんなって感じてん」その友だちの話を聞いて、私の考え方が変わった。T先生が最後に私に「ありがとう」と言ってくださった意味もこの時理解できた気がする。体験を聞いて私がT先生から受け取ったものは、震災のつらい記憶だけではない。人と人の出会いや1日1日の日々を大切にすること、今生きていることの幸せやありがたさも学ばせていただいた。

4 防災に興味を持った私

(1) 環境防災科を選んだきっかけ

私の母は、中学3年の受験生の時に阪神・淡路大震災を経験した。そのため、私は小さい頃からずっと地震の恐ろしさや当時の神戸の様子を教えてもらっていたが、私自身が実際に経験したことがないため、あまり想像ができなかった。しかし、そんな私たちだからこそ災害のメカニズムについて学び、防災の知識を高める必要があると考えていた。だから私は、災害から一人でも多くの人を守るために必要な防災の知識を詳しく学べる環境防災科を志望した。

(2) ボランティア活動を通して

私は、この3年間で数多くの活動に参加させていただいた。どの活動も私にとっては貴重なもので、できることなら全てを紹介したいが書ききることができないので、ここでは一番深く関わった活動とそこで学んだことを書こうと思う。

私が一番深く関わった活動は、防災ジュニアリーダー活動である。元々は、育成合宿という形で合宿を行っていたが、新型コロナウイルスの影響で私が1年生の時から学習会だけの参加に変わった。学習会では、阪神・淡路大震災を経験した語り部さんの話を聞いたり、中高生ができることについて他校の人たちと話し合ったりした。そこで、私が学んだことは2つある。

1つ目は、「心の受け継ぎ」である。私は、語り部さんの話を聞いて心の受け継ぎを学ばせていただいた。語り部さんは、阪神・淡路大震災の自分の経験だけを語るのではなく、ある手紙も私たちに読んでくださった。手紙の内容は、語り部さんご本人のものではなく、子どもを亡くされた、あるお母さんが書いたものだった。しかし、語り部さんの表情や声で、手紙を書いたお母さんの気持ちと語り部さんの気持ちの両方が重なって届き、私は涙が出た。その時に、語り継ぎをする中で同時に心の受け継ぎもされているのだなと気づいた。未災者である私たちがこれから語り継いでいく震災の内容は、自分が経験した話ではない。だからと言って何もしないでいるのではなく、語り部さんのように、伝えたい、知ってほしいという自分の気持ちが大切であり、その気持ちを誰かの語りと一緒に継いでいこうと思った。

2つ目は、私たち環境防災科は決して特別な存在ではないということである。環境防災科は防災を専門に学ぶ学科だが、防災ジュニアリーダー学習会を通して、環境防災科以外にも防災を学び、自分たちでできることを考え、実行している人たちがいることを知った。そして、他校との交流の中、環境防災科で行っていない活動や新しい角度からの見方、考え方などを学んだ。また、私は、校内の防災意識を高める

ための活動として、学校の避難訓練に力を入れて取り組んだ。やらされる避難訓練ではなく、自らデザインする避難訓練を行った。しかし、すべての学校ができるわけではない。この防災ジュニアリーダー学会後の活動で、自分たちができることとして挙げた案が実際にできるということは当たり前ではないこと、させていただいているという感謝の気持ちを忘れないことを学んだ。

5 夢と防災

(1) 私の将来の夢

私は将来、乳児院で働く保育士として防災に関わり、広めていきたいと考えている。私は中学生のころ、子どもへの虐待のニュースを見て心を痛めたことをきっかけに乳児院という施設を知り、その時から乳児院で働く保育士になりたいという夢は変わっていない。しかし、3年生になってから自分の夢と向き合う時間が増え、就職をした後のことなどを深く深く考えると本当にこの道でいいのか分からなくなった。それでも、今まで弟や妹の世話をしてきた経験や知識を自分の強みとして活かしていける職業に就きたいと考え、今も乳児院で働く保育士を目指している。

乳児院にいる子どもは、保育所や幼稚園などに通っている子どもとはまた違う。特に大きな違いは、在所している子どもは複雑な事情を抱えた子どもが多いということである。乳児院に通っている子どもの約4割は虐待が理由で入所してくる。そのため、家族のように愛情と責任感を持って子どもたちを見守る必要がある。

(2) 夢と防災の関わり方、広め方

乳児院で働く保育士の立場でどのように防災に関わり、広めていくか。私は、2つのことを中心に防災を広めていきたい。

1つ目は、自分自身の身の安全の確保と同時に子どもの命も守るために、日頃から避難訓練を行うことである。乳児院に通う0～2歳児は自分で身を守れないため、保育士が子どもたちを守らなければならない。そのため、職員同士で避難訓練を行って安全かつ迅速な動きを心掛けたり、防災マニュアルを作って様々な状況を予想したりすることが必要である。その際に、防災ジュニアリーダーの活動で学校の避難訓練を自らデザインし実行した経験を活かしていきたい。

2つ目は、子どもだけでなく、保護者にも不安な気持ちにさせないように、保護者も防災を学べる機会を作ることである。家にいるとき、買い物をしているときなど、いざという時の子どもの命と自分の命を守る方法や避難所生活で子育てママが困りそうなこと、おすすめの備蓄品などを伝えていきたい。また、保護者も一緒に避難訓練を行う機会を作っていきたい。

そして、災害時だけでなく災害後の避難所生活、復旧・復興段階の時も子どもたちが生き続けられるように、先のことで考えた防災対策を行うこと。保護者とのつながりも大切にし、保育士側からの一方的な意見ばかりではなく、「みんなで防災を学ぶ」ということを心掛けること。この2つを防災を広げていく上で大切にしていきたい。

6 3年間で振り返って

私は、この3年間でたくさんのことを学ばせていただいた。そして、何か活動をするたびに少しずつ成長もした。私は、入学したころと比べて特に2つの力が身についたと思う。

1つ目は、積極的に動こうという気持ちが強くなったことである。私は、この3年間で数多くのボランティア活動に参加させていただいた。それぞれの活動を通して、耳と心で聴こうとする傾聴の姿勢や視覚障がい者の方や子どもへの伝え方など様々なことを学ばせていただいた。中でも一番身についたのが積極的に動こうという気持ちである。今、自分には何ができるのかを見つけて行動に移すこと。これは、臨機応変に対応する力にもつながり、日常だけでなく災害時にも大切なことだと思う。

2つ目は、コミュニケーション能力が高くなったことである。元々私は、自分からは声をかけられない性格だったが、地域の方々や他校の人たちと交流したり、みんなの前で発表したりする機会を通して、自分が思っていることや考えていることを相手に伝わりやすいように工夫する方法を学び、力が付いた。

7 最後に

復興が進めば震災の跡が消えてしまう。私が思うこの『語り継ぐ』を書く意味は、阪神・淡路大震災での出来事、被災者の方の記憶、携わった人々の行動や思いなど、復興したまちからは見えない部分を「かたち」として残すためだと考える。また、震災を体験していない私たちが防災を学ぶのは、風化させない

ため、そして、未来の災害で一人でも多くの人を救うためであると考え。私がこれから大切にしていきたいことは、どこにいてもどんな立場であっても防災を身近に感じるということだ。環境防災科の生徒は、よく「伝えていきたい」「語り継いでいきたい」などと言葉にしているが、そうしていききたいなら、中途半端ではだめだ。まずは、自分を見つめる必要がある。私は、身近なことに目を向け、そこから視野を広げていくということをこれからも大切にしていきたい。

環境防災科で3年間を過ごして、時には自分で自分を追い込みすぎてしんどくなることもあったが、その時に逃げ出さずに全力で取り組んだから、誰かの支えがあったから、今の成長した私がいるのだと思う。先輩方の『語り継ぐ』を見たとき、上手くまとめられるか不安だった。最後まで、書きあげることができたのも入学をした当初の自分からしたら考えられないことだ。この『語り継ぐ』を通して、誰かの経験を文章として表すことの難しさ、自分の活動をまとめることの大変さ、いろんなことを感じたが、この『語り継ぐ』を書く機会があつてよかったと今は思っている。私は、環境防災科の先生や担任の先生、部活動のみんな、環境防災科のみんな、いろんな人に出会えたから成長できた。人との出会いをこれからも大切にしていきたい。

これから生きる

角井 歩樹

1 はじめに

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が発生し、この震災によって6434人の尊い命が失われた。震災から28年、私たちのような“震災を経験していない世代”が年を追うごとに増加している。今後は、未災者が未災者に語り継いでいくことが多くなるだろう。しかし、災害はいつでも発生するかわからない。緊急時に過去の教訓を生かし、自分や周りの人の命を守るため、また、被災者の方々の気持ちを風化させないために、私たちには震災を『語り継いでいく』責任がある。

2 阪神・淡路大震災

（1）母の体験

母は当時、社会人で神戸市長田区に住んでいた。ゴーという音で目が覚め、その直後、下から突き上げるような揺れが襲ったという。家の中は割れた食器やガラスが散乱し歩ける状態ではなく、靴を履いて生活していた。また、近所に知り合いが一人暮らしをしていたため、母はすぐ様子を見に行き、その時に変わり果てた町を見て衝撃を受けたという。インフラは全て止まっていたが、昼頃に電気は回復し、テレビで情報を得ることはできたようだ。テレビをつけると新長田の町が燃えている映像が映し出され、家を出ると肉眼で確認できるほどの炎と黒煙が少し遠くで上がっていたという。幸いなことに家まで炎は来なかったそうだが、初めて「死ぬかもしれない」と感じたらしい。

震災発生から数日間は家の中の片付けをして過ごしたという。電気が使えたため、料理をすることは可能で食べる事には困らなかったが、水が不足していたことが1番大変だったようだ。トイレは浴槽の残り湯を使い、お風呂は名谷に住む友達の家借りに行っていたという。

（2）父の体験

父は当時、大学生で神戸市西区に住んでいた。震災の数日前からインフルエンザにかかっており、家で寝込んでいた。朦朧とする意識のなか、一瞬、窓が光ったような気がした直後、家がしなって見える程の激しい揺れに襲われたという。父の住んでいた家は壁に少し亀裂が入る程度の損傷で済んだが、万が一に備えて震災から数日間は車中泊をしていたそうだ。インフラは全て止まっていたが電気だけは午前中の内に回復し、情報を得ることはできたという。しかし、水が不足していた為、米のとぎ汁をトイレの水に使うなどしていたそうだ。

西区周辺は他地域に比べ被害が少なく、避難所生活をしている人も少なかったそうだ。明石より西へ向かう山陽電車などは問題なく運行しており、道路もひび割れしていたが車を走らせることはできたという。また、姫路の方まで行けば物が買えたことで水以外は特に困ったことは無かったそうだ。

3 両親の話を聞いて

両親から話を聞いて「当たり前は当たり前ではない」ということを強く感じた。これまで、多くの講義で震災体験者の方から様々なことを学ばせてもらったが、最も身近な人から聞く話はそれらとは少し別の意味を持つ話のような気がした。私はこれまでも阪神・淡路大震災について両親に聞いたことがある。しかし、今回ほど真剣に話を聞く機会は初めてだった。両親は暗い話にならないように気を使っていたが、時折見せる表情に震災の記憶が刻まれていると感じた。また、両親の話を聞いて印象的だったことは、生活する上で苦労したことや困ったことが似ていたことだ。二人は住んでいる地域も震災による被害も異なっている。母に関しては近隣で火災や家屋の倒壊などがあった。話を聞く前は長田に住んでいた母のほうが苦労も大きかっただろうと考えていたが、あまり違いがないことに衝撃を受けた。両親の話から人間が生活する上でライフラインがいかに重要なのかを感じることができた。

今後、発生が予想される南海トラフ巨大地震においてもライフラインに関する問題は多く起こるだろう。そうなったときに少しでも苦労のない生活を送るために、水の備蓄といった日ごろからの備えを充実させていきたい。また、この両親の話とそこから得た教訓を誰かに伝えることが私の「語り継ぐ」であると感じた。

4 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

私が環境防災科に入学した理由は消防士になりたいという夢の影響が大きい。私は中学生の頃、進路について悩んでいた。その当時から消防士になりたいという夢を持っていたが第一志望にしていた学校は厳しいと言われ、別の学校を探すことになった。そんな時、舞子高校に在学中だった姉から環境防災科という防災を専門に学ぶ学科があると教えられた。私が中学生の頃は西日本豪雨を含む多くの災害が発生していたため防災には興味を持っており、消防士となる上で防災を学んでおくことは重要だと考え、入学を決意した。

(2) 入学後

舞子高校に入学後、新型コロナウイルスによる影響で2ヶ月間、登校することが出来なかった。2ヶ月後、ようやく学校に行けるようになって、これまで経験したことのない非常事態であることや慣れない環境であることが重なり、授業についていくだけで精一杯だった。しかし、そんな中でも自分が学んだことを家で家族に話すなどの「伝える」ということだけは欠かさず行っていた。

(3) 環境防災科の活動と学び

私が環境防災科の活動の中で印象的なことは、灘区で実施したまち歩きだ。何故、長田のまち歩きではなく灘のまち歩きが印象的なのかというと、活動中に住民のお爺さんから震災当時の話を聞くことができたからだ。お爺さんの家は5人家族で、震災当日、激しい揺れとともに目が覚めたという。揺れが収まった後、どこからか火が出たという声が聞こえ、家を捨てる覚悟で公園に避難したそうだ。その時見た家は大きく歪んでいたという。火は時間とともに勢いを増し、多くの家を飲み込んでいったそうだ。幸いなことに避難した公園に火の手は来なかったが、火に包まれていく街を見て呆然としていたという。この話を聞いて、阪神・淡路大震災が人々に与えた影響の大きさを実感した。現在では、1月17日前後にニュースで取り上げられることを除いてメディアで阪神・淡路大震災について取り上げている機会は少なくなっている。しかし、阪神・淡路大震災を経験した人たちは28年たった今でも震災のことを鮮明に覚えていて、中には未だに苦しんでいる人もいるのかも知れない。そういった人たちに私ができることは震災の事実を語り継いでいくことだ。そしてそれは震災の事実と向き合い続けることだと思う。おそらくそれは大変な生き方だろう。しかし、そうすることが阪神・淡路大震災を風化させないこと、南海トラフ巨大地震を含む今後の災害へ備えることに繋がることだと思う。これから、こういった進路を選んでもこの生き方を実践できるような人間でありたいと感じた。

5 ボランティア活動

私は1年生の時、あまり積極的にボランティアに参加できていなかった。しかし、2年生になり後輩ができるなどの環境の変化から「自分は部活や勉強を言い訳にしてボランティア活動から逃げている」ということに気が付いた。このままでは私は大人になっても何かを言い訳にして逃げてしまうと感じ、顧問の了承を得て、部活と勉強とボランティアの両立を図ろうと決意した。ボランティアは出前授業を中心に活動を行っていた。出前授業は1年生の時に多聞東小学校で行って以来だったため、はじめは不安を覚えたが先輩やクラスメイトがサポートしてくれたことで落ち着いて活動することができた。そして、徐々に経験を積み、神陵台中学校での出前授業ではリーダーを務めさせてもらった。リーダーを務めることはそれまでとは違う苦労が多かったが、それ以上にやりがいと楽しさがあった。

私が出前授業をする際に心がけていたことが2つある。1つ目は「出前授業をさせてもらっている」という気持ちを忘れないことだ。基本的なことかもしれないがとても大切なことだと思う。一方的に行うのではなく共に学び、共に成長することが大切だと感じたからだ。2つ目は授業を受ける人に楽しんで取り組んでもらうことだ。何故なら、防災に関して学習したことを覚えてもらうためである。防災はただ話を聞くだけで身につくものではない。それを知識として自分の中に落とし込むことが重要である。興味の無い授業、つまらない授業では人の記憶には残りにくい。そうなれば、いざというときに正しい知識を使って自分の身を守ることができないだろう。しかし、興味をもって楽しいと感じたことは記憶に残りやすい。そして、防災に興味を持ってもらうことは、次の世代を育てる面でも、防災をもっと学びたいと感じてもらえるきっかけづくりの面でも重要になるからだ。

6 新型コロナウイルス

私の3年間の高校生活は、防災と同じくらい新型コロナウイルスと向き合わなければならなかった。高校入学後、緊急事態宣言という異例の状況に陥り、2ヶ月間学校に行けなくなってしまった。そして、外出自粛によって友達に会うことも難しくなった。6月になり学校に登校できるようになっても、社会全体が危機感を募らせているような状況だったため厳しい制限が課せられた。私自身、いつも閉塞感とやり切れないもどかしい気持ちを抱えて過ごしていた記憶がある。ボランティアや講義といった環境防災科の活動も憚られるようになった。新型コロナウイルスの影響を受けたのは高校生活だけではない。避難所に身を寄せる人々にまで影響を及ぼし、避難所生活にさらなる負担がかかることとなった。

新型コロナウイルスが私たちにもたらした影響は大きい。それには良いことも悪いことも両方あった。良いことの一例を挙げると、リモートで人と接する機会が増えたことだ。特にリモートで行った出前授業は通常時では絶対に経験できなかったことだ。そういった意味では新鮮味があって面白かった。また、リモートを使えばいつでも、どこでも誰かとつながることが可能で、海外の人とも顔を見て接することが容易にできるようになった。反対に悪いことの例を挙げると、コロナ患者の急激な増加によって病床が不足し最悪の場合亡くなってしまう人が出たことや、医療従事者の負担の増加、外国人観光客の規制、蔓延防止処置による飲食店の営業規制など挙げていけばキリがない。その中でも私は新型コロナウイルス感染者が不当な差別や偏見をもたれていることが大きな問題だと感じた。コロナウイルス感染者が差別を受けることで新たな感染者が名乗り出ることが難しくなり、感染者であることを隠して生活してしまう。それにより感染が拡大するからだ。今の社会ではどんなに感染しないように気を付けていても感染してしまうことがある。それは誰にでも起きうることであるため、感染してしまうのは仕方のないことだといえる。感染してしまった人を責めるのではなく、受け入れるような社会を作ることが今後、求められていると思う。この先、数年間はコロナウイルスと向き合っていくことになるだろう。終息に向けて自分にできる対策を続けていきたい。

7 夢と防災

(1) 将来の夢ときっかけ

私の将来の夢は前述のとおり消防士になることだ。消防士になりたいと決意したきっかけは2つある。1つ目は安定した職業に就きたいと考えていたからだ。私には教師や市役所勤務など公務員の親戚が多くいる。その親戚たちの話を幼い頃からよく聞いていたため、自分自身も彼らのように公務員になりたいと考えるようになった。2つ目の理由は人を助ける職業に就きたいと考えるようになったからだ。私には4歳下の妹がおり、何度か救急救命士の方に助けられている。その時に、人の命を救うために迅速に対応する救急救命士の姿に強い憧れを抱くようになり、人を助ける職業に就きたいと考え始めるようになった。また、私が小学生の時に東日本大震災が起こり、テレビで多くの人が苦しんでいることを知り、自分がこういった人たちの助けになりたいと感じたこともきっかけの1つだ。そして人を助ける職業の中で「消防士」という職業が自分に一番適していると考えたため消防士を志すようになった。

(2) 防災との関わり方

防災は生きていくうえで誰しもが関わる重要なことだ。特に消防士と防災の関係性は極めて深いものだろう。防災に取り組むことが自分の命を守ること、さらには他人の命を守ることに繋がる。よって、自分自身が消防士となって救える命を救うために何をすべきか考えた。「環境防災科の活動と学び」にも記載したが、私は過去の災害の事実を語り継いでいきたい。そのためには地域とのつながりが重要なため、市民の人々が防災訓練などのイベントを通して防災に触れる機会を増やしたいと考えている。なぜなら防災を身近に感じてもらうためだ。しかし、防災イベントなどはこれまでも行われてきたが若者の参加者が少ないことが課題として挙げられる。こういった問題を解決するためには若者に興味を持ってもらうことが大切だ。そのための具体策として、水消火器の使用や煙体験、防護服の着用など体験型のイベントを実施したい。ただ話を聞くだけではなく、自分自身で実際に触れて感じる機会があるほうが興味を引きやすいと思う。イベントで体験できるものは消防という組織でしか実施できない内容のものを取り上げたい。そうすることでオリジナリティがあるものになると思う。しかし、この体験をするためだけにイベントに参加するというのはあまり期待ができないため地域の祭りや地域の大きなイベントと同時に行うことで、若者の気も引きやすいし、家族連れや高齢者などからも興味を持ってもらえると思う。また、祭りなどに参加することは地域とのつながりを深めることになるので次回以降、イベントや講習を開く際にも参加してもらえと思うし、災害時においても地域住民と連携しながら迅速に命を守ることに繋が

るだろう。このように、イベントの開催方法や内容を工夫して効果的に防災を広めていくことで防災への興味を高め、震災の風化を防ぐことや自助や共助の考え方を育んでいくことに繋がると思う。また、次を担う若者の人材育成にも効果を発揮すると思う。

8 最後に

私はこの「語り継ぐ」を執筆するにあたって、お世話になったすべての人に感謝したいと思う。私は環境防災科として過ごした3年間で多くの経験をした。将来の夢に活かせることや、災害時に自分と他人の命を守るためにすべきこと、ボランティアの在り方等々、自分がこれからの人生を生きる上で大切なことを学んだ。この3年間で人間的に大きく成長できたと実感している。ここで学んだことを忘れることなく、将来に活かしたい。

未災者として

川越 彩生

1 はじめに

私は幼稚園の年長の時に、神奈川県から神戸市に引っ越してきた。そのため、私、弟、両親は阪神・淡路大震災を経験していない未災者である。未災者として何かできることをしたいと思い、これまでに未災者でありながらも被災された方々に当時の体験や教訓を聞かせていただいた。それを語り継ぐ。語り継ぐことで、風化を防ぎ、近い将来の災害に備えることができると思う。

2 阪神・淡路大震災

父の話

(1) 横浜から見た阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災発生時、父は横浜に暮らしていた。朝、学校へ行く準備をしている時に、テレビのニュースを見て、大きな地震が発生したことを知った。映像を見ると、火災が発生し、高速道路は横倒しになっていた。様々な家屋が倒壊し「まるで何かの戦争映画を見ているようなとても信じられない状況だったことを覚えている」と言っていた。今までに見たことのない光景が広がっていて茫然とした。また現実起きたことを受け入れ、理解するのにとても時間がかかったことも覚えているようだ。

(2) 社会人として聞いた話

父は、神戸市長田区の会社に縁があって入社した。阪神・淡路大震災の時、地震後の火災により長田区の会社のある真野地区でも火の手が上がっていた。大きな被害が出たが、会社には業種柄手押しポンプ車3台が設備されており、夜勤の社員60名が消火栓を使えない状況下で、必死の行動で敷地内の井戸を活用し、地域の住民と協力し合い消火活動を行った。その結果、延焼を食い止めたようだ。また、会社の体育館では被災者の受け入れを行ったようだ。その会社は、今でも防災訓練を実施しており、住民との共生を基本に放水訓練をし、社員一人一人が考えて動けるよう、防災への活動を継続している。

母の話

(1) 横浜から見た阪神・淡路大震災

母は当時、今の私と同じ高校3年生。横浜に住んでいたのも、実際震災は経験していない。母は、受験生だったので毎日テレビから流れてくるニュースを見て、自分と同年の子は、どうしているのか、学校や卒業式は、どうなっているのかと思っていたという。

(2) 東日本大震災

母は、東日本大震災が起こる前の5月に横浜から神戸へ引っ越しをした。ちょうど私が年長の年。たまたま、母の友人がテレビから流れるニュースを見て関東出身の母に電話をしてくれたようだ。母は、運転中ですぐに被害状況を確認できなかったが、すぐにただ事ではないと分かり、横浜の祖父母（私の母の実家）に電話をして無事を確認したようだ。祖父母たちは、今までにない揺れがかなり感じられ、発生直後は、慌てて玄関を開けたようだ。横浜でも震度5弱の揺れだったようだ。食料なども一時的に不足しがちだったので、神戸から、すぐに食べられる保存食などを母が送ったようだ。

当時横浜に住んでいた時、幼稚園からの友達は大きな被害はなかったが、計画停電などがあったので、卒園式も縮小されたようだ。

母の知人の話

(1) 震災直後

母と同じく知人も阪神・淡路大震災当時は高校3年生。地震とすぐ分らず、ベッドで寝ていた。だが、バタンバタンと上下左右に大きく揺さぶられる感じがあったようだ。「ぎゃーっ」と叫びながら敷布団にしがみついた。数秒だったがとても長く感じたようだ。

その方は、神戸市垂水区に住んでいたのも、すぐに車で小学校に避難した。ところが、運動場は車でいっぱいだったため、駐車場に避難することになった。真冬のため、一晩中エンジンをかけながら過ごしたようだ。しかし、何回か余震があり眠れなかったという。朝になると、配給でパンが配られたようだ。一

度家に戻ると、食器は食器棚から落ちて粉々になっていた。ピアノは台座から外れて壁に打ちつけられ、壁には穴が空いていた。すぐに電気や電話は使えたので、友達と連絡を取り合ったそうだ。

(2) 発災後

地震が収まった後、学校は、1、2回登校日があり、安否確認程度があったそうだ。その後は卒業式までは登校しなかった。水道が止まっていたので、数回だけ水を汲みに行った。お風呂がガスで沸かせなかったのので、電気ポットで沸かしたお湯を湯船に入れ、お風呂に入った。また、友達の家で入らせてもらった。地震の日の空が赤黒かったのを覚えているという。当時は分からなかったが、火事の影響だとわかったそうだ。

3 話を聞いて

父の話を聞き、小学1年生の時に、初めて阪神・淡路大震災の映像を見て衝撃を受けたことを思い出した。父からは、何回か父の知人の被災体験を聞いたことがあった。だが、今回は、より詳しい話を聞くことができ、感じさせられることがあった。阪神・淡路大震災での経験を生かし、被災時だけではなく、次に起こる災害に備えて日頃から継続的に防災訓練を行うことの大切さを改めて感じた。継続的に行うことによって、どのような時に災害が起こったとしても災害対応が迅速になることにつながるのだと思った。地域住民との関わりを保ち、災害時には協力し助け合えるような、信頼の関係ができると思う。そのため、私もこれからも地域の行事ごとに参加し、コミュニケーションをとるなどをして地域の方と積極的に関わり続けていこうと思う。

母からは、初めて詳しく東日本大震災時の話を聞いた。叔母と祖父母が震度5弱の地震を体験していたことも初めて知った。食料が不足ぎみになっていたことを聞き、災害前の備蓄を普段からしておくことの大切さが改めてよく分かった。緊急時の備えはいつでもしておくべきである。

母の知人の方からは、初めて被災体験を聞かせていただいた。感謝を伝えたい。身近な人から地震のリアルな体験談を初めて聞くことができた。もし、私が中学3年生の時に被災をしていたらパニックに陥り、受験に集中することは難しかったと思う。被災と受験の2つの困難が重なっていたのだと感じた。また、知人の方は友人と連絡をすぐに取れて安否を確認することができたそうだが、災害後は取れない可能性の方が高い。そのため、日頃から避難場所や避難ルートを確認し、集合する場所を決めておくことが命を守る行動として大切である。

4 東北訪問

私は、東北訪問に行くことができるという環境防災科ならではの取り組みに惹かれていた。1年生、2年生で参加の応募をしたが、コロナの影響により、なかなか参加することができなかった。しかし、2022年の1月3回目の応募でやっと参加することができた。とてもうれしかった。

東北訪問では、東日本大震災の被災地に行った。1番印象に残った活動は、大川小学校に訪れたことである。初めて実際に震災で被害に遭った建物を間近で見た。建物には損傷や津波の跡が残っていて、倉庫には網などが置かれたままで校舎の様子がそのまま残され、あの時から時間が止まっていた。写真で見るとは違い、迫力があつた。一度は、自ら足を運び見に行くべき場所である。ある1つの壁に「未来へつなぐ」という言葉が書かれていた。その意味は、語り部である佐藤敏郎さんから聞いた。「震災の悲しい思い出、つらい思い出だけが心の中に留まっているのではなく、家族、友達、学校、こどもの笑顔などがあつた当たり前のような日常が存在していたことを後世に伝えてほしい」とおっしゃっていた。その言葉が心に深く残った。被災地を訪問する前までは、震災を経験し、悲しくつらい思い出になっていると思っていた。しかし、それは間違いだった。1人1人が、震災に向き合い一步一步前に進み必死に歩きだしていたことが分かった。そして、災害だけに目を向けるのではなく、災害前の社会背景にも焦点を当てることが重要だと改めて強く感じた。これからも心掛けていきたい。

5 環境防災科に入って

(1) きっかけ

私が環境防災科に入ったきっかけは、母が紹介してくれたことである。以前からボランティアに興味があり、様々なボランティア活動ができる学校だと知り、強く心を惹かれた。その活動の中で東北訪問という取り組みがあつた。東日本大震災で被災された方から直接話を聞かせて頂くことや被災した建物を間近で見ることができるというものだった。その訪問に行きたいと強く思った。志望理由の1つでもあ

る。また、私は、阪神・淡路大震災や東日本大震災を経験したわけでもない。だが、災害や防災について深く学び、災害のメカニズムを知ることによって少しでも人の役に立てるのではないかと、自分の将来にも役立てたいと思ったからだ。

(2) 授業を通して学んだこと

入学後は、授業を聞くことにより様々な知識を得ることができた。災害のメカニズムや社会背景を学んだ。災害の表の部分だけでなく、裏の背景に目を向けることの大切さも学んだ。

1年生では、「災害と人間」の授業で様々な講師の方に来ていただき、体験談を聞かせていただいた。その体験談を家族にいつも話すようにしていた。すると、災害や防災に対して、以前よりも興味をもつようになり、家具の固定を強化する、備蓄をどうするかなど話し合う時間が多くなった。

2年、3年生では、授業でグループワークを行い、意見を共有することが多くあった。自分とは違った相手の意見や発想を知ることができ、得られることが多くあった。自分1人ではなく他の人の意見も聞くことによって新しい考えが生まれ、より深い考えになるのだと実感した。

3年間で学んだことを自分の将来に活かし、自分の命だけでなく、様々な方の命を守れるようにしたい。

(3) ボランティア活動を通して

私は、今まで様々なボランティア活動に参加してきた。ボランティアをする側は「させていてほしい」ということを心掛けて活動をするように、これを忘れてはいけない」と授業で先生がおっしゃっていた。私はそれから参加をする際、ボランティア活動は当たり前にはできず、させていてほしいと常に感謝の気持ちを持ちながら活動をした。

様々なボランティア活動の中でも自分に印象に残った活動がある。それは、子どもに防災に関する紙芝居を読む、一緒に防災体操などをする活動だった。活動準備では対象が子どもだったため、子どもには難しく読めない言葉を分かりやすくするなど様々な工夫をした。誰かに災害や防災を伝える時、その方達に寄り添った伝え方をすることの大切さを学んだ。そうすることによって、相手により伝わりやすくなると感じた。

6 夢と防災

(1) 将来の夢

私は将来、保育士、幼稚園教諭になりたいと思っている。この夢は、入学当初からずっと変わっていない。私は元々、子どもが好きだ。中学の家庭科の授業の一環で幼稚園に訪問したことがある。その際、子どもたちの行動や発想の豊かさを間近で見て興味を抱いた。子どもたちの特性を理解し、もっと深く関わっていききたいと強く思った。

(2) 防災をどう広める

子どもは、自分で命を守ることは難しい。そのため、高校で培ってきた防災知識を活かし、まずは保育士、幼稚園教諭に防災に関する意識と知識を身につけてもらう。それにより、大人が誤った判断をすることはなくなり、子どもの命を守ることに繋がると考える。

東日本大震災時、保育園や幼稚園で命は守れたものの保護者に引き渡し後、亡くなってしまった子どもがたくさんいる。だから、保護者の防災意識も高める必要がある。定期的に保護者も参加型の防災訓練を実施し、常に防災に関わる環境づくりを行うことも大切になってくると考える。園内には、保育園までの避難ルートや、近くの危険場所を示したものを掲示しておく。それを普段の保護者との会話の中で話題に出し、一緒に見て避難ルートや危険場所の掲示を見るきっかけづくりをする。そうすることによって、保護者の災害と防災に対する意識が高まることになると考える。意識を高めておくことで、いつ災害が来たとしても、備えられるようにしておく。

そして、子どもの防災意識も高める。楽しく防災を学べるように、難しいものではなく簡単な防災クイズ、防災体操、手作りの防災グッズ作りなどをして防災を難しいものだと捉えず、身近なものだと捉えられるようにする。それによって、防災に関心を持つことができると思う。子どもの頃から、防災に関わることで、大人になったときに防災が当たり前のようになり、生活の一部になり、日頃から災害や防災について考えることができるようになって考えている。そのため、災害からの被害を最小限に抑え、自分の命を守り、さらにその子どもの命を守ることに繋がる。

さらに、子どもが防災クイズや防災体操、手作りの防災グッズの作り方を家で親に話すことも防災を広げることになると考える。家族で避難ルートや避難場所を話すきっかけになり、それ以外にも家具の固定や備蓄の準備など様々な防災に結びつくと思う。

7 さいごに

この『語り継ぐ』を書き、伝えることの大切さを学んだ。今回被災者と未災者の方から震災当時の様子を聞かせていただいた。伝えるということは、簡単ではない。伝えたい内容が伝わらないときもある。これを自分なりに整理し、未災者として伝えていく。未災者だからこそ聞いて感じたことや教訓を伝えることができるのではないかと思う。そして、伝えた方に、災害や防災に興味をもっていただけるように印象に残る語り継ぎをしていきたい。

南海トラフ巨大地震が起こると言われている今、私達の世代が動かなければならない。これまで学んできたことを活かし、自分にできることを見つけ一生懸命取り組みたい。阪神・淡路大震災から学んだ教訓を決して忘れてはいけない。風化をさせてはいけない。

これからも高校で続けてきたボランティア活動を自分なりに続けていきたい。

防災への第一歩

後藤 芽衣

1 はじめに

私が生まれた約9年前にたくさんの人の命が犠牲となった阪神・淡路大震災が起こった。また、私が小学校に入学する前には東日本大震災が起こった。しかし、私はどちらも体験していないし、記憶にもない。テレビや授業、書籍などの人づてにしか、そこで起こったことを知ることができない。しかし、環境防災科で学び、そんな自分たちに何ができるのかを懸命に考えてきた。いろんな人から被災体験を聞き、災害・防災と向き合ってきた。それでもまだまだ未熟で、自分にできることは小さなことだ。けれども、阪神・淡路大震災をはじめとする大災害を風化させたくない、今後起こるとされている南海トラフ巨大地震での犠牲者を最小限にしたい、そんな私の想いが読んでくださる人に伝わってほしいと思う。そして、それらの想いを語り継いでほしいと思う。

2 叔父の話

(1) 阪神・淡路大震災について

叔父は当時高校2年生(17歳)で、電気工事の会社の寮で学生として西宮市に住んでいた。寮は8人が1部屋で暮らしており、当日は正月休みで実家から帰ってきて数日が経っていた頃だった。部屋で寝ているときに地震が起こって、ものすごい揺れでベッドごと部屋はぐちゃぐちゃになったという。叔父は、「まるでみんながダンスしているみたいだった」と、その時の光景を表現する。外の建物はつぶれていて、電線が切れて火花が散っていたという。暮らしていた寮は何百人も暮らせる建物だったので、ほとんど被害はなかった。そして、会社からは「家に帰れ」と言われたが、電車が止まっていたため、京都の実家へ帰るためには電車が動いていた大阪まで、何時間も歩いた。その道中では、ガスのにおいがしたという。家に帰ると、翌日には会社から「戻って来い」と言われ、フェリーで三宮の営業所へ向かった。先輩たちは電気工事の仕事をしていたが、叔父はがれき撤去を1、2か月やらされ、その営業所で雑魚寝して過ごしていた。食事は1人に2食分のカップラーメンが支給されていた。

それからしばらく経って、災害廃棄物の処理場を作るための電気を通す工事のために三田の山奥へ1か月ほど駆り出されることもあったという。

(2) 東日本大震災について

当時33歳の叔父は建築会社に勤めていて、震災発生から1か月後に仮設住宅の建設のために岩手の海沿いの町を訪れた。その時、車で向かったが、津波の影響で店などがなくカーナビの指示が全然わからなかったそうだ。また、岩手に到着する前に福島のホテルに立ち寄ったが、異様な空気が流れていて、ここには被災者しかいないと感じてすぐにホテルを後にした。町の様子はがれきだらけで、道路の真ん中に流されてきた船があったそうだ。また、津波で魚などが流された影響か、町全体が臭かったと言っていた。建築会社からは、仮設住宅を1人1部屋作るように指示されていた。叔父も同僚もみな「こんなところりたくない。1秒も早く帰りたい」と思い、1週間から10日ほどで完成させて帰ったそうだ。

3 話を聞いて

私は、今まで授業や講義を聞いて、被災したら被災者として避難所生活を送ることが当たり前のよう感じていた。しかし、叔父の話聞いて同じように被災していても、すぐに復旧に駆り出される学生がいたことに驚いた。そんな叔父には事実として被災はしたが「被災者」という肩書は全く与えられていないような気がした。それを踏まえると、1年生の時に「災害と人間」の授業で講師として来てくださった方々のような、ライフラインの復旧や、警察や自衛隊のような救助や支援に携わっていた人たちも同じような苦勞をしていたと思う。さらに、そんな肉体労働をしても救援物資の1日2食のカップラーメンくらいしか食べられない環境にもおかしいと思った。また、今まではボランティアの人たちの話しか聞いてこなかったけれど、東日本大震災のときの叔父のように仕事として復旧・復興に携わった人の話を聞いてその人たちへの対応があまりよくないと思った。ただでさえ、その土地への愛着やボランティアの方のような善意があるわけでもない人が、被災地の環境で働かされることは、そんなに楽な仕事ではないと思う。東日本大震災のときに叔父たちが早く帰りたいと思った気持ちも、私には否定できない。そのため、叔父のように、ボランティア以外で復旧・復興や救助に携わる人にもっとサポートが必要だと思った。そ

して、私も今後そんな人たちのサポートをできるようにしたいと思った。また、そのような状況で復旧・復興に従事してくださる方への感謝を忘れずにいたいと思った。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私はどの高校を第一志望にするか迷っていた時に、「どこもそんなにやること変わらんやろ」と思っていた。しかし、ある時高校の案内がたくさん載っている本で「環境防災科」という言葉に目を引いた。ほかのどこにも似たような高校がなくて「何ができるとこなんやろ」と興味がわいたからだ。また、それまでは1年に1度くらいしか防災に関する授業を受ける機会がなかったため専門的に学んでみたいと思った。その後、色々と調べているうちに将来の夢にも防災がつながりそうだとということで受験を決めた。

(2) 入学してから

私は入学当初からボランティアに一生懸命取り組もうと思っていたものの、普段の生活との両立がうまくできなくて、1年生の冬からボランティアには参加できずにいる。しかし、うまくいかなかったボランティア活動の中にもたくさん得られることがあった。私は、ボランティア関係でいうと主に2つのことに携わった。1つ目は災害メモリアルアクションだ。これは、多くの人に災害や防災に興味を持ってもらうことを目的に、先生たちにインタビューをして、冊子や年表を作ったり、ほかの学校や専門家と意見や活動内容を共有したりしていた。ここでは、先生に被災体験に関して直接インタビューをしたり、ほかの先生方の被災体験を知ったりすることで、阪神・淡路大震災を少し身近に感じる事ができたと思う。2つ目は防災ジュニアリーダーの活動である。これは、各ジュニアリーダー校で集まって、講義に参加したり、意見交換したりして、それを学校に持ち帰り、生かしていく活動である。私はこの2つの活動を通して、意見交換をして、それについて考えることで様々な視点から物事を見る力が身についたと思う。

また、環境防災科では、ボランティア活動以外でも授業内でも人前で発表したり、大きな課題に時間をかけて取り組んだりするなどの機会が多くあった。そのような活動を通して、自主性や創造性、社会性なども育むことも出来たと思う。さらに、以前は深く思い悩むことも多かった対人関係も、3年間同じクラスメイトと生活することで、少しずつ苦手意識が改善されたように思う。特に頼れる友達ができたり、友達に支えてもらったりしたことで、友達の大切さやありがたみを感じた。そして、苦悩も多かったが、3年間環境防災科で過ごしたことで、少し人間として成長できたと実感している。もちろん、私には不足していることもたくさんある。それも環境防災科で学んだこと活かして、今後成長していきたいと思っている。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は心理学を学んで、心理士として困っている人のところに寄り添うことである。幼いころから人のために働ける職業に就きたいと何となく考えていた。そして具体的に心理士になりたいと思ったきっかけは、中学生の時に仲の良い友達が学校に来なくなったことだ。何か力になりたいと思っていた時に臨床心理士という仕事があるのを知った。また、私は幼い頃から刺激に敏感で、頻繁に些細なことで思い悩んで自分を苦しめてしまうことがあり、それを心理学を学んでなんとかしたいと思った。そして、調べていくうちに、困っている人のところに寄り添う職業だと知って、臨床心理士という職業を魅力的に感じて、志そうと思った。

臨床心理士になったら、自分と同じように繊細な心を持ち、普段の生活に生きづらさを抱える人たちのところに寄り添うことができるようになりたいと思っている。社会の中で人間関係や勉強、仕事などで悩みを抱えていたり、漠然とした不安を抱えたりしている人の力になりたい。カウンセリングというと、世間では精神疾患にかかった人や不登校、こころに深い傷を負った人などの医療行為が必要になったり、心が崩壊してしまったりして行き詰ったときに頼るものというイメージがある。しかし、私はそのような状態になる前に誰かに悩みを吐き出せるような世の中になればよいと思っている。私はそれを目標に掲げて臨床心理士として働きたいと考えている。

防災に関しては、小・中学校で阪神淡路大震災や防災に関する授業で、被災体験や災害の詳細を聞くうちに、二度とこんな思いをする人たちを見たくない何となく心苦しく感じた。そして、臨床心理士が災害現場でも活躍していると知って、被災地支援などもできる心理士になりたいと思うようになった。

(2) 臨床心理士と防災

私はACTIVE防災Ⅰという授業で、子どものための心理的応急処置や被災者の精神状態の変化について、学んできた。それらの授業や講義は私にとって非常に興味深い内容だった。その授業の内容では、専門家が行う医療行為とは別で今の私たちができるこころのケアを学んだ。しかし、私はそれだけでなく専門的にこころのケアについて学び、子どもだけでなく大人にも頼りにされる心理士として災害現場で働きたいと思っている。強いストレスや絶望感、将来への不安に苛まれる被災者のこころに少しでも寄り添えるようになりたい。そして、回復が困難となる、うつ病やPTSDの発症、災害関連死を防ぎたい。また、私の叔父のように被災しても働かざるをえない状況にある被災者や、ボランティアや仕事として被災地支援に来ている人のこころのサポートもしたいと思っている。慣れない環境での長時間の復興作業や批判を浴びることによるストレスを緩和して、スムーズで快適に復興作業に携わってもらいたいと思う。ほかに、快適な環境作りとして、足湯や喫茶スペースなどの、被災者も支援者も積極的にコミュニティに参加できる場を提供できるようにしたい。また、心理学を学んで、その知識やテクニックを生かして、防災を社会に広めたり、身近に感じてもらうたりできるようになりたいと思っている。そのことによって早めに避難してもらったり、日常的に防災について考えたりできる社会を実現したい。さらに、重症な精神疾患を持つ方々が被災してしまうと、回復がより難しくなったり、避難所生活が困難になったりする可能性があるため、それを防ぐために平常時にそのような人たちが社会で極力生まれないようにする必要がある。また、日々生きづらさを抱えながら生活している方々が被災すると、それを引き金に精神疾患を発症してしまう恐れもある。そのため、そうなる前に平常時に気軽にカウンセリングを受けられるような環境を整備していきたい。

6 新型コロナウイルス

私は新型コロナウイルスの影響で、中学3年生の末から高校3年生の現在まで様々なことに悩まされてきた。マスクの着用によって顔が見えず、コミュニケーションが円滑に進まなかったり、ソーシャルディスタンスや消毒、換気など環境の変化に戸惑ったりした。それに伴い、防災のあり方も変わってきている。避難時に持ち出すものや避難方法を改善したり、臨機応変に対応したりしなければならなかった。しかし、避難時の臨機応変な行動はコロナ禍でなくても意識しなくてはならないことだ。私は新型コロナウイルス感染拡大によって改めて認識することができたと思う。

また、感染症の症状や、自粛期間による運動不足など身体面での問題があったことに対して、新型コロナウイルス感染拡大による不安やストレスを抱える人が増えた。最初は、感染者や濃厚接触者への差別が見られ、その差別に苦しんだ人もいたと思う。そして、それについての授業や講義を受け、そのような差別がより感染拡大につながることを学んだ。さらに、新しい生活様式になじめなかったり、ストレス解消やリフレッシュがうまくできなかったりすることに悩んだ人も多くいるだろう。その結果、「コロナ不安」や「コロナ鬱」、「コロナ疲れ」という言葉が生まれた。私も世間や周囲の人々とのコロナウイルスの予防や対策に関する価値観に差があり、少し心苦しさを抱えた時期があった。そして、今後新たな課題が新型コロナウイルスに代わって出てくるだろう。それに合わせて社会での臨床心理士の立ち位置やニーズも変わっていくと思う。だから、この新型コロナウイルスの感染拡大を通して、常に世の中のニーズを意識して臨床心理士として活動していきたいと思った。

7 最後に

今回「語り継ぐ」を執筆して、長い間をかけて自分のこころと向き合うことができた。将来、「臨床心理士に本当になりたいのか」、「なれるのか」、「防災とどのように向き合っていくのか」、「自分は何がしたいのか」と執筆中に何度も自分の心に問いかけて、思い悩んだ。自分の心と向き合うのがしんどくなって、しばらく執筆する手が止まったこともあった。しかし、指導して下さった先生方、ふさぎ込んでいた私に寄り添ってくれた母、学校で私を笑顔で迎えてくれたり、心の支えになってくれたりした友達の存在があり、「語り継ぐ」を最後まで書き上げることができた。これは、環境防災科に入学しないとできなかった体験だと思う。こんな私を支えてくれた周りの人たちに感謝を伝えたいと思う。そして、今回、執筆にあたって被災体験、支援体験を語って下さった叔父にも感謝を伝えたい。

また、私たちの『語り継ぐ』を読んで、防災意識の向上や災害について考える機会を持っていただくことができれば執筆者冥利に尽きる。私は災害を知ることが防災への第一歩になると考えているので、これを読んで知ったことや感じたことを身近な人にシェアして、事実だけでなくその想いを語り継いでいってほしいと思う。

これからの社会では、もっとカウンセリングのニーズが増えると考えている。私は、『語り継ぐ』を執筆して考えた「こんなことをしたい」という想いを忘れずに臨床心理士として活動したいと思う。高校生活の中であまり取り組めなかったボランティア活動にも将来的に参加していきたい。そして、環境防災科で学んだことを無駄にせず、継続的に防災に関わって生きていきたい。

未災者だから分かること

小西 うらら

1 はじめに

私は1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災を経験していない。私と同じように震災を経験していない人は多くいると思う。その中には、経験していないから分からない、経験していないのに何を語り継ぐことができるのだろうと思う人もいるだろう。しかし、経験していないからこそわかることがあると思う。それは、経験したことのない人の視点から阪神・淡路大震災を見ることだ。大きな災害を経験していない世代はたくさんいる。経験していないから分からないで終わらせるのではなく、経験したことのない人の視点にたって語り継ぐことも大切だと考える。

2 阪神・淡路大震災での母の被災体験

(1) 阪神・淡路大震災発生直後の体験

母は当時、神戸市須磨区に住んでいた。阪神・淡路大震災当日の朝ベッドで寝ていた。「ゴ——ッ」という音と共に大きな揺れが襲った。あまりにも大きな揺れだったので、ベッドから起き上がることができなかった。揺れが収まってから、家族の名前を呼んだ。家族は全員無事だった。弟の部屋はベッドに横になった際の足元側に本棚が配置されており、扉が観音開きであったため扉が開き、支えとなったおかげで寝ていたベッドが崩れずに助かった。何が起こったか分からず、家の2階の窓から外を覗くと、裏の家が潰れていて、すでに消防隊の方が駆けつけていた。暗くて自分では気が付かなかったが、消防隊の方に「隣の家の屋根が突き刺さっている、みんな公園に集まってきているから逃げなさい」と言われた。少しすると、日が昇り明るくなってきた。唯一開いていた近くのコンビニに行った。そこでは、入場制限がかかっていて、行列ができていた。レジも使えないので店員の人が1つ1つ計算をしてくれ、お金を支払った。

(2) 勤務先で

母は、須磨から六甲にある病院に仕事に向かおうとしたが、電車が使えなかったので1週間仕事に行くことができなかった。1週間後、東京の本社から車が来た。その車で働いている人の家まで一人ずつ迎えに行き、そのまま六甲の病院まで向かった。いつもなら40分～50分ほどで行けるが、車が渋滞していて4時間もかかった。母は勤務先にいた人から「地震発生直後は怪我をした人が待合室にあふれていた」という話を聞いた。病院にはカルテを作れないほど人が殺到していたので、メモ用紙に処置した内容を書いた。病院の向かいにあった、健診センターは遺体でいっぱいになっていた。病院の先生が亡くなった方に書く死亡診断書が無いと火葬をすることができない。病院の先生は、「医者なのに数えきれないほどの死亡診断書を書かないといけなのがつらい」と泣いていた。診断内容はほぼ圧死で、「圧死としか書きようがない」と言っていた。1年後の1月17日には、仕事中にみんなで集まって黙とうをした。

(3) 阪神・淡路大震災発生後日

須磨で被災したが、昔住んでいたのが長田区だったので、家族で火災が落ち着いてから長田区を見に行った。まだ、焼けた跡の焦げた匂いがしていた。昔、自分が遊んでいた場所が全部焼け落ちてあまりにも変わり果てた姿に涙が出た。当時、神戸新聞の配達はなかったが、町の中に新聞を置いている場所があり、その新聞を見ると日に日に亡くなった方の人数が増えていった。

3 話を聞いて

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。そのため、被災した方のお話や当時の写真を見て想像することしかできない。今回「語り継ぐ」を書くにあたって、初めて母の被災体験を詳しく聞いた。自分に一番身近な存在である母の体験談だ。今までは阪神・淡路大震災当時の様子を想像しようとしてもどこか他人事としてとらえてしまうことが少しあったが、自分の一番身近な存在の母の話は重みが違った。自分が想像をするよりも何倍も衝撃的だった。聞いた話の中でも特に母の勤務先での話が印象に残っている。阪神・淡路大震災がどれだけ大きなものだったのか、どれだけ多くの人が犠牲になったのかということが身に染みて分かった。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を知ったのは、中学生の頃、進路に迷っている時に母がすすめてくれたからだ。幼いころから人の命を救いたいという気持ちがあったので、私にぴったりだと教えてくれた。そこから環境防災科について調べていくうちに少しずつ災害や防災に興味をもつようになった。興味を持つようになったのと同時期に自身の中学校で避難訓練が行われた。その避難訓練は、地震を想定しているもので、予告ありで行われた。ほとんどの人がふざけて笑いながら避難訓練に参加していた。その時、もし本当に大きな地震が起きたらどうなってしまうのだろうかと考えた。そこからもっと防災や災害について学びたいと思うようになった。

(2) 入学して

私が環境防災科に入学してから、授業や講義を受けるなかで、自分の知識の少なさに驚かされた。今までも小学校や中学校で阪神・淡路大震災のことや防災についての授業を受けたことがあった。しかし、環境防災科に入学してから、今まで聞いてきた内容は 100 分の 1 にも満たないくらいの知識だということに気付いた。このように災害や防災に対しての知識がほとんどない世代がたくさんいると思うと、とても怖くて恐ろしいことだと思った。このとき、私が環境防災科に入学して災害や防災について学ぶ意味が明確になったような気がした。

5 環境防災科での活動

私は環境防災科に入学してから、今まで様々な活動に参加させてもらった。その中でも印象に残っている活動が 4 つある。

(1) ボランティア活動

私が環境防災科に入学する前までは、自分がボランティア活動を行いたいから、誰かのために募金をしたり炊き出しをしたりするのだと思っていた。しかし、私がボランティア活動を行っていくなかで、自分がやりたいからやるのではないということに気付いた。ボランティア活動をすることでボランティアを行っている私の方が多くのことを学ぶことや感じることができた。そこから、ボランティア活動をさせていただいているのだという考えになった。

(2) 出前授業

出前授業は小学生、中学生を対象に防災や災害についての授業を行う活動だ。この活動を行う事で私自身も、多くのことを学ばせていただいた。相手からの希望に沿って授業を作っていく。年齢に合わせてどのように授業をすると分かりやすいのか、興味を示してくれるのかを自分がその年齢の時どうだったかを思い出しながら考えた。授業をしていく中で私が一番驚いたことは、小学生・中学生の知識量の多さと、発想豊かな考え方だ。私が小学生・中学生だったころよりも防災教育が進んでおり、そんなことまで知っているのかと知識量の多さに驚かされる場面が多々あった。そして、私たち高校生が質問すると毎回と言っていいほど想定外の答えがとんでくる。これは、小学生・中学生にしかできない発想で若者の力の大きさを感じることができた。

(3) 募金活動

募金活動では「募金よろしくお願いします」と大きな声で呼びかけた。最初のほうは緊張して声が小さくなりがちだったが、「頑張ってるね」と温かい声かけをしながら募金をしてくださる方がいた。このとき初めて「私も何か役に立つことができるんだ」と感じる事ができた。コロナ禍の今、自分たちにできることを自分なりに頑張ろうと思ったきっかけになった。

(4) 地域交流

学校近くの地域の方と、防災訓練をしたり、スタンプラリーを行ったりして交流を深めた。参加する人たちはその地域の小さな子どもから高齢者の方までの幅広い年齢層の方だ。地域の方みんなでこのようなイベントや行事を行うことで、地域の方々同士でコミュニケーションをとることができる。これが一人一人の防災力の向上にも繋がり、「共助」にも繋がっていくと思う。実際に私が参加した時も初対面の地域の方と会話をする場面があった。会話をする事で、私はスタンプラリーに参加している地域の方のことを知ることができた。また、相手も私のことを知ることができたと思う。この何気ない会話が「共助」

に繋がっていくのだと思った。イベントや行事を行う理由がよく分かった。

（５） 今までの活動を通して

これらの活動を通して本当に多くのことを学ぶことができたし、成長することができたと思う。特に、中学生時代から何事もどうせ無理だろうと決めつけていた私が、「自分にはどうせ無理だろうと思って行動せずに終わるのではなく、何事にもチャレンジすることが大切だ」ということを学ぶことができたのは自分にとって大きな一歩になったと思う。そのため、これらの活動のきっかけをくれた友達や先輩、後輩、先生、ボランティア活動をさせてくださっている方々に感謝したい。

６ 将来の夢と防災

（１） きっかけ

私の将来の夢は、看護師になることである。看護師といっても助産師、保健師、訪問看護師など多くの職種がある。その中でも、２つの仕事に携わりたいと考えている。

まず１つ目は、病棟看護師である。病棟看護師になりたいと思ったきっかけの出来事は、中学生の頃に行ったトライやるウィークである。トライやるウィークに行くまでは、看護師とは医者の横で患者さんをサポートしたり、患者さんと医者とを繋ぐ役割をしたりする職業だと思っていた。しかし、実際はそれだけではなかった。患者さんが喜んでくれるようにと病棟の壁を飾り付けたり、クリスマスツリーを置いたりしていた。通りすがりにこれをみた患者さんが「可愛いね」と笑顔になっていた。ここから看護師というのは、患者さんの心を支える存在、笑顔にする存在であるということに気づき、自分も患者さんの心に寄り添い、支え、笑顔にできるような看護師になりたいと思った。

２つ目は、災害支援ナースだ。この夢を目指すようになったのは、環境防災科に入学して災害や防災について学んできたこと、母から阪神・淡路大震災について聞いたことの２つがきっかけになっている。これらのきっかけから災害時にスムーズに動ける看護師になり、多くの人の命を助けたいと思うようになった。

（２） 看護師と防災

看護師は何か起きてから仕事をする事が多く、災害前の防災と看護師はあまり接点がないと考える人もいるだろう。しかし、私は看護師という立場において防災は自然と行われているものだと思う。なぜなら、普段の日常での患者さんとの会話が防災に繋がっていると私は考えているからだ。これは、今までの環境防災科の授業で学んだ地域コミュニティの大切さにも通ずることがあると考える。地域コミュニティが大切な理由の１つに通常時に挨拶や会話などを頻繁に行い、近所付き合いを大切にすることで、災害時に顔見知りの関係であることができ、地域の方のことをよく理解した上で共助を行うことができるということがある。これらのことを普段から行っているのに行っていないのでは、命が助かる可能性が大幅に違ってくると思う。そのため、看護師になることができれば積極的に患者さんと会話をしたいと考えている。患者さんのこともよく分かり、患者さんも看護師である私のことがよく分かるという共助のしやすい関係を築きたい。

（３） 防災を広めるために

私が看護師になったらしたいことが２つある。

１つ目は、患者さんに向けて防災を広めることである。自分の命の守り方や、災害時に身近な人や自分の周りの人が怪我した時の対処法、事前に準備をすることで防ぐことのできる病気などを広めていきたいと思う。広め方としては、日常的な会話の中で楽しく防災を伝えられるようにしたい。しかし病院の中でも、軽傷の患者さんから重症の患者さんなどいろんな方がいると思う。だから、その人一人一人にあった命の守り方を伝えていきたいと思う。

次に２つ目は、看護師や、医者など同じ職場で働いている人たちに対して防災を広めることだ。防災の広め方としては、母から聞いた阪神・淡路大震災の様子や今までの環境防災科で学んだことなどを伝えていきたいと考えている。これを伝えることで病院側も災害に向けて対策することに繋がり、実際に災害が起きた時に少しでもスムーズに動くことができると思う。これらのことを踏まえて、私は看護師になり看護師だからこそ分かることを伝え、防災を広めていきたいと思う。しかし、これらの２つのことを行うためにはまず自分の命を守らなくてはならない。だから、これからもっと災害や防災の知識を増やしていきたいと思う。そして、自分の命だけではなく周りの人の命も助けられる看護師になりたい。

7 最後に

今回この「語り継ぐ」を執筆するにあたって、感じたことが2つある。

1つ目は、周りの人への感謝を忘れないということだ。環境防災科に入学してから今までを振り返ると災害や防災の知識が増えただけではなく一人の人間として少し成長することができたと感じる。これは、環境防災科での経験や活動の積み重ねから得られたものの成果であると思うので、このような経験や活動をさせてくださった方々に感謝の気持ちを忘れずに日々を過ごしていきたい。

次に2つ目は、この「語り継ぐ」を多くの人に読んでほしいということだ。私のように、大きな災害を経験していない人が多くいる。実際に私の友達にも大きな災害を経験したことのある人はいない。私が小学生の頃、「津波がきたら泳げば大丈夫」と友人が言っていたのを聞いたことがある。大きな災害の経験もなく知識もなければこのような恐ろしい考えになってしまうのだ。最近は私が小学生の頃よりも防災教育が行われているが、このような考えを持っている人がゼロ人だとは言い切れない。この「語り継ぐ」を読んで少しでも防災や災害のことを知るきっかけになってほしい。そして、実際に災害が起きた時に自分で自分の命を守る人が増えてほしいと思う。

「あの日」から未来へ

小西 甚

1 はじめに

まずこの『語り継ぐ』を執筆するにあたって、自分にとっての「阪神・淡路大震災」を考えてみた。私が阪神・淡路大震災について真剣に考えるきっかけとなったのは、小学校高学年の時に校外学習で人と防災未来センターを訪れたことである。そこを訪れるまでは震災学習や報道、親の話を通して阪神・淡路大震災について触れてはいたのだが、なかなか震災について実感を掴めないでいた。しかし、人と防災未来センターを訪れ、自分の意識が大きく変わった。そこで最初に見学したのが、地震の揺れを映像で再現した「1.17 シアター」と、被災後の街の様子をジオラマで再現した「震災直後のまち」である。これらの展示は当時小学生だった自分に大きな衝撃を与えるものだった。震災当時の状況を目の当たりにし、震災の概況を初めて具体的に感じた。大きな音と閃光、散乱した物、潰れた家々、火災によって焼け焦げた展示品の数々。これらの生々しい震災の爪痕を見て、聞いて、肌で感じて初めて震災の恐ろしさを実感した。この体験が震災を真剣に考えるきっかけとなったのである。そうして震災や様々な災害に興味を持ち、学びを深めた。その学びを深めていく中で、舞子高校環境防災科の存在を知り、現在ではこの『語り継ぐ』を執筆するに至っている。様々な方のお話や自分の体験から学び、考察したことを精一杯この『語り継ぐ』に記す。拙い文章ではあるが、自分の考えを読み取っていただければ幸いである。

2 阪神・淡路大震災当時の話

(1) 祖母の話

祖母は垂水区の自宅被災した。祖母はベッドで横になり、「そろそろ起きようか」と起床の準備をしている頃だった。突如、ベッドが浮かび、浮遊感に見舞われた。何かと思えば、体験したことのない大きな揺れが襲ってきた。祖母宅にある大型の観音開きの食器棚が開き、その中に入っていた食器は床に散乱した。幸い、食器棚自体は倒れずに済んだという。その他にも2人でも到底動かせないというほどの大型の冷蔵庫が、その一瞬の揺れでおよそ20センチ動いたという。また、仏壇も倒れてきたという。祖母宅は集合住宅で、5階にある。他の階は棚やタンスなど、ありとあらゆる物が倒れたという階もあったそうだが、祖母宅は奇跡的に目立った被害はなかった。祖母は「家具の配置の仕方が良く、何も倒れなかったのではないかな。また、その家具の配置は全く偶然だった」と当時を振り返る。地震発生後、祖母は安全を確認して室内の整理を開始したが、度重なる余震に悩まされた。部屋内の整理をしても余震が連続して発生し、とても片付けができる状況ではなかった。また、ゴミ捨てに行った時にも余震が発生。歩けないほどの余震に見舞われたことも少なくなかった。祖母は当時スーパーで仕事をしていた。幸い職場も大きな被害を受けていなかったため、出勤して業務を行ったのだが、地震後1～2日でスーパーの中にある全ての商品が売れて無くなったという。食品だけではない。全ての商品がスーパーから売ってしまったのだ。結果として、スーパーには物がなくて仕事といってもただレジに立っているだけという状況になっていた。ライフライン関係は、祖母宅にあっては、水道、電気は翌日に復旧した。しかし、ガスだけは長期にわたって復旧しなかった。祖母宅付近の公園には、水が出ない地域の人が集まり、水を汲んでいた。その列は長い時には50人ほどになったという。先述の通り、祖母宅はガスが止まっているため湯を沸かすことができない。そのため、どうしたかという、電気ポットや炊飯器を使って湯を沸かし、その湯を使って体を拭いたり、足を洗ったりしていた。食べ物に関してはスーパーに行っても何もないので、米を炊き、家にあった冷凍食品や缶詰と一緒に少しずつ食べた。

また、祖母の叔母（以降、叔母とする）が神戸市中央区の葺合に住んでおり、その時に叔母が遭遇した状況についても話を聞いた。叔母は、葺合で4階建マンションの最上階に住んでいた。地震が発生し、その揺れが原因でマンションが倒壊した。3階以下の階が押しつぶされるような状態で倒壊したため、4階に住んでいる叔母は何とか助かったが、下の階の住民は建物の下敷きとなった。何人かの住人はまだ生きており、手や体の一部が瓦礫の外に出ていたり、視認できる状態であったりしたが、重機がないため救出作業が難航し助からなかった。この倒れたマンションに祖母は震災1週間後に徒歩で向かい、見てきたという。また、丸焼けになった長田の町や寸断された高速道路から落ちかかっているバスなど、さまざまなものを見てきた。数か月後に電車が復旧し、もう一度長田の町に行く機会があった。その時に見た長田の町は一面真っさらな何もない焼け野原。祖母は自然と涙があふれ、息が詰まったという。

阪神・淡路大震災を経験して、祖母は、備えの大切さに気付かされたという。また、「忘れた頃に災害

が襲ってくる。この時に、対策を怠っていればより多くの被害を生む。そのため、日頃より防災を意識して生活をしていくことが大切。実際に阪神・淡路大震災が発生する前は、神戸に地震はないといった根拠のない思い込みがあった」と語る。話の最後に「命があっただけでも幸せ」と静かに付け加えた。

(2) 祖母の話を聞いて

私はこの『語り継ぐ』を執筆するまで、家族に阪神・淡路大震災について聞くことは少なかった。また、話題に上がったとしてもそこまで深く考えて話をするとはほぼなかった。今回のインタビューで、初めて阪神・淡路大震災について祖母と深く考えたのだが、このインタビューを通して印象的だったのは、震災の話になった途端に祖母の雰囲気が変わったことだ。いつもは明るい祖母なのだが、この時ばかりはいつもの祖母とは違った。表情や話し方などなんとも表現しにくい、とにかく、いつもの祖母とはまるで別人のようになってしまった。話を進めていくうちに詳しく被災体験について話してくれ、実際に見た、有名な高速道路の倒壊現場や、長田の火災現場について語ってくれた。授業では、それらの話を何回も聞いたことがある。また、写真や動画などでも様々な記録を見てきた。しかし、この時ばかりは、妙に現実感があった。これが、「記憶」の力であると強く感じた。また、身近な存在である家族から聞くということも相まったのだろう。私は、これから他の人に震災を伝えていくにあたって、この震災の「記憶」というものを伝えていきたいと思う。なぜなら、「記録」では感じ取れない現実感があると身をもって実感したからだ。しかし、震災を経験していない自分は、当然「記憶」など存在するはずもない。ではどうすればいいのか。私は一人でも多くの震災体験者の話を聞き、その中から「記憶」を取り出して伝えることである。話を聞き、その話の中でどのような体験をし、どのような思いを持ったのか、読み取って自分なりに解釈し、伝えていくことで震災の「記憶」というものを後世に継承することができるのではないかと私は考える。そのため、私はこれから多くの人に震災の経験を聞いていきたいと思う。当たり前だが、震災を直接体験した人は、年々減少していく。そのため、今のうちに話を聞いておき、多くの「記憶」を蓄積しておく必要があると考える。

3 環境防災科に入学することになったきっかけ

私が舞子高校環境防災科に入学することになったきっかけについて述べる。私が環境防災科に入学することを志すきっかけとなったのは中学1年生の時に聞いた母親からの話である。ある日、私は中学校の授業で防災学習をした。そのことをいつものように母親に何気なく話すと、「あんた、舞子高校の環境防災科って知ってる？」と聞かれた。当時の私は環境防災科の存在を知らなかったため、「なにそれ、知らんわー」と返した。そこから詳しく話を聞いてみると、どうやら全国的に珍しい防災を学べる専門的な学科があるということを知った。母親の職業は美容師であるため、客と会話することが多い。その時に客から話を聞いてきたようだ。その話に興味を持った私はインターネットで環境防災科について検索してみた。すると様々な学習やボランティアの様子が掲載された新聞記事が検索結果に表示された。それを見ていくにつれ「自分も環境防災科で防災について勉強したい」と思うようになった。また、自身の将来の目標が消防官であるといったことも相まってより一層、環境防災科に入学したいと思うようになった。

以上が、私が環境防災科に入学することになったきっかけである。

4 環境防災科の活動を通して

(1) 授業内での講義

この「語り継ぐ」の執筆を行っている現在も環境防災科の活動は継続しているのだが、その中で特に印象に残っているものを選んで述べていく。まずは1学年での「災害と人間」の授業での講義である。1学年では様々な方から講義を受けた。電気・ガス・水道・電話のライフライン関係や消防・警察・自衛隊・海上保安庁などの公安職などのさまざまな職種の方々より講義を受けた。阪神・淡路大震災や東日本大震災の被害状況や活動状況、数十年以内に超高確率で発生が想定されている南海トラフ巨大地震への対応など、様々なことを学んだ。それと同時に自分の知らなかったことや間違っている知識が多すぎることに気づかされ、自身の知識不足を痛感した。そうして様々な職種の方から講義を受ける中で私はあることに気が付いた。それはどの職種の人も自分の仕事が誰かを助けることになるという責任感を持っていることである。公安職では直接人命を助けることがあるが、ライフライン関係などの職は直接的に人命などを助けるという業務を主として行っていない。しかし、どのような職においても、自分の仕事が誰かの役に立つという考えのもと、業務を行っているということが講義で理解することができた。これらの講義を受けて自分は、どのような職についても自分のやっている業務は誰かを助けることに繋がるという責任

感を持って、仕事に取り組みたいと感じた。

（２） 消防学校体験入校

次に消防学校体験入校について述べていく。消防学校体験入校は１年に初級、２年に上級と２回ある。まずは初級の内容について述べる。１年時の初級では集合、整列要領等の規律訓練を行う。規律訓練において、私は小隊長を任された。小隊長はその小隊の行動を命ずる指揮者である。そのため、適切かつ明確な指示を発することが求められる。しかし、誤った指示を出したり、動作の号令を出すべき場所に出さなかったり、ミスを連続した。もちろん、誤った指示や指示の出し忘れなどによって、小隊員は混乱してしまう。その様子を見るたびに私は本当に申し訳ない気分になり、自分の未熟さを痛感した。訓練中盤になってようやく一通りの指揮動作を覚えることができたのだが、それまで幾度もやり直しがあった。それでも必死に声を出し、指示に従ってくれた小隊員に感謝してもしきれない。

２年時の上級では、放水訓練を主として行う。ホース延長・撤収や、放水の要領を確認したのちに、まとめである総合訓練を行う。上級においても私は中隊長という部隊を指揮する役割を任された。上級では、初級の反省を活かして明確かつ適切な指示を発するように努めた。その結果、総合訓練では特に大きな問題もなく、完遂することができた。

消防学校体験入校を通して特に印象に残っているのは、「フォロワーシップ」である。「フォロワーシップ」とはリーダーが正確に指示を出したり、行動したりするためには、そのリーダーの下立場にある者が、リーダーを支えるように行動することが必要不可欠であるという考え方である。これは、体験入校時に消防学校の教官が仰っていた話であるが、この消防学校体験入校でフォロワーシップの重要性を痛感させられた。先述の通り、初級では本来、小隊をまとめなければならない立場の私がミスを連発し、混乱させてしまった。この時に、もし仮に誰かが「もうやめた」と投げ出してしまったらどうだろうか。小隊は各々が役割を持っているので、一人でも抜ければ小隊として成立しないのである。ミスを繰り返し、何度も何度も同じことの繰り返しになってしまった場面もあったが、そのたびに声を張り上げ、俊敏な動作を行う小隊員の姿を見て、改めてフォロワーシップの重要性を理解した。将来、私もその場のリーダーに従う場面もあると考えられる。また、自分自身がリーダーとなって行動する場面も出てくるかもしれない。そのようなときはこの「フォロワーシップ」ということを心に留めて、支え、支えられる立場として行動していきたい。

５ 夢と防災

（１） 夢ときっかけ、目標と考え方

私の夢は、消防士になることだ。この目標を目指すに至ったきっかけは、幼少期に消防士に対する憧れを持ったことだ。幼少期の私は消防車が好きだったようで、休日は両親によく消防署に連れて行ってもらっていた。その際に、大きな声を出して訓練を行う消防士の姿を見て、憧れを覚えた。また、私は小学生の頃から「人の役に立ちたい」という考えを持っていた。そうした事も含めて、消防士を目指すことになった。

この環境防災科に入学し、様々な人の講義や授業を受けていく中で、自分が持っていた考えが変わる部分や、新しい考えを持つ部分があった。その例として、「不幸になる人を一人でも減らしたい」という私の考えを紹介したいと思う。この考えは私が環境防災科に入学してから変わった考えである。環境防災科入学当初は、「消防士になって、一人でも多くの人の命を救いたい」という考えをもっていたのだが、徐々にこの考えが、「消防士になって、不幸になる人を一人でも減らしたい」という目標に変わっていった。これは講義での「被害を受けた人だけではなく、その周りの人も心に深い傷を負う」というお話がきっかけである。このお話を聞いて、私は人の命を救うことが、周りの人の心を救うことに繋がると解釈した。結果、私の考えは命を救うことから、「人」を救うことにシフトチェンジしていったのである。周りから見れば、「語句が違うだけで本質的な部分は変わっていないではないか」という指摘もあるだろう。しかし、私の中でこのことは将来の目標設計に大きな影響をもたらしたのである。実際、環境防災科入学前は消防士になることを強く希望していた。しかし、「人」を助けるという考えを持つからは、様々な公安職の職種に興味を持ち始めた。そして、多様な職種を見ていくうちに、どれもその職にしかできないことがあるということに気が付いた。そのため、この『語り継ぐ』執筆中の現在は、消防士をはじめ、様々な公安職を目標に努力している。

(2) 目標実現に向けて

私は、先述の「不幸になる人を一人でも減らしたい」という目標を実現させるために消防士やその他公安職に就き、環境防災科で学んだ知識、習得した技術を活用していきたいと思う。まず、公安職は市民と会話する機会が多くある。職業特性上、その機会は非常時になることも少なくないと考えられる。そのような場面において私はコミュニケーション能力を発揮していきたい。非常時は混乱していることが多い。また、焦燥感などから、語弊が生まれたり、誤った情報が広まったりしてしまう可能性が高い。誤った情報は、緊急時には死と直結してしまうこともある。そのため、私は自らのコミュニケーション能力を活かして、適正な情報提供、伝達に力を注ぎたいと考える。また、非常時に救助に来たはずの公安職職員が、自信がないような話し方をしていると、もちろん市民は不安を覚える。そのため、私は堂々とした話し方で、安心してもらえるようなコミュニケーションをとっていきたいと考える。

6 最後に

今回、この『語り継ぐ』を執筆して、改めてこの環境防災科で多くのことを学んだと気づいた。『語り継ぐ』を執筆するにあたり、どのようなことを書こうか考えてはいたのだが、執筆していくうちに記載したい内容が増えていった。実際にこの本文中で、当初、記載する予定のなかったものも含まれている。また、記載できなかったものも多くある。このことから、私は環境防災科で学んだことはとても膨大なものであると改めて実感した。

また、祖母にインタビューした際には本文中にもあるように、祖母のいつもとは違った一面も見えた。震災から28年が経つが、今もなお、癒えることのない傷を人々の心に残していると実感した。震災は多くの命や物を奪っていった。震災においての被害は統計などの数字を見て判断されることが世間では多い。しかし、私は今回のインタビューで心の傷についても理解することができた。このことから「阪神・淡路大震災は未だに終わっていない」と私は考える。物質的な面から見れば、復興したと言えるだろう。しかし、阪神・淡路大震災が引き起こした被害のひとつである心の傷は人々の心に残り続けている。この心の傷は目に見えないものだ。しかし、明らかな被害であると私は考える。「被害」が残っている状態で災害から復興したと言えるのだろうか。この観点から、私は「阪神・淡路大震災は未だ終わっていない」と考える。では、阪神・淡路大震災から完全に復興させるためにはどのようなことが必要なのか。私は、次の世代にこの阪神・淡路大震災の記憶を伝え、今後起こりうる大災害に対して、被害を限りなくゼロに近づけることだと考える。阪神・淡路大震災は様々なものを奪っていったと先述したが、多くの教訓も残していったといわれる。この教訓を活用し、同様の被害を無くすことが阪神・淡路大震災を「終結」させる一歩ではないかと考える。同様の被害が無くなれば、阪神・淡路大震災と同様の「心の傷」が繰り返されることがないからだ。

これから、多くの人に阪神・淡路大震災について伝えていくにあたって、私が大切にしたいことは、「記憶を伝える」ということだ。「祖母の話聞いて」にもあるように、直接、被災した人から話を聞くことでしか感じられない現実感がある。これはどんな動画や其他媒体でも再現不可能であると私は考えている。つまり、震災を体験していない、言い換えれば震災の「記憶」を持っていない私は、「現実感」そっくりそのまま伝えることは不可能なのである。しかし、工夫をすれば、「記憶」というものを伝えることができるのではないかと私は考える。例えば、話を聞いて自分が感じたことや想起したことを話に盛り込むということだ。もちろん事実と異なるものであってはならないが、「〇〇という話をしているときはとても悲しそうな雰囲気が伝わってきた」という伝え方や、「〇〇という話を聞いて、当時は～という心情だったのではないかと読み取った」という伝え方など、話を聞いてその時に感じた現実感や、感情を言語化して伝えることで、直接聞いた話により近づけながら、「語り継ぐ」ことができるのではないかと感じた。

先述のとおり、様々なことをこの3年間で学び、経験してきた。自身のこれまでの人生で、また、これから先の人生においても非常に濃いものになるだろう。その高校生活の中で多くの人にお世話になった。友人や先生、家族など多くの人に助けられながら、この環境防災科での毎日を送ってきた。そのことに感謝でいっぱいだ。この経験から、私は、環境防災科で得た知識や能力を活かし、分野に関係なく、困っている人を助けられるような人間になりたいと考える。また、3年間、環境防災科19期生の仲間と、共に学び、過ごせたことを誇りに思い、この『語り継ぐ』の執筆を終了する。

語り継ぐ

小村 翔大

1 はじめに

1995年1月17日、阪神・淡路大震災が発生し、たくさんの尊い命や街並みが壊され、たくさんの涙や悲しみがあつた。震災から9年後に生まれた私たちは当然震災を経験していない。これから数多くの災害が起こると予想されているのに対し、私たちのような震災を経験していない世代が増えていき、被災者の経験や思いが風化されている。私たちに今できることは、私たちが震災未経験者に当時の被災者の思いや教訓を正確に語り継ぐことだ。震災を経験していない世代から震災を経験していない世代へと語り継ぎ、風化させない。そして、未来に起こる災害に対して大きな被害、犠牲を少しでも減らすことが語り継ぐことの意味だと考える。

2 阪神・淡路大震災の両親からの話

阪神・淡路大震災当時、父は加古郡稲美町に住んでいた。いつも通りベッドで寝ていると「ドーン！」という音とともに急に激しい揺れを感じ、初めの縦揺れで突き上げられ目が覚めた。その後グラグラと30～40秒程度横揺れを感じ、起き上がろうとしても起き上がることができないくらい大きな揺れを経験した。それまでは西日本では地震は起こらないものだと考えていたが、突然、今まで経験したことがないような揺れに襲われ、パニックになった。揺れが収まり、祖母は家族が無事かを確認した。激しい揺れには襲われたが、少し物が落ちたり外壁が少しひび割れをしたりする程度で稲美町の被害はそれほど大きくなかった。一時的な停電はあったが電気、ガス、水道などのライフラインはすぐに復旧した。しかし、テレビでニュースを見ると、神戸市や西宮市で大きな建物が倒壊し、神戸市長田区では火災などによって大きな被害がでていた。これを見て、稲美町の被害は少なかったが、他の地域では、もっと苦しい体験をしている人がいると思い、他人事ではいられなかった。余震の揺れが完全に収まった後も、避難することではなくいつも通りの生活をした。

当時、父は稲美町で一番高い建物の工場に勤務していた。普通のマンションの10階建程の高さがあった。震災当日父が出勤すると、工場の最上階は地震の激しい揺れにより、冷蔵庫が倒壊し、水道管が破裂して水浸しになっていた。水道はその後すぐに復旧したが、工場の経済面では影響が出た。

母は当時大学生で東京に住んでいた。直接被害は受けていないがテレビをつけると阪神高速が横倒れになっていて衝撃を受けた。何が起きているか分からなかった。地震は東京で頻繁に体験していたが西日本では全くないと思っており、あれほど大きな地震には衝撃を受け混乱していた。

3 両親の話を聞いて

両親から話を聞いて、まずこの被災体験を聞かせてもらったということをととても大切にしたいと思った。自ら被災体験を話したくない人もいる。一人ひとり違った体験で当たり前のように聞くことができない話だ。今回の両親のように、このようなお話をしてくださっている方の話をただ聞くだけでなく多くの人に伝えていく必要があると思う。

話を聞いて、阪神・淡路大震災の恐ろしさを改めて感じた。稲美町では被害が少なかったものの、地震の揺れによるものだけでないところで多くの人の生活や経済面に影響がでてしまった。父は阪神・淡路大震災より大きな地震を経験したことがなかった。西日本では来ないものだとすら思っていた。しかし、あそこまで大きな被害となってしまった。今の私たちは大きな災害を経験していない「未災者」であるが、今後、南海トラフ巨大地震や日本海溝・千島海溝地震など巨大な地震が必ず起こる。過去の災害の被害を繰り返さないために私たち一人ひとりが防災、減災について考えていかなければならない。一人で対策するだけではなく、近所の人や周りの方々と助け合いながら防災をすることは、災害時に「共助」がしっかりとできるようにするために大切だと思った。父の話を聞いて、家庭の防災対策に対する課題に気づくことができた。稲美町では被害は少なかったが神戸市や西宮市などでは建物が倒壊し、ライフラインは大きな影響を受けた。また、火災が発生し、大きな被害を受けた地域も多くある。その地域のことを他人事としてみるのではなく、阪神・淡路大震災で多くの死者がでてしまった経験を無駄にしないように教訓を活かせる対策を伝えていくことが大切だと感じた。

また、私が今生きているということは決して当たり前ではないことだと改めて思った。あの日、父が大きな被害を受けていれば…。毎日元気に過ごせていることに感謝しないといけない。

4 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

舞子高校環境防災科に入学したきっかけは将来、消防士になりたいという夢があったからだ。私には、人の役に立ちたい、自分が住んでいる町を守りたいという思いがあり、日常から市民を守ることができ、災害時にもリーダーとなって活動する消防士なら、人々やまちを救えると思った。その目標のために、防災の知識や過去の災害の教訓、課題を知ることが必要だと思った。環境防災科に入学すれば、防災に関する知識だけではなく、外部講師の方からの講義や消防学校体験など将来のなりたい職業と防災をつなげて学ぶことができると思ったからだ。

また、私は防災に少し興味があった。私が小さいころに東日本大震災が起こった。当時私は保育園に通っていた。あまり記憶はないが、テレビに映った東北の様子は今も覚えている。これから数多くの災害が起こると予想されている地に生まれた者として防災を通して社会に貢献していきたいという思いがあり環境防災科を受験することにした。

(2) 入学して

環境防災科の授業では地理や物理、心理や自然環境など様々な分野を通して、自然災害のメカニズムや過去の災害の教訓、課題、対応を学んできた。科目は違うが防災はすべてつながっていることを、身をもって感じた。また、環境防災科は外部講師の方の授業が多く、ライフラインや消防士、警察など様々な視点からの防災を学ぶことができ、将来なりたいと思う職業と夢を合わせて学ぶことができた。そして環境防災科の授業ではグループワークやパワーポイントを使った発表が多く、人前で話す力や行動力、コミュニケーション力など様々な力を磨くことができた。

私は3年間防災を学んできて、防災で一番大切なことは、地域交流や近所の方々との関係性を大切にすることなど人と人とのつながりだと考える。平常時から近所の人との関係性や距離感を良くしていくことで災害時にも互いに助け合う共助がしっかりとでき、被害を最小限にすることができる。また、日頃から挨拶をしっかりとし、地域のイベントや行事に参加しておくことで信頼関係が良くなり、災害に強いまちづくりができる。このように地域交流や人と人とのつながりを作ることは平常時からしておくことが大切だ。

環境防災科に入学してから3年が経ち、授業や講義、ボランティア、防災に関するワークショップなどで防災を勉強していく中で気づいたことがある。防災というものは、日常からの対策、心のケア、地域交流、危機管理、リスクマネジメントなど様々な視点から考えることができるということだ。そして、その様々な視点はすべてつながっていて、災害に強いまちにしていけるためには1つも欠けてはいけないということである。様々な視点があることを知って防災を学んでいかなければならない。

(3) ボランティア活動

環境防災科では授業とは別にボランティア活動をすることができる。環境防災科では「ボランティア」の意味がとても広く使われている。地域の行事の準備・運営、出前授業、被災地での活動など様々な内容のボランティアをしていく中で、「現地の方々のために」という気持ちを持っておかなければならない。自分が成長するために行うという気持ちではなく、被災者のため、まちのため、未来のためになるような支援ができるように考えなければならない。支援というものは現地に行って活動することだけでなく、今まで触れてきたもの、関わってきたことに興味をもって一歩ずつ踏み出していくことも支援の1つになる。そして、ボランティアは自分の意思で主体的に行うことが大切であり、一度行ったら終わりではなく継続していくことが大切だ。

環境防災科で3年間ボランティアを行ってきた中で、私が印象に残っている活動は、地元の小学校での出前授業だ。環境防災科の授業やボランティアを通して身につけた力を活かしてこれからの未来を共に担う子どもたちに防災を教えに行くにあたって、それまでの準備やコミュニケーションを大切にしていた。地元の町を災害に強いまちにするためにどのような防災ができるかを考えることができた。

5 東北訪問

私は2年生の冬に東北訪問に参加させていただいた。そこで特に印象に残っていることが3つある。1つ目は、宮城県石巻市にあった大川小学校のことだ。大川小学校では東日本大震災により全児童108名のうち74名と教職員10名が亡くなった。私は大川小学校を見た際に衝撃を受けた。瓦礫などは片付けられているが東日本大震災当時の姿が残っているからだ。当時の状況を想像すると胸が苦しかった。しか

し、当時大川小学校に通われていた娘さんのご遺族である佐藤敏郎さんの言葉がとても印象に残っている。それは、「大川小学校は過去を振り返る場所ではなく、未来を拓く場所だ」という言葉だ。この言葉を聞いてただ見学させていただきだけではなく、訪れた私たちがこれから何をしないといけないのかを考えさせられた。

2つ目は大川小学校と同じ石巻市にある南浜復興祈念公園・MEET門脇に訪れたことだ。石巻市には東日本大震災当時、門脇小学校があった。門脇小学校は東日本大震災の津波で校舎の1階まで津波が押し寄せ、校庭に停めていた避難者の自動車のガソリン漏れが原因で出火し、津波で自動車が押し流され校舎に延焼し3日間燃え続けた。このような津波火災により大きな被害がでた。しかし、門脇小学校の避難訓練は校庭に出るだけでなく、裏山に避難するものであったため、事前から防災意識を高め、対策がしっかりとできていたことにより避難訓練通りの避難をすることができ、学校管理下では犠牲者を減らすことができた。しかし、当日休んでいた児童や下校して避難する判断ができなかった低学年の児童が津波に巻き込まれ亡くなった。門脇小学校を訪れて、津波だけではなくそれに伴い火災が起こることも想定して避難訓練をしなければならないと感じた。石巻市にある2つの小学校を訪れて、それぞれの被害について比較してしまうことはいけないことではないが、それぞれの出来事の背景を理解し、そこから得た教訓をこれからの災害に活かしておく必要があると感じた。

3つ目は東北訪問では多くの語り部さんからの話を聞かせていただくことができたことだ。それぞれの語り部さんが共通して言っていたことは「自分の命を優先する」ということだ。その言葉を聞いて私は防災を学んでいるからこそ大切な人や他人のことを考えていたが、防災をするにあたってまずは自分の命を守ることが大切であると気づいた。それを怠ってはいけない。自分の命を守ることができてこそ大切な人の命を守ることが大切だと考えるようになった。

このような東北での様々な経験から、東北の方々の思いや自分が感じたこと、思ったことを友達や家族などの身近な人たちから伝えていき、広く語り継がれていくようにしていくことが大切だと思う。そして、これらの教訓から、これからの災害に備えて少しでも被害を減らすことができるようにしたい。

6 夢と防災

(1) きっかけ

私の将来の夢は、公務員になることだ。その中でも市職員として働きたいと考えている。私は環境防災科に入学したとき、消防士になりたいという夢を持っていた。しかし、消防学校体験入校や環境防災科の授業、講義などを通して厳しさを知り、自分にもっとあっている職業はないかと考えるようになった。その際に環境防災科の授業で行ったワークショップを通して自分の住んでいる町や、今までお世話になった町を守りたいという思いができた。そして、市職員になり、町の課題や問題点にしっかり向き合い、改善策を考えていくことなどで町をしっかりと守ることができると思った。神戸市には市役所に総務部防災課という部署があり、災害時にも町のために活動する。市職員は、消防士や警察官のように直接的に町を守ることはできないが、脆弱な町にしないようにするためにその町の社会をしっかりと知ったうえで、裏方として町を支えていくことができると考えたからだ。その際に高校時代から防災を専門として学んでいる私が、環境防災科で学んだ知識や行動力を活かして町を守っていきたい。

(2) 防災とのつながり

市職員は平常時でも災害時でも防災と強くつながっていると考えている。平常時は、津波発生時にどの程度浸水してしまうのか、土砂災害ではどの地域が特に被害に遭うのかといったことを、市民の方を交えたワークショップを通してハザードマップの作成をしたり、災害に強いまちづくりをするために普段から防災計画を行い、市民の防災意識を向上させる取り組みを行ったりするなどの役割がある。災害時は、正確かつ迅速に情報の提供を行い、避難場所の整備をするなどの役割がある。また、市民の方々のリーダーとなって行動し、住民の安全、安心を徹底させ、日頃からの防災意識を高める職業である。

私が市職員になって行いたい主な活動は2つある。1つ目は、「防災フェスタ」という子どもが楽しみながら主体的に防災意識を高めていくためのイベントの開催である。少子高齢化という社会問題がある中で町に求められているものは若手の防災意識の向上だと考える。そのため、子どもに焦点を当て、楽しみながら防災を学ぶことができるイベントを開催することで、防災意識の向上とともにコミュニティの形成につながり、災害に強いまちづくりにすることができると考える。

もう1つは、防災意識が高い若手を育成するために私が防災課に入って地元の小学生や中学生に防災を教えに行くことだ。環境防災科の授業やボランティア活動、出前授業などを通して身につけた知識や人

前で話す力、行動力に加えて自分の地元の町だからこそわかる知識や経験を活かして、地元子ども達に防災を教えに行こうと考えている。

このようなイベントを開催するためには消防士、警察官、自衛隊などの公的機関や市民の方々と日頃からの連携が必要不可欠であり、町の方々との距離感や人と人とのつながり、コミュニケーションを大切に防災を多くの人に広めていきたいと考えている。

7 南海トラフ巨大地震

近いうちに起こると予測されている南海トラフ巨大地震はM8～M9の海溝型地震で、30年以内に70%以上の確率で起こるといわれている。南海トラフ巨大地震が発生するとこれまでにないほどの大きな被害がでてしまう可能性が高い。最悪の場合、南海トラフ巨大地震による被害は32万人を超え、経済被害も220兆円を超えると予想されている。このような巨大地震が迫っている中で私たち全員がどのような対策を取らなければならないか考える必要がある。まず大切なのはハザードマップを確認しておくことだ。東日本大震災と同じで津波の被害が大きいと予想され、津波により238万棟余りの建物が全壊したり焼失したりすると推計されている。そこで自分の住んでいる地域や学校、職場がある地域を中心にハザードマップを確認し、災害時にどこにどのような被害があるのかを知っておく必要がある。さらに防災グッズを備えておくことも大切である。南海トラフ巨大地震で避難所に避難する人の数は最大で950万人でおよそ9600万食の食料が不足すると予想されている。食糧不足の問題にならないようにするために、日頃から防災グッズを確認することが大切だ。また、日常的に非常食を食べて、食べたら買い足すというローリングストック法をしていく必要がある。このように日常的に少しでも対策をしておくことで、災害時に被害を減らす減災へとつながる。

【出典】「内閣府 防災情報ページ」<https://www.bousai.go.jp/> 2022年11月閲覧

8 最後に

「語り継ぐ」を通して、伝えることの大切さを改めて感じる事ができた。今まで家族と被災体験のことや防災について話すことは少なかったが、これからの防災、減災について考える良い機会となった。私たち人間はこれから多くの災害とともに生きていかなければならない。災害が起きても多くの人々が生き延びていくことができるSURVIVORとなるために、これまでの災害から得た教訓や被災者の思いを多くの人に伝えていかなければならない。3年間環境防災科で学んだ知識、行動力に加え、これからも防災を学んでいき多くの活動、経験を通して得た力を活かしてもっと多くの方々に防災を広めていこうと思う。

私にできること

塩原 愛渚

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が発生し、大きな被害をもたらした。私は、今まで見た写真や映像、語り部さんや講師の方々、学校の先生から聴いたお話の中でしか、阪神・淡路大震災を知らない。そんな私にできることの1つとしてこの「語り継ぐ」がある。経験していないから何もしないのではなく、経験していないからこそできること、すべきことを自らが考えて行動に移すことが大切だ。

2 阪神・淡路大震災を経験した祖母と叔母のお話

(1) 発災直後

祖母は、祖父と叔母の3人で神戸市垂水区に住んでいた。叔母が高校1年生のときである。震災発生当時3人は3階で寝ていた。5時46分の大きな揺れで、祖母は目を覚ました。そのとき祖母は、部屋にあった三面鏡が一瞬宙に浮いて、倒れたのを見た。その光景はスローモーションのように感じるくらい恐ろしく、今でも鮮明に覚えていると話す。次に、叔母の部屋の扉を開けて、逃げ道を確保しなければならないと思った。揺れが続いていたが、両手で壁をつたって歩きながら、扉を開けに行った。叔母はこの時、とても大きく揺れているなど思いながらも寝ていて、祖母に起こされなかったらあのまま寝ていただろうと言う。祖母は、祖父に「着るもの持ってきて」と叫んだ。

2階に下りて、落ちてくるものから頭を守るためにソファのクッションを頭の上においていた。家の中は食器や家具、水槽、ガラスの置物などが倒れて散乱していた。これらから足を守るために、家の中を土足で歩いた。

揺れがおさまって外に出ると、ガスの匂いがしていた。近所に住む人が、ガスの匂いがする家に住む人に避難を呼びかけたり、ガスの匂いがする場所はどこか探したりしていた。祖母たちもガスの匂いはどこからするのか探した。そのときに見た家の近くにあるマンホールはもり上がり、その周りがひび割れていた。

(2) 発災から数時間後

家は平成元年に鉄筋に建て替えていたため、崩れることはなかったが、少しゆがんだ。それが分かってから、祖父が持つ理容室の支店へ連絡をした。そして、祖父はポートアイランドにある支店へ様子を見に行った。ひどい状態になっていたという。

空が真っ暗になっていた。後から、長田で火災が発生して、その煤で暗くなっていたと知った。飛んできた煤によって車も汚れていた。

ライフラインは全て使うことができなかった。理容室を営んでいた祖父母にとって一番苦しかったことは水がでなかったこと。近くで水を配っている所があると知り行くと、目の前の人の順番で無くなってしまったといわれた。震災から5日後の、1月22日から水が出始めた。それまでは、キャンプ用品でお湯を沸かし、それをバケツにためておき、そこにホースを入れて、ホースの先にシャワーをつけてお客さんの頭を洗うことをしていた。お風呂は支店の寮に行き、入らせてもらったり、家で金魚の水槽に入れるヒーターを水がたまった場所に入れ、お湯を沸かして入ったりした。支店の従業員の子どもや、曾祖父母が家に来た。支店の従業員の1、2歳の子どもが住んでいるマンションだと、余震がきたときに揺れを大きく感じてしまう。それが「怖い」と言い、鉄筋構造である祖父母の家に泊まっていた。また、曾祖父母の家は全壊した。しばらくの間一緒に暮らしたという。食事はガスコンロを使って料理をしていた。冷凍庫にはお餅などが入っていたため、食べ物に困ることはなかったという。水は、ストックしていたものを使っていた。電気は、一番早くに復旧した。電気の復旧後、テレビで長田などの被害が大きかった場所の様子が映し出されると、祖父母、叔母が住んでいるまちとは大きく違って、とても衝撃を受けたという。

怖かったことは、何度も起こる余震だ。揺れる前に、地鳴りがする。地鳴りがする度に、揺れると分かる。揺れると分かっているからこそその怖さがあったそうだ。

そして最後に「この世が終わるのかと思った」「映画の中にいるようだった」「もう二度と経験したくない」と言った。

(3) 阪神・淡路大震災を経験してからしていること

祖母は、阪神・淡路大震災を経験してから防災バッグを準備している。夏物と冬物を入れ替えていつ起こるか分からない災害に備えている。また、水を備蓄するようになった。阪神・淡路大震災のときは、震災前に水を山の方までくみに行っていたため、家に偶然あったその水を使っていた。水が出なくなってしまい、困ったことはお風呂に入ることや、トイレを使うことが難しかったりしたことである。祖父母と叔母は、阪神・淡路大震災発生時、家でお風呂に入ることがあまりできず、お風呂に入らせてもらいに行っていた。また、トイレの水は、お風呂にたまっていた水をトイレに流して使っていた。その経験があったからなのか、お風呂の水は抜かなくなったという。

3 話を聴いて

祖母と叔母に阪神・淡路大震災のことを聞くのは初めてだった。環境防災科に私が入学し、阪神・淡路大震災の話を聴いていく中で、家族はどんな経験をしたのか気になったことが何度もあった。しかし、「語り継ぐ」を執筆するまで聞くことができなかった。執筆するにあたり話を聴いたとき、祖母と叔母は真剣な表情をしていた。普段の会話とは違う表情に、言葉では表せない阪神・淡路大震災への思いが込められているように感じた。私は祖母と叔母の話を真剣に聴いた。

初めて家族に阪神・淡路大震災の話を聴いて、災害は他人事ではないと改めて思った。学校の講義とは違って、身近な人に話を聴いたことで、より自分に身近に感じられたのだと思う。祖母は最後に「もう二度と起こらないでほしい」と言い、叔母は「起こらなかつたらいいよね」と言った。環境防災科で災害について学んでいる中で、災害が絶対に起こらないということはないと知った。また、起こらないようにするのではなく、起こったときに被害を抑えられるような取り組みを行う減災の存在も知った。環境防災科で学んだ知識をもとに、家族と一緒に防災に加えて減災のことも考えていきたいと思った。これからは今まで以上に、災害について話す機会を家族の中でつくりたい。

私は今回、祖母と叔母にしか話を聴くことができなかった。今度は、父や母から話を聴きたいと思う。そして、家族と一緒に取り組める防災を一緒に行っていきたい。

4 環境防災科

(1) きっかけ

環境防災科の存在を知ったのは、中学校3年生のときだ。進路について考えているとき、母に勧められた。環境防災科について調べていると、普通科では学べない防災に関する専門的な知識が学べると知った。しかし、当時は「防災」と聞くと、どこか自分には関係のないものだと感じていた。しかし、将来目指す看護師という職業に、環境防災科で学べることを活かすことができるのではないかと思い、環境防災科を受験することを選んだ。

受験するにあたり1冊の本を読んだ。防災士の資格を持つ方によって書かれた『いつ大災害が起きても家族で生き延びる』（小川光一著、ワニブックス、2016年）だ。この本を選んだ理由は、イラストがたくさん載っていて、災害別に状況が想像しやすかったからだ。私はこの本を読んで、不安を感じた。もし、今、災害が起きたら私は家族と一緒に助かることができるのか、災害の知識が全くない今の状況のままで助かることができるのかという不安だ。

本の後半には、すぐに家族と一緒に取り組める対策が書かれてあった。しかし、その時は、取り組んでいるものがほとんどなかった。この時、私が環境防災科に入って、まずは私が災害に関する知識を身につけようと固く決心した。そして、環境防災科での授業や活動を通して得た知識を家族に伝え、家族と一緒に防災について考えていきたいと思った。

(2) 入学して

環境防災科に入学して初めに読んだ本は『高校生、災害と向き合う』（諏訪清二著、岩波ジュニア新書、2011年）だ。この本を私は時間をかけて読んだ。本に書かれていることは全て実際に起こったこと。この本の中には、母親を亡くした高校生が環境防災科に入学し、講義で出会った講師の方が、「唯一助けられなかった人がいる」と話し、それが自分の母親だと知った、というお話が書かれていた。そして、それをきっかけに、高校生は母親の話ができるようになったということも書かれていた。私はこの話を受けて、人生の中で何度もある選択1つ1つが自分の人生を大きく変えることを知った。だからこそ、私は環境防災科での選択1つ1つを大切にしていきたいと思った。

また、環境防災科だからこそ経験できたことがたくさんある。1つ目は、色々な職種・立場の方から、

震災のお話が聴ける講義をたくさん受けたこと。2つ目は、ボランティアや出前授業、募金活動などに参加できたこと。出前授業では、事前の準備の大変さや相手に分かりやすく伝えること、授業の進め方の難しさを実際に感じた。一番伝えたいことは何か、授業の内容は筋の通ったものになっているのかなど、突き詰めて考えることの大切さを学んだ。私は、出前授業に参加したことで、普段から突き詰めて考える癖がついた。3つ目は、災害に関する専門的な知識を得ることができたり、防災について深く考える時間があったりしたこと。先生は「災害を正しく恐れることが大事」と言っていた。そのためには、深く災害について学ぶことが大切だと思った。災害について学んでいることで、防災も取り組みやすくなると思う。4つ目は、消防学校体験入校ができたこと。私は将来、消防士とは違う、別の職業に就きたいと考えている。しかし、この体験を通して多くのことを学んだ。その中の1つが、「報告・連絡・相談」が大切ということだ。報告を怠り、個人で判断をして勝手に行動をしてしまったら、混乱を招いてしまう。個人で判断する前に誰かに相談して頼ることや連絡をして助けを求めることが大切だ。

環境防災科では普通科では学べないことが学べ、経験できないようなことが経験できる。その環境があるのは環境防災科をつないでこられた先生方や先輩方のおかげだと思う。何事にも与えられている環境に感謝をすることが大切だと思った。

高校2年生のとき、防災ジュニアリーダーとして活動をした。避難訓練班の1人として校内で行う避難訓練を考えたり、避難訓練の前に行う防災学習の内容を考えたりした。防災学習の内容が避難訓練に活かすことができるのか、つながりがあるのかなど多くのことを考えることがあり、とても自分の成長につながっていると感じた。避難訓練を考える立場になって気づくことが多くあった。これからは、色々な立場で、ものを考えることを大切にしたいと思う。

5 将来の夢

(1) きっかけ

私は看護師になりたいと考えている。理由は、母が看護師として働く姿を小さいころから見ていて、その影響を受けたからだ。また、小さいころに母が入院したことが看護師を目指す大きな出来事となった。

母が入院した時、私は小学生だった。それまで、家族が入院したことがなかったため、入院することになったと知ったときは不安だった。家に帰っても母がいない生活がとても不安だった。当時、母が入院した理由は教えてもらえなかった。まだ、小学生だったため親が心配させないために言わない判断をしたのだろう。そのかわりに「お手伝いをしないから、入院することになったんだよ。だからお手伝いを頑張ろうね」と言われた。母が入院しているのは、自分のせいだと子供ながらに思ったことを覚えている。

高校生になって、ある授業を担当していた先生が、「入院することになった」ということを子供にどのように伝えるべきか悩んだという話を聴く機会があった。その先生は子供に病気であることや、しっかりと治療をすれば治るということを伝える選択をした。伝えるとき、子供の年齢にあった言い方で伝えたい。この話を聴いて、相手が子供だとしても、子供だから病気の話をしても理解できないと決めつけるのではなく、どうしたら子供でも理解することができるのか、また、親が入院することへの不安をどうしたら取り除いてあげられるのかを考えることが大切だと思った。同時に、私の母が入院した時も、先生のように、母が入院している理由を説明してくれる大人が近くにいたらよかったと思った。正しい情報を、年齢にあった伝え方で伝えることができ、不安を取り除くことのできる、そして、患者さんとそのご家族に寄り添える看護師になりたい。

(2) 看護師になったら

私は、正しい知識を患者さん一人一人に合わせた言葉遣いで、丁寧に伝えることのできる看護師になりたいと思っている。そして、患者さんの不安も、その患者さんのご家族の不安も減らしていきたい。私が幼いころに経験した母の入院で感じた不安を、患者さんの子どもにさせたくない。だから私は、看護師になったとき、患者さん自身の病気やその症状、治療法を、ご家族にどのように伝えるのが良いのか患者さんと一緒に考えていきたい。そして、ご家族に対しても丁寧な対応を行いたい。そのためにもまず、私が患者さんやご家族が話しやすく、頼りやすい存在になるように行動しなければならない。正しい知識を持ち、技術面が優れていることはもちろん、患者さんとお話することや、声掛けをすることを大切にしたい。

また、看護師は命を扱う現場にいる。その時に私がとる行動1つ1つが人の命を左右することになる、ということを自覚して、しっかりと考えてから行動するようにしたい。人の命を扱っているからこそ、余裕がなくなってしまうことがあるかもしれない。しかし、それが患者さんに伝わってしまうと、患者さん

の不安を招くことになってしまう。どんなときも笑顔を忘れないようにして患者さんと接したい。

6 最後に

「語り継ぐ」を執筆したことを通して、環境防災科に入学してからできた多くの経験は、多くの人の支えや協力があつてこそ成り立つものだと思つた。また、それらの経験の多くは、環境防災科に入学したからこそ経験できたことだ。3年間、恵まれた環境の中で多くの経験ができたことや、支えてくださったり協力してくださったりした方々に、感謝をしたい。私は高校を卒業した後、環境防災科のように防災の勉強をする機会はなくなるが、3年間勉強した知識を活かしたり、自分から防災に関わる機会を見つけたりして、環境防災科での経験が無駄にしないようにしたい。

「未来を生きる私たち」

塩見 勇人

1 はじめに

突然、神戸の街を襲った兵庫県南部地震。何人もの命、財産が一瞬にして奪われた。あの日から28年が経とうとしている。今もまだ、苦しんでいる人がいる中、当時の記憶を風化させてしまっているのだろうか。風化させないために何をすべきなのか。未災者である私たちに何ができるのか。そう考えて、この環境防災科に入学し、過去の災害や防災、減災について勉強しようと決意した。

2 母の被災体験

当時、母は宝塚のアパートに住んでいた。突然、ドン！というトラクターが突っ込んでくるような音が生きて飛び起きた。母はすぐに地震だと気づき、布団の中に潜り、隣の部屋で寝ていた弟に「地震や、布団の中に潜れ。」と何度も声をかけた。その時、母は死を感じたらしい。弟は何が起きたのか理解できず、寝ぼけたようにボーっとしていた。母が寝ていたのはベッドだったため木製のタンスとの間に隙間ができて、下敷きになることなく命を守ることができた。あと数センチ、数十センチずれていれば命はなかっただろう。そして私自身も存在していなかっただろう。大きな揺れが収まった後、母は隣の部屋で寝ていた弟の様子を見に行った。弟は雑魚寝をしており、周りに大きなものを置いていなかったため、怪我すらせずに済んだ。だが、弟はまだ寝ているかのようにボーっとしていた。人はパニックに陥ると頭が真っ白になり放心状態になるのだと言っていた。余震が続く中、これから生き延びていくために必要な食料を買い求めに、近くのコンビニまでダッシュした。コンビニにはあふれかえるほどの人がいて、中にはほとんど何も残っていなかった。せめて水だけでもと思い自動販売機まで一直線に走った。大量の水を買うことができた。この水さえも買うことができなかつたらと考えると恐ろしいと感じるそうだ。そして地獄の生活が始まった。ライフラインはほとんど止まり動くことはなかった。何よりお風呂に入れないことがつらかった。友達の家に行きお風呂に入らせてもらったことが何よりもうれしかったと母は話す。その後、ゆっくりではあるが元の生活を取り戻していった。母は阪神・淡路大震災を経験して改めて災害前の備えの重要性に身をもって感じさせられたと振り返る。

3 父の被災体験

当時、父は御影駅周辺で新聞配達をしていた。早朝の3時ごろには家を出て新聞を配っていた。配達を終え、家に帰ろうと車を走らせていた時に突然、地震が発生した。車体がゴンと音上げ、パンクしたのかと思い、車を止めてタイヤを見てみた。タイヤはパンクしていなかった。不思議に思い、周りを見渡すと勢いよく「うわー、地震や」と大声で叫びながら次々と家から人が出てくるのを目にして、地震だと理解した。大きな揺れを体験しなかったことは不幸中の幸いだったと言っていた。当時父は東灘区の渦森台に住んでいたため被害はあったが、そこまで大きな被害は受けなかった。家の中は小物で散乱していたが、大きなタンスや食器棚は家具の固定をしていたおかげで倒れずに済んだ。当時を振り返り、父親は「家具の固定をしていて本当に良かったと身をもって感じた」と話した。

4 両親の話を聞いて

両親の話を聞いて考えたことがある。それは、災害時は何か1つのことで生と死が分かれるということだ。母親はベッドで寝ていたから命が助かった。これが雑魚寝だったら確実に命はなかっただろう。弟の部屋に大きなタンスがあったら命はなかっただろう。父親が新聞配達の仕事をしていなかったら、少なくとも怪我はしていただろう。このように災害時、何か1つのことですべてが変わってくる。家具の固定ができていれば倒れてくるかもしれないという心配さえもいらなかったのかもしれない。災害時に備えて非常食を買っていたらコンビニにダッシュする必要もなかったかもしれない。災害時は何が起こるのか本当にわからない、予測ができない。しかし、災害が発生することを想定し、日ごろから備えをすることは可能だ。よく「家具の固定は大切だ」と言われるが自分の家で完璧にできているのだろうか。そう考えた。リビングの食器棚はがっちりと固定できているが、弟、私、姉の部屋の家具の固定は不十分だ。これを機に両親と相談し、家具の固定をしようと思った。

また、被災した両親から聞いた話を私だけで止めてはいけなしいと考えた。冒頭にも記したように震災の

記憶を風化させないためには何をすべきか、未災者である私に何ができるのかを考え、行動に移していかなければならない。被害を最小限に抑えるための備え、災害時に活かすことのできる防災教育をしていかなければならない。それらがこれからの未来を生きる私たちに課せられた使命だと考えた。

5 環境防災科

(1) キッカケ

小学校の授業で「釜石の奇跡」について勉強した。中学生が小学生の手を引っ張って高台に避難している写真を見て素直にすごいと思った。そして中学生になり進路選択をする際に、舞子高校環境防災科のパンフレットを目にした。少し興味を持ち調べていくうちにネパール訪問や東北訪問に行く先輩方の写真を発見した。私も実際に足を運び防災を学びたいと思った。そのような被災地支援やボランティア活動を通して防災の重要性や命の尊さを実感し、過去の過ちを二度と繰り返さないようにするため私に何ができるか3年間で探したいと思った。これらが私を環境防災科に入学したいと思わせたキッカケである。

(2) ボランティア活動

私はこの環境防災科に入学しボランティア活動に力を入れたいと考えていた。1年の時は行動に移せないことが多くあった。しかし、2年生からは様々なボランティア活動に参加した。ボランティア活動は「偽善だ」「ただの自己満足だ」とよく言われることがある。しかし、支援する側、支援をしてもらう側の両方がいて、初めて成立する。そのことを肝に銘じて感謝の気持ちを忘れずに取り組もうと考えた。自分がいいと思ってやっても、受ける側からすると迷惑になるかもしれない。常に相手の立場に立ち一度自分の中で考えてから行動することの大切さを学んだ。2年生の時に行かせていただいた大久保北中学校での出前授業ではp4c(子どもの哲学 philosophy for children)という方法を使って授業をした。中学生に授業に興味を持ってもらうためには楽しくすることが大切なのではないかと考え、この方法を用いた。最終的に笑顔で楽しく防災を終えることができたので良かった。

次に行かせていただいたのが加古小学校での出前授業では、災害時様々なことを想定し、時系列で考える授業を行った。高校生の私が考えること、小学生の児童が考えることでは、それぞれ違う視点で考えることができた。考えたことのない意見も出てきて、私たちにとっても学びにつなげることができた。そこで出前授業の面白さを感じた。また、ボランティアは基本的に報酬をもらうことはない。ボランティア活動を通して報酬には代えられないものを得ることができた。これからもボランティア活動に積極的に参加しようと思った。

(3) 1.17 震災メモリアル行事

1年に1度の1.17 震災メモリアル行事。私はこの日を1年で一番大切な1日にしたいと考えている。なぜなら阪神・淡路大震災を風化させないことにつながるのだと考えているからだ。全体会ではasariさんから話を聞かせていただいた。お話の中に未災者であるものが伝えていいのだろうかという話があった。これは私自身も環境防災科入学当初から疑問に思っていたことだった。未災者である私たちが本当に伝えていいのだろうか。雁部那由多さんや齋藤幸男先生は伝えていいと仰ったその言葉で伝えていいのだろうかという不安を捨て、風化を防ぐ語り継ぎをしていこうと決意した。

6 東北訪問

(1) キッカケ

環境防災科の生徒はみな、口をそろえてこう言う。「次の世代に語り継いでいきたい。伝えていきたい」と。私自身も言っていることだ。しかし、未災者である私が語り継いでいいのだろうか。少し防災の知識があるからといって伝えていいのだろうか。そう疑問に思っていたこともあり、実際に被災地に足を運び語り部さんの方々や現地で被災された方々の「生の声」を聴きたいと思った。また、現地の様子を肌で感じたいと思った。そのような思いから参加しようと思った。

(2) 多賀城高校との交流

私たちは宮城県にある多賀城高校の生徒とまち歩きをした。多賀城高校の生徒は、2013年度から防災マップに自分の通学経路を記入したり、津波波高標識を電柱に設置したりと様々な活動をしている。津波波高標識に関しては、校内で意見をまとめて電柱の管理会社をはじめ様々な企業、一般家庭、自治会などに内容を一から説明し、許可をもらうまで説得し続けたと言っていた。「同じ高校生なのにこんなことま

でしているのだ」と感銘を受けるとともに、私自身も神戸で何かできないだろうか考えた。多賀城高校の生徒のような大きなことはできないとしても必ず私にもできることがあるはずだと考えた。ボランティアをはじめとしたさまざまな防災活動に積極的に参加することから始めようと思った。

(3) 大川小学校

多賀城高校の生徒とのまち歩きを終え、バスに乗り大川小学校へ向かった。大川小学校の近くには北上川という大きな川があった。この川が多く命や財産を一瞬にして丸呑みにした。大川小学校に着き、バスを降りると、思ってもいないほどの重たく暗い空気が漂っていた。そこで語り部活動をされている佐藤敏郎先生のお話を聞いた。「言葉はいらないのかもしれない。」これは、最も印象に残っている言葉だ。校舎や校庭が語り掛けているから目で見て感じ取ってほしいという遠いようで近いメッセージだと考えた。校舎を見れば、授業を受けている小学生の姿が思い浮かんだ。校庭を見れば、楽しそうに走り回る小学生の姿が思い浮かんだ。かつてここで小学生が生活していた場所だと考えると心が痛む。小学校が子供たちの最期の場所になってはならない。そのため災害時に活かすことのできるリアリティを持った避難訓練や、防災学習を取り入れていくことがこれからの災害に向けた防災、減災につながるのではないかと考えさせられた。

(4) 東北訪問の感想

私はこの4日間で「いのち」「防災」について深く考えることができた。多くの語り部さんからお話を聞かせていただいて、学ぶことも多くあった。印象に残った研修は、大川小学校で佐藤敏郎先生から聞いたお話だ。大川小学校を訪れる前は恐ろしい場所、悲しい場所、寂しい場所だと捉えていた。しかし、佐藤先生は大川小学校を「未来を拓く場所」だと言っていた。この言葉に衝撃を受け、正直驚きを隠せなかった。過去の後悔にしっかりと向き合うことで二度と同じ過ちを繰り返さないようにすることができ、未来の災害の備えにつながるのではないかと考えた。また、雁部那由多さんから防災の本質を教えていただいた。「自分の命を守り、大切な人の命を守り、みんなで助かる。そしてハッピーエンドで終わらせる。」これが防災だと。正直、お話を聞く前は防災をハッピーエンドで終わらせるなど考えたこともなかった。これを機に防災の捉え方が一変した。

この東北訪問では語り部さんの「生の声」を聴いたり、実際に震災遺構を見たり、現地の高校生と交流したりなど、貴重な体験ができたので、これからの災害の備えに繋げていきたい。

7 夢と防災

私の将来の夢は不動産会社の経営者になることだ。2年生の「社会環境と防災Ⅰ」の授業での外部講師の方が仰っていた言葉がある。「平常時の家は財産や命を守るもの。災害時の家は財産や命を奪うもの。」この言葉を聞き、住居において災害に強い建築構造や災害対策が最も重要なのではないかと考え、不動産の経営者を目指そうと志した。阪神・淡路大震災では建物崩壊による窒息死、圧死が死者の約8割を超えた。もし、亡くなった方々の住居が耐震性のある頑丈な住居だったら助かっていたのかもしれない。そう考えると災害に強い住居がいかに必要とされるかがわかる。これから30年以内に70～80%の確率で発生するといわれている南海トラフ巨大地震に向けた住居の開発や備えが必要不可欠になってくる。免震、制震、耐震のような建築構造、水や非常食の備蓄倉庫、電気を蓄える蓄電システム、命を守るAED、消火器などの装備、設備を考えなければならない。現実性を持ち、開発していくことが住居における防災や減災につながっていくのではないかと考える。また、私が不動産業界で働くことができればいいことがある。それは仕事を通して防災を広めていくことだ。広めていく方法をいくつか考えた。1つ目は顧客との会話の中である。顧客が物件を選ぶ際に様々な条件があると思う。顧客のニーズを第一に考えるのはもちろんだが防災、減災の視点から考えたときに安心して住んでもらえるような物件を提供したいと考えた。物件選びの際に住居の周りにはどんな自然災害の危険が潜んでいるのか、具体的にどんな防災対策をすればよいのか、災害時どこに避難すべきなのかなどお話ししたいと思った。2つ目はオーナーとして行う避難訓練やイベント、清掃活動だ。阪神・淡路大震災で助かった人の多くは、警察や消防、自衛隊などによる公助ではなく近隣住民による共助によって救出された。このことから日ごろからの地域コミュニティの維持や向上が大切だと思った。そのため避難訓練やイベント、清掃活動を通して住民が自分の住む町の特性を知り、住民同士のコミュニケーションをとることができるよう場を提供したいと考えた。

このように不動産経営において物件を販売するだけでなく、避難訓練やイベント、清掃活動などを企画し実施することで住民同士のコミュニティを築き、いざというときの共助につなげられるのではないかと

と考えた。

8 最後に

この「語り継ぐ」を執筆するにあたって、未来を生きる私たちがすべきことは何なのかを考えさせられた。阪神・淡路大震災で被災した両親、東日本大震災で被災された方、語り部活動をされている方々の言葉には説得力があった。それぞれ被災体験は異なるが、ほとんどの方々が言っていたことがある。「日ごろからの備え」である。この言葉をよく耳にするがどれほど重要なことなのか未だにわかっていない人もいるかもしれない。だからこそ防災を勉強している私たちが発信していく必要があると考えた。発信していくかたちは決まっていないと思う。どんなかたちでもよい。一人一人が「私にできること」を考え、行動に移していくことが防災の始まりだと思う。これからは未災者が主体となる時代がやってくる。災害大国といわれる日本に住んでいる以上、生き抜くための知識、力が必要とされてくる。だからこそ、この3年間の学びを色々なかたちで語り継ぐとともに私自身も成長していきたい。

次世代へのバトン

白壁 菜乃葉

1 はじめに

激しい揺れとともに神戸の街を突然襲った阪神・淡路大震災。それから 28 年の月日が経過した現在、震災を経験していない人が人口の半数以上を占めるようになった。私がこの震災を知ったのは、小学校 5 年生で防災学習を行った時だ。私が何不自由なく生活している街の十数年前は、映像で見た世界で、そこはまるで戦場を見ているようだった。

震災を経験していない人が増える中で、震災を風化させないよう後世に繋いでいる方がたくさんいる。そのバトンを途切れさせてはいけない。次は震災を経験していない私たちが未災者につないでいく番である。

2 母の話

当時母は、姫路にある実家に住んでいた。朝、ものすごく大きな騒音で目が覚め、こんなに朝早くから工事を行うことは迷惑だと思った。その数秒後、突然いつもとは違う長く大きな揺れに襲われた。祖父が 2 階から降りてきて、家の一番大きな柱を支えながら「大丈夫か!？」と母に問いかけた。それと同時に祖母は、急いで台所へガスの元栓を止めに行った。揺れが収まり後々考えると、朝の騒音は地鳴りのようだった。テレビをつけると戦後の焼け野原のような映像が映っていた。日頃から神戸の辺りには地震が来ないと言われていたため、その光景にとっても驚いた。時間が経つにつれてテレビで被害状況が放送されるようになった。一番驚いたのは阪神高速神戸線が倒れている映像を見た時だった。ありえない光景を目にし、言葉がでなかった。その時、今回の地震の大きさ、怖さを感じた。そして、絶対はないということを実感した。当時は、母は守ってもらった側だったが、もしその時に自分に子供がいたらと考えると両親と同じように動くことができなかったと思うと言っていた。

3 父の話

当時父は、姫路市に住んでいた。その日のまだ薄暗い早朝、地下からダンプカーが突き上げてくるような「ゴー」という地鳴り音で目が覚めた。その直後、かなり長く感じられる地震の揺れを体験した。何が起きているか想像もつかない中、揺れが収まるのを待った。いつもはすぐに終わるはずの揺れがなかなか収まらずとても恐怖を感じた。その後、会社に出勤したが、普段神戸方面から出勤してくる職員が誰も出勤できていなかった。その後、神戸に住んでいる職員からの電話で、電車などの交通機関が止まっており、今どのような状況に置かれているのか分からないと言われた。父がその職員に今の神戸市の状況を伝えようとしたが、テレビで少しの情報しか得られなかったため、その少しの情報を伝えることしかできなかった。

数日後、地震も落ち着き、地域の住民が学校等への避難所に移った後、公務員である父らは、避難所の状況調査のため、各避難所を回り、必要なものなど聞きまわった。幸い、救援物資等のパンやおにぎりなど食べるものはあったが、みんな疲れ切った顔でこれから帰るところもなくどうしたら良いのかといった不安げな顔をしていた。

聞き取り調査を行っている中、そのうち「毎回同じことを聞きに来て」と避難者から愚痴を言われることが増えていった。必要なものを知るための調査であったが、いつの間にか個人の愚痴を聞くことがメインの仕事になっていた。被災者の方は、それだけ精神的に辛い思いになっているのだと痛感し、被災者の方の愚痴を聞くことで、少しでも気持ちを和らげることができるのなら、この仕事も価値があるものと考えられるようになった。

後になってわかったことだが、愚痴を収集することも大事なことで、そういった声が早期に仮設住宅の整備を行う原動力になったそう。その後、父のように道路や河川港湾などのインフラ整備等をに携わる者は、災害直後の対応で、災害ゴミの対応や、どこかの建設業者に早く動いてもらえるかなど、早期の復旧復興のために何が必要であるのか等をまとめた災害復興誌を作成した。この復興誌は、後の東日本大震災時に宮城県を支援するために提供した。

4 話を聞いて

両親の話を聞き、当時は本当に言葉が出ないほどの想定外のことが起こったのだと実感した。母の話を

聞いた時、祖父母が自分より大切な人の命を守るための行動をいち早くとっていたことにとても驚いた。日頃から防災対策や想定もなかったにも関わらず、咄嗟に自分より他人の心配をした。そんな人間に私もなりたいと強く思った。自分のことを大切に思うことも重要だが、それよりも失いたくないものがあるということを考えさせられた。そのためには、今後の災害に対する防災について、真剣に向き合っていく必要があると改めて思った。

父の話を聞いた時、私が父の立場であれば、自分のことで精一杯だったと思う。そのうえ、聞き取り調査となれば、私の精神がもたないだろう。父の家族も兵庫県に住んでいたため、心配であるはずだが、そのことよりも仕事を優先せざるを得ない状況だったということから、当時の慌ただしい状況が想像できる。

両親の話から、想定外を想定内にすることが今後大切だと改めて思えた。近いうちに来ると予測されている南海トラフ巨大地震に向けても対策していこうと思う。私が将来家庭を持つことができたなら、私も祖父母や両親のように尊敬される強い親になりたいと思った。現在は、想定外の災害が増え、なかなかどのような被害をもたらす災害がくるかわからないが、大切な人の命を守っていくためにも、今環境防災科で学んでいることをもとに、想定外を想定内にしていけるよう知識を身につけ、臨機応変に対応していける大人になっていきたいと強く思う。

5 環境防災科

(1) きっかけ

当時中学3年生だった私は、幼稚園の先生になりたいと考えていた。その時、環境防災科卒業生の兄から、災害時の幼児の心のケアについて話を聞いた。その時、私も幼児の心のケアについて学び、将来の職業に活かしたいと思うようになった。当時から南海トラフ巨大地震も予測されていたため、今後の社会はもっと防災を学んでおく必要があると思い志願した。

(2) 入学後

私は無事に環境防災に入学することができたが、コロナ禍により数か月の間学校へ行くことができなかった。初めての高校生活のスタートが想像していたものとは大きく違い混乱した。慣れないネットでの課題提出があり不安でいっぱいだった。ようやく学校に行くことができてからも、初めは出席番号の奇数と偶数に分かれての分散登校が2週間程続いた。コロナ禍で入学式が行われなかったため、あまり入学したという実感も持てなかった。また、友達や先生方と話す時はマスク越しであるため、顔の表情などがわからず戸惑った。数か月が経ってもなかなかコロナは収まらず、楽しみにしていた高校での文化祭や合唱コンクールも行うことができなかった。コロナ禍にも少し慣れてきたころ、環境防災科では、普通科とは違った、専門分野の勉強や校外学習、外部講師の方のお話を聞きレポート等を書く機会が多くあった。最初はパソコンの使い方すらも分からなかったが、練習を重ねるうちにできることが増え、とても嬉しかった。

(3) 消防学校

実際に消防士の方の行っているトレーニングや訓練をする、消防学校体験入校があった。1年生では初級、2年生では上級と分かれており、1年生では規律訓練や、集団行動などを行い、仲間と協力することの重要性を感じさせられた。2年生では、1年生で行った規律訓練を復習しながら、放水訓練を行った。思っていた以上に1つ1つの道具が重く、訓練や練習をしていない素人には到底簡単にできないような動きがたくさんあった。そういった体験をさせてもらったことで、消防士の方がいかに私たちの身の安全を日々守ってくれているのかを考え直すことができた。

6 ボランティア活動

ボランティア活動では、やってあげているのではなく、やらせていただいているという気持ちを大切に取り組んできた。

(1) こばと聴覚特別支援学校

いくつかのボランティアを行ってきた中の1つに、こばと聴覚特別支援学校との交流、聴覚に障害を持った子供たちに向けて防災を広めるための活動があった。新型コロナウイルスの影響により、実際に子供たちに会うことはできなかったが、自分の身を守る時の行動を劇にし、動画で届けた。劇のセリフは全て手話で行った。初めて手話で劇をするため緊張感もあったが、友達や先輩、後輩と協力しあい、やり遂げ

ることができた。届けた動画を見た子供たちは、もう一度見たいと言いながら喜んで見てくれたと聞き、誰かの命を守るために行う行動は、誰かを笑顔にできるものだと感じることができ、とても印象に残った。

(2) 募金活動

私が初めて募金活動を行った時、最初は街中で大きな声を出すことに對して恥ずかしさがなかなか消えなかった。しかし、活動中に地域の方からの「頑張ってるね」や「ありがとう」などといった温かいお言葉や、様々な震災体験をされた方からの話を聞き、たくさんの方の気持ちを背負ってやらせてもらっているのだと感じた。その時、今の私にできることは、自分の精一杯の声を出し、思いを伝えるということだと思った。そこから、大きな声で呼びかけることができた。震災を経験していない私にとって、1つ1つの話がとても貴重であった。

(3) 出前授業

出前授業は、対象年齢に合わせて授業内容を考えて、行うことがとても難しかった。当たり前のことだが、相手に教えるというのは、自分が正確な知識を持っていなければいけない。だが、小中学生からの質問には、頭を悩ますものもあった。その分、今の自分にどんな知識が足りていないのかを知ることができた。その経験から、出前授業は伝える相手だけではなく、自分の成長にもつながるのだと実感することができた。

7 将来の夢

私の将来の夢は、アロマセラピストになることだ。アロマセラピストとは、精油に関する正しい知識をお客様にアドバイスをし、様々な種類の精油をブレンドしたアロマオイルを使用して、トリートメントを行いながらお客様に癒しを促進する仕事である。

(1) きっかけ

私がこの職業に就きたいと考えた理由は、私が長期で体調を崩してしまい全然眠れなかった時、母がアロマオイルを使用し私にマッサージをしてくれ、よく眠れたという出来事があったからだ。また、私は昔から香りに興味があったため、香りを使った仕事で何かできないか調べ、たどり着いた職業がアロマセラピストだった。

(2) 夢と防災

この職業と災害時について考えた時、初めに思いついたことは避難所支援だった。避難所では完全にプライバシーが保たれているわけではないため、体調を崩した時の私と同じようになかなか眠れない人や、ストレスを抱えてしまっている人が多くいるのではないかと考える。その時に香りで癒し、リラックスしてもらえる環境を提供することができれば、少しでも気持ちよく避難所生活を送ってもらえるのではないと思う。香りには好き嫌いがはっきり出るため、相手の方を不快にさせないように注意しながら、一人一人に寄り添えるアロマセラピストになりたいと思っている。

(3) 通常時とアロマセラピスト

災害時ではなく、通常時で防災と絡めて考えてみたが、アロマセラピストはあくまでもお客様に癒しの場を提供する仕事であるため、防災との接点が見つからなかった。しかしながら、カウンセリング時に、環境防災科で学んだ建物の耐震性について少しでもお話することができれば、お客様に安心を提供するとともに、防災について知ってもらえるきっかけとなるのではないかと考えた。また、アロマセラピストの資格とともに、嗅覚反応分析士といった8種類のアロマを嗅ぐだけで生体情報を知ることができる資格を習得しようと考えている。生体情報の分析結果は、グラフにして視覚化することができる。そして、実施前後でグラフを比べることができるため、相手の一人一人にどのようなアロマや食事が合うのかを簡単に分析することができ、アドバイスをすることができる。実際に私も体験したことがあるが、自分に足りていないことが何なのか目に見えてわかるため、原因がわかり、心がとても落ち着いた。そういった経験から、私もこの資格を取得し、アロマセラピストとして施術前にお話をする時、困っていることや不安に感じていることがないかを聞き、防災に繋がるようなことがあれば、少しでも話の中に取り入れ、よりリラックスし、安心して施術の受けられる環境を提供できるようにしていきたいと思う。

8 最後に

私は、「語り継ぐ」を執筆していくなかで、伝えていくことの大切さに気づかされた。環境防災科に入学するまでは、30年以内に大きな確率で南海トラフ巨大地震がくると言われていても、正直怖いと思うことしかできなかった。しかし、今では違う。南海トラフだけではなく、他の災害への備えや対策、災害時の人の心理についてまで考えられるようになった。そして、この環境防災科で学んだことを家族や友達に伝えることができるようにまで成長することができた。このように自分が成長できたのは、震災当時を経験された方からの当時の貴重なお話や、環境防災科の先生方や先輩方が今までの震災を語り継いでこられたからだ。これからは、私もそんな方たちの一員となっていきたい。

高校生の私にできることは限られているが、その中でも学んだことを伝えることはできる。1人でも多くの人に語り継いでいくことの大切さを知ってもらえるように次は私が語り継いでいきたい。

環境防災科に入学し、この3年間で他の高校では経験できないことや学びがあった。もちろん辛いこともあったが、その分大きく成長できた。この学科に入学するにあたって支えてくれた家族には本当に感謝している。ここで執筆の「語り継ぐ」は終わるが、これからも私の語り継ぐことは続いていく。

語り継ぐ

瀬合 慶史

1 はじめに

阪神・淡路大震災から 28 年の月日が流れた。神戸の街に残る震災の面影はもう数えるほどしか無くなってきている。数的な記録だけが形のあるものとして残っていく。その様な状況で、未災者である私たちがどの様に震災の教訓や記憶を語り継いでいくべきか。数字だけでは残せない、そんな被災者の方の記憶や教訓を長く残していきたいと考え、執筆させていただく。

2 環境防災科

(1) きっかけ

環境防災科に入学しようと思ったきっかけは、中学校のトライやるウィークで神戸市の西消防署に行き、消防士に憧れを抱いたことだ。そこで、消防士になるためには災害について知ることが必要だと感じた。「災害について学ぶのなら環境防災科という学科が舞子高校にある」と予備校の先生から教えていただき、環境防災科に興味を持った。オープンハイスクールに行くと、大勢の前で生き生きと話す先輩方の姿を見て、自分もこんな風になりたいと思った。また、配られたパンフレットを見ると、ネパール訪問というプログラムが目に入った。以前から海外に興味があった私は、災害や海外の文化に触れられるプログラムがあると知り、環境防災科に入学することに決めた。

(2) 入学後

海外に行けるという事に期待を膨らませ入学すると、いきなり新型コロナの影響で海外渡航はおろか、2ヶ月間学校に登校することさえできなくなった。要領が悪く、物事を始めるまでに時間がかかる私は、コロナウイルスによる休校期間で出された宿題に全く手がつかず、このままで高校3年間やっていけるか不安になった。やっとの思いで登校すると、防災に関する授業は全くわからず、授業についていくので精一杯だった。

(3) ボランティア活動

環境防災科に入って数は少ないが、いくつかのボランティア活動を行った。その中でも最も印象に残っているのが募金活動だ。その募金活動は、「垂水区の福祉を向上させる」という趣旨に基づいて垂水駅に赴いて行ったが、自分が想像していた何倍ものお金をお預かりして、温かい言葉をかけてもらい胸が熱くなった。その時初めて、人の温かさを肌で感じると共に、このまちを守りたいと感じた。

3 親族の被災体験

※続柄は著者視点である

(1) 叔父の被災体験

地震発生後、近所の学校へ避難した。夜は余震の度に目覚めてぐっすり眠れず、数日間寝不足だったようだ。また、避難所のご飯は毎回冷たい弁当で味気無く、不安感が増していく一方だった。そして驚くことに、避難所に集められた全国からの物資を独占しようとする人がいたようだ。このようなことがあったからなのか、避難所の雰囲気は一層重くなり、とても居心地が悪く、息苦しい生活が続いたようだ。

(2) 叔母の被災体験

朝、ドーンという音で目が覚めた。何度もベッドから突き上げられるような揺れが起こり、台所の食器棚が倒れ、食器が割れ、家の中はどこがどこか分からないほどになってしまったようだ。しばらくするとガスの臭いがしたので慌てて家を出たが、幸い火災には繋がらなかった。外に出ると寒くて体が震え、電話線が切れて電話が使えなかったので家族と連絡がつかず、とても不安だったようだ。近所の方々もみんな外に出て不安そうにしている、一層不安が駆り立てられた。とにかく会社に行かなければと思い、徒歩で通勤した。通勤途中、公衆トイレを見ると糞尿まみれになっていた。風呂にも入れず、ガスボンベとランタンが役に立ったようだ。

(3) 母の被災体験

毎年、1月17日が来ると段々と母自身の記憶が風化していると感じるようだ。

当時、2階に寝ており、ドンッという縦揺れの衝撃で目覚めて何が起きたかわからない母を、祖母が1階に降りよう慌てて呼びに来た。余震の揺れが続く中、1階に降りると、停電の暗闇で何もわからず、雨戸を開け日が差し来ると、開き扉の食器棚の食器がごとく床に落ちて割れていた。一人暮らしの叔母(前述2)が須磨の海側の共同住宅に住んでいたのも、心配で真っ暗な中、固定電話を探し出し電話をかけたが、その日の昼過ぎまで通じず、ラジオを使って初めて大震災が起こったことが分かった。ガスや暖房もつかず、毛布にくるまり時間が経つのを待った。祖父が起きた後の布団の上にタンスが倒れていた。もし祖父が早起きでなく寝ていたら、どうなっていたかと今でも思い出してぞっとするそうだ。外に出ると、大きな門柱が片方倒れていた。もう叔母は亡くなっているかもしれないという不安が募った。昼過ぎに公衆電話から、叔母が無事だと連絡が入り、安堵し、少し肩の力が抜けた。しかし、叔母の住んでいる場所は危なく、家に帰ろうにも電車が動いてないので、彼女は何時間もかけ自宅へ歩いて帰ったそうだ。トイレは1回目こそ流れたが、しばらくはライフラインが繋がらず、トイレが流れない、お風呂も入れない日が続いた。電気もガスも使えず、カセットコンロでお湯を沸かし、温かいインスタント食品を食べて、暖を取ったそうだ。車で動こうとすると大渋滞で動けず、街は建物や地面が崩れ、平衡感覚を失うような状態で、被災した神戸は、何も起こってない地域の人から見れば、きっと映画の出来事のようにみえているのだと孤独を感じたそうだ。その一方で手を差し伸べてくれるボランティアの人たち優しさが身に染み、被災者みんなで復興に向けて頑張ろうとする団結力を感じたそうだ。

(4) 母から聞いた曾祖父母の被災体験

曾祖母と曾祖父は当時、神戸市長田区の菅原地区というところに住んでいた。

私が幼いころ2人とも亡くなってしまったが、当時もう仕事を引退していた曾祖父母は、いつもの様に寝ていると、激しい揺れとともに一瞬のうちに1階がぐしゃぐしゃに潰れ、2階から出て、近くの小学校に避難した。私の祖父は、連絡がつかない曾祖父と曾祖母を探しに原動機付自転車で現地に行き、焼け野原になり跡形も無くなった曾祖父母の家を目の当たりにした。半ば諦めていたが、寒さで凍えそうになりながら小学校に避難している曾祖父と曾祖母に再会できたそうだ。命が助かって良かったと一安心したが、昔気質であり銀行を信用しておらず、タンス貯金をしていた曾祖父の財産は、家と共に焼けてしまった。着物の仕事をしていた曾祖母の衣服は焼けてなくなってしまい、曾祖母は亡くなるまで、あの着物があればと嘆いていたそうだ。火事場泥棒が横行し、焼けた家に何か残っていないか取りに行った時、焼けて溶けた小銭を持って帰ろうとする泥棒がいた。仮設住宅が次々と立ち、何とか須磨の仮設住宅に移り住んだが、曾祖母は嘆いてばかりで、曾祖父が家事をしていた。今まで積み上げてきたものが、震災で全て焼けてしまった。今からどうやって生きていけばいいのか、歳をとった曾祖父母にとっては、どうしようもない不安と、ぶつけどころがない災害への憤りでいっぱいだったのだと感じたそうだ。

4 被災体験を聞いて

(1) 叔父の被災体験を聞いて

私の叔父はとても気が強く、物怖じしない性格なのだが、震災の当時は余震でぐっすり眠ることができなかったという話を聞いて、震災の後の不安さが伝わった。また、救援物資を独占する人がいたという話にとっても衝撃を受けた。私は今まで見てきた震災の映像に、人々が1つずつ列に並んで物資を受け取っている物しか見てこなかった。しかし実際にはこのようなことが起こっていたと聞いて、自分のこと以外に考える余裕がなかったのだろうと感じた。

(2) 叔母の被災体験を聞いて

震災当時は冬だったという事もあり、そのつらさは想像できない程のものだと感じた。震災は、公衆トイレが糞尿まみれになっていたなど、震災は衛生面などにも影響が出るという実体験を聞いて、どうしたら災害時の衛生問題を解決できるのか考えてみたいと思った。また、ガスボンベやランタンなどの備えの大切さを改めて感じた。

(3) 母の被災体験を聞いて

実際に震災を経験した母でさえ、記憶の風化を感じているということに驚いた。

また、今まで聞いてきた色々な人が被災した時の様子を「戦争のようだ」と例えるのを耳にすることが多かったが、「平衡感覚を失った世界」という表現は、神戸のまちが崩れていく様子を連想させた。震災後はまるで映画の世界のようで孤独を感じたという話では、どれほど神戸のまちが一つの社会として日本

全体から孤立していたかを感じさせられた。このような孤立を防ぐためにはどうしたらいいのか考えたい。

(4) 曾祖父母の被災体験を聞いて

全ての財産が無くなってしまう事はとても怖いものだと感じ、銀行の利用は財産を守るための一種の防災なのだと痛感させられた。また、火事場泥棒の話を聞いて、災害などで人間が窮地に立たされると本性が表れると知った。

(5) 全体の感想

今回、多くの人の震災当時の話を聞いて、今私が生きていることは当たり前ではなく、いつ何が起こるかわからない自然の上に人間は生きていることを改めて感じた。また、全ての話の共通点として、全員が不安や恐怖、怒りを感じたことが挙げられる。これらのことから、震災当時の、次いつ地震が起こるかわからないという恐怖と、先が見えない復旧・復興に対する不安、どこにぶつければいいのかわからない怒りが確かにそこにあったのだと想像することができる。私自身も、最も身近な人物である母の話を聞いて、いつ起きるかわからない巨大な災害を前に不安でいっぱいになった。だからこそ、もしも災害が起こっても自分自身が助かり、一人でも多くの人を助けられるように備えをして、災害に対する力をつけたいと思った。私が話を聞いた中で最も印象に残ったのは、物資を独占する人の話と曾祖父母の焼けた家に現れた火事場泥棒の話だ。今までの環境防災科の授業で、火事場泥棒がいたという話は聞いたことがあったが、実際に自分の身内が被害に遭っているという話を聞いて心底驚いた。

火事場泥棒や物資を独占することは、決して正しい行いとは言えないし、犯罪になり得る場合もある。しかし、未災者である私が、火事場泥棒と物資を独占する人の視点になって考えてみると、彼らのしたことは本当に悪行なのだろうか疑問に感じてしまう。犯罪は犯罪であることに変わりはないが、彼らも家族や財産を失い、これからどう生きていくか不安で仕方がなかったのではないと思う。火事場泥棒でも、火事場泥棒の被害者でも、いずれも被災者であることに相違はない。

これらのことを考えると、震災当時の被災者たちは一瞬一瞬を『生きる』ことに必死だったのだと改めて感じさせられる。これから起こるだろう大きな災害では、こういった火事場泥棒をせざるを得なかったような人たちを二度と出さないための制度作りや、財産を守る場所である家をもっと災害に強くする必要があると感じた。

5 将来の目標と防災

私の将来の目標は入学当初と変わり、現在は海外に住むことになった。この目標を持つようになったのは、幼いころから通っていた英語教室の先生に海外留学や海外旅行の話を聞いて、海外の文化や景観、歴史を、そして環境防災科での学習を通して、海外の防災や災害などを知ってみたいと思ったからだ。海外は日本と違った家屋の材質や構造があり、同じ台風被害や大雨被害でも被害の大きさが違うのではないかと考えたので、それを自分の目で見てみたいと思った。海外の防災や災害には、日本とは違うものや、日本にはないものがあると思うので良いと思った部分は日本に持ち帰り、改善が必要ならば改善案を考え、繋がりのある環境防災科の同級生に託したい。環境防災科の活動理念に「Think globally Act Locally」とあるが、私はいずれ世界規模で横のつながりを持ち活動しなければならない「Think globally Act internationally」という考えを持たなければならない日が来ると考えている。国際的に防災力を高めていけばもっと世界は災害に強くなるのではないかと考えた。この目標が叶ったら自分がやれることは少ないと思うが、実践に移したいと思う。

6 語り継ぐ

今回、初めて母に被災体験を聞いた。母の口から「段々と災害の記憶が風化していると感じる」と聞いた時、私は驚きを隠せなかった。今、実際に阪神淡路大震災を経験した人が減りつつあることは周知の事実だが、今まで十分に震災の記憶は語り継がれていると感じていた。しかし、実際に震災を経験した母が記憶の風化を感じるということは、十分に語り継ぐことができているのではないかと考えた。過去の震災の教訓は、必ず次の震災が起こった時に生きてくると思うので、これ以上記憶が風化しないように自分ができることをしたいと思った。時代が進むにつれて情報の出所や伝え方も変わる。それゆえ、私たち環境防災科は時代に沿った伝え方をしていかなければいけないと考える。最後に、今回「語り継ぐ」を執筆

するにあたり、協力していただいた親族や私が環境防災科に入学して今までにいろいろな知識を教えていただいた講師の方々と先生方に感謝を込め、執筆を終了させていただく。

自分にできること

高橋 茉那

1 はじめに

1995年1月17日5時46分、阪神・淡路大震災発生。私は環境防災科に入るまでは、今の神戸に震災の跡を感じたことがなかった。しかし、環境防災科で学んできて、今でも苦しんでいる人、未来のために語り継いでいる人がいることを知った。まだまだ、復興の途中だということに気付いてほしい。そのために、私に何ができるのだろうか。震災を経験していない人が増えてきた今、少しでもこれから起こる災害の犠牲者が出ないために自分がどう語り継いでいくか考える。

2 阪神・淡路大震災

(1) 父の話

当時、22歳の社会人2年目で高知県から朝霧の会社の寮に引っ越ししてきた。1995年1月17日5時46分、大きな揺れで目が覚めたが、そのまま寝てしまった。朝起きると、家はCDラックが倒れ、ガラスが割れていた。8時頃、出社しようと家を出ると周りが大騒ぎしていた。とりあえず、神戸市兵庫区にある会社に電話した。たまたま電話はつながり、会社にいた先輩に「来るな」と言われた。テレビを見ると、火災の現場や高速道路が倒れているところが映し出されていた。家は水が止まった。幸いにも寮に水をためているタンクがあったため、水は使えた。それでも、家でお風呂は入れないし、毎日、風呂にためていた水をコップ一杯分すくい、顔を洗っていた。明石の銭湯に行ったり、車で加古川の銭湯にも行ったりした。食事は寮だったこともあり、いつも通りに準備されていて、食べることができた。日頃から、バイクで移動することが多かったため、困ることが少なかった。地震発生から3日後、やっと出勤することができた。しかし、ほとんどの人がまだ出勤できない状態だった。JRは須磨駅から東方面が停止していたため、須磨駅から兵庫区にある会社まで約5kmある道を2週間くらい毎日歩いていた。災害当時は、歩道をバイクが通っていたりして、交通ルールがないようなものだった。会社では本棚(約2m)がすべて倒れていた。また、ある建物では屋根がフロアに全部おちていて、ひどい有様だった。屋根が工場機械の上にも落ち、工場が2か月程ストップした。最初の2週間はひたすらみんなで、片付けや掃除をしていた。大阪方面の人などは、家に帰れず、会社で寝泊まりしていた。引っ越ししてきてまだ2年目だったため、近所に知り合いも少なかったが、全員無事だった。しかし、叔父、叔母は東灘区に住んでおり、家が全壊になり、1階で寝ていた叔父は瓦礫に埋まった。親戚の人達が急いで駆けつけて、何とか救出できた。小学校、中学校の避難訓練は1年に1回くらいしかしていない。高等専門学校では、避難訓練をした記憶がない。震災前も震災後も、会社では1年に1回避難訓練がある。地震が起こってから地震に対する意識が変わった。避難訓練に真剣に取り組むようになったり、防災グッズを置くようになったりした。

(2) 母の話

震災当日、大学4回生で両親と一緒に神陵台の家に住んでいた。地震が起きたときは、父が仕事のため両親は起きて、支度をしていた。父は地震が起きても、ネクタイを着けていて、母に無理やり、机の下に入れられた。2人とも無事だった。地震発生時、突き上げるような強い揺れを感じた。本棚や食器棚が倒れた。家族でとりあえず外に出ると、近所の人たちも外に出ていた。ライフラインが止まった。水道は、近くの小学校まで汲みに行き、火はカセットコンロを使っていた。姉と近くのコンビニや薬局で、食料を買いに行った。しかし、急いで買った食料はたくさん余った。自身は、救援物資仕分けのボランティアをしていた。「しんどかった」と振り返る。段ボールの中はいろいろなものがぐちゃぐちゃに入っていた。ひどいときには、袋の開いたポテトチップスが入っていた。「正直こんなに要らない」「そこまで困ってないのになあ」「この仕事に意味があるのか」と思いながら、作業をしていた。困ったと感じたことがたくさんあった。洗い流さないシャンプーはべとべとするため、使えなかった。銭湯は、しばらくお風呂に入っていない人がたくさん入っているため、それが気になって入れなかった。名谷にある親戚の祖母の家に行き、風呂に入っていた。つらかった記憶は、火事のニュースを見ていた時だ。親が生き埋めになっていて、助けようとするが火が近づいて、親の「逃げろ」という言葉で仕方がなく逃げる子供たちをみて、心が苦しかった。

(3) 話を聞いて

私は、話を聞いてまず少し安心した。父も母も大きな被害に遭わず、私の親戚も亡くなっていなかったからだ。しかし、大叔父ががれきの下敷きになったという話を聞いて、私は驚いた。こんなに自分の身近なところにそんな経験をしている人がいたとは知らなかったからだ。がれきの下敷きになっていたが、助かったと聞いたときはとても安心した。誰でもがれきの下敷きになる可能性はある、改めてそう感じ、自分にできることをしていきたいと思った。母が、救援物資のボランティアをしたという話を聞いて、ちょうど授業で救援物資について習っていたため詳しく話を聞くことができた。授業で話を聞いていたことと同じような話をされていて、救援物資はただ送るだけではないと改めて考えさせられた。もし、自分が救援物資を送ることになったら、何を送ればいいのか、どのように詰めて送ればいいのか考えていこうと思う。母が急いで店に食べ物を買いに行ったが、たくさん余ったそうだ。その話をしているときに、両親が冷蔵庫のもので1週間はやりくりできると言っていた。私はその話を聞いて、もし自分が災害に遭って、自分の家が住めるようならば、できるだけ食べ物を買わないようにしようと思った。避難所生活をしている人の中には、全然食べられなくて苦しんでいる人がいるからその人たちに渡すべきだと考えたからだ。私は話を聞いてまた新たに学ぶことができた。母の、火事のニュースを見ていた時が特につらかったという話が、一番印象に残っている。その話をしていた母は、本当につらそうだった。私は、母が一生懸命話してくれたこの話を、忘れてはいけないと話を聞きながら感じた。

私はあまり両親から震災について話を聞く機会がなかったから、新鮮だった。話を聞いていて、知らなかったことや、驚いたことがたくさんあった。父と母が思っていることが違ったり、同じことを思っていたりして、人それぞれに災害に対する思いがあることを知った。私は、両親から受け継いだこの思いを忘れないでいたい。最後に、私のために時間を割いて、記憶から振り絞って話をしてくれた、両親には感謝している。

3 夢と防災

(1) 私の夢

私の夢は、管理栄養士になることだ。これは、私が高校に入学する前から変わっていない。しかし、環境防災科で学んできて、管理栄養士でもいろいろな分野で働いていることを知った。高校入学前の私は、管理栄養士は病院で働く人、学校の給食のおばちゃん、スポーツ選手の育成をする人というイメージしかなかった。しかし、講義を受けて、自衛隊で管理栄養士が働いていることを知った。「災害と食」は意外と密接に関わっているのではないかと私は高校に入学してたくさんの人に話を聞かせてもらって、震災時の食の大切さに気付いた。

(2) 管理栄養士になりたいと思ったきっかけ

興味を持ち始めたのは、中学1年生の時に校外学習で私立の高校に行った時だ。その高校は内部進学で大学に入ることができ、その大学に栄養科があることを知った。もともと、私は食べることが大好きで食の分野に興味があった。管理栄養士になる方法を調べ、私も管理栄養士になれると気づいたことが管理栄養士の仕事に興味を持つきっかけだった。

本格的になりたいと目指すようになったのは、中学2年生の時のトライやるウィークの時だ。私は保健センターで職業体験をさせていただいた。その時に、管理栄養士の方から話を聞く機会があり、楽しそうだと感じ、管理栄養士になりたいと思った。

(3) 管理栄養士と防災

私は、環境防災科に入って災害食について興味を持った。私は、阪神・淡路大震災の時の食事について調べたことがある。震災時に第一線で働く人たち、例えば、消防士や警察官、自衛隊、電力会社勤務の人などの食事について書いた本を読んだ。私は想像よりも食事の量が少なく驚いた。私が一番驚いたことは、3日間何も食べずに働いていた人がいたということだ。ほぼ不眠不休で働いているのに、そのうえ栄養不足。食事がとられない理由はいくつかあった。まずは、単純に食事をする時間がないということだ。仕事が多すぎるあまり、食事を後回しにする人たちが多かったようだ。また、食事をする暇があったら仕事をしろという、日本の考え方が食事をとりにくくする原因であった。実際に、食事をとっているときに「仕事をしろ」と言われたという職員もいるらしい。他にも、災害食の数が足りないという問題も挙げられていた。私はこの事実を知って、このままではだめだと思った。この状況では、3日間も体はもたず、人手も減っていくのではと考えた。食事をとって、体の緊張をほぐし、栄養をとって次の仕事につなげて

ほしい。私は、そう感じた。

日本の避難所は、今でも、おにぎりが少し配られるだけらしい。しかし、欧米では災害発生後3日以内に出来たてのおいしいご飯が食べられる。避難所にキッチンと調理師が配置される場所もあるからだ。私は、日本でもそうあるべきであると思う。栄養があり、おいしい食事を摂ることにより、心をホッとさせることができるし、活力にもなる。そのことで、がれきの撤去などの復旧作業も迅速になり、被災地にも活気が戻る。また、私はきちんとした食事をとることで災害関連死が減ると思う。栄養のある食事をとることで病気になりにくくなるし、おいしい食事をとることでストレスの軽減になり自殺行為も減ると考えたからだ。それゆえ、私は、日本はもっと炊き出しを推進するべきだと思う。日本は感染症を恐れて、あまり炊き出しをしない。しかし、食事の大切さを知ってもらえれば、炊き出しの重要性に気付いてくれるに違いない。私は、避難所の食事を管理栄養士の立場から見直していきたい。

4 環境防災科

(1) 入学するきっかけ

私が入学した理由は、舞子高校のバドミントン部に入りたかったからだ。防災には興味がなかったが、「南海トラフ巨大地震もあるし、損ではないかなあ」「入学したら、家族を災害から守れるかな」という軽い気持ちで入学した。

(2) 3年間で学んだこと

私は、環境防災科に入れて良かったと思っている。貴重な経験がたくさんできたからだ。まずは、たくさんの方の講義を聴けたことだ。いろいろな視点からの防災や災害の話聞いて、世界が広がった。私が一番印象に残っているのは、聴覚障がいのある方の講義だ。私の出身小学校は、聴覚障がいのある児童を支援する学級があり、学年でも2人補聴器を着けた人がいた。そのため、ある程度の知識はあったが、初めて知ったこともたくさんあった。私たちにとって、普通のことも、聴覚障がいのある方にとっては恐怖を感じることがあると知り、私に何ができるのか考えるきっかけになった。私は聴覚障がい者のことをもっと知りたいと思い、手話を習うことにした。たくさんの人と交流する中で気付いたことは、聴覚障がい者の方も私たちと同じでおしゃべりすることが大好きだということだ。私はもっと手話を練習して、おしゃべりできるようになりたい。少しずつ手話を覚えていこうと思う。

私は、視覚障がい者との交流もさせてもらった。私は初めて、視覚特別支援学校の校門をくぐった。私はたくさんのことに驚いた。まずは学校内で白杖を持っている人がいなかったことだ。先生に誘導されながら、移動している人もいたが、私たちと同じように歩いている人もいた。普通に見えているのでは正直思った程だ。しかし、交流をしていくことでそれは違うことに気が付いた。普通に歩いていた女の子は、私たちに配られたプリントの文字より数倍大きい文字が印刷されたプリントに顔を近づけながら、読んでいた。全く見えない人だけではなく、大きい字なら見える人など視覚障がい者でもいろいろな人がいることを知った。私たちはゴールボールもした。ゴールボールとは鈴の入ったボールを投げ合いゴールに入れて点を競い合うスポーツだ。私たちはボールの鈴の音を頼りにゴールを守る。ゴールボールのコートにはテープ上にひもがあり、それを触りながらコートを把握する。いろいろなところに工夫されていることを知り、パラリンピックの競技に興味を持った。私は、アイシェイドという、ゴールボール用のゴーグルをした。すると、目の前が真っ暗になり急に怖くなった。自分がどこを向いているのかもわからないし、どこにいるのかもわからない。実際に、コートに入り、アイシェイドを着けると、コート上のひもがとても役に立った。真っ暗で音だけが頼りだと思っていたら、ひもを触ることにより急に視界が広がったような感覚になり、自分がどこを向いていて、どこにいるのか把握することができた。視覚障がい者は音を頼りに過ごしていると思っていたが、こんなにも触覚が大切なのだと、ゴールボールを通して気がついた。

私は環境防災科でたくさんの経験をさせてもらった。自分の知らなかったことを知り、自分の知らない世界を知ることができた。自分はこの3年間で視野が広がったと感じる。環境防災科に入って、新たな夢もできた。私は、この経験を糧にこれからの社会を生きていきたい。

5 まとめ

私は「語り継ぐ」を推敲して、自分ももっと語り継いでいくことができるのではと感じた。この3年間で振り返ると、いつもはあまり気づかず生活していたが、たくさんの方の経験をしていくことに気がついた。そして、私自身インプットが多く、アウトプットする機会が少なかったのではということにも気がつい

た。私は、これから、経験してきたことや思いを伝えていきたいと思う。

私は、この3年間で学んだことを将来につなげたいと思っている。まずは、手話を覚えたい。受験が終わったら、もう1回学び直そうと思っている。手話を覚えて、もっといろいろな人と話せるようになりたい。次に家族にもっと防災の大切さを教えていきたい。私は家族を災害で失いたくないし、自分も災害で死にたくない。家族全体で防災の意識を底上げし、実践し、少しでも、私を含めた家族の命が守られる可能性を増やしていきたい。

今、私は管理栄養士として災害関連の職に就きたいと考えている。私は、この3年間で食事については講義を受けていない。みんなにも、もっと災害時の食事の重要性に気がついてほしい。私は、管理栄養士になって、食事と災害について、伝えたいと思っている。

6 参考文献

- ・ 自然災害と避難所（2023年1月23日閲覧）

http://www.isad.or.jp/wp/wp-content/uploads/2019/03/no135_7p.pdf

語り継ぐ

武田 優

1 はじめに

1995年1月17日5時46分に阪神・淡路大震災は起こった。私たちはまだ生まれておらず、経験していない。だからといって風化させるわけにはいかない。これからも震災を経験していない人は増えていく。だから未災者から未災者へと語り継いでいかなければならない。そのために私たちは「語り継ぐ」で一人一人が文章をつづっている。私たちは卒業後も環境防災科で学んだことを活かし、一人一人がそれぞれの場所でそれぞれの個性を活かした防災や支援を行っていくことが、環境防災科の卒業生としての使命であると考えている。

2 阪神・淡路大震災

(1) 母の話

母は当時、神戸市西区に住んでいた。「ズドーン」という音が鳴り揺れた。食器や時計が落ちる音が聞こえてとても怖かった。母は別々の部屋で寝ている祖母と祖父と、部屋にいるまま「大丈夫？」とお互いに確認しあった。地震が起きた時はまだ暗かったため明るくなるまでは布団の中で待つことにした。明るくなり1階のリビングへ行くと食器などが散らばっていた。ガス・水道・電気などのライフラインはまだ使えていたので、祖母がご飯を炊き、お風呂に湯を張った。その後断水した。水が出ないときは近所の小学校まで水を汲みに行った。母の家では1日中ライフラインが使えないといった状況はなかったため、家でガスが使えなくなったりとこや友達が母の家のお風呂に入りに来ていた。

4月から学校が再開したが、交通機関の整備がまだされておらず、普段は1時間で着くところをバスや電車を使い継いだり歩いたりして3時間かけて学校に行っていた。

避難所になっている学校で支援活動をした。支援物資が入れられたダンボールを開けて中身の仕分けをし、避難所で生活されている方に配った。自衛隊の方が一生懸命働いている様子が印象的だったと話していた。

(2) 父の話

父は当時福岡県に住んでおり、阪神・淡路大震災が起きた後の2月に神戸市の大学に受験しに行くことになっていた。神戸市のホテルに宿泊するつもりだったが、神戸市のホテルは電話が繋がらず、姫路市のホテルを利用したそう。

3 この話を聞いて自分が思ったこと

私は母から震災の時の話をここまで具体的に聞くのは今回が初めてだった。今までたくさんの方の講義を聞いてきたが、母の話の中に出てくる人も場所も自分が知っている人や場所なので「あのリビングでこんな感じで食器が散らばったのか」や「歩いて10分ほどで着く母の母校である小学校に水を汲みに行っていたのか」などイメージがしやすかった。そして、母は私が思ったよりもあまり当時のことを覚えていない。話している最中にも「忘れた」や「覚えていない」と何度か言いながら話していた。しかし、「ズドーン」と音が鳴ったことと揺れが怖かったことは開口一番に話したので余程印象が強かったのだと思った。

母がこのような体験をした一方で、父は私と世代が全く異なるが未災者だ。今、神戸市に住んでいるからと言って必ずしも阪神・淡路大震災を経験しているというわけではない。父と同じような立場の方もいるのではないだろうか。「未災者から未災者へ」というのは「若い世代からより若い世代へ」と語り継いでいくという意味だと今まで思い込んでいたがそうとは限らないと知った。若い世代だけでなく、震災を経験していないすべての人に伝える伝え方を学び、震災を知らない人を減らしていくというのが語り継ぐことの意味なのだと思う。

また、私と父が色々と質問をしながら母の話を聞いている傍で母の話に興味がないのか弟は夢中でご飯を食べていた。環境防災科に入ってから防災のことだけではなく、どのように伝えていくかも学んだつもりだったが、一番身近な立場である弟に何と言ったらいいのか正直わからなかった。話し手でもない立場で無理に興味を持てと強要しても意味はないだろうし、かといってそのまま見過ごしてしまったのもよくなかったと反省している。今思えば、「ママはこういう体験をしたのだね」と1つ1つ確認しな

がら弟も混ぜて話を聞くのが良かったのではないかと思います。未災者から未災者へ語り継ぐのは難しいことだと改めて実感した。

4 環境防災科

私が防災について興味を持ったきっかけは中学3年生の時の修学旅行で福島県に行ったことだ。東日本大震災について触れて災害が起きた時、自分も被災者の力になりたいと思い、舞子高校の環境防災科への進学を決めた。

環境防災科に入って様々なことを学んだ。たくさんの方の講義を受けて色々な立場の方の阪神・淡路大震災や東日本大震災の経験について知ることができた。授業では災害のメカニズムからどんな防災があるのか、学んだことをどのように伝えていくのか、ボランティアに対する姿勢、自分の長所や特技を活かし自分にしかできない防災や支援の仕方についても考えた。

災害のメカニズムを知ることが防災を学ぶ上で必要不可欠だ。どこで、どのように、何が原因かを知ることが次の対策に繋げられるからだ。入学前はこれからどうするべきかと先のことばかり考えていたが、過去の教訓から多くのものを吸収できると知った。

ボランティアに対する姿勢も授業や講義を通して色々なことを学んだ。自主性・社会性・創造性・無償性・継続性の5つの姿勢や、自分が支援と思ってしたことは必ずしも支援を受ける側のためになるとは限らないということも知った。想像力を働かせ、ただ自分ができるところをやるのではなく相手のために自分ができるところをしなくてはならないということも学んだ。そして、自分の長所や特技を活かし自分にしかできない防災や支援についてはその課題を出されるたびに頭を抱えた。防災や支援につなげられる長所や特技が何も思いつかず、自分には何もないと突きつけられるように感じて苦しかったが、防災や支援と直接関わりがなくても考え次第でつなげることができると学んだ。そして、それが見つかった時自分の中に小さな自信がついたように感じることもできた。

5 ボランティア

中学校の時から学校で行われている小さなボランティアには何度か参加していたが、本格的なボランティアに参加するのは環境防災科に入ってからが初めてだった。入学してすぐのころは「全部のボランティアに参加しよう」と意気込んでいたがそれは不可能だとすぐに分かった。なぜなら1つ1つのボランティアに入念な準備が必要だからだ。中学校の時は簡単な説明を事前に一度受けたら後は当日先生に説明されながら進めていくというものだったが、環境防災科のボランティアはそうではない。時間をかけてより良いものにしようと工夫を凝らし、何度も修正を繰り返して当日を迎える。それは限られた参加者によるボランティアだけではなく、クラスの全員で行う授業の一環で行う出前授業も同様だ。授業時間や放課後の時間も活用してそのボランティアと向き合わなければならない。ボランティアは「するだけで偉い」と思う方もいるかもしれないが、実際はそうではなく、相手に合わせた防災教育や支援を行わなければならないと学んだ。このことを活かして卒業後もボランティア活動を続けていきたい。

6 東北訪問

私は高校2年生の冬休みに宮城県に行った。東北訪問では9つの研修があったが、この「語り継ぐ」ではワークショップについて書こうと思う。宮城県の東松島市のあおい地区という場所でワークショップを行った。ワークショップでは縦割り意識を改善しウェブ状に組織を配置し情報を共有するというものである。私はそのうちの地域医療班の担当だった。このワークショップでは班の高校生が話し合いを進めていくにあたって班に1人助言者の方がついていて、私はそこで東日本大震災で被災した際に、ご自身が務めておられた看護学校の生徒とともに避難所で看護活動を行っていた方のお話を聞かせてもらった。その方のお話で1番印象に残っているのは「健康な方が健康なままでいてもらえるように」という言葉である。私は今まで病気やけがをしたり精神的につらい思いをしたりした人を救うために自分はどうかすればいいのかを学ばなければならないと思っていた。健康な人のことなんて考えてもみなかった。その方がおっしゃっていた「健康な方が健康なままでいてもらえるように」避難所で行ったことは、健康な方にも動いてもらうことである。災害時は人手が足りず、自身も被災しているにも関わらず働いていた人もいたと思う。しかし、健康な方にも手伝ってもらうことがその人の健康を守ることにつながり、避難所で病気やけがをしている人を救うことにもつながるということを知った。

7 手話

私は高校1年生の時に学校の授業で井上健司さんの講義を聞き、手話に興味を持った。井上さんのお話の中でコロナ禍では聴覚障害者と通訳士という関係でも一緒に行動するのが難しいため、今までのように気軽に通訳士と一緒に病院に行くことができないという話がとても印象に残っている。私はこのお話を聞いて将来の夢である看護師に自分になった時に手話を使うことができれば、聴覚障害者の方が一人で病院に来られても対応できるし、手話を日常会話の言語として使っている方にとっては筆談よりよいコミュニケーションができると思った。また、学校の講義の中でも少し手話を教わった時に手話の手で作る形や動きに1つ1つ意味がありおもしろいと感じた。これが理由で井上さんが講師をされている手話講座に参加することを決めた。手話を練習していく中で手がつりそうになることもあったけど、講座を重ねるごとに自分の手話の語彙力が上がっていることを実感し、交流会で井上さん以外の聴覚障害者の方と手話で話し自分の手話が伝わった時や相手の話が理解できた時はとても嬉しかった。看護師として手話を使うことを考えたらまだまだ未熟であるため、受験が終わったらまた勉強したいと思っている。

8 災害関連死

災害関連死とは、建物の倒壊など災害の被害によって直接亡くなるのではなく、避難所で病気の発症や持病の悪化などで間接的に亡くなることである。地震の場合、地震による建物の倒壊などで亡くなる方よりも災害関連死で亡くなる方が多くなることもあるといわれている。阪神・淡路大震災では死者が6434人でそのうち921人が災害関連死である。一方、熊本地震では276人の死者のうち8割にも上る226人が災害関連死と認定されている。

このような災害関連死を防ぐためには、避難所を医療従事者が巡回している際に具合が悪いことや持病を持っていることなどを話しやすい環境にしていくこと必要であると考えます。また、医療従事者が自ら気づかなければならないと思う。そのためには医療従事者が病気の症状だけではなく、災害時の心理的なことにも気を配る必要があると考えます。

9 夢と防災

私の将来の夢は看護師になることだ。看護師として環境防災科で学んだことを活かして、防災と関わり災害関連死の方を少しでも減らしていくために、私は災害支援ナースになりたいと思った。災害支援ナースとは、看護職能団体の一員として、被災した看護職の心身の負担を軽減し支えるように努めるとともに、被災者が健康レベルを維持できるように被災地で適切な医療・看護を提供する役割を担う看護職のことである。活動期間は発災してから3日～1か月で災害が起きたその日に被災地へ行くわけではない。災害支援ナースが助ける命はその災害から一度助かった命である。避難所での生活でエコノミークラス症候群になったり、持病が悪化したりというのをなくすために、また、災害関連死を減らすために被災地へ足を運ぶのである。

このように災害支援ナースの仕事は災害が起きた後がメインになる。災害から一度助かった命を守ることでも防災といえるだろう。しかし、私は防災とは災害が起きていないとき、何もない日常でできることだというイメージが強い。災害が起きていないとき、自分が災害支援ナースとして活動していないときにできる防災はないのだろうかと思い2つ考えた。

1つ目は、患者さんひとりひとりに合った防災を伝えることである。看護師は患者さんとコミュニケーションをとる機会が多いため、その患者さんが退院した後の生活も考慮しながらその人に合った防災と一緒に考えていけるのではないかなと思う。入院前と退院後で生活が変わる場合、多くの方が不安に思うだろう。災害が起きた時のことを考えるとさらに不安になるのではないかな。そのためその患者さんに合った防災を伝えることができるのは、防災を広めるうえで看護師としての強みになると考える。例えば、退院後車いすでの生活に変わる方の場合だと地震が起きた時、机の中に入って頭を守るとするのは難しくなる。だから頭をすぐに守れるように近くにヘルメットを置いておくという対策ができる。このように一人一人に合った防災を提案していきたいと考えている。

2つ目は、病院内でのイベントで防災セミナーを開くことである。これは病院に通院や入院をしている幅広い年齢層の方に防災に興味を持ってもらうきっかけになると考える。このような取り組みを行い、災害が起きていないときでも看護と防災を両立させていきたい。

10 さいごに

私は「語り継ぐ」の執筆によって人から話を聞かせてもらえることのありがたさを改めて実感した。人

から話を聞くことで知識が増えるのはもちろん、自分なりの考え方や自分がこれからどうしていくべきなのかを考えることができた。私は今まで父や母の震災体験を詳しく聞いたことはなかった。たくさんの方の講義を授業の中で聞いてきたが、一番身近な存在である母の体験を聞いて地震は怖いものだと思い改めて実感し、将来起こるといわれている南海トラフ巨大地震の時には、私が家族の命も守りたいと強く思った。

また、私は環境防災科に入って防災のことだけではなく、防災を通して自分自身のことや将来のことについて深く考えることができた3年間だったと思う。たくさんの方に講義をしてもらい視野を広げることができた。それはたくさんの方が私たちのために自身の経験や教訓を語り継いでくださったからだ。そのことに対する感謝を忘れず、自分も環境防災科で学んだことを語り継いでいくということを意識して過ごしていきたい。

語り継ぐ

竹林 剛

1 はじめに

1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災から28年。私を含め、多くの若者はこの震災を経験していない。しかし、この震災のことは決して忘れさせてはいけない。震災を経験していない人が、1人でも多くの人が、この「語り継ぐ」を読んでくれることを願い、執筆していきたいと思う。

2 母の地震体験

母は阪神・淡路大震災があった当時、神戸市北区に住んでおり、仕事は明石市の小学校で養護教諭として勤務していた。陸上競技大会の大会顧問をしており、その日も普段通り早朝練習があったため、朝早くから出勤する準備をしていた。準備をしているときにふと外を見ると、外が一瞬光った。すると、次の瞬間、母はなぜかその場にしゃがみこんでいた。なぜだか分からなかったが、立てなくなってしまった。しばらくの間は立つことができず、ただその場にただで精いっぱいだった。キッチンの食器棚に入っていた食器類は、大きな音を立てながら床に落ち、リビングに置いていた物も次から次へと落ちていった。ここで初めて地震だと気が付いた。揺れが収まり、しばらくすると祖母が母のいる部屋に行こうとした。母は和室にいたため、扉ではなく襖だった。しかし、祖母はパニックになっており、自分の家なのにもかかわらず、襖だと気づかずに押して開けようとしていた。しばらくしてから、ようやく襖だと気づいた。幸い、母が住んでいた場所は地盤が強い神戸市北区だったため被害は比較的少なかった。被害が少なかったため、当時は長田区や灘区などで甚大な被害が出ているとは想像もしていなかった。その日は電車が止まっていたため、学校に行くことができず、自宅で待機をしていた。10時ごろにテレビが付くようになり、ニュースの映像で生田神社の社が倒壊しているのを見た。この時に初めて、神戸に大規模な地震が来たのだと知った。昼の12時を過ぎたころにようやく学校に電話がつながり、「学校に行ける人は安全に気を付けて来てほしい」と言われ、翌日から同僚の車に乗せてもらい、学校に行くことにした。

学校に行くと、避難してきた人が校舎中にいた。神戸市よりも被害が少なかったため、溢れかえるほどではなかったが、それでも教室や、グラウンドには大勢の避難者がいた。今まで想像もしなかった光景にとっても驚いた。しかし、何よりも驚いたのは体育館の吊り天井が落ちていたことだ。地震が早朝に起こったため、人的被害は一切なかったが、もしも日中に地震が起こっていれば、被害はもっと大きかっただろう。

母が学校に着いてすぐに生徒の安否確認を始めた。電話が通じないため、生徒が住んでいる地域の掲示板に「この紙を見た生徒は学校に連絡をください」と書いた紙や「1月〇日に学校に来られる生徒は登校してください。安否確認を行います」と書いた紙をいくつも掲示した。場所によってはガス臭いところもあったそうだ。

紙の掲示と同時並行で避難所の運営も行った。トイレは比較的すぐに水が流れたため、あまり困らなかったという。避難所運営で最も大変だったことは宿直だった。学校自体が避難所になっているため、男性の先生が交代で宿直を行った。ガスはその日のうちに復旧していたため、女性の先生は自分の家で弁当を作り、宿直の先生に配った。夜通し働いていたため、心身ともに疲れ切っており、弁当を渡したときは大変喜ばれたそうだ。

地震から3週間経った頃に学校を再開することになった。避難者に協力してもらい、できるだけ1つの場所に固まってもらったり、車がある人は車中泊をしてもらったりした。避難者の協力のおかげで何とか授業ができる状態になった。学校再開後、小学生たちは元気に登校していたそうだ。授業を再開するようになってから、1週間ほど経ったときに神戸市から編入生が数人来た。中には両親を亡くした生徒もいた。当時はスクールカウンセラーがいなかったため、母は養護教諭として人一倍気にかけていた。幸い、生徒同士で打ち解けることができたため、編入生も毎日登校することができたそうだ。吊り天井が落ちた体育館は、授業では使用できなかったが、卒業式までには工事が間に合い、無事、卒業式も行うことができた。

3 母の話を聞いて

私は大きな地震をこれまでに経験したことが一度もない。そのため、地震が発生した後の大変さも、辛さも全く知らない。しかし、今回、母の話を聞いていく中で、地震の怖さ、被災後の辛さを改めて知るこ

とができた。身近にいる人から聞くことで、より一層、地震の恐ろしさを知ることができた。

地震の恐ろしさを知ることによって自分が地震にあったら、自分の身を守れるかどうかと不安に思った。環境防災科の授業で自助と共助が大切だということは何度も学んだ。しかし、実際に大きな地震が発生したとき、咄嗟に自分の身を守れるのだろうか。避難訓練や防災学習にはいつも真剣に取り組んできた。それでも不安だ。だからこそ、あまり防災教育がなかった時代に、瞬時に頭を守る行動をとれた母はすごいと思った。

母が勤めていた小学校は比較的被害の少なかった地域にあったため、長田区や灘区などの小学校に比べたら、まだマシだと言っていたが、体育館の吊り天井が落ちてきたり、避難所運営を夜通し行ったりすることが、マシだということが地震の恐ろしさをより引き立てた。

4 自分の地震体験

私が初めて地震というものを知ったのは、東日本大震災が起こった日、保育園に通っていた頃だ。普段とは違い父が迎えに来てくれて、車の中のテレビで真っ黒で巨大な物体が町を襲っているのを見た。当時の私は、津波はおろか地震も知らなかったので父にこの大きな物体は何かと聞いた。すると父は「これ全部が海や」と言った。当時の私からすると何が何だか分からなかった。なにせ、海が町を襲うなんて考えたこともなかったからだ。理解できていない様子の私に父は地震と津波について教えてくれた。そこで初めて地震を知った。それから数年が経ち、初めて地震を体験したのは小学3年生の時だ。私のクラスは何かの発表をしていて、その時に突然校舎が揺れたのを覚えている。私のクラスはプレハブの校舎で授業をしていたため、本校舎よりも揺れが強く、立ってられないほどだった。揺れ自体はほんの数秒ほどだったが、その数秒がとても長く感じた。そして次に体験したのが中学2年生の時に起きた大阪北部地震だ。その日はまだ学校に行っておらず、今から出ようと思ったときに揺れ始めた。家には誰もいなかったもので、小さな揺れではあったが、とても恐怖を感じた。直近で体験したのは、高校2年生の時に紀伊水道で起きた地震だ。1時限目の授業を受けている途中で揺れだしたことを覚えている。その時は一瞬何が起きているのかわからず、周りの人が机の下にもぐっているのを見て、地震だと気が付いた。幸い物が落ちてくることもなく、大きな揺れでもなかったので学校内で負傷者が出ることはなかったが、紀伊方面では数名が軽傷を負った。この地震では、普段からの防災対策の重要性和地震はいつ襲ってくるか分からない、ということを環境防災科に入ってから初めて身をもって実感することができた。

この3回の地震体験では、全て頭を守る行動をとることができた。しかし、これから起こるだろうといわれている大地震でも瞬時に頭を守る行動がとれるかと言われれば絶対に大丈夫だという自信はない。そのため、これからも防災訓練に真剣に取り組み、万が一のことがあっても自分の身を守れるようにしたい。

5 環境防災科について

環境防災科では普通科では行われない防災についての授業が行われる。1年生では災害や防災に関する基礎的なことを学び、2年生では国内についてだけでなく、外国の防災についてなど、より深く防災について学ぶ。そして、3年生ではそれまでに学んだ防災と自分の将来の夢をつなげる授業が行われる。また、授業の中で外部講師の方による講義を聴かせていただく機会もあり、様々な視点から防災について学ぶことができる。その他に、授業外で参加するボランティア活動も豊富にある。生徒は自分で参加したいボランティアを選び、参加する。その中には、東日本大震災の被害を受けた宮城県に訪問し、ご遺族の方の話を聴かせていただいたり、ワークショップを行ったりする東北訪問というものもある。

6 ボランティア活動

私はこの3年間で小学生と関わるボランティア活動を中心に参加してきた。生徒会活動や部活動などでなかなか参加できなかったが、その中でも時間の合間を縫って参加してきた。

なぜ、小学生と関わるボランティア活動を中心に参加してきたのかというと、自分よりも若い世代に防災について伝えたかったからだ。環境防災科で学ぶようになって、伝えることの大切さを様々な場面で何度も知ることができた。そのため、私も1人でも多くの人に伝えようと思い、その中でも小学生に伝えようと思った。多くの小学生は私と同じように、震災を経験していない。しかし、震災を経験していない世代に震災や防災について伝えることで、危険なことや場所、とらないといけない行動などを知らなかったことが原因で命を落としてしまうという人を減らすことに繋がる。伝えることで防災になるのだ。また、小学生に防災について話したあと、必ず、「家でおうちの方にもどんなことを聞いたかを話してね」と言う

ようにしている。そうすることで、聞いた本人だけでなく、その家族にも間接的に防災について話したことになり、多くの人に防災を広めることができる。

このように、私はボランティア活動で小学生を中心に災害や防災について伝えることで、1人でも多くの人に防災意識を持ってもらえるように努力してきた。舞子高校を卒業してからも自分が働いている職場の同僚や上司、友人に防災について伝えていき、今まで以上に、防災を広めていけるようにしたい。

7 将来の夢

私は小学生の頃から警察官になりたいと思っていた。学校に行くときや、家族と出かけているときに見かける警察官の方の姿がかっこよかったからだ。環境防災科に入学したのも防災について学び、警察官として県民を守れるようになりたいと思っていたからだ。しかし、環境防災科の授業や外部講師の方による講義を聞いていく中で、市民を守るのは警察官や消防士、自衛隊員だけではないと知った。そして、今は市職員として市民を守れるようになりたいと考えている。市職員は地震などの大規模災害が発生した際、災害対策本部を設けて市全体の対応を行う。例を挙げると、けが人の状況や家屋の状態の確認、救援物資の仕分けや配給、仮設トイレの設置などがある。これらの対応も立派に市民を守っている。自分たちも被災しているのにもかかわらず、これ以上の犠牲者を出さないようにと様々な業務を行っている。もし、市職員がこれらの業務を行わなければ、復興はおろか復旧も進まないだろう。そのため、市職員はなくてはならない存在だ。私も災害が発生した際は、環境防災科で学んだことを活かして、少しでも早く市の機能を回復できるようにしたい。

しかし、警察官を目指すことを完全にやめたわけではない。あくまでも、市職員が第1志望にしているだけで、警察官も第2志望として考えている。警察官になった場合、市民の救助活動や避難誘導など、様々な場面で出動することになる。また、今後この2つの職業のほかにも就きたい職業が候補として出てくるかもしれない。そのため、どの職業に就いたとしても、活躍できるようにこれからも、防災について学び続けるとともに、万が一のことに備えられるようにしたい。

8 新型コロナウイルス感染症

2019年12月に世界で最初の患者を確認した新型コロナウイルス感染症。感染者は世界で5億人（2022年6月現在）を超え、世界的なパンデミックをもたらしている。この影響により、多くのことが制限されてきた。特に私たちの学年は中学校の卒業式や高校の入学式をまともに行うことができず、高校入学後すぐに2か月間の休校期間が設けられた。その間は、学校から郵送された宿題をこなすだけで、高校生らしい生活を何一つとして行うことができなかった。休校期間が明けてからも、2週間は分散登校などの制限が設けられて、クラス全員で初めての授業を受けたのは6月の中旬に入ってからだった。その後も、部活動の大会が中止になったり、文化祭が中止になったりなど、様々な行事がなくなり、入学前に想像していた高校生活とは全く違う日々が続いた。

しかし、その中でも自分たちにできる最大限のことをしてきた。初めて学校全体で行われた行事の陸上競技大会では、少しでも沈んだ気持ちを盛り上げていこうと、生徒会として様々な企画を行った。球技大会ではクラスが一丸となって、いくつもの種目で優勝した。2年生のときに行った文化祭では、飲食ができる模擬店が開けないなどの規制がありながらも、生徒全員で学校を盛り上げることができた。修学旅行では、行き先が変更されたが、同じ学年の仲間と全力で楽しむことができた。ボランティア活動では例年通りのことはできなかったが、それでも自分にできることを探して行えた。このほかにも様々な行事を行ったが、どれもその時にできる最大限を行ってきた。下を向かず、前を向くことの大切さを知った。

この3年間で様々なことを学んできた。当たり前が当たり前ではないということ。備えることの必要性。人とのつながりの大切さ。前向きに考えていくことの大切さ。どれも日常では知ることのできなかったことばかりだ。コロナによる影響を受けたからこそ、知ることができた。しかし、コロナ禍を経験しない世代はきっとこのことに気づくことができないだろう。だからこそ、コロナの影響を受けた被災者として私たちが伝えていかなければならない。伝えることで防災にもつながるだろう。コロナ禍を経験していない人たち全員に伝えることは難しいかもしれない。しかし、自分と関わりがある人に伝えることはできる。本当に地道な道のりかもしれないが、いずれ多くの人に伝わっていき、防災にも役立ててくれるだろう。この3年間のようにこれからも、自分たちにできることを考え、行動していきたい。

9 さいごに

私はこの『語り継ぐ』を執筆するにあたって、初めて母に詳しく話を聴いた。聴き始めるときに、震災

について聴いても大丈夫だろうかと少し不安だったが、聴いていくと、震災に関する様々なことを話してくれた。中には、避難所の運営者としての苦労や、養護教諭としての苦労など、なかなか聴くことのできない話も話してくれた。自分が語り継ぐことができるのは、話してくださる人がいるおかげだと改めて感じた。だからこそ、話して下さった人たちのために震災について語り継いでいかなければならない。これからも、防災にかかわっていくが、常にこのことを忘れずに活動を行っていきたい。そして、語り継ぐことで一人でも多くの人に防災に関心を持ってもらいたい。

1 はじめに

阪神・淡路大震災を経験していない私たちは何を語り継ぐことができるのか。

震災から時が経つにつれて、震災を経験した人から震災を経験していない人へと世代が移り変わっていく。阪神・淡路大震災の教訓というバトンをどのように次の子どもたちに繋いでいくか考えていくことが、今、必要になっている。私は災害の出来事を風化させてはいけないと思う。私は環境防災科として歩んできた時間の中で培ってきたものを語り継ぎたい。

目で見たこと、耳で聞いたこと、語り部さんのお話や講義の先生のお話、地域の方との交流の中でのお話の中で学んだことを伝えたいと思う。

2 阪神・淡路大震災

(1) 父の話

父は当時、神戸市須磨区に住んでいた。これは神戸市須磨区で被災した父の体験談である。1月16日の夜、父は三宮付近に出かけていた。いつもは三宮のカラオケで朝まで滞在し、朝の始発の電車で自宅に帰宅していたことが多かった。しかし、その日だけは、三宮に朝まで滞在することをやめて、終電の電車で帰宅したのだ。もし、あの日、終電の電車で帰宅せずに朝まで三宮付近に滞在していたら、震災後の三宮の被害の様子から現在は生きていなかったかもしれないと語っていた。

1月17日の早朝に下から突き上げるような揺れと大きな地鳴りによって父は目覚めた。目を開けると、頭の近くにタンスの上に置いてあった物が転がっていた。幸い、地震による怪我はなく、家が崩壊するなどの被害はなかった。水・電気・ガスなどのライフラインは停止した。自宅付近に災害に備えるための貯水タンクがあって、水は確保することができると安心していましたが、蛇口から出る水は茶色く濁っていたので衝撃を受けた。

ライフラインが復旧するまで時間がかかったことで、日々当たり前に行っていたことが災害時には当たり前でできなくなることを強く感じた。地震の発生から数日後、自宅の家具の整頓やガラスの除去を終えて、月見山にある叔母の家に向かった。住宅はガラスが割れ、家具が散乱するなどの被害を受けていた。1日中、ガラスの撤去を家族総出で行った。自宅や親戚の家の掃除をしていく中で、家具の固定などの地震への備えの大切さに気付かされた。

震災から数か月後、自宅付近の公園には仮設住宅が建設され、震災前から建設中だった建物はやっと完成した。建物を建設するのには時間がかかるが建物が崩壊するのは一瞬の出来事だと父は震災を経験して感じた。災害に備えることの大切さを経験したので、備えることの大切さを伝えてほしいと話していた。

(2) 母の話

1月17日の早朝に大きな揺れを感じて布団から飛び起きた。とっさに体が動き机の下にはいることができた。兵庫県の北部に住んでいたので地震による住宅の被害は少なかったが、参加する予定だった大学の入学式が延期するなど生活に支障があった。また、神戸からの物流が途切れて神戸からの商品が入って来なかったことが印象的であった。地震が及ぼす影響を母は初めて痛感した。災害における被害の影響を少しでも小さくするためには備えることが大切であり、地域全体で防災意識の向上が必要だと語った。

3 父と母の話を聞いて

私は父と母の震災の経験の話を詳しく聞いたのは初めてであった。心のどこかで詳しくは聞かないほうが良いと感じていたのだろう。しかし、実際に震災の経験について聞いてみることで初めて知ったこともあった。

私が一番印象的だったのは、公園に仮設住宅が建てられていたことである。仮設住宅が建てられた公園の場所が衝撃的だった。そこは私が幼少期の頃から遊んでいた場所でもあり、今でもその公園でランニングをすることがある。私が頻繁に利用している公園が震災の数か月後には仮設住宅が建設されていて住民が住んでいたことを父の話で初めて知った。住んでいる地域の昔の出来事を全く知らなかった。これを

機に、地域についてもっと深く知って、地域との関係性を深めていきたい。また、父の話のなかで、1つ感じたことがある。父が震災前日に終電に乗る判断をしていなかったら、今の私はいない。今ある命は数々の出来事を経て、実在するのだということだ。災害に備えることの大切さも改めて感じることもできた。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を知ったのは小学生の頃にルミナリエを見に行ったときである。私はルミナリエを小さい頃から家族と見に行っていた。小さい頃は「綺麗な光」だとしか思っていなかったが、年齢が上がっていくにつれて、「綺麗な光」から「復興への架け橋」と思うように変化していった。その時から私の心の中では、ルミナリエは何を伝えるために開催しているのか、なぜたくさんの方が協力して開催しているのかを知るためには、神戸で過去に何が起こったのか知ることが大切だと考えていた。中学生の頃、ルミナリエを見たいと思い、見に行った。ルミナリエを進んでいくとブースの一角にテントがあって高校生が数人立っていた。そこに立っていたのが環境防災科の生徒であった。これが私の舞子高校環境防災科との出会いである。中学生の頃から災害について学びたいと思っていたので、環境防災科との出会いは私にとって衝撃的なものであった。そして、そこから、災害について幅広く学んでいることを知り、環境防災科に入ってたくさんのこと学びたいと思った。

(2) 入学して

私は入学してたくさんの方に驚かされた。例えば、入学したほとんどの人が人を助ける仕事に就きたいと思っていたことだ。私は夢や目標に向けて行動していくことは大切だと思う。夢と目標を持っていると、夢や目標に向けてどのように生活していくべきかが明確になるからだ。コミュニケーション能力の高さも衝撃だった。初対面だったのに、話をしていくにつれて過去に一度、出会ったかのような感覚が芽生え、また、入学してから時間が経過するにつれて、人それぞれに個性があることに気づいた。人それぞれに個性があるからこそ、様々な視点からの意見を見出すことができるのだと思った。

講義や授業を通じて、災害の怖さや防災や減災を様々な角度から考え、学ぶことができた。そして、その中で学んだことを語り継ぐことの難しさに直面した。震災を経験していない私たちがどのように伝えるべきかと思い悩むこともあった。しかし、様々な経験を経て、今では私は学んだ災害や防災の知識や、被災者の方の思いやお話を語り継ぐことも大切なことだと考えている。経験した災害のことについてお話することはとても辛いことで、辛さをこらえて私たちに講義をしてくださっていることに私たちは感謝の気持ちを持たなければならない。その上で、私たちがその思いや願いを代弁して伝えていきたいと思った。このように考えるようになったことで入学する前と入学した後の知識の差や防災への向き合い方が変化したことにも気が付いた。そして、伝えることができる内容の深さや伝えるべきことの幅が広がり、1つ1つの伝える言葉に責任の重さを感じるようになった。

(3) ボランティア活動

私が主に参加していたボランティア活動は、地域で開催されているイベントのお手伝いをする事だ。私は多聞東地区メンバーとして活動した。多聞東地区で開催されるイベントの内容や防災活動について多聞東地区在住の方たちと会議で話し合うことも多聞東地区メンバーとしての役割の1つである。環境防災科の生徒の一員として、地域のイベントを通して防災を広めていきたいと思った。地域の子どもたちと共にやるボランティア活動もある。地域で開催された防災訓練を通じて子どもたちと交流し、防災の大切さを伝えてきた。ボランティア活動を行うにあたり、大切にしていたことはボランティア活動をしている立場ではなく、ボランティア活動をさせてもらっている立場であるという認識を持つことだ。感謝の気持ちを持って参加することを心掛けている。地域の活動以外にも他校との共同学習にも参加した。私が交流したのは視覚特別支援学校である。視覚特別支援学校では、ゴールボールをしたりした。視覚特別支援学校の生徒の方と防災を深めるために、防災ワークショップを行なった。活動の中で気が付いたことは、視覚障害にも弱視や全盲など見え方に違いがあるということだ。私はゴールボール体験の際に視界が真っ暗になるゴーグルをかけた。競技をしていく中で視界を失われる怖さがあったものの、楽しさも感じることもできた。同じ、競技を様々な立場の人たちが一緒に楽しむことができることに衝撃を受けた。実際にボランティア活動に参加しないと知ることができないこともたくさんある。障害者の方と同じ立場で

体験することが大切だと思った。ボランティア活動を通じて、人と人の関わりの重要性にも気づくことができた。

5 夢と防災

(1) きっかけ

私の将来の夢は警察官になることだ。その中でも警視庁警備部警護課に所属したいと考えている。警察官を目指すようになったきっかけは、幼少期に警察官に憧れを抱いたことだ。幼少期から、警察官の人を助ける姿や人を守る姿に惹かれていた。私が目指している部署は要人を守る任務が主な仕事だ。己の命を犠牲にしても、要人を守らなければならない責任ある仕事を担う。私は己を守ることができない者は己以外の人を守ることにはできないと思う。己の身体や精神を鍛え、あらゆる角度からの危険を排除する警護人になり、そして要人から信頼してもらえるようになりたい。

(2) 防災との関わり方

警察官と防災は身近に関わっている。警察官は災害時、交通規制や治安維持などの任務を遂行しなければならない。市民や要人の安全を確保しつつ、自身の安全確保をするためには、災害の多彩な知識を身につけることと臨機応変に行動をすることが求められる。そして、迅速かつ安全に避難誘導を行うためには訓練が必要だ。警察官のキャリアの中で市民と共に防災に向き合っていかなければならない。警備部警護課の主な任務は要人の警護なので、直接的に防災イベントや広報としての防災の広め方は難しいが、自身ができる防災の広め方や、警護任務として海外訪問や被災地訪問の首相や国会議員の護衛があるので、海外で発見した防災対策や被災地で見た景色を一市民として沢山のひとと共有をしていきたい。私はどのような職業に就いたとしても防災と関わりがあると思う。防災を直接的に伝える方法と間接的に伝える方法があると思うが、防災意識を向上させることには相違はないと思う。私は、正しい知識と間違った知識の判別や環境防災科で学んだことを活かした防災の伝え方をしていきたい。仕事上、防災の対応に限りがあるので市民としての防災にも力を入れていきたいと思う。地域に住む一般市民としての防災意識の向上をするために地域が主催するイベントや避難訓練に参加し、地域と自身の関係性を深めていき、有事の際には、地域同士や近隣同士で助け合いたい。

6 新型コロナウイルス感染症と防災

新型コロナウイルス感染症は全世界に影響を与えた。新型コロナウイルス感染症が完全に終息していない現在、大規模な災害が発生してしまうと多大な社会影響が予測される。災害発生後の対応も大切だ。避難所生活により多くの人が1つの場所に集まることによりクラスターが発生してしまう。新型コロナウイルスの感染拡大を食い止めることが最も重要なことだ。そのためには感染経路を遮断させることが求められるので、私たち一人一人の注意が必要である。私も感染拡大を防ぐために、防災バックの中には、マスクや消毒などの備蓄品を準備している。自身のことだけを考えるのではなく、周りのことも考えて行動することの意識を持つことが、コロナ対策としての対処法の一つとなるのだ。私も他人事ではなく、自身のことでもあると考えていきたい。

7 今後の防災活動

私はこれから大学で学んだ先、警察官の道に歩もうと思っている。大学では、災害心理学を専攻しようと考えているので、引き続き防災について勉強し、心のケアについて深く学んでいきたい。また、ボランティア活動も引き続き参加したい。ボランティアの継続性を重要視していきボランティアに携わっていききたい。警察官になるまでの時間を有効的に使い、防災活動に取り組んでいきたいと思う。生きていく中で環境の変化があるので、環境の変化に合わせた防災対策をしていきたい。災害が発生した際には率先的に避難誘導ができるようにもっと災害に関する正しい情報を収集していきたい。防災・減災は日々の積み重ねによって、災害が発生した際の対応が変わってくるので日々の生活を大切にしていきたい。

8 最後に

私は生きていくなかで防災は無視できない存在であると思う。私は大規模な被害をもたらす災害に直面したことはないのですが、お話の中や映像でしか災害の怖さを知らない。南海トラフ巨大地震の発生確率が上がる一方で、私は南海トラフ巨大地震に直面したら迅速な行動ができるのかが不安だ。地震の怖さで動けなくなるかもしれない。また、地震を経験したことがある人は過去の地震を思い出してしまい、その場

で動けなくなる人もいると思う。その際に、避難を先導するリーダーが必要になってくる。災害が発生した直後は誰も状況を把握できていないので不安だと思う。不安を打ち消し、生きるために避難することを促すことのできる存在が重要になってくる。私はそんなときにリーダーになりたいと思う。自身の不安を表に出さないためのはったりも時に必要だと思う。自身がその場にいるだけで安心してもらえるような行動をするべく、今までに培ってきたことを活かし、これからの人生の中で身につけていきたい。いつどこで発生するかわからないのも自然災害の特徴である。自然災害に対応するためには備えが重要だ。物資の備えから家の耐震化の備えなど備えることにはお金や時間がかかる。災害が発生する前に備えることが大切である。備えることの大切さや災害の教訓を私はこれから先を生きる子どもたちに伝えていきたい。現在の社会は高齢化が進行している社会背景もあるので要援護者についての防災も考えていきたい。

未来のために

津郷 優馬

1 はじめに

これから阪神・淡路大震災を経験していない世代は増え続ける。私もこの震災を経験していない。未災者から未災者へつなぐことがとても重要になっている。

未災者が「被災していない」、「知らなかった」を言い訳にしまうと今までの震災の記憶や教訓が風化し、同じ間違い、準備不足が起こってしまう。このことを防ぐため、未来の人達のために未災者である私たちが語り継ぐ必要がある。

2 母の話

(1) 地震発生直後

当時、神戸市中央区元町通りの12階建てのマンションの8階に住んでいた。早朝、母はベッドで寝ていた。突然台所の食器棚のガラスのパリンと割れる音とともに大きな揺れが来た。かなり長く続いた。母がベッドから落ちるほどの大きな揺れだった。母は揺れの後、部屋から出ようとしたが、テレビが倒れていて、余震もあり部屋から出るのが困難であった。

明るくなり部屋の中を確認すると、食器棚の食器が向かい側にあった冷蔵庫の中に入っていた。また、お皿やコップが床に落ち割れていた。エレベーターが止まっていたので階段で下に降りた。すると下の歩道にひび割れが入っていた。その後、母親の祖母が住んでいた長田区日吉町に向かった。電車は線路上で止まり、動かなかった。そこでは煙や火が立ち上っていた。もう祖母の家は全焼していたが、祖母はその時病院に入院していたため命は助かった。

(2) その後の生活

ガス、水道、電気のライフラインが機能を停止していた。数日たって、電気が一番初めに復旧し、マンションの貯水タンクがあったため水道はその後すぐに復旧した。ガスが出ないためお風呂に入ることができなかったが、お風呂に水を貯め、水中で使えるヒーターで温めた簡易的なお風呂に入ることができた。ベランダからのぞくと公園で救援物資を配っているのが見えたので、自衛隊の方が来たときにもらいに行き、確保した。パンや冷凍の焼きおにぎり、カップラーメンなどがもらえた。非常時で食べ物がない状態だったため、もらった食べ物がいつもの時以上においしく感じた。ベランダからは様々な地方から来た消防車が毎日何十台と通っていたのが見えた。

職場の建物は2階部分が崩落し、仕事ができる状態では全くなかった。そのため家で過ごすしかなかった。テレビを見ると震災で亡くなった方の名前がたくさん出ていて、日がたつごとにその名前数が増えていた。その中に小学校からの同級生の名前が3人出ており、目を疑った。この時震災で最大の悲しみを覚えた。その後はテレビを見ることも嫌になっていた。少しの音や風の音にも敏感になっていた。

3 母の話を聞いて

この「語り継ぐ」を執筆しなければここまで長い時間阪神・淡路大震災の話を母にインタビューすることはなかったと思う。このようなつらい体験を思い出して話してくれた母に感謝したい。

母の話を聞いて思ったことがある。それは、家具の固定などの自分ができる防災が大切だということだ。地震発生後の母の家は食器棚の食器が冷蔵庫に入るほど雑然と散らかっていた。地震発生時にこの場所にいたら本当に危険だったと思う。そのため地震が起こる前から、大きな揺れを想定し、自分自身や家族から少しでも危険を遠ざけるため自分ができる防災をすべきだと思った。

地震は来ない、自分は大丈夫と思ってしまうと、自分ができる防災を見つけられなくなってしまう。また、自ら危険を近づけることにもなってしまう。したがって、少しでも防災を視野に入れ、災害は自分自身や家族を襲ってくると考えることが大切である。

また、日常が日常でなくなるつらさを少し感じた。自衛隊からもらったおにぎりがいつもよりおいしかったと聞いた。当たり前が当たり前でなくなると、日常にあったものがなくなる。今ある日常のものに感謝し、備蓄も大切にしようと思った。

4 環境防災科

(1) きっかけ

環境防災科に入ろうと思ったきっかけは中学の頃に進路相談で、中学1、3年で担任だった理科の先生から環境防災科のことを教えてもらったことだ。母から阪神・淡路大震災の話は聞いていたが小学校の頃の私はあまり理解できていなかった。小さい時から自然現象には興味があり自然現象のメカニズムが学べる上に、将来の夢である消防士になるために必要な防災の知識が学べると思い受験を決めた。

(2) 入学してから

防災の知識が全くなく、何から学べばいいのかも分からなかった。私たちの学年は新型コロナウイルスの影響でクラスメイト全員と授業を受けるのは6月からだった。6月までは自宅学習で分散登校もあったがクラスメイト全員と顔を合わせることはほとんどなかった。しかし、最初からクラスのみんなが明るかったことから不安はなかった。

環境防災科の授業では、専門的な授業があり、パソコンを使ったレポートの作成や前に出て発表することが数多くあった。専門的な授業のほとんどが初めて聞くことだった。環境防災科では様々な活動をしてきたがその中でも強く印象に残っているもの3つがある。

1つ目は出前授業だ。講義で「間違った情報は人を殺す」と聞いたことがあったため絶対に間違ったことや聞き手が誤って認識をするようなことは言わないように心掛けた。小学生相手にどのようにすれば自分たちの話に関心を持ってくれるか、どのようにすればわかりやすいかなどを考える貴重な体験をすることができた。また、相手が楽しいと思えるように、硬くならないような言葉遣いに気を付けることが難しいと感じた。

2つ目は消防学校体験入校だ。入学して間もない時は将来の夢である消防士の訓練ができると思い少し浮かっていた。運動部に所属していた私は、厳しいといわれる訓練もできるだろうと訓練をする前は精神的に余裕があった。だが、その余裕は訓練が始まるとすぐになくなった。1年生の時は初級で主に規律訓練をした。規律訓練では大きい声を出す、姿勢を正す、機敏に動くなど自分のことをするのと同時に周りとの息を合わせて行動しなければいけなかった。2年生の時は上級でホース取扱訓練や放水訓練をした。私は小隊長として指示を出した。部隊に的確な指示を出すことは、間違っただけではいけないという緊張感もあり非常に難しかった。中隊ごとで動くときは上からの指示を聞き、機敏に動くということを心掛けた。指示を出す側、指示を聞く側の両方体験し、どちらも周りを見る力や、集中力、体力がいるのだと学んだ。

3つ目は垂水消防署体験だ。この体験は消防署に行きたい有志が講義や訓練を受ける。1年生の時にいくと、消防学校体験入校では見られなかった2年生の姿を見ることができた。自分たちよりも声が大きかったり、行動が早かったり、私は消防学校の時よりもついていくのに精一杯だった。規律訓練やホースを使った消火訓練、査察実習、危険物業務についての講義などの活動以外にも様々な体験ができ、とてもいい経験になった。将来の夢である消防士を近くで見ることができ、改めて消防士になりたいと思った。2年生の時は自分の出せる精一杯の声を出し、訓練も参加することができ普段では体験できないいい体験となった。

(3) ボランティア活動

ボランティア活動では、舞子高校で行われる防災イベントや地域のイベントのお手伝いなどをさせていただいた。地域のイベントの参加者は小学生やそのお母さんが多く、10代後半から20代の人はいまだあまり見かけなかった。この地域に住んでいないから初めて見る人ばかりだったが、話しかけてくれる人が多く、楽しくお手伝いをすることができた。話しかけられた側の気持ちを知り、自分から話しかける大切さを感じた。

また、私は1年生の時に防災ジュニアリーダー学習会に参加した。たくさんの中学、高校から防災を学習しに集まった。何をしたらいいのか、自分には何ができるか分からなかった。そんなときお手本となってくれたのは2、3年生の先輩だった。他校の人達と楽しそうに話し合い、発表の時では自分から進んで発表していた。仕事を見つけるとすぐに動き、私たちの失敗も優しくフォローしてくれた。このボランティアをきっかけに先輩たちのような失敗をフォローできるような周りの見える人になりたいと思った。

1年生の時に参加した地域防災セミナーでは先輩の準備の速さに驚いた。この地域防災セミナーは自分ができる防災を体験できるというものだ。例えば、水に足を付け、体温を下げるようにする体験や水消火器を使った活動、紙食器を作り、どれほどの強度かを試す活動などがあった。私はこの紙食器を作るブースのお手伝いをした。来てくださり、体験された人たちはみんな楽しそうであった。このボランティア

から大人でも体験活動をする楽しんでもらうことを知った。

(4) 新型コロナウイルス

新型コロナウイルスによる影響は災害ともいえるほどだ。この状況で大災害が起こってしまうと避難所などで新型コロナウイルスが流行し、被害が大きくなると考えられる。このことを防ぐために、一刻も早くこの状況を終わらせなければならない。そのためには人々が協力していくしかない。一人一人が大災害が起こった時の被害を想像し、自分自身のできる、人のためにできることをしていく必要がある。

また、すべての人が自分の体調管理を徹底する必要がある。これは医療従事者の負担を減らすためだ。今、医療従事者はかなりの負担を強いられることが考えられる。自分自身が病気にならないことが社会のためになるのだ。そして、この状況を変えるために最も大切なことが新型コロナウイルスに感染していた人を差別しないことだ。差別をしてしまうと「差別されるなら、コロナにかかっていることを隠そう」と思う人が増えるからだ。そうすると新型コロナウイルス感染症にかかった経路が分からなくなり、広がる原因となってしまう。自分たちの行動を考え、その結果がどのようになるのかを想像していくことが必要となってくる。

5 夢と防災

(1) 消防士

私は将来消防士になりたいと思っている。そう思ったきっかけは、小さいころに聞いた母の話だ。震災の時に他県からたくさんの消防車が来てくれ、消火や救助をしていたという話を聞いて自分もなりたいと思った。この時はまだ懂れていただけで、なればいいなとしか思っていなかった。消防士になることを決意したのは中学生の時だ。

私の出身中学校の前には大きくはないが消防署の出張所があった。その消防士は朝から毎日大きな声を出しトレーニングをしていた。疑問に思い調べてみるとそれは市民の命を守るためであった。人のために自分の命を懸けて動いているというところに憧れ、私もそのような消防士になりたいと思い、消防士を目指すことに決めた。

私は消防士となり多くの人が防災をもっと身近にとらえ、楽しく学べるようにしたい。そのためには、自分自身が簡単にできる防災について知る必要がある。また、防災をもっと身近なものとして考えてもらいたい。防災を身近だと考えることで自助の意識が高くなり、災害時の死傷者が減ると考えている。

楽しく学ぶということの具体的な例として、ひまわりおじさんとして活動している荒井勤さんの防災楽習迷路のようにクイズ形式で学べるような体験型のイベントを行いたい。防災を学ぶイベントは今までも行われてきた。私も消防署が主催するイベントに参加したことがあるが若者の参加が少なかった。今は少子高齢化が進み子どもが減っているが子どもたちへの防災教育は前よりも重要となっている。そんな中、若者の参加が少ない原因は楽しく学べるという意識がないからだと思う。防災は難しいという先入観から防災のイベントに参加しないというのは、自分たちの命を危険に近づけているといえる。

災害が多く、被害がさらに大きくなってきている今、自分自身を守る方法を知っておかなければいけない。年齢関係なく誰でも参加でき体験できるようなイベントを行うことで、たくさんの人が参加し、自分ができる防災を考える場ができると考えている。起震車体験などは地震を経験していない人たちが地震を知る非常にいい体験になると思う。消火訓練や煙体験を行う機会が多くなれば、若者も楽しく災害について学べると思う。防災、減災を難しいと思わず、防災、減災に興味を持ってもらい、今後の災害で出る被害を少なくしたい。

(2) 今後の課題

災害弱者と呼ばれる人たちの災害による死者数を減らすためには、周りにいる、助けてあげられる人達が防災の知識を身につける必要があると思う。災害時には周りにいる人と助け合いながらみんなで判断し避難する。判断を間違えば集団で危険な場所に行くことになる。1つの判断ミスで命を失わないためにも助けてあげられる、集団を動かせる人が防災の知識を身につけることは必要だ。高齢化が進み、自助で精一杯の人が増えていく。この災害弱者と呼ばれる周りの人の防災意識を高めることが、今後の課題になると思う。

6 最後に

これからは震災を体験していない人が防災の中心となる。震災の体験話では人が亡くなった、など聞き

たくなるような話も多くある。そのような話から目を背ける人や、災害が起きても何とかなると考える人がいるかもしれない。しかし、そういった考えの人が増えると、次の大きな災害が起きた時に被害が大きくなってしまう。一人一人が災害に対して意識を変えることで災害の被害は大きく減ると思う。兵庫県には阪神・淡路大震災の記録が残されている野島断層保存館や人と防災未来センターがあったり、追悼行事があったりする。このように小さなころから防災を学んでいる県では災害は何とかなるという考えの人は少ないだろう。震災の被害が少なかった県でも被害が大きかった県と同じように防災を学習できたらいいと思う。

私は、前に述べたように震災を体験していない。震災当時のことは被災者のお話や写真からしか知ることとはできない。これからの未災者もそうなると思う。震災を体験していないからこそできることをこれからは考えたい。お話をしてくださった方々は私たちに未来のバトンを渡してくださったのだと思う。ここまでつなげてきてくださった方のためにも、これからの人のためにもより知識を深め、次へとつなげていきたい。

私たちにできること

坪田 莉瑚

1 はじめに

阪神・淡路大震災から28年。私はその時、生まれていない。私のように、震災を経験していない人は年々増えていく。私たち、未災者に何ができるのか。そのようなことを考えながら、3年間様々なことを学んできた。新型コロナウイルス感染症により、当たり前の日常の大切さを感じた高校生活。震災の時と同じような気持ちになっている被災者もたくさんいるだろう。もしそうであれば、私たちは少し被災者の気持ちがわかるかもしれない。

今まで震災の話をしてくれたすべての人の分も、私の言葉で、私なりに、語り継いでいきたいと思う。

2 祖父の話

当時、祖父は明石市に住んでいた。祖父、祖母、伯母、父の4人で暮らしていた。2階建てで、1階の下にはガレージがある。当時、祖父と祖母は1階の畳部屋で、叔母と父は2階の別々の部屋で寝ていた。初めは何が起こったかわからなかった。少したって地震だと気づき、部屋のドアをすぐに開けに行った。祖父が2階にいた2人を呼んで、すぐに家から飛び出した。家にいるのが危険だと思い、とっさに家を出た。しかし、逃げている最中に屋根瓦が落ちてきたため、今思えばとても危険だったという。家にあった灯油が地震でこぼれて靴にかかっていたが、何も気にせず、その靴を履いて逃げた。朝だったため、寝間着でとても薄着だったという。近所には潰れた家があり、ガスのにおいもした。近所の新築の家は、1日で全壊してしまった。すぐ近くに明石公園があり、そこに避難した。その日は雪が降るほど寒く、途中で祖父のコートを家に取りに帰った。そのコートに入っていた携帯ラジオで、情報収集をした。この震災で一番怖かったのは、余震だった。いつ大きい揺れが来るのかわからない。そのような緊張感の中で、過ごしていた。1時間ほどで、避難していた明石公園から帰ってきた。祖父の家を建ててくれた大工が震災直後にきてくれて家を見たところ、大きな損傷はなく、家の中で1番安全なのはガレージだと聞いた。家にあったカセットコンロをガレージにもっていき、カレーを作ったり、ご飯を炊いたりした。

その時すでに、ライフラインは止まっていた。幸い、お風呂に水をためていたため、トイレを流すのに使えた。外にも水道があり、蛇口をひねるとそこからも水が出た。家の中の水道は使えなかったが、外の水道は使えたのだ。それに気づいてからすぐに、近所の人に声をかけた。その時、バケツを持って水を求めている人を見つけた。その人にも声をかけ水を入れると、とてもうれしそうにして帰っていった。また、神戸市長田区の方では火災があった。夕方にその灰が明石まで飛んできて、降っていたらしい。

祖母の母は加古川に住んでいた。加古川の方は被害が小さかったため、家族で行くことに決めた。電車は止まっていて、遠回りをしなければいけなかった。祖父は3人を加古川に送り、仕事に行くことにした。加古川から姫路まで行き、姫路から播但線に乗り、福知山線に乗り換え、大阪の会社まで行った。会社に行くまで、半日ほどかかった。そして、会社に1週間泊まった。

明石駅から兵庫駅は、1週間でつながった。つながってからは、兵庫駅から三ノ宮駅まで歩き、三ノ宮駅から芦屋駅までのバスに乗り、芦屋駅から大阪駅まで電車で行っていた。三ノ宮駅から芦屋駅までのバスに乗る人が、たくさんいた。長蛇の列でトイレに行きたくなっても抜け出せないほどだった。それと同時に、三ノ宮の悲惨な姿を、そこで初めて見た。阪神高速は横倒しになっていて、神戸市役所の2号館6階はつぶれていた。それを見た周囲の人たちは、写真を撮っていた。祖父は写真を撮っているところを見て、なぜこんな状況で写真が撮れるのかと、少し腹を立てていた。

祖父の家は新築だった。家は少し傾いていて、壁にはひびも入った。祖父母は、今もまだその家に住んでいる。次に大きな地震が来たら、家が倒れてしまうかもしれない。家が倒れてしまうと近所にも迷惑がかかってしまう。そう思っており、引っ越しも考えたが、家にはたくさんの思い出があり、やはり引っ越したくないという話になっている。また、日がたつにつれて震災のことを忘れてしまう。棚の固定や食器棚の扉が簡単に開かないようにはしているが、備蓄などには意識があまり向いていないらしい。震災のことは思い出したくない出来事だが、忘れないようにするために、進んで写真を見たり震災のテレビを見たりしている。

3 話を聞いて

身内の人からこんなに詳しい話を聞いたのは、初めてだった。私が祖父から聞いた話の中で、一番印象

に残っているのは、震災を忘れないようにするために当時の映像や写真を見ているという話だ。震災のことを思い出すとつらくなるというのは、誰しもが思うことだろう。しかし、思い出さないとできないこともあるのだと思った。私たちは震災を経験していないが、震災の話を聞いたり写真を見たりすると、どうしたら被害を少なくできるのか考えて備えようという気持ちになる。被災者は経験したからこそできること、未災者は被災者から教えてもらったからこそできることがあると思った。

また、「写真」には様々な人の、様々な思いがあるのだと思った。今写真があるから、私たちは震災の悲惨さや悲しさ、語り継いでいかなければならないという気持ちを引き起こされている。しかし、それを撮っている人の気持ちや、撮られている建物の持ち主の気持ちなどはわからない。写真を撮っている人は将来につなげたい、残したいと思っていても、撮っているところを見ている人は不快に思っているかもしれない。写真にはたくさんの人の思いが詰まっているものなのだと感じた。

そして、改めて、災害にはわからないことがたくさんあるのだと感じた。もし、阪神・淡路大震災のような大きな地震が今きたら、どれだけ被害を抑えられるのだろうか。それは、実際に起こらないとわからないのだ。人々は、南海トラフ巨大地震が起こるといわれても、私たちのように災害を専門に学ばない限り、どこから対策をすればいいかわからないだろうと思った。これから起こるとされている災害に向けて、備えをするということを広めていくのが私たちの役目だと思った。そして、もっとたくさんの人が防災に興味を持つ社会を作っていくべきだと感じた。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が、幼稚園の年長のとき、東日本大震災が起こった。幼稚園から帰ってきてテレビを見たとき、津波警報が出ていることを知り、テレビの前で呆然と立ち尽くしたことを覚えている。災害に興味を持ち始めたのは、その時からである。小学校に進学すると、年に何回か防災教育があった。はじめから、私は阪神・淡路大震災や東日本大震災の勉強に興味を持っていた。何の力でこんなことになるのかと思っていた。そして、想像できないほど悲惨な被災地の写真や動画を見ていくうちに、こんな街になることをなぜ防げなかったのかと思いはじめた。また、阪神・淡路大震災を経験した父や祖父の話を聞いたり、テレビで震災のことを扱っていたら見てみたりするなど、自分から進んで災害について学ぶようになった。小学校高学年になる頃には、防災教育が少ないと思い、震災の勉強に興味を持っているというだけでなく、もっと学んで次の世代に伝えていきたいと思うようになった。そして、中学校3年生のオープンハイスクールで、環境防災科という学科があることを知った。

(2) 環境防災科での活動

環境防災科に入学することが決まってから、ある疑問を持っていた。それは、震災を経験していないのに、聞いたことを話すだけでいいのかということだ。知識はたくさん増えていくけれど、私が語り継いでいいのかという疑問は大きくなるばかりだった。しかし、授業や講義で話を聞いていくと、震災が風化するということのほうが良くないと思うようになった。反対に、私たちに話していただいたことを語り継がないほうが、環境防災科として、将来を担う者としてどうなのかと思った。私にとって震災は、経験していないし、想像できないほどの出来事ではあるが、3年間様々なことを学んできたからにはこれからの世代にしっかり語り継いでいきたいと思う。

出前授業では、伝えることの難しさを感じることも多くあった。小学生にはどのような言い回しをしたらわかりやすいのか、どのように伝えたら楽しく学んでもらえるのかをたくさん考えた。私は、ある中学校の出前授業に参加したことがある。私と一緒に授業を進めてくれたのは、先輩だった。初めて先輩と授業をすることになり、とても緊張した。しかし、先輩はとても頼れる優しい人だった。その時の先輩の姿を鮮明に覚えている。伝えたいと思っていることをすらすらと話し、中学生にもわかりやすい言葉を使って素晴らしかったと思った。しかし、人前で話すことが苦手な私は、先輩のようにその時に思い立った言葉を発することができなかった。もっと人前で話すことに慣れて、私もその先輩のようになりたいと思った。この出前授業は、将来、様々な人の心のケアを行いたいと思っている私にとって、まだまだ未熟でもっと成長しなければいけないと思うきっかけとなった。そして、出前授業は、小学生や中学生に防災・減災について教えるだけでなく、自分も成長できる場所だと感じた。もっと防災について知り、自分が伝えたいことが話せるようになりたいと思った。

5 夢と防災

(1) 心理と防災

私は環境防災科に入る前、中学校の先生になりたいと思っていた。私たちのように災害を経験していない子どもに、防災・減災について語り継いでいきたいと思っていた。その夢を諦めたわけではないが、災害について学んでいくうちに、心理学について興味を持つようになった。よって今は、公認心理士・臨床心理士の資格を取り、スクールカウンセラーや災害支援に携わりたいと思っている。この夢を持つようになった主な理由は、「Active 防災Ⅰ」の授業である。この授業で、外部講師の方のお話や授業を通して災害心理について学んだ。災害時、多くの人がうつ状態になったり、絶望感に襲われたりする。そのようなことを知り、災害時いちばんダメージを受けるのは、人の心なのと思った。町の復興が終わっても、「心の復興」が終わるまではとても時間がかかる。阪神・淡路大震災や東日本大震災では、たくさんの人がPTSDやうつ病になった。普段とは比べものにならないほど心に大きな負担がかかり、仮設住宅では高齢者の孤独死が問題となった。私は、自然災害をなくすことは不可能だが、そのような心の問題で亡くなる人や、PTSDやうつ病の発症者をゼロにすることは可能だと思う。このような、孤独死やPTSD、うつ病は、災害が起こる前に防ぐことができる。まずは、自分にとって安全な環境や人間関係を作ることから始まる。常に親と喧嘩をしていたり、信頼できる人がいなかったりすると、災害時、助けてもらえないかもしれない。誰にも相談できなくて、1人で抱え込むことが増えると、PTSDやうつ病につながってしまう。よって私は、周囲の人との人間関係を、一番大切にしておかなければいけないと思う。そして、自分に対してコントロール能力をつけるということも大切である。そうすることで、1人で抱え込むということはなくなるだろう。しかし、普段から災害と心理の関係について考えながら過ごしている人は少ないと思う。私が心理士になったら、そのようなことから広めていきたいと思っている。

また、このようなことを広めるだけでなく、私もたくさんの人に寄り添っていきたいと思う。その人の感情はその人にしかわからない。そのようなことを他人が考えるということは、難しいかもしれない。そこで私たちができることは、他人のことを自分事として考えるということだ。もし、自分がその状況に置かれたらということをよく考え、その人に合った心のケアができるような心理士になりたい。

(2) 災害時にできること

災害時、避難所では子どもの遊び場を作ることが、子どもへの心のケアの1つであると学んできた。私は災害時に、心理士ができることの1つなのではないかと思っている。私が思っている子どもの遊び場とは、ボランティアの人とも遊べて、何でもできる遊び場ではなく、「災害が起こる前と同じように遊べる場」というものだ。このように考えたのは、私は幼いころとても人見知りで、公園に誰かがいるだけでも遊びたくないと思っていた経験があったからだ。幼いころの私のような子供にとって、知らない人がたくさん集まる避難所で普段通りに遊ぶというのは、とても難しいことだと思う。避難所には、両親を亡くしたりはぐれたりしてしまっている子どももいる。寂しい思いや孤独感を抱く子どもも多くなるだろう。そのような思いを持っているときに、知らない人と遊ぶと、もっと心に大きな負担を抱えてしまうかもしれない。そこで、地域の人や子ども自身が身近に思っている人と遊ぶということが大切だと思い、地域ごとの子どもの遊び場を作ることが、子どもの心の負担を少なくすることにつながるのではないかと考えた。

災害後、建物や堤防、ライフラインなどは、復旧・復興へと向かっていく。しかし、心の復旧・復興とは何なのかと考えたとき、とても難しいことだと思った。私が今思っている心の復旧・復興とは、完全にPTSDやうつ病を治し、また同じようなことが起きたときに、同じような状況にならないようにするための対応力をつけることだと思っている。ただ、自分の中では結論を出したものの、あまりしっくりした答えではないと思っている。心の復旧・復興とは何なのかということを、これからも考えながら過ごしていきたいと思っている。

6 最後に

私にとって環境防災科とは、たくさんの夢や私たち未災者でもできることを教えてくれた場だった。3年間クラスのメンバーが変わらないということに不安を抱えたこともあったが、ずっと同じクラスだったからこそ、災害にもつながる、人と人との結びつきの大切さを知ることができたと思う。また、「語り継ぐ」方法はたくさんあると思った。「Active 防災Ⅰ」の授業では、自分の趣味と防災はつなげることができるということを知った。そして、防災はどの仕事にも関わっていて、切っても切り離せないことなのだと思う。近い将来には、南海トラフ巨大地震が起こるといわれている。これからもこの日本で生きて

いく私たちにとって防災・減災は、本当に重要だということを、しっかり語り継いでいきたいと思っている。

私たちが環境防災科としてできることはたくさんある。私が学んだことは、災害の怖さやどのような災害が今までに起きたのかということだけではない。命がどれだけ大切なもので大きなものなのか。1つ1つの授業でそのことを学べたと思う。防災について淡々と語り継ぐだけではなく、命の重さや今私たちが生きているということがどれだけ素晴らしいことなのかも含めて、語り継ぐということが大切なのだと思う。自分たちにできることを1人1人が考えていけば、被害を少なくすることにつながるのではないかなと思う。

未災者である私たちにできること

永井 はるひ

1 はじめに

1995年1月17日阪神・淡路大震災が発生し、多くの尊い命や日常が奪われた。この震災から28年がたつ今、震災を経験していない人が半数以上を占めるようになった。私もそのひとりだ。「震災を経験していない人に語り継ぐことはできない」と言われるとそうかもしれない。しかし、大災害を経験した方々が語り継いでくれた教訓を、震災を経験していない世代に伝えることが私たち環境防災科の使命である。

2 中学校の先生の被災体験

私が卒業した中学校では、1月17日には避難訓練、被災された先生が被災体験を話してくださる機会があった。先生方のお話の中で特に印象に残っているT先生の被災体験について話そうと思う。

T先生は震災当時大学1年生で剣道部だった。入学当初から寮生活を送っていて、T先生のほかにも1年生は16人いた。震災前夜にも、体感できるほどの地震があったが、気には留めなかった。その程度だった。いつも通りT先生は2階で、何人かは1階で寝ていた。翌朝、1月17日阪神・淡路大震災が発生した。大きな爆発音のような音でT先生は目が覚め、爆弾か何かが落ちたのかと不思議に思っていた時、突然、下から大きく突き上げられた。その時初めて、地震だと認識することができた。2階で寝ていたはずなのに、近くの窓から外を見ると、なぜか地面が見えた。まだ頭が回っていなかったが「とにかく外へ逃げろ」という言葉で、命の危険を感じたという。自分自身に、余裕はなかったが1階にいた仲間はどうなったのかと、頭の端で人の無事を心配することはできた。幸いみんな無事で、畳の下敷きになっていた人もいたが救助され、命に別条はなかった。しかし、寮はつぶれ、もちろんライフラインも止まってしまった。

3 話を聞いて

まず、T先生が今、目の前に立って話していることは当たり前なことではないのだと思った。人が大切にしてきたものを見境なく奪ってしまうのが災害なのだ。ライフラインが止まり、当たり前だと感じていた日常が一瞬にして奪われてしまった。今後の災害で「当たり前」を失わないためにも、環境防災科で学んだことを多くの人に発信していきたいと考えている。高校を卒業すると、参加させていただけるボランティア活動を、自ら探さなくてはならない。過去の災害から得た教訓や、語ってくださった教訓を地域の人と関わる中で語り継いでいきたい。つなげていく人がいなくなれば「風化」が進む。そうすれば、また甚大な被害が出でしまう。そうならないためにも、口にするだけでなく、行動に移していかなければならない。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入学したいと思った理由は2つある。1つ目は、私たちの住むこの日本が災害大国であるということだ。幼いころから様々な防災教育を受けてきて、災害に興味を持ち、より深く災害や防災について学びたい、今後起きてしまう災害で自分自身や、大切な人を守る術を知りたいと思うようになった。2つ目は、防災学習を通して過去の災害を風化させたくないからだ。環境防災科に入学することができたら、災害や防災を学ぶことができ、防災を通し社会に貢献できる人間になれると思った。

環境防災科に入学して、日本だけでなく各国での災害の、誘因、素因、災害後の対応についても学んだ。また、警察官、消防士、救急救命士、自衛隊の方々が講師として来てくださり、平常時の活動や、災害時の対応などについて真剣に教えてくださった。様々な視点から震災の教訓を聞くことで、今までは1つの視点から考えていたことも、新たな方向から物事を考えられるようになった。

(2) ボランティア活動

私は環境防災科に入学して多くのボランティア活動に参加させていただいた。ボランティア活動は、「参加させていただいている」という謙虚な気持ちで取り組むことが大切で、準備を怠るということがあってはならない。また、1回で終わるのではなく継続して参加することが大切だ。継続は簡単なことでは

なくとても難しいことだが、継続的に参加することで相手との信頼関係が深まり、自分自身の活動範囲も広がっていくことができる。そして誰かに言われて行動するのではなく、自分からチャンスを掴むことが大切だ。募金活動や出前授業、地域の行事等は環境防災科だからこそできる体験なのだと思う。誰かに言われないと行動できないような人になってはいけない。

（３） 芦屋特別支援学校との交流

私はこの３年間を通して人前で話すことが好きになった。そうさせてくれたのは、環境防災科での活動の中で、沢山の成功と失敗があったからだ。特に印象に残っているのは、２年の３学期に行われた芦屋特別支援学校との交流だ。この交流で学んだことは「ボランティアと交流は違う」ということだ。交流は、互いが互いを知り、より深く物事を学び合う機会であり、それが一方通行になってはいけない。しかし私は、準備不足により、ペアの友人とも、特別支援学校の生徒さんともうまくコミュニケーションをとることができず、一方的な交流になってしまっていた。一度しかない授業なのに、準備不足で思っていたような交流ができなかった。私は生徒さんや先生方に対して、とても申し訳ない気持ちになった。準備の大切さや、交流の意味について考え直した出来事だった。この失敗から、もう２度と同じミスをしないように計画的に準備し、積極的に動いた。こういった経験や学びは、環境防災科に入って、ボランティア活動や交流に参加した人にしか得られない貴重なものなのだと思う。

（４） 講義で学んだこと

「災害と社会の関係」という講義では、災害は悲惨で残酷なものだが、それゆえに若者の人生を変え、社会の変革を進めるということを学んだ。大規模災害を経験し、周りの人を救いたいと思うようになるからだ。今後 30 年以内に 70～80%の確率で起こるとされている南海トラフ巨大地震に向けて、これまでの災害で被災された方が悲しい、辛い災害だったで終わらず、何かにつながる出来事になってほしいと思うようになった。

この講義から災害は負の感情だけで終わらしてはいけないものだったと思った。災害はマイナスのイメージが大きいけど、新たな可能性を導いてくれるものでもある。現に阪神・淡路大震災後、看護師や消防、警察になりたいと思う人が増えた。これは災害を経験したからこそその結果だろう。誰かを守りたいと思う気持ちは何よりも素敵な感情だと思う。災害が起きなくても、起きた時でも他人を慮る気持ちを大切にしていきたい。

5 東北

私は高校２年生の時、家族と祖父母とで宮城県を訪れた。

（１） きっかけ

きっかけは小学生に向けての出前授業だった。私は、阪神・淡路大震災も東日本大震災も日本で起こった多くの大規模災害を体験していない未災者である。それなのに、出前授業に行かせていただいた時には、震災を知っているかのように話した。ボランティア活動や交流を通していく中で私は「東北の被災地を自分の目で見ていないのに語れない」「授業で学んだことを話すだけならだれでもできる」と思うようになった。2011 年 3 月 11 日東日本大震災が発生して亡くなられた方やご遺族、今も苦しんでいる方のためにも、被害を受けた地域をこの目で見て学んでから伝えたい。このような気持ちを母に伝えると「阪神・淡路大震災の時、東北の方が様々な支援をしてくださった。祖父母も呼び東北の今を知ろう」と言ってくれた。

（２） 荒浜小学校

東北に着き初めに向かったのは荒浜小学校だった。荒浜小学校は津波の被害が大きく、建物の３階まで津波の跡があった。今も車や自転車、家、がれきが残っており当時の悲惨さが身にしみて感じられた。そこでは、語り部さんや被災者の方々が被災体験を語ってくださった。語り部の H さんの被災体験を話そうと思う。

当時 H さんは、母、奥さん、お子さんの４人で暮らしていた。2011 年 3 月 11 日東日本大震災が発生し、お子さんを連れて荒浜小学校まで避難した。その時、母と奥さんはまだ避難していなかった。地震発生後、町に巨大津波が押し寄せ、先ほどまで目の前にあった家や車がどんどん流されていった。波が引く時、多くの方が助けを求めてきたが、何もできず自分の無力さを知った。その時、流れていく屋根の上で救助を待つ母と奥さんの姿を見つけた。「自分の目の前で家族や知人が流されていくのに、目で追うこと

しかできなかった」と私たちに涙を流しながら語ってくださった言葉が、私の胸に強く残っている。

(3) 東北を訪れて

私が東北を訪れた年は、震災から10年の節目を迎えていた。だが正直、町は復興したとは言えない状況だった。私が訪れた地域は、建物が全く建っておらず平地で人通りも少なかった。学校で東日本大震災を学んだときは、徐々に復興はしていると言っていた。しかしそれは一部地域のものにすぎないものだったと強く思った。そして被災地をこの目で見て、苦しみや悲しみを聞いたからこそ、多くの人に正しい情報を発信したい。震災を経験した人にしか、災害の本当の恐怖を語ることはできないのは事実である。しかし、東北に行き教えていただいたことを通して、それらの考えは単なる言い訳にすぎないと感じた。発信するという選択を捨てたということだ。東北を訪れて今の神戸の防災対策では南海トラフ巨大地震が発生してしまったとき、また多くの尊い命が奪われると思う。堤防の高さ、ハザードマップの在り方、防災意識と全てにおいて怠っていると思う。東北を訪れて、もっと防災教育、防災対策の徹底をしていく必要があると感じた。

6 夢と防災

私の今の夢は理学療法士だ。もともと私は地域と密接な関わりを持つことができる警察官になりたかった。しかし、部活動での経験を通して怪我で苦しむ人の支えになりたいと強く思うようになり、理学療法士という仕事に興味を持ち始めた。私は幼稚園の頃から姉の影響でバドミントンを始め、中学、高校に入ってもバドミントンを続けてきた。「スポーツに怪我は付き物だ」そう思うようになったのは、高校生になってからだ。高校3年の春のこと、初めて松葉杖をつかなければならない程の大怪我をした。怪我をした瞬間、私の中で「もうすぐ最後の大会が始まるというのにどうしよう」、「治るのか」という不安の気持ちでいっぱいになった。私の場合、怪我をしている時が一番つらい期間で、それと同時に不安、焦りが出てきてしまう期間だ。不安な気持ちでリハビリに励んでいると、理学療法士の方が優しく声をかけてくれた。自分のことで精いっぱいだった私が、そこで初めて周りのことにも目を向けられるようになった。

理学療法士として働くということは、常に体の不自由な人と過ごすということだ。災害が発生した時の理学療法士の仕事は、要配慮者を安全に避難させ、安全を維持することだ。避難所生活を余儀なくされる場合、子どもから高齢の方まで多くの人の身体機能が低下することや、避難所では障害のある方が生活しづらい環境となるという課題がある。そこで理学療法士が、被災地に行くことで体操指導や、環境整備、助言等を行うことができ、課題解決の糸口となる。

私が、理学療法士になる事ができたら大切にしたいことが2つある。ひとつは、周りを巻き込みながら防災を広めていくことだ。これは、多くのボランティア活動を通して学んだことだ。1人でできることは限られているし、1人で物事を進めてもうまくはいかない。周りの人と共有しながら、防災を深めることで個々の防災意識の向上にもつながり、より多くの命も守れるようになる。もうひとつは、初心を忘れないことだ。社会に出ると多様な考えがあり、自身の思い通りにいくことは少ないだろう。そんなときでも、初心を忘れなければすぐに諦めることなく乗り越えられると思う。今後もっと私にあった仕事を見つけたときでも、初心を忘れず努力していきたい。

7 今後

私は、これから先も災害・防災についてより深く学んでいきたいと考えている。特に世界の災害について学びたい。環境防災科の授業で、世界の災害について学ぶ機会があった。世界の中では経済格差によって起こる貧困や移民、難民問題がある。そこから脆弱な社会となり災害が起こった時、被害が大きくなったり、助かってもそれらの問題によって二次被害につながったりする。また、世界の防災教育の在り方にも興味を持つようになった。世界には日本と同様、災害大国が多くある。しかし、災害大国であるのにもかかわらず、経済的にも人材的にも十分な防災教育を受けることができない国も少なくはない。守ることのできる命も失われてしまうという課題がある。そういった国の防災教育を見直すためにも、まずはその地の災害を知り、その地にあった防災を考えることが、命を守るために必要なことだと思う。

8 最後に

私は『語り継ぐ』を執筆するにあたって今までの自分の在り方や、防災に対しての意識変化について思い返すところがたくさんあった。入学当初の私は、災害や防災に興味があっただけで、知識はあまりなく未熟だった。しかし、講義を受けたり、ボランティア活動や出前授業など様々な活動に参加させていただ

いたりすることで、たくさんの知識や多くの人の想いについて学ぶことができた。また活動を通していく中で、自らが「伝えたい」と思うようになっていった。人間は自然に逆らうことはできないが、みんなが防災を意識することで被害を減らすことはできる。卒業後も継続的に地域活動に参加し、未災者である私たちが、未災者である次世代へ語り継いでいくことが大切だ。これこそが、今後の災害に対応し、多くの人の命を守る術のひとつである。

「つなぐ」

長尾 一千花

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災。私はこの9年後に生まれた。

2 母の話

(1) 発生直後

阪神・淡路大震災が発生したとき、母は神戸市垂水区にある2階建ての一軒家に曾祖母（母にとっての祖母）、祖父母（両親）、伯母（姉）、伯父（兄）と6人で住んでいた。犬も1匹一緒だった。揺れがあった後、とにかく真っ暗の中で家の中に何が落ちているかもわからない状態だったため、ベッドから降りることすらできなかった。しばらくして祖父母が靴を持ってきてくれたことでベッドから降りることができ、いろいろな物を踏みながら部屋からもようやく出ることができた。家中にガラスが飛び散っていたり、タンスや本棚が倒れたりしていた。1階に降りてまず、風呂場の残り湯を確保した。水、電気、ガスのライフラインがすべて止まっていたからだ。その後、兄弟3人はいつでも外に出られるよう、余震に怯えながらみんなで玄関に集まっていた。近所で火事や生き埋めはなかったものの、家の駐車場にある5～6段のブロック塀が剥がれていた。家は半壊だった。地面には穴が開き、亀裂が入って段差やズレがはっきりわかったり、水が出てきたりしていた。祖父母は食料を集め、近所の人たちと情報交換をしていた。少ししてから犬と一緒に中学校の武道館へ行き、そこから母たちの避難生活が始まった。

普段は消費期限どころか賞味期限が1日過ぎただけで食わずに捨ててしまう祖母だったが、この時だけは家にあった少し賞味期限が切れたものも母に渡してきたという。

(2) 避難所生活

特に受付などがあるわけでもなく、大体で決められていた1家族分のスペースに入った。「人が1人寝られる広さ×家族の人数分」というくらいの広さだ。布団や食べ物はすべて支援物資だった。食べ物はジャムパンやクリームパン、アンパンなどが1人2つまで配られた。子どもが我慢している中、おじいさんなどの高齢者が怒鳴ってジャムパンを取り合いしていた。避難所ではみんながイライラしていた。飲み物は自動販売機の補充などをしているような人が持ってきてくれていたが、味はほとんど選べなかった。コンビニが開放されている日もあったが、そこに行けたのは情報を持っている一部の人だけだった。

次の日くらいから、プールの水をトイレで使うため子どもたちがバケツリレーで汲んだ。飼っていた犬も一緒に避難所へ入っていて、自分が寝ている布団の上で寝ていた。他にも犬などのペットを連れている人がいた。毎日、新聞が届き、自由に読めるようになっていたため、それを読むことで自分の知り合いが亡くなっていないかなど、他の被害状況を確認していた。家の近くにある寺からは水が出たため、みんなでポリタンクを持って分けてもらいに行っていた。自衛隊は来ず、遠くまで行かないと炊き出しがなかった。母がいた避難所では、意外とボランティアに世話になったり、ボランティアの存在を大きく感じたりすることはなかったという。母が見たボランティアといえば「支援物資を運んでくれている人たちはボランティアなんかな」と思うくらいの数だったそうだ。特別記憶に残っているのは、どこかのボランティア団体が動き、服やおむつなどを大量に持ってきてくれたこと。大きい街に支援が集中し、偏っていることを実感した。風呂屋には2kmくらいの行列ができていて、並ばないと入ることができなかった。この時くらいから、水のいらない粉のシャンプーが広く出回りだした。避難していた武道館の天井には穴が開いていたが、他に場所がないので、みんなそこで避難生活を送っていた。当時小学校の先生をしていた祖母は、通勤する際に使う道路の状態が悪く、職場である学校へは行けそうになかったため、公衆電話を使って職場の人と話し合いをしていた。支援物資は、簡単に考えて思い浮かぶものばかりがたくさん届き、リアルに生きていくことを考えたとき本当に必要なものがほとんど届かなかった。本当にかき集めないといけないもの（生理用品、ミルク、離乳食、薬やアレルギー対応の食べ物など）がなかなか手に入らなかった。支援物資の中で本当に必要だと思ったものは歯磨き粉。赤ちゃんの夜泣きで育児ノイローゼのような人もいた。遊び盛りの子どもたちも基本的には手伝いをしていることが多かったが「静かにしときよ」と言われているので静かに過ごしていた。また、グラウンドはほぼ駐車場になっていたが、中庭がある学校だったためそこで遊んだりもしていた。

避難所は家からとても近かったため、時々様子を見に行ったりしていて、2か月目くらいからは余震が

続くなか、家を整理しだした。家の大きいものが片付きだしたくらいからは、犬、曾祖母、祖母が家で寝るようになっていた。

普通に生活ができるようになったのは3か月半後くらいからだった。震災後には耐震工事とオール電化がとても広く言われだした。震災まではあまり気にならなかったが、耐震工事をしていた建物としていなかった建物では崩れ方が違った。また、オール電化の家は復旧が早く、水を溜めているため比較的困ってなかった。

(3) 避難所生活で感じたことなど

住民同士の共助は極端に被害が大きいところでしか行われぬ。母が住んでいた地域のように、被害が比較的大きくなかったところでは、主に高齢者が様々なものを取り合いするだけだと感じた。赤ちゃんがいる人のためには授乳や夜泣きなどのことも考えて、別室の用意があればいいのと思った。母のところはそこまで大きな町ではなかったためペットも一緒に避難所で過ごせたが、三宮などもっと大きなまちの避難所ではペットに困っていたと思うので、避難所でのペット問題がどうにかなればいいのと思った。ベッド際にはすぐに履けるスリッパなどを用意しておくことや、簡単に着られる服などを用意しておくことが大切だと思った。懐中電灯はとても大事である。

3 祖母の話

(1) 発生

当時、神戸市西区の小学校に勤務していた祖母は、目が覚めてそろそろ布団から出ようかと思っていると、下からドンと突き上げられる感覚に襲われた。ジェットコースターに乗っているような揺れが続いた。発生時、すでに起きていて無事だった曾祖母だが、もし1階の部屋で寝ていたらタンスの下敷きになっていたかもしれない。神戸に来る前、愛媛でも地震を経験していた曾祖母がすぐにドアを開けに行ったため、ドアが開かなくなることはなかった。食器棚などの扉は全開でガラスなどは飛び散り、足の踏み場がないためスリッパや靴を履いて家の中を歩いた。ライフラインがすべて止まった。1月で外が真っ暗ということもあり、何が何だかさっぱりわからなかった。外が明るくなったところに電気が復旧し、テレビがついた。テレビやラジオで仕入れた情報は「淡路が震源」ということだったため、淡路に近い垂水区の被害が1番大きいと思っていたが、新長田や東灘の方が酷かったことに驚いた。家の電話で連絡を取り合うことができないが、とにかく親戚に無事を伝えなければと思い、近くの公衆電話に行った。公衆電話には人がたくさん並んでいた。自宅の屋根は日本瓦で重かったため、たくさん剥がれ落ちた。トイレは風呂の残り湯を使った。当時の祖父の同僚がバイクで屋根にかぶせる大量のブルーシートと一緒に、玉子焼きやおにぎりを大阪方面から持ってきてくれた。近所にあった缶詰工場では、売り物であろう生のうどんを家の前に並べて、だれでも持って行けるようにしていた。缶詰工場と、通照院という近所の寺に井戸水があったため、みんなでポリタンクに分けてもらった。お風呂に入ろうと銭湯へ行っても、雪が降って寒い中何時間も待たされる行列だった。人数制限があり、順番が回ってきても決められた時間内に済ませなければならなかった。あまりにもお風呂に入れなかったときは、祖母の同僚が西区の有瀬に住んでおり、プロパンガスでお風呂を沸かせるからと家族で借りに行った。放置するわけにもいかず、散らばったガラスや物を片付けている間も毎日余震が続き、しばらくは小さい揺れでもとても怖かった。余震は睡眠不足などにもつながった。一緒に中学校の武道館に避難していた犬だが、動き回ることやアレルギーのことも考え、少ししてから外につないでいた。九州などからもトラックで水を運んでくれたが、食べ物に関してはパンやおにぎりだけで野菜が取れず、体調を崩すこともあった。

1か月くらい経ってから、神戸に来て初めて着任した小学校を見に鷹取駅周辺へ行った時には、一面焼け野原で衝撃を受けた。ボランティア元年と言われてるように、この年からボランティアが目立つようになり、神戸の人は各地の人にお世話になったという。

(2) 震災から得た教訓

物の下敷きにならないよう、家具の固定や耐震をすることが何よりも大事。また、避難所だけでなく、地震が発生したときに家の中のどこで身を守ればいいのかも考える（柱が多くて狭いトイレや洗面所などが良いらしい）。逃げる道を塞いでしまうため、扉の前に物を置かない。床に散らばるガラスなどでけがをしないようスリッパなどの履物を用意したり、停電しても安全に動けるよう懐中電灯などを常に用意したりすることが大切。どんなものでも備えは重要。

4 話を聞いて

母からはよく震災の話を聞かせてもらっていたが、ここまで細かく話を聞いたのは今回が初めてだった。被災地全域に炊き出しがあったり自衛隊が来たりしていたと思っていたので、母の地域には無く、ボランティアも特別目立たなかったということにとっても驚いた。また、共助も全域で行われていることだと思っていた。近所の寺から水を分けてもらうことも共助ではあるが、それ以上のことは行われず、物資などの取り合いが起こったということにも驚いた。避難所では赤ちゃんがいる人が大変そうだったということを知り、もし自分が避難所の運営に携わることがあれば、可能な限りで配慮されている避難所にしたいと思った。

祖母からは今まであまり震災の話を聞いたことがなかった。母から聞いていたからだ。今回も被災当時一緒に過ごしていた母から話を聞いたため、祖母に聞く予定はなかった。しかし、子どもだった母と大人だった祖母では、同じ体験をしていても感じ方などが違うのではないかと気になり聞いてみることにした。母があまり覚えていなかった部分など、初めて聞く話もあり、今までと違った視点の貴重な被災体験を聞くことができた。阪神・淡路大震災を経験して、しておけばよかったことや学んだことを聞くと、「どんな些細なことでも、備えは大切。何かあった時には近所の人はもちろんやけど、人とコミュニケーションをとって助け合うことが大事なんやで。でもそれって何かあった時に急には無理やから、普段からコミュニケーションをとることが大事。やっぱり物理的な備えと同じくらいに人とのつながりって大事なんや」と言っていた。頻繁に「人とのつながり」という言葉が出てきていたので、祖母にとっては1番大切にしたいことなのだろうと思っている。また、ボランティアの話をしているときに祖母は「やっぱりな、他人事じゃなくて自分の事として見たり考えたりすることが大事なんや思うわ」と言った。聞き覚えのある言葉だ。「自分事に」は環境防災科で学び、初めて耳にした言葉だったので、とても驚いた。これらのことを強く言っていたので、祖母が大切にしたいことを私も一緒に大切にしていきたいと思った。

5 環境防災科

(1) きっかけ

私は中学1年生の時に環境防災科を知った。災害に興味があり、ボランティア活動が好きな私に、舞子高校出身だった当時の担任の先生が教えてくれた。将来、保育士になりたいという夢があった私は、過去の災害での出来事や教訓などを学ぶことで、守れるはずの命をしっかりと守りきることができるのかもしれないと考え、入学したいと思った。

(2) 入学してから

私たちの高校生活は長い休校から始まった。新型コロナウイルスの感染が拡大していたからだ。そのため、本来であれば定期的に入っていたのであろう講義が分散登校後の授業にもすごく一気に入ってきた。災害の経験談などを語ってくださるのを必死にメモし、いくつかのレポートを一気に提出するという作業が多かったように思う。レポートがたくさんあるのならひとつずつ計画的に進めればいいのだが、それができなかった私は提出遅れで1年生の1学期から怒られたこともあった。先生が私たちを怒っているときに言った言葉が印象的でずっと残っている。「自分のこともちゃんとできへん人に被災地の方たちは助けてほしいと思うか」という言葉だ。この言葉を聞いたとき私は、他人のことを助けたい気持ちがあるのであれば尚更、自分自身のやるべきことを丁寧にやり遂げることが大切なのかと考えてそれが気づきになった。

3年生になってから忙しくてあまりボランティア活動に参加できていないが、それまでの2年間ではたくさんのボランティア活動に参加させていただくことができた。駅前での募金活動や南あわじ市の小学校への出前授業など様々な分野の活動があった。

6 夢と防災

私の将来の夢は、保育士になることだ。保育士を目指している理由は主に2つある。1つ目は小さい子どもと関わることが大好きだからだ。一緒に遊ぶことはもちろん、世話をしたり成長していくところを間近で感じたりできることに楽しさを感じている。昔から、自分の好きなことが少しでも絡んでいる仕事をしたいと考えていた。2つ目は自然災害で命を落とす子どもを減らしたいからだ。東日本大震災は私が年長の時に発生した。母とテレビで放送される現地の様子や被害の状況を見ていた中で、幼稚園バスごと津波にのまれたという出来事がとてもショックだったのを覚えている。なぜそう感じたか、どう思っていたかなど、ショックを受けたということ以外に当時のことはほとんど覚えていない。しかし、今考えてみる

ときっと自分と同年代の子がたくさん亡くなったという事実が深く印象に残ったのだと思う。環境防災科で学ぶようになってから、幼稚園バスの出来事は判断次第で安全に避難できたのではないかと考えている。この2つの理由から、どんな時でも子どもの命を守りきることができる保育士になりたいと思うようになった。

私は、最低限3つのものさえあれば、子どもを守りきることができる保育士になれると思っている。豊富な知識、適切な判断力、素早い行動だ。この3つさえ持ち合わせていれば、災害時にはどのようなことが発生すると考えられるか、どのような対応ができるか、それを基にどこへ向かって逃げれば良いかの判断、そして迷わず避難行動に移すことができる。これらは園の職員1人や2人だけにあっても意味がない。全員が身につけることが大切だと思っている。そのため自分が働く園などでは災害発生時の行動だけでなく、防災活動として職員全員で災害について学ぶという機会を設けたい。保育士、大人という立場から、日本の宝といわれる子どもの命をしっかりと守りきることができる人になりたい。

7 最後に

『語り継ぐ』を執筆するにあたり、母や祖母をはじめ、たくさんの方から震災の体験を聞かせていただくことができた。今まで頻繁に話をしてくれていた母からも、避難所で感じたことなどを詳しく聞くのは初めてだった。今後、災害が発生したときにどのようなことに気をつければ良いかを理解することができた。祖母からも、話の中から人とのつながりを大切にするべきということを学んだ。被災の話をしてもらう、聞かせてもらうということもつながりだと感じる。

夢と防災でも書いたように、私は将来保育士になりたいと思っている。祖母の話を聞き、保護者の方から乳幼児まで、幅広く人とつながる職業だと気づかされた。平常時でも災害時でも困ったときには、コミュニケーションが助けてくれると感じたので、今の段階から意識して過ごしていこうと思う。

話してくださった被災体験を人に伝えていく、保育士として働くことには、人としっかり話せないといけないという共通点があると考えている。酷く人見知りをしてしまうので、舞子高校を卒業するころには人見知りのない私になっているよう、努力していきたい。

神戸で生まれ育った者として

中田 愛香

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分阪神・淡路大震災が神戸の街を襲った。震災の10年後に私は神戸の地に生まれた。神戸の学校の多くは、毎年1月になると「しあわせはこぼろ」という副読本を使い、震災学習が行われている。また、毎年「しあわせ運べるように」を歌ってきた。学んでいるといっても、震災後に生まれた私たちには神戸で大地震があったことに実感を持てなかった。きっと、私のような人がたくさんいるだろう。阪神・淡路大震災を環境防災科で学んだ者として、阪神・淡路大震災の記憶を繋いでいく使命が私にはある。

2 両親の被災体験

(1) 父の体験

私の父は当時自宅が神戸市垂水区にあり、灘区の特別支援学校に勤務していた。地震発生時テレビが落ちてきたり、ギターが倒れてきたりした。この揺れでは学校は休みになるだろうと思ったが、とりあえずバイクで学校に向かうことにした。バイクで国道2号線を通り、須磨区に入ったら景色が一変していた。道路側に家が倒れ、燃えている家もあった。阪神高速道路の下には、高速道路の金具などの部品がたくさん落下していた。20cm橋が持ち上がっていたところは、瓦礫をスロープがわりにして通り、普段は元町駅周辺を通るが旧居留地周辺を通った。旧居留地の古い石造りの建物が倒壊し、大理石の山ができていたのを見た。市役所の2号館の一部の階がつぶれているのを見た。普段は学校まで30分で着くところが、詳しくは覚えていないがもっとかかったようだ。

学校に着くと、学校周辺は倒壊した家だらけで、避難所指定されていなかったが避難してきた人がすでにいた。数日後には避難者が2000人近くいた。生徒の安否確認では、あちこちの避難所を回った。しばらくは水が出なかったため、割れた水道管の水を使っていた。

避難所運営で一番困ったことは、生活ごみがたくさん出たことだ。処理しきれなかったため、燃やしていた。すると、毎回消防のヘリが見に来ていた。しばらくすると救援物資がたくさん届いた。消毒にも使えるというウイスキー、服飾メーカーからの服、パンや弁当、お菓子などがたくさん届いた。救援物資の中にビール会社から届いたものがあり、ビールが入っていると皆喜んだが、中身は水でがっかりしたようだ。教員には避難所運営当番というものがあり、交代で学校に寝泊まりしていたが、寝るときは職員室に段ボールを敷いて寝ていた。

(2) 母の体験

母は当時高校3年生、神戸市長田区、兵庫区との区境辺りに住んでいた。灘区に近い中央区にある高校に通っていた。電車が混むのが嫌だったためいつも早く起きていた。1月17日の朝、いつも通り朝早く起き、犬と一緒にこたつに入ってボーっとしていた。その時とてつもない音と揺れが襲い、犬とこたつの中に入った。犬が揺れにとっても驚いて暴れ、引っつかかれて大変だった。祖母は台所でお弁当を作っていたが急いでガスを消した。その時は立っていられないほどすごい揺れだったと祖母は言っていた。祖父は洗面所で身支度をしていたが無事だったらしい。

母が入ったこたつの上には食器棚が倒れてきて、しばらく出られなかった。食器などを少し片づけてもらい、靴を持ってきてもらって、やっとこたつの外に出ることができた。

家の外に出るが他の住民たちは外にいないで、ガスが漏れているにおいがしていた。母は、ふとおばあちゃん（私からして曾祖母）は無事かと気になった。祖父が自宅から10分のところにある曾祖母の家に向かったが全く帰ってくる気配がない。母一人で曾祖母の家に向かった。道中、2つに割れている家を何軒も見つめた。曾祖母は無事で、祖父は曾祖母の入れ歯を探していたらしい。

家の片づけをしていると、家に転がっていたテレビがつき、阪神高速道路が倒れている映像を見た。それを見て驚き、今まで停電していたということにその時気づいたらしい。水道もこの先止まるかもしれないと、お風呂の湯船に水を満タン入れ、家の近くの自動販売機に水やお茶を大量に買いに行った。近くのコンビニでは食料品があまりなく、ミニスーパーに行くと長蛇の列ができており、争奪戦だった。食べ物を手に入れることが一番困難だった。母の住んでいた地域は、近くに給水車が来たのが地震発生後約1週間後、小学校に救援物資が届いたのが約1か月後だった。お風呂は歩いて30分の所へ3日に1回行って

いた。それ以外の日は、ガスコンロでお湯を沸かし、体を拭くなどしていた。

食べ物を手に入れるために、家から少し離れたところにあるスーパーに友人と買い出しに行った。この間に、北区に住んでいる友人がお母さんと一緒におかずを作って持ってきてくれたという。母も祖母もとでもありがたかったと今でも話している。

一緒に買い出しに行った友人と、その他の友人の安否確認に行った。ある1人の友人宅に行くと、かうじて棒1本で家が支えられている状態だった。小学校に避難しているという張り紙があったので、小学校に向かった。その友人は給食室前の冷たいコンクリートの所にいた。

何をするにもどこに行くにも飼い犬が片時も離れなくなった。また母は、何日もガスの臭いで気分が悪くなったことと、ヘリコプターの音で眠れなかったらしい。

震災から約1か月後に学校に行くことができた。登校すると「生きてたんや」と、友人から言われた。長田区は火事が大変というイメージが大きく、携帯電話やポケベルもまだ普及していなかったため、安否確認ができなかった。そのあと1回学校に行っただけで卒業式だった。

母は、震災を経験して以降、何があってもいいように鞆の中がパンパンだ。また、何か備えないといけないという意識があると語った。

(3) 両親の話を聞いて

私はこの「語り継ぐ」を執筆するまで、震災体験を母からは少ししか聞いていなかったし、父からほとんど震災体験を聞いたことがなかった。今回話を聞き、阪神・淡路大震災はいかに多くのものを奪った壮絶な出来事だったかを改めて知ることができた。私が話を聞いた場には妹もいたため、妹も震災のことを少しでも知る機会になったのではないかと思った。

父には教師として学校の避難所運営に携わった貴重な経験を聞くことができた。私は教師になりたいという夢がある。私も災害時に避難所運営をする立場になる可能性があるということだ。阪神・淡路大震災が起きた当時と時代も社会も変わっているため、避難所運営の在り方や発生する問題や課題は違うと思うが、父から聞いたことを活かしたいと思う。また、父が勤務していた学校は、支援物資がたくさん届いたということを聞いて考えた。近い将来起こるとされている南海トラフ巨大地震では広域にわたって被害が出て、物資が届くか分からない。母の住んでいた地域に、阪神・淡路大震災の時に物資が届かなかったというのと同じようなことは現代でもあり得るだろう。支援物資ばかりあてにするのではなく、各校での食料や衛生用品などの備えが大切だと考えることができた。

母は震災当時高校3年生で私と同じ年齢だ。高校卒業間近で、学校に行けなくなり、最後に思い出を作れなかったことは寂しいことだったと思う。私がその状況におかれたらショックを受けて落ち込むだろう。母の鞆の中がパンパンなことや、家には買いだめがたくさんあることは前から知っていたことだった。しかし、その備えを考えるようになったきっかけを初めて知った。私も大阪北部地震を経験してから、出かける時とても不安で鞆の中にいろいろ入れてしまう。出かける時でも備えができるように家族でさらに話をしたいと思うようになった。私の家族は日中、神戸市内ではあるが別々の場所にいる。災害が起こってもそれぞれが無事であるために、私から伝えることは伝えていきたいと思うし、両親からのアドバイスや体験も備えに取り入れていきたいと思った。

3 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

環境防災科の存在は中学生の時から何となく知っていたくらいだった。私がこの環境防災科に入学しようと思ったきっかけは大阪北部地震で被災し、帰宅困難者となったことだ。

私は当時中学2年生だった。この地震が発生した時、私は野外活動の班別活動で京都まで生徒たちのみで向かっている道中だった。震源地に近い夙川駅にいたため大きく揺れた。先生がいなかったのでテレフォンカードを使い、連絡して先生が駅まで来てくれたのは地震発生から約7時間後であった。先生が来てくれるまで私はたくさんの優しさに触れた。スマホを貸そうかと声をかけてくれる方や、涼しい車両を用意し、休ませてくれた駅員さんがいた。私はこの時、助けてもらうばかりの立場だったので、災害が起こったら今度は自分が助ける立場だと感じた。私はその頃から教師という夢を持っていた。生徒の命を守る教師になりたい。そして、自分のように学校生活や行事の中で、不安で辛い思いをする生徒をつくらないようにしたい。このような思いにより、環境防災科に入学することを決めた。

(2) 入学してから

私は入学してからたくさんの活動に参加させていただいた。出前授業や交流授業には特にたくさん参加させていただいた。それらの活動の中でも印象に残っているものは、芦屋特別支援学校との交流である。交流には毎年参加させていただいて、自分にとって大きな活動になった。1年の時は3年の先輩とペアを組み、先輩や先生方にアドバイスをもらいながら準備を進めた。2年の時は後輩とペアを組んだ。特別支援学校にはさまざまな障害や特性を持った生徒がいるため、細かいところまでこだわる必要がある。例えば漢字が読める子、読めない子がそれぞれいるため、基本的には漢字で書いてふり仮名を書いた。また、見たり聞いたりして理解しにくい生徒もいるため、実物や写真を見る、実際に避難行動を一緒にする。「あたりまえ防災」もみんなで楽しみながら踊った。芦特のみんなはとても素直で真っ直ぐに私たちの方を見て、授業を聞いてくれて、質問にもたくさん答えてくれた。とても場が明るくてあっという間の交流だった。この活動を振り返ると1年の時はとても上手くいったが、2年の時は少し不甲斐ない結果になってしまった。私は上手く授業を進めることができたのだが、全体として良い評価ではなかった。2年として1年を指導しきれなかったことをとても後悔した。自分の結果ばかりではなく、全体として作り上げることの意味を痛感した。

芦屋特別支援学校との交流授業やその他の出前授業を通して得たものがたくさんあった。その中でもこれから特に大切にしていきたいことがある。それは相手に応じた伝え方をすることだ。芦特にはさまざまな障害や特性、個性を持っている生徒がいる。全員に伝わる言葉や絵、動きを考えることが大切だ。それは小中学生にも同じことがいえる。小中学生も理解できることは人それぞれ違う。個性もそれぞれだ。将来たくさんの場面で防災について伝える場面があるだろう。その時に、活動を通して得た伝え方を工夫したいと思う。

4 夢と防災

(1) 私の夢

私の将来の夢は中学校の社会科の教師になることだ。私は中学校生活を毎日とても楽しく過ごすことができた。自分も生徒に対して楽しいと思ってもらえるように、教師となってサポートしたいと思った。そして、生徒が毎日楽しいと思える学校生活を作りたいと思い教師を目指すことにした。社会科は自分の好きな教科だということと、災害について授業で触れることができるということが理由で、社会科の教師になりたいと思った。

教師は防災と密接に関わり合っている。例えば、防災教育や震災学習、避難訓練の実施などである。これらの防災教育や訓練がとても大切だと認識させられたのが、東日本大震災の大川小学校での出来事だ。私は大川小学校の出来事は2年の授業の時に初めて知った。この出来事により、たくさんの児童、教職員が犠牲になられた。多くの犠牲者を出してしまった要因として学校側が具体的な避難場所やマニュアルを決めていなかったことがある。また、正しいマニュアルに沿った訓練がされていなかったこととされた。

学校は生徒の命を預かり、安全に生活する場所である。自然現象を未然に防ぐことはできない。しかし、このような出来事を二度と繰り返さないために学校で訓練する必要がある。子どもたちが例え1人でも自分の命は自分で守れるような防災教育を徹底しなければならない。災害大国である日本にとって、学校や教師と防災は切っても切り離せないものである。

(2) 自分がどのような教師になってどのように防災を伝えていきたいか

私は生徒を守ることのできる教師になりたい。一方的に守るだけでなく、自助や共助ができるように防災教育を行うことも生徒を守ることにつながる。

私が今まで受けてきた防災教育や避難訓練を振り返ってみると、課題がいくつか見つかった。それらの改善を行いたい。防災教育は、基本的に座学が多く飽きてしまうということが課題だ。真面目に聞かない生徒もいるため、まずは興味を持ってもらうことから始めようと思う。例えば、クロスロードなどのゲーム形式のものをやる。他に、起震車体験や消火器訓練などの体験を行うなどといったものだ。座学で真剣に学ぶことは大切だ。それに加えて、楽しみながら防災に触れることで、大切なことを伝える座学も生徒はよく理解してくれるのではないかと考えた。

次に避難訓練は、事前に予告されていて緊張感に欠けるということが課題である。私が小中学生の時の避難訓練は、「この日のこの時間に地震の訓練をします」などといった連絡があった。いつ来るかわかっているため生徒の緊張感はない。また、教師の様子を見てみると、地震が起きた想定であるのに平然と立

って指示している。まずは教師が助からないと生徒を守るということはできない。生徒にはもちろん、教師の緊張感を高めるためにも、できるだけ予告しない避難訓練を行いたい。災害時は生徒だけでなく、教師も混乱する。けが人はどの程度いるのか、どの場所が通行不可能なのかは災害が発生してわかるものである。災害時に迅速に動くためには、訓練でいかに引き出しを増やすかだと思う。けが人は何人いてどこへ誰が運ぶのか、通行不可能の場所はどこでどの場所が通行できるのか想定し、リアルを突き詰めた避難訓練を行いたい。

私は、生徒を守れる立派な教師になりたいというのが大きな目標である。そして、当たり前のことであるが、私は教師という立場において「生徒」を1番大切にしていきたい。中学生となれば自分のことだけでなく周りの人の命も守れる存在であってほしいため、環境防災科で学んだ命の大切さや守り方を伝えていきたい。

5 最後に

『語り継ぐ』を執筆するにあたって、阪神・淡路大震災についてたくさん触れた。自分が生まれる10年前に神戸の街が大地震によって傷ついたことなど、今を見れば分からない程だ。神戸で歌い継がれている「しあわせ運べるように」の歌詞で、「傷ついた神戸を もとの姿にもどそう」という歌詞がある。小学生の頃はあまり意味も考えずに歌っていた。だが今は、被災者の方はこのような思いを持ち、今の神戸を作り上げてくださったのだと考えた。防災を学んでいる今、考え直すと、歌詞が深く胸に突き刺さった。

阪神・淡路大震災を経験された方は少なくなっている。被災者の方がどのような思いを持っていらっしゃるのか、後世にどのようなことを伝えたいのか。それは直接聞いた人しかわからないことだ。風化させてはいけないと言われているが、『語り継ぐ』ことは難しいことだと思う。だが、私は環境防災科で多くの方から震災のお話を聞かせていただいた。震災の記憶を伝えていき、風化させないようにすることが私たちにはできる。震災を経験していない私が語り継いでもいいのかという葛藤も今までにあった。だが、被災された方の思いを無駄にするようなことはしたくないから、自分にできることはやりたいと思うようになった。

夢と防災で書いたように私には教師という夢がある。生徒の命を守れる教師になるというのが大きな目標だが、震災を経験していない生徒に『語り継ぐ』ことも大切にしていきたい。生徒に伝えて、その生徒が親になり子どもに伝え、ずっと先の未来まで繋がってほしいと思う。

環境防災科生であり、神戸に生まれ育った者として、阪神・淡路大震災に向き合い『語り継ぐ』使命を果たしていこうと思う。

「多種多様な語り継ぎ」

中西 剛徳

1 はじめに

私がまだ生まれていなかった神戸のまちで大規模な地震が起こった。1995年1月17日（火）午前5時46分52秒阪神・淡路大震災が発生した。この震災で神戸のまちでは一瞬のうちに多くの人の尊い命が奪われ、建物が倒壊した。そして、この時の教訓を忘れないために舞子高校環境防災科が設置され、今19期生の1人として私はいる。命の大切さをじっくりと学べる場所である。経験していないからといって震災を忘れてはいけない。この先も大きな災害はいずれ起こるだろう。その時に今学んでいる経験を用いて身を守り、そして、私は世代を超えて語り継いでいこうと思う。

2 母方の阪神・淡路大震災の話

（1）震災当時

震災当時の母方での様子を聞いた。母は元々神戸市内には住んでいなかった。神戸から東に少し行った同じ兵庫県の尼崎市に住んでいた。尼崎市でもものすごい揺れだった。私から見て曾祖母は当時1人で暮らしていたので、祖父が自転車を朝の6時から大急ぎで漕いで、同じ尼崎市でも少し離れている曾祖母が暮らしていた場所に行った。駆けつけてみると仏壇やタンス、食器棚まですべて倒れていた。しかし、曾祖母は倒れていたその上を這いつくばって外に出てきていた。曾祖母の家は長屋だったので近所の人々が心配をして先に駆け寄ってくれていたらしく無事だった。長屋にいた人たちはみな家の中が危ないと思い、家から飛び出してきたそうだ。一方母は、祖母が懐中電灯を持って急いで駆けつけてくれたので、すぐさま家の外に出た。当時住んでいた家はマンションだった。そうこうしているうちに、今度は次の問題が明るみに出てきた。ガスの臭いとその一帯に充満していてもうこの家では住めないということだ。幸いにも知り合いや親戚が同じ尼崎に暮らしていたのでそこに泊まらせてもらった。母はこのマンションに引っ越してわずか1週間しかたっていないだったのでとても残念だった。今では当たり前にあるお風呂が家になく、昔はよくあり、銭湯の数が今よりもはるかに多かったのも、そこに毎日通っている人が少なくなかった。引っ越しをしたのもそれが理由で、ついに家の中にお風呂がある生活が送れると思っていたのにとっても悲しかったそうだ。その後、震災復興住宅に住めることが決まり、祖父母は数年前までそこに住んでいた。

（2）震災を経験したことと思うこと

震災が発生してまず感じたことが生きているという安堵感、そして、この先どのようにして生活していけばいいのだろうかという不安感。この2つが一気に襲ってきたそうだ。今何が起きているのかわからないし、自分の身がどうなるのかもわからない、情報が入ってこないということが一番辛かったそうだ。もちろん神戸で地震が起きたぐらいとしか情報がなく、尼崎までこのような被害が出ていることが理解できなかった。ニュースの報道は長田の火災でもちきりになっており、少し離れている尼崎の情報など入ってくることはなかった。正確な情報を得ることが難しい程、焦っており、お互いを助けるのに必死になっていた。

（3）母方の話を聞いて

母方の話を聞いていくうちに、今とはいくつかの生活様式が気になった。お風呂の話もそうだし、木造長屋の住宅が連なっているという点だ。当時阪神地区には大きな地震は来ないと学校教育で教えられていたそうだ。そのため年季が入っている木造の建物ばかりだった。さらに木造という点はシロアリの危険性も考えられた。実際に、母はシロアリを退治したことがあるぐらい身近な生き物であった。そして、シロアリがいるということは地震の揺れに耐えられない可能性が高い建物であることを表している。今でこそ鉄筋コンクリートの建物が多いが、当時の木造の建物の中には被害を倍増させるような要因（複合的要因）があったということがいえる。

3 父方の阪神・淡路大震災の話

（1）震災当時

父の実家も尼崎市にあった。しかし父は震災当時大学生で岐阜県の大学に通っていたため、直接大きな

揺れなどは経験していない。しかし、震災が起きた1月17日は実家が気になったので大学の講義が終わり次第急いで関西に戻ってきていた。そこで目にしたのは神戸に行きたくてもいけない人が大阪にたくさんいるという状態だった。今のJR大阪駅のみどりの窓口の前には毛布にくるまる人、新聞紙を御座代わりに寝ている人であふれかえっていた。父がこの状態に啞然としていたら「兄ちゃん、今日はもう動かんからここでゆっくりしていき、焦ってもしょうがないで」と改札口に座っていた知らない人に言われたそう。父は今でも大阪駅に行くとそのことを思い出すという。その後、何とか実家まで行けた。その際に、国道2号線沿いの阪神高速が倒れている横を通ってやっと神戸の状況が鮮明にわかってきた。やはり、当時は情報の受け取りが困難だったということがわかる。

父方の祖父母は地震が起きた瞬間に飛び起きて、その後すぐに祖母はお米を炊いたそう。そしてたくさんのおにぎりを作っておいた。なぜかと聞くと、田舎では昔ご飯が食べられることがありがたかったから、お腹が空くという体験をしたくないと思って本能的に体が動いていたそう。父が実家に帰ると、もともと父の部屋で、自分が寝ていた場所にガラス製の大きな水槽が落ちていたそう。父はもしここで寝ていたら間違いなく命を落としていたか、何らかの怪我を負っていたという。

(2) 震災を経験したことで思うこと

祖母が真っ先に行動したことはおにぎりを本能的に作ったこと。このことが大切だった。この時近隣の人は慌てふためいていたはずなのに祖母がおにぎりを作っている姿に、父はとっさの判断力が緊急時にこそ活きるものであり、ありがたいことだったと感じたそう。

そして次に交通網について。父は何としてでも関西に乗り込み阪神圏内には徒歩でもいいから行こうと決めていたのが、ここまでひどいとは思っていなかった。いろいろなルートを探した。大阪から船で神戸港に行こうとしたが断念。鉄道はもちろん開通しておらず、道路はやっと人が通れるところがあるくらいだった。それゆえ、自転車がとても役立ったという。動力は自分であり、バイクのようにガソリンの心配はしなくていい。さらに、小回りが利いて狭い道でも通れることが本当に便利だと言っていた。唯一の難点はパンクするリスクが普段の日よりも大きいということだ。ガラス片や住宅に使われているネジや釘といった小さくて鋭利なものが至る所に散乱していたからだった。この経験はのちの東日本大震災の時にまで関連している。父には宮城県に知人がおり、東日本大震災で被災されている。その際に父が宮城の知人宅に訪問し、瓦礫の片付けなどを行った際の話の中で、父が持って行った自転車がとても助かったと知人の方が言っていたそう。

(3) 父方の話を聞いて

父の話で聞いた、うずくまる人でいっぱいだったという大阪駅は、今ではそれを想像させない程に、人々の傷も建物自体の傷もなくなっているように思う。震災で建物自体壊れていたところもあっただろう。寒い大阪駅でうずくまることしかできなかった人がたくさんいただろうが、もうその面影は残っていない。当時の大阪駅の光景にはこの先、未来永劫戻らないでほしいと思っている。しかし、近年心配されている南海トラフ巨大地震でまた、大阪駅がそのような光景に戻ってしまう可能性がある。それを阻止していくために、私は改めて防災・減災について詳しく知りたいと思うようになった。おにぎりをとっさに握った祖母の行動のような、昔から教わってきた食べ物を大事にしようとする考え方が人の命を救うことができる実感した。昔の人の知恵や経験を大切に今を生きていかねばならないと深く考えさせられた。過去に戻ってほしくはないものの過去から伝えられている知恵は多く取り入れていく必要があると考えた。そうしていくことで歴史的観点からの防災・減災ということも学べると考えた。

4 環境防災科

(1) きっかけ

舞子高校環境防災科に入学しようと思ったきっかけは東日本大震災だ。私には宮城県と山形県に知り合いがおり、その方は東日本大震災を経験されている。私は当時幼稚園児だったが、父に連れられて東北に行くようになっていった。目の前の光景が本当に同じ日本なのだろうか、そういうことしか頭に浮かばなかった。津波で流されたであろう家屋の跡形もなくなただけ地面が見えており、夜になると光が月明かりしかなく、信号機も作動していないまちを私は見ていた。福島県の浜通りの一部では町全体に金網がめぐらされており、鉄製のフェンスが道に張られていた。今でも仙台空港の入り口には今何ベクレルかという電光掲示板が作動している。私はこの光景を見て怖いという印象だけしか残らなかった。時間は流れていき私は中学校3年生になり高校受験生となった。正直、舞子高校は今の家から離れている。片道1時間30

分の登校は長いと感じる。はじめは地元の高校に通うことを考えていたがしっくりくるものがなかった。そんなある日、父から舞子高校環境防災科がテレビに出ていると聞き家族で見た。私はここでなら精一杯学び尽くせると考えた。幼いころに感じた何とも言えない光景や恐怖感。言葉に表すことのできない感覚が探せるのではないかと考えた。ここでなら言葉に表して、怖いという体験談をもとに私にとっての「語り」ができるのではないかと考えた。そうして、環境防災科を受験した。

(2) 入学して

はじめは新型コロナウイルスの影響で学校にすら行けず、どういったことを学んでいくのかわからない不安な日々が続いていた。6月になりやっと分散登校という形から学校に行けるようになった。それからというものの忙しい日々が続いた。たくさんの方のご講義を受けるなど普段は経験できない授業がたくさんあった。1年生の時の講義で一番印象に残っている言葉がある。それは「GO TO トラベルは行ってもいいが、なぜGO TO ボランティアはしてはいけないのか？」という言葉だった。短いフレーズなのだが話の筋は私が聞いてきた中で一番しっくり来た。なぜ、世界には明日のご飯がなくて困っている人もいる中、さらに新型コロナウイルスという人間からすれば脅威といえるものが少し収まったからといって商売を始めようだのいうのだろうか。商業で成り立っている人からすればうれしいだろうが、災害で仮設住宅に住むことを余儀なくされている人も、日本にいて、その人たちの支援よりも優先すべきことが本当にあるのだろうか。私はこの意見にとっても共感すると同時に重要な課題でもあると考えたので、思わず顔を伏せて考え込んだことを覚えている。何もできないのかという無力感によるものだ。しかし、その言葉は自分に何かできないだろうかそう思うきっかけでもあった。この意見を述べられた方はCODEという世界的にボランティア活動をされている支援団体に所属しており、市民の自立を掲げて活動をされている。

2年生になり、ますます自分から行動を起こしてみたいと思うようになっていた。夏休みのある日、私の母がふとクジラ漁の特集をしているテレビ番組を見つけ録画しておいてくれた。もともと私は魚釣りによく出かけていたので魚が好きになっていた。もちろん哺乳類であるクジラやイルカもそうだ。何気なく夏休みの昼食中に見ていると、現場は宮城県牡鹿半島鮎川地区というところだった。鮎川地区は日本古来より有数のクジラ漁や加工場が盛んなまちである。そんなまちが東日本大震災の時に津波に襲われ、商店や加工場が次々と流されてしまった。それだけでなく、クジラを獲る船が流されてしまい町の活気が失われていった。私が見たテレビ番組の中で、明るいニュースが飛び込んできたというものだった。日本が商業捕鯨を再開するというニュースである。これは30年ぶりの快挙だった。今までは調査捕鯨という名目のもと日本の捕鯨船が時々クジラを捕まえに行き個体の調査をしてから加工され、一部が一般市民も食べられるという仕組みだった。日本では現在商業捕鯨を行うことができる港は限られている。その中の1つに数えられているのがこの鮎川だった。さらにうれしいニュースは続く。津波で流されていた捕鯨船が高知県沖で見つかったのだ。無人で沖を漂っていたので気になって高知県の漁師さんが船内を調べると宮城県から流されていることがわかりすぐに連絡したそうだ。そうしてすぐに鮎川の漁師さんが取りに行くといったエピソードがあった。私は気が付くと、テレビにくぎ付けになっていた。行ってみたい、行って当時のお話を聞いてみたい。そう思い夏休みに宮城県に一人でお話を聞きに旅立っていった。幸い宮城県には知人がおり、昔から父に連れられて旅行をしていたので、地理的なことはよく知っていた。行ってみると、私が小学校2年生の時にいった野蒜駅は津波で駅が壊滅的な被害に遭い、震災伝承館に生まれ変わっていた。また、タクシー運転手の方が住んでいた場所は津波で地区丸ごと更地になりそこには最近オープンしたての震災祈念公園が建設されており、想像を絶する変化ばかりだった。震災祈念公園は、造られて間もないので木々が若木のままだった。それはこの地区すべてが津波でさらわれたことを意味している。そして、火災も発生して多くの建物が焼き尽くされてしまったため、鮎川地区では昔の商業施設を元あった位置から少し高台に新しく作り、再スタートを切っている。この大型商業施設も震災から約5年後に建てられることが決定し、そこからの工事となったので7年以上は少なくとも再建するのにかかってしまった。そのため多くの加工業者さんなどが撤退していった。また震災後鮎川地区には、くじらの博物館があり、上級から初級まであるくじらに関する問題を解いてみた。とても難しかったが、解いているときのワクワクが止まらなかった。ぜひ訪れた時には体験してほしいと考えている。3年生では私が思う集大成となることをしようと考えている。

5 将来の夢

私の将来の夢は鉄道の車掌になることだ。きっかけは、5歳の時にいった、北海道への旅行中の出来事

だった。北斗星という日本最後のブルートレイン（寝台特急で2016年に引退）に東京都の上野駅から乗った。私は元々鉄道が少し好きで、その時も車掌室に行きどんな仕事をしているのだろうと様子を見ていた。すると中から車掌さんが出てきて「君、触って見るかい」といつてくれた。私がうなずくと帽子を被せて、マイクを握らせてくれた。その5分ぐらいの時間が私の中には今でも深く思い出として残っている。車掌さんになりたい、そう思うようになったのはこの時だった。いつか、私と同じ体験をさせてあげたいと思うようになったからだ。それからというもの、旅行に行くときは鉄道の写真を必ず撮って、旅の中で鉄道に乗り、将来の夢をかなえた時にはどの列車に乗ろうかと考えていた。そうして時間が過ぎてゆき、北斗星が引退するというニュース番組の報道を見た。そのニュースは本当に悲しかった。私が車掌になるという目標を持つきっかけになった、北斗星が無くなるとわかったからだ。しかし、私が5歳の時に体験したことを次の日本の鉄道を支えていく子どもたちに伝えていくことができると考えた。きっと、あの時車掌室に入れてくれた人もこの気持ちがあったからこそ若い私に大きな希望や夢を与えてくれたのだと思う。このことより、私は自分自身が北斗星に乗務するという夢が途絶えて気持ちが沈んでいたが、また新しい目標のため鉄道関係の仕事に就くという夢を今も追い続けている。今は夢を叶えるために、たくさん学びを深めているところだ。環境防災科では日本中を襲っている自然災害などを学ぶ中で、鉄道とお客さんの安全を担っていることを常に考えて、日々安全な運行ができるように工夫していく知恵を付けられていると感じているので、その部分でも鉄道事業と関連していけると良いと考えている。

6 最後に

私は『語り継ぐ』を執筆するにあたって話を聞くことや、思い出を振り返ってみたりするということが久しぶりにできたように感じた。毎日が多忙な高校生だがそんな中でも、家族と和気あいあいと話をすることや思い出に浸りながら旅行の写真をしている時間が嬉しく感じた。お互いに思い出を共有することや忘れていたことを思い出したり、定期的にこういったことをしたりすることこそ本来人間がすべきことなのではないだろうか。「私の原点とは何か」そういったことに触れられた気がした。環境防災科で今まで学んできた中でたくさんの思い出が詰まっている。それも私の周りの人のおかげなのだと気が付いた。何気ない会話、普段の学校生活を共にしているクラスメイトや先生方、生活を気にかけてくれる両親、思い出とともに感謝しないと罰が当たる、そう思っている。私は多くの『語り継ぐ』場面にいる。例えば、環境防災科の講義で講師の方が私たちに語り継いでくれている場面など、様々な『語り継ぎ』方があるのだということを知った。そして最後に、今までの私の思い出に感謝をして、この先も楽しい思い出を私自身の『思い出』に上書き保存していこうと思う。

「様々な想い」

中野 千愛

1 はじめに

阪神・淡路大震災が起きたのは1995年1月17日午前5時46分のことだった。一瞬にして元あった町は奪われてしまった。静まり返った神戸の町。しかし今では復興に復興を重ね、活気が戻ってきている。阪神・淡路大震災を経験していない私たちだからこそ、伝えられるものがある。

2 阪神・淡路大震災での体験談

(1) 母の体験談

母は、尼崎の一軒家に住んでいた。17日が歯科衛生士の学校の期末考査だったため、17日の午前2時までテスト勉強をしていた。午前5時46分、「ゴーーー」という音が鳴りだし、揺れ始めた。まだ眠くてボーっとしていた。その時に、「あー揺れたな、1階にいる祖母に呼ばれたら下に行こう」と思っていた。祖父が単身赴任だったため、祖母は1階の寝室で寝ていた。すぐに祖母に呼ばれて1階に行くと、玄関が開いており、台所の上の棚からたくさんのものが落ちていた。祖母に「すぐにスリッパを履いて」と言われた。固定電話が使えたため、大阪の学校の先生に行けないことを連絡すると、大阪は揺れていないし、情報も回っていなかったから、「テストを受けに来なさい」と言われた。しかし、その後、テレビやラジオで放送されるようになり、後に謝りの電話が入った。

揺れも収まり、部屋に戻ると自分の布団の周りにだけ、テレビや様々な家具が倒れていた。寝るところが少しずれていたら、テレビが頭に倒れてきていた。家は壊れているところが無く、周りの家も無事だったが、コンビニの食料が無くなっていた。17日は「何かを食べたい」という気持ちにはならなかった。住んでいたところは運良く、電気は止まらなかった。水道も数時間後には復旧したが、ガスは数日間使えなかった。

友人Aが、唯一動いていた阪急電車に大阪から塚口まで乗り、そこからは自転車で尼崎まで食料をもって会いに来てくれた。当時の母は、それまでに震災を受けたことがないから、避難しようという考えにいたらなかった。

(2) 親戚の体験談

母の親戚は当時、両親と息子の3人で芦屋に住んでいた。いつもは両親と息子は別々で寝るのに、17日に息子が「今日は一緒に寝よう」と言って、一緒に寝た。そして、阪神・淡路大震災により、家が全壊した。3人とも救助され、病院に運ばれた。3人中、息子だけが亡くなった。息子は元々目が悪かった。病院で「メガネが無いから、お母さんの顔が見えない」と言って息を引き取った。

(3) 話を聞いて

母の話を聞いて最初に感じたことは、いつも前向きで優しい母が、阪神・淡路大震災を経験し、そのことを今でも忘れずに覚えているということだ。「それほど大きな災害だったんだ」と改めて感じる事ができた。経験している人が身近にいることは当たり前ではない。だから、この経験を次の世代に語り継ぐ存在に私はなろうと思った。私は母から震災体験について聞くことがあまりなかったが、『語り継ぐ』を書くにあたって、色々な話を聞くことができた。被害は大きいほうではなかったが、母の話の中で「もう少し寝る場所がずれていたら、家具の下敷きになっていたかもしれない」ということを聞き、今、母が生きていることや私が生まれてきたことは奇跡の連続だと感じた。

初めて親戚の話を聞いたとき、私は涙が出そうになった。自分の親戚にこのような体験をした人がいるなんて思ってもみなかった。話の中で、息子がその日に限って「一緒に寝よう」と言ったことに関して、もし言っていなかったら息子は助かっていたのかなと考えるようになった。しかし、これもその人の運命だと思った。若くに亡くなってしまった親戚のお子さんにも悔しくて、「もっと生きたかった」と思っただろうけれど、それ以上に残された家族は悔しかっただろうと感じた。自分より先に亡くなってしまい、後悔が一生残ると思った。せっかく生き残って、幸せなはずなのに、一生息子の“死”と隣り合わせで生きていかなければならない。精神的ストレスや孤独感が残るだろう。また、南海トラフ巨大地震が起きると言われているが、その揺れによって、阪神・淡路大震災での出来事がフラッシュバックしないかが心配で

ある。そこで私は自分に何かできることはないかと考えるようになった。

私は、母や親戚の話だけでなく、講師の方の話や先生から教えていただいた防災の話や実際の経験談を忘れずに、語り継がなければならないと強く感じた。また、教えていただいたものをそのまま伝えるのではなく、自分の思いも伝えないといけな。表面を見るだけでは語り継ぐ意味にはなっていないと考えた。その人の当時の気持ちや今の気持ちも考え、伝えていかなければならない。

3 環境防災科

(1) きっかけ

環境防災科を目指そうと思ったきっかけは2つある。1つ目は、災害が多い時代に生まれたからには、災害大国で生き抜く術のヒントを3年間で身に着けたいと思ったことだ。これからの社会は大きな災害を経験していない世代が社会の中心になっていくといわれている。そこで私に何ができるか、環境防災科での3年間で学び、発信できる人になりたいと感じた。2つ目は、災害から家族を守りたいと思ったことだ。私の家の周りには、山が多く、決して安全と言い切れる自信はない。「もし、近くの山で土砂崩れが起きたら」と考えるたびに、私が家族を守るべきだと思うようになった。そして、環境防災科なら命の大切さや被害を最小限にできるように防災・減災について学べると考えたからだ。

(2) 学んだこと

入学時の私は不安でしかなかった。「防災の知識なんてないし、3年間クラス替えがないから友達ができなかったらどうしよう」と思っていた。しかし、自粛期間を経て、いざ学校が始まると私が思っていた以上に安心して学校に行くことができた。そこで、主に2つのことを3年間かけて学ぶことができた。1つ目は、仲間の大切さだ。仲間の大切さを1番感じることができたのは、消防学校体験入校だ。規律訓練やホース延長訓練をしたが、私1人では絶対に乗り越えられなかった。仲間と声を掛け合ったり、教えあったりすることで乗り越えられた。これは、3年間クラスが同じだった仲間だからこそ、できたことだと今になって実感することができる。2つ目は、ボランティアを通して、先輩や後輩と仲良くなれたことだ。中学生までの私は、上からものを言ってくる先輩が嫌いで、「仲良くしよう」と思ったことがなかった。しかし、環境防災科に入学し、今までの先輩とは違い、親身になって接して下さった。とにかく全員が優しくかった。そんな先輩方を見て、「私も先輩方のように後輩に頼られる人になりたい」と思うようになった。これは、環境防災科でしか得られなかったことだと実感した。

この3年間で伝えることの大切さに気づかされた。何をやるにせよ、口に出して思いを伝えれば、理解してくれる人がある。分かち合ってくれる人がある。このような交流によって、深い関係を築くことができる。私は自分の気持ちを言えるようになった。また、相手の気持ちを理解することができるようになった。環境防災科での3年間は人生で1番と言っても過言ではないくらいに、自分自身が成長することができた。

(3) 環境防災科の授業

中学生までの私は特に防災に対しての意欲はあまりなかった。しかし、環境防災科に入学した先輩に話を聞いたときに、今後生きていくうえで災害からは逃げられないことを知り、自分や家族の命を災害から守りたいという思いもあり、入学した。最初の授業を受けて、「正直ここで3年間やっていけるのかな。頑張りたいけど自信はないな」と思っていた。しかし、グループワークをしていく中で、周りの子の防災に関する知識や熱量を知り、負けていられないと思った。自分が輝ける場所は環境防災科であると感じることができた。

新型コロナウイルスが流行りだし、1年生の最初は学校が休校期間になり、課題をするしかなかったが、学校が始まると、距離を取りながら勉強したことも、今ではいい思い出になった。コロナの時代に環境防災科で勉強できて、普通なら味わうことのできない様々なことを体験できた。普通の高校生活とはかけ離れていたかもしれないが、下の世代に伝えたいことをたくさん学ぶことができた。これは、私の一生の財産である。

4 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は救急救命士になることだ。きっかけは傷病者の処置にあたっている女性救急救命士に出会ったことだ。傷病者の命を一番に考えながら、周りにいる人が安心できるように優しく声かけをして

いる姿を見て、私も周りを見ることができて、女性にしか出せない包容力のある救急救命士になりたいと思った。また、医者や看護師と違い、自分から現場に駆け付け、処置を行うことができるのは救急救命士だけである。現場と病院を繋ぎ、「1分1秒の差で生死を分ける環境で戦う救急救命士になりたい」と私は強く考えている。人の命を助けたら終わりではなく、二次災害を防ぐために、日々できることをしていきたいと考える。

（２） 救急救命士と防災

私は、将来は今よりも女性の救急救命士が必要だと聞いたことがある。その理由は、日常時の現場や災害時の現場では、女性の気づかいや女性にしかわからないことがたくさんあるからだ。例えば、災害が発生したときに妊婦さんが破水してしまったら、その場で出産しなければならなくなる。その時にプライバシーを守るため、妊婦さんの周りをシートなどで隠す必要がある。そのような判断を一番にできるのは女性だと言われている。

私は一般市民のなかで、日常で人のことを助けられる人を増やしたい。救急救命士は事故や災害などが起きてから、現場に向かうことが多い。そのため、救急救命士が現場に着くまでに時間がかかってしまう。その間に一般市民が心肺蘇生法やAEDの使い方を知っているだけで、一人でも多くの人の命を救えると考えた。私は小学生の時に、人が倒れているところに遭遇したことがある。その時に印象的だったことは、制服を着た学生がすぐに駆け寄る一方で、大人は見て見ぬふりをしていたことだ。この事実から、小学校から大学までの学校で、講習会を定期的に開くことも大切だが、それと同じくらいに大人が働いている会社でも月に1回程度の講習会を開催し、自分の命を守った上で相手の命を守ることができるように、心肺蘇生法とAEDの使い方についての講習会をするべきだと考えた。そのことが防災に繋がると考えた。

私は救急救命士になった時に1つ大切にしたいことがある。それは、「人のところに寄り添う」ということである。私は命を救うだけでなく、人のところにも寄り添い、安心させられるような救急救命士になりたい。どんな人でも救急車に乗ると絶対に不安でいっぱいになるはずである。怪我をした本人やそれを見守る家族や知り合いも、助かることを1番に考えているだろう。その時に自分が処置することに精一杯になっていては、全員が不安に思ってしまう。そうならないためにも、最善の判断をしながら、周りにいる人を安心させられるような救急救命士になりたい。命を救うことだけが全てではないと考えている。人の命を救うためには、日々の訓練を行い、知識を今から身につけなければならない。防災を学んでいる私だからこそ、夢である救急救命士として働いたときに、発揮できることはたくさんあると考える。

（３） 消防士から教わったこと

高校2年生の時に行った消防学校での話である。消防士の方が「終わりになき戦い」ということを言っていた。家の形が違うことや、季節や状況が変わることで、実際に同じ現場を体験することはないそうだ。また、被害にあわれた方はトラウマとなって一生、そのトラウマと向き合っていかなければならないかもしれない。私はそのような方の心のケアもしていきたいと考えている。「人の命を救うことだけでなく、人のところに寄り添い、女性にしか出せない包容力のある救急救命士になろう」と決意することができた。

消防士や救急救命士は人の命を守ることが使命だが、1番忘れてはいけないことは、『自分が死なない、自分の命を守る』ことだ。災害現場で、自分が巻き込まれて死んでしまっただけでは意味がない。人の命を助ける前に自分が生き残らないと救いたい命も救うことはできない。そのためには自分と相手を守るために日々、体を鍛えるトレーニングをしたり、適切な判断をしたりするために、座学の勉強やいろいろな現場を想定した実習を集中してすることが大切だ。また、現場でプレッシャーや恐怖に打ち克つために、日頃から自分自身を見つめ直す時間がとても大切だと感じることもできた。そして、1人で抱え込まずに周りに頼ることも大切だと感じた。1人で抱え込むとストレスになり、仕事上でのミスが増える。相手に迷惑をかけないように相手のことを1番に考えることが大切だと考える。

5 最後に

この『語り継ぐ』を書くにあたって、環境防災科での様々な思い出が蘇り、今までの自分の心情や考え方などを思い返すことができた。1年生の時はただただ人の命を守りたいと思っていたが、3年生になった今では、人の命を守った後に、その人に寄り添いたいと思うようになった。これは、沢山の講師の方からのお話を聞くことで得られたことだ。正直、この3年間でここまで防災について考えられるようになる

とは思ってもいなくて、自分でもびっくりした。胸を張って成長できたと言える。

今後は、大きな災害を経験していない世代が社会の軸になっていく。しかし、災害を経験していない若者には、災害を軽視し、自分事ではなく、他人事のように考えている人が多くみられる。そこで、私たちが環境防災科で学んできたことを伝える必要がある。伝える時に、人のこころを動かせるように語り継いでいきたい。実際に、私が講師の方の話や母の話を聞き、「このまま平凡に生きているだけではいけない」と感じた。だから、このように少しでも自分に何かできることはないかと考えてくれる人が増えるようにしたい。いろいろな話を聞き、災害で家族を失った人の気持ちは分からないし、分かるようなものではないけれど、今も過去の災害で苦しんでいる人はたくさんいる。これ以上そのような人が増えないように自分自身や社会を変える必要があると考える。

大切な「わ」

永松 采和

1 はじめに

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分。最大震度7の大きな揺れが私たちの暮らす神戸の街を襲った。28年前の出来事だ。阪神・淡路大震災を経験していない人が増えている中で、南海トラフ巨大地震が2022年5月現在で、直近40年で約90%の確率で起こるといわれている。環境防災科の私たちができることは『語り継ぐ』ことではないだろうか。

（南海トラフ地震とはどんな地震か、いつ来るか、想定される被害状況
<https://telenet.co.jp/column/nankaijisin22s/> 2022年5月閲覧）

2 父の話

午前5時46分。揺れで目が覚めた。「地震や」とすぐに分かったが揺れが長くかなり激しかったため何もできなかった。

当時父が住んでいた場所は板宿の大黒町だった。神戸市須磨区の大黒町から戒町北側までは第二次世界大戦後の区画整理が終わり、戒町南側からは区画整理が終わっていなかった。そのため須磨区の大黒町までの被害と戒町からの被害では大きな差が出ていた。

私の祖父母と暮らしていた父は祖父と同時に「大丈夫か」と声を発した。本棚などが倒れ家の中はぐちゃぐちゃだった。冷蔵庫の中もすべて飛び出し、戸締りをしていたはずの鍵が壊れて窓が開き、不思議なことにすべて真ん中に寄って重なっていた。後に半壊と判定された。外に出てすぐ、左右に道があるはずだが片方の道が崩れた家でふさがっていた。「大変なことになった」と思った。余震がずっと続いていたため祖父母を車に避難させ、父は歩いて2分程度の所にある親戚の家を確認しようと走って向かった。親戚の家は小さなビルだった。建物は全壊だった。父はここに住んでいた人を救助した。親戚は1階に住んでいたが偶然できた隙間の下にいたため命を落とすことはなかった。他の親戚の家も近かったため向かおうとした時、突然知らない女性に、「助けてください」と腕を引っ張られた。崩れた家に女性の両親が埋まっているからだ。しかしずっと余震も続いている中で崩れた家に入るのは自分の命が危険だと判断した父はほったらかすわけではないが、どうしようもないと思い「消防や救急を待つしかない」と伝えた。

午前7時過ぎ、いつもなら空が明るくなってくるはずだが、ケミカルシューズの工場や家屋で火災があったため真っ黒な煙が上がり、昼頃になってもずっと空は暗いままだった。そのうち消防車などが来たが水道管も止まっていたため消火活動ができなかった。

父が被災して大変だったことのひとつは家が壊れていてインフラが止まっていたことだった。家が壊れてしまったため避難所と指定されていないところに避難した。1週間ほどそこに泊まっていたが神戸市から災害復旧の仕事の依頼があったため泊まり込みで仕事をした。阪神・淡路大震災当時、父は24歳で土木系の建設コンサルタントとして大阪で働いていた。神戸市からの災害復旧の仕事は下水道の被害状況の調査をし、修理の優先順位を決めるというものだった。水が止まっていた3か月間、下水処理場で泊まり込んでいた。水を復旧させるには下水も整備しないといけなかったからだ。仕事の中で特に一番大変だったことがご飯の確保だった。昼間は仕事のため避難所等の炊き出しに並んだり、救援物資をもらいに行くことができず、帰り道に何とか空いているコンビニに入っても全然物がなくクラッカーのみという日もあった。避難所にいる人たちよりも救援物資が当たらなかった。

3 話を聞いて

父の住んでいた地域の被害が大きかったことは授業等で学んだりして知っていたが仕事をしている側の話を聞く機会はなかった。救援物資をもらいに行けなかったことなどを初めて知った。この話を聞いて、父も同じ被災者なのに復旧に向けての仕事をしていた。仕事をしている人も救援物資や炊き出しに並びに行ける環境を作ることが大切だと思った。そして余震が続く中、どのようにすればたくさんの方の命をできるだけ早く救うことができるのかを考えていきたいと思った。環境防災科の授業の中でもなかなか知ることができなかった新しいことを知り、環境防災科として授業で習った知識と先輩方に教えていただいた知識を使い、新たな教訓が得られるのではないかと思った。

父の被災した話を聞いて、南海トラフ巨大地震が来ると、全国的に大きな被害が出てしまうことが予想されているため、どうなってしまうのかとても不安に思う。私たちが授業で学んだことを活かして地域の方々や、全く知らない方々と協力をしてできる限り多くの方々の命を救いたいと考えている。そのために、地域の方々とコミュニケーションとしてあいさつを欠かさず行い、できる限り顔を合わせるように心がけたいと考えている。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入る一番のきっかけは、中学2年生の秋頃、進路について困っていたときにピアノ教室の先生から「私（ピアノ教室の先生）の娘と生徒が通っていた舞子高校の環境防災科っていうところがあるけど興味あったりする？」という発言がきっかけだ。環境防災科について自分で調べたり、通っていた2名の先輩方から話を聞いたり、環境防災科の発表や展示をたくさん見ていくたびに『環境防災科の生徒になりたい』と強く思うようになった。環境防災科生になってもっと自分の知らない災害について知りたいと思うようになり、人前に立って堂々と話す環境防災科生を見て私も先輩方のようにはっきりと自分の意見を伝えられるようになりたいとも思うようになった。神戸市民として阪神・淡路大震災の教訓を学び、そして未来の災害につながるように様々な人に伝える防災や減災を学びたいと思ったのが環境防災科を受けるきっかけとなった。

(2) 災害と人間

高校1年生の初めから私にとって一番防災に関わることとなった科目が「災害と人間」だった。「災害と人間」では環境防災科の設立に携わった諏訪先生の話や消防、警察の方の普段なら聞けない話を聞くことができた。もしも環境防災科に入っていなければ絶対に聞けなかった災害時の対応や行動を聞くことができた。私がその中で一番印象に残っている言葉が自衛隊の講義で聞いた『必ず誰かが助けてくれる、必ず助けてもらえる、絶対に助けてもらえると思うことが大切』『諦めることを諦める』という2つの言葉だ。なぜこの言葉が一番印象に残っているかというと、災害時もしも自分の身に危険が迫ったとしても最後まで絶対にあきらめずにいれば必ず助かるという希望が出てくるからだ。危険が迫ると諦めてしまう人が多いと思うのでこの言葉も伝えたいと思った。

災害と人間の校外学習で1年生の9月に人と防災未来センターに足を運んだ。私は受験前に2回ほど家族で行っていた。家族で行く時と授業として行く時ではかなり気持ちが違ったように感じた。何度も見た展示も受験前とはまた違った視点で見ることができた。前に見たときは気にならなかったところが、すごく興味深く、たくさんの学びを得ることができた。授業として、環境防災科生として、人と防災未来センターに行くことができてとてもよかったと思う。

1年生では野島断層へも訪れた。阪神・淡路大震災を起こした断層を目の当たりにし、震度7を引き起こすエネルギーを感じたような気がした。保存館の館長である米山さんが講義でおっしゃっていた『『恐怖』と『落胆』、『悲しみ』を一気に味わった』という言葉は今でも覚えている。一気に味わったことのない私は、ただ想像することしかできないが、今後はそのようなことを減らしたいと思い、そのためにできることは環境防災科で防災・減災について学び、今後、災害時に自ら率先して行動しようと当時1年生の私は考えていた。

(3) 長田のまち歩き

阪神・淡路大震災の二次災害の火災で大きな被害を受けた長田のまち。高校2年生の1学期末、私たちは長田のまち歩きを行った。阪神・淡路大震災前の長田のまち、火災によって被害を受けた長田のまち、新しく建てかえた長田のまち、様々な長田のまちを見ることができた。その中で、長田で起こった火災の境目となった大国公園の被災クスノキが印象に残っている。大国公園にある1本のクスノキが長田の大火災の延焼を止めたという事実をはじめて聞いたとき正直信じられなかった。私の中で「木は100%燃えるもの」だと思っていたからだ。そのため1本のクスノキが大きな火災を止めたことを信じられなかった。

長田のまち歩きを行って火災によって被害を受けた長田のまちと、被災クスノキのある大国公園、クスノキのおかげで火災の被害を受けなかった長田のまちは全くとっていいほど景色や雰囲気が違っていた。火災の被害を受けた側は新しくまちを作り直し、「区画整理」を行って様々な規制をかけながら「災害に強いまちづくり」を行っていた。しかし、火災の被害を受けなかった側は家が建っていたままのた

め、まち全体の整備、建て直しはできなかった。そのため大国公園を中心として西と東では建物間の広さや建て方、まち並みになどに大きな差が生まれていた。阪神・淡路大震災による二次被害の火災は、長田という小さなまち全体に大きな影響を与えた。

父は小さいころからよく大国公園で遊んでいたそうだ。その話を聞いて、子どもの思い出のたくさん詰まった大国公園と1本の「被災クスノキ」は長田にとってとても重要な場所であり、なくてはならないものではないだろうかと感じた。

私は生まれてからずっと垂水区で暮らしているが、垂水区が災害に強いまちづくりができているかどうかをまだ知らない。

(4) コロナ禍の学校生活

私たち47回生の高校生活は2か月間の「自粛」から始まった。正直不安しかなかった。出席番号の前後の人さえ名前も顔も出身中学もわからず、新しい友達がちゃんとできるのだろうか、同じ環境防災科で3年間協力し合えるのか、先輩たちとうまく話せるのかなど不安は募るばかりだった。また、環境防災科生となり、まだ一度も授業を受けていない状態の私が考えたことが「自粛期間の今、災害が起こったらどうなるのか」だった。まだ何もわからないままの自粛期間で災害が起きても、私は何をすれば良いかわからず、不安がどんどん膨らんだ。6月の初め頃、分散登校が始まって元気で明るく接してくれるクラスメイトのおかげで少し不安な気持ちが消えた。本格的に登校が始まって様々な外部講師の方のお話や、先輩方のアドバイスを聞き、慣れないことばかりだったが、たくさん助けられながら1年間を過ごした。いつの間にか不安は解消され、少しの期待へと変わっていた。3年間頑張ろうと思えた初めの1年だった。

5 夢と防災

私は将来、子どもに関わる仕事の保育士や幼稚園教諭になろうと思っている。きっかけのひとつは小さい子どもが大好きで、小学生のころ、妹の同級生たちとたくさんお話をしているうちに「もっと大きくなってからもたくさんの小さい子どもとかかわる仕事に就きたい」と考え始めたことだ。もう1つのきっかけは、私が保育所に通っていたころから両親が共働きで遅い時間まで大人にたくさん遊んでもらっていたことだ。小学校高学年になると自分より小さい子と関わるが増え、私が小さかった時に遊んでもらったことを思い出し、私も保育所でお世話になったような優しい先生になりたいと思いはじめた。

南海トラフ巨大地震がくるといわれている今、小さい子どもから大人まで、自分の身は自分で守らなければならないと思う。それでも保育園や幼稚園では、小学校や中学校、高校のような「身を守る」防災訓練は行っていないと思う。実際私自身も保育園児の時に防災訓練や災害のお話を聞いた記憶はない。また、避難訓練していたという話も聞かない。ということは、あまり行われていないのではないかなと思う。しかし、それでは被害を受けると最悪な状態が予測されている南海トラフ巨大地震では、子どもたちの安全を守り切れないのではないかと考えている。そのため、私は環境防災科で学んだことを小さい子どもたちや、一緒に働くことになる職員たちに伝えていきたいと思うようになった。

保育園や幼稚園での防災教育を行うにあたって、まず伝える側の私たちが正しく新しい情報を手に入れたるように話せば伝わるかどうかを知る必要がある。そこで環境防災科として学んだ、「年齢に応じた伝え方」を活かしたいと思う。例えば、手作りで防災に関する紙芝居や絵本を作り、1つのお話として子どもたちの前で話すことで脳に残りやすく、その後の「ごっこ遊び」などで活用し、身について覚えられるのではないかと考えた。また、紙芝居などにしたお話を「ミニ絵本」にすると小さい子どもたちが自分のロッカーにいれたり持ち運べたりして常に確認できるようになるのではないかなと思った。小さな1つのひらめきが子どもたちの命を守ることにつながるのではないかなと思う。子どもたちの個性と将来を壊してしまわないように、ひとりひとりに向き合った防災の伝え方を考えていきたいと思う。

保育士や幼稚園教諭に必ずなりたいわけではなく、「小さい子どもに関わる仕事」に就きたいので、もしも保育士や幼稚園教諭になれなくても、小さい子どもに防災・減災を伝えられる職業には必ず就きたいと考えている。

6 大切にしたいこと

私がこれから防災・減災を伝えていくときに一番大切にしたいことは3つの「わ」である。小学校5年生の時のクラス目標が『「輪」「和」「わ」』だったことを「語り継ぐ」を書いているときに思い出した。私は様々な「わ」を大切にすることがひとりひとりに向き合った防災の伝え方への大きな一歩につながると思う。

なぜ突然小学校5年生のクラス目標を思い出したかはわからないが、私は当時からのこのクラス目標が好きだった。クラスみんなで「わ」を大切に1年間過ごす、心優しいクラスが生まれたと感じたからだ。それゆえ、私はこのクラス目標のように「わ」を大切に語り継いでいきたいと思う。

7 最後に

まず環境防災科を受験すると決めて、初めて触れた環境防災科の文章が「語り継ぐ」だった。その「語り継ぐ」を今、私が書いているということに驚いている。「語り継ぐ」は、舞子高校ホームページに今後に残り続ける文章であり、私たちよりも年下の災害を経験していない世代も気軽に触れられる防災・減災の1つではないかと考えた。私はこの「語り継ぐ」を執筆するにあたってまた新たな学びがたくさんあり、過去の災害の学びはまだまだ足りないと感じた。将来の夢を叶えるためにこれからも勉強をしていくが、環境防災科で学んだことを風化させず、もっと自ら情報を手に入れ、防災・減災について学んでいきたいと思う。「語り継ぐ」を書いた私たちも未災者である。未災者の私たちができることは防災・減災を学び、未災者から未災者へ「語り継ぐ」ことだ。

これからはそれぞればらばらの進路を歩みですが、3年間切磋琢磨して過ごしてきた環境防災科19期生として、今後起こるであろう災害に向き合い、協力していきたいと思う。この3年間は絶対ほかの学校では味わえない「葛藤」と「楽しさ」を学べたと思っている。大変なことの連続だったが、必ず協力し合える仲間、支えてくれる仲間がいた。この先もきっと学ぶことのできない環境防災科生だけの何かをたくさん得られたと思い、私は環境防災科に入学できてよかったと心から思う。

繋ぐ思い

橋本 夢翔

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災から今年で28年目を迎える。今の神戸は本当に地震が起きたのかわからない程きれいになっている。しかし、神戸がきれいになるにつれて風化も進んでいっている。阪神・淡路大震災を経験していない人が増えていくなかで風化を遅らせ、阪神・淡路大震災のような被害を出さないように語り継いでいくのが今の私たちの役割であり、バトンを次の世代に渡していく必要がある。そのため私たちは語り継いでいき、より多くの人に阪神・淡路大震災について知ってもらい防災・減災を行ってもらいたい。

2 阪神・淡路大震災当時の話

(1) 母の話

母は当時、大学生で西宮市の学生マンションに住んでいた。阪神・淡路大震災当日、寝ていると、「ドン」という音と窓が光ったような感じで目が覚めた。その後大きな揺れを感じた。地震直後は水も電話も使えたためお風呂に水をためて、数日間やり過ごした。コンビニに買い出しに行くと、食料や水はほとんどなくなっていた。落ち着きを取り戻し、友達と阪神高速道路の様子を見に行くことにした。阪神高速道路はテレビで報道されているように、斜めに傾いていた。数日たってもライフラインは戻らなかったため、大阪の友達の家に行くこととした。大阪は西宮と違って、ある程度普通の生活がおくれていたのでビックリした。当時バイトをしていたフードコート内にある飲食店では地震後すぐに営業を開始して、住民に食料を提供していた。その後、淡路島の南あわじ市にある実家に帰ることとした。帰る途中は交通機関が正常ではなかったため、時間がかかりかなり大変だった。実家も食器棚の食器が数枚割れた程度で、家屋も無事で、祖父・祖母・叔母2人も無事であった。学校に戻るまでに数か月かかり、体育館での避難所生活をしている子どももたくさんいた。時間がたつにつれて知り合いの同級生や高校の同級生が亡くなったという連絡が入ってくるようになった。

(2) 母の話を聞いて

私は今まで母の震災体験は聞かないようにしてきた。なぜなら、聞くことにより母が何か嫌なことを思い出すのではないかと思ったからだ。しかし話を聞いてみると、「当時はこんなやってほんま大変やったわ」と笑顔で話していた。おそらく当時は話している以上に大変であったと思うし、1日1日生きるのが精いっぱいだったと思った。

阪神・淡路大震災の震源地は淡路島北部で、母が暮らしていた西宮の学生マンションからも、祖父・祖母・叔母2人が住んでいる実家からも震源地が近く、被害は大きかったが誰1人として亡くなっていないことに安心した。

まず1番驚いたのは、地震直後は水や電話が使えたということだ。「水が使えるようになったのは1か月たってからやった」「電話は全然使えなくて安否確認ができなくて不安やった」という声を多く聞く中で、水も電話も使えたということにビックリした。水と電話が使えるだけで不安が大きく解消され、友達や家族に助けを求めることができる安心感があつたことを話を聞いていてよく分かった。

3 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入学したきっかけは2つある。

1つ目は救急救命士の方に助けてもらった経験があるからだ。私は中学3年生の時に救急車に乗って病院に搬送されたことがある。当時は胸部がとても痛く、息をするのもしんどいくらいで動けない状態だった。その時、私は「死ぬのかな」と思い、とてもマイナス思考になって、落ち着くことができなかった。しかし、救急救命士の方が優しく声をかけてくださり安心することができ、自分もこの人のように多くの人を助けて安心してもらえるような人になりたいと思った。そして中学3年の夏に舞子高校の環境防災科という学科があると知り、ここに入学したら人を救える知識をたくさん学べると思い受験することに決めた。

2つ目は舞子高校の野球部に入りたかったということだ。舞子高校野球部は県でベスト4に入った実

績がある。ここでなら技術的にも精神的にも鍛えることができ、甲子園を狙えると思い舞子高校の野球部に入ろうと考えた。また大学に野球の推薦で行くために夏の県大会で戦績を残さないといけなかった。僕は中学のころから大学までは野球を続けようと考えていた。その中でスポーツ推薦というのはとても重要なものだった。しかし大学野球のスポーツ推薦はとても厳しく県ベスト8に入っていないと推薦してくれないという大学が多々ある。反対に県ベスト8に入っていれば多くの大学の推薦を受けることができる。そのため公立高校で県ベスト8以上に入ることのできる高校を探していると舞子高校がでてきた。

(2) 入学してから

今まで防災のことやボランティアのことに全く興味のなかった私にとって入学当初はしんどいことだらけだった。私たちは新型コロナウイルス感染症の関係で約2か月の自粛と分散登校を余儀なくされた。高校生活を楽しみにしていた私にとってとてもつらい状況だった。またクラスメイトは顔も名前も知らない人ばかりで本当にやっていけるのか不安だった。しかし、環境防災科の人たちは優しい人たちばかりだったためすぐに仲良くなることができた。環境防災科の人達は個性豊かな人が多く、1日1日がとても楽しい日々になった。球技大会や陸上競技会、文化祭など様々な行事を通してより一層環境防災科の仲が深まった気がする。学業の面では、最初の頃は専門知識や専門用語が多く、覚えることで精いっぱいだった。しかし、日を重ねるごとに専門用語の意味を理解し、説明ができるくらいまでに成長することができた。今はまだ基礎的な知識や阪神・淡路大震災などの大きな震災のことしか詳しく知らないの、今後はもっと詳しく防災のことを知っていきたいと思う。また、精神面でのケアについても、もっと学んでいきたいと思う。

入学してから、多くの人達と関わってきて多くの人に支えられ助けてもらいここまで成長することができた。これからは新しい環境で今まで学んできたことを伝えていき、多くの人に防災に興味を持ってもらえるようにしていきたい。

(3) 消防学校

私たちは1、2年生の時に消防学校へ体験入校した。1年生の時には規律訓練やトレーニングなど基礎的なことを行った。規律訓練では集団行動などを行った。列が乱れたり声が小さかったりなど少しの抜けがあるとすぐにやり直しするというハードな訓練だ。トレーニングは腕立てなどの基礎的なことだったが回数が100回とかなりハードだった。2年生の時には規律訓練のおさらいと放水訓練を行った。規律訓練は1年生の時の復習だったのでスムーズに行われた。放水訓練ではホースの伸ばし方から放水体験まですべて体験させてもらった。最初のホースを伸ばす訓練では上手くまっすぐに伸ばすことができずに苦戦した。すると「到着地点を見ながら伸ばしたら上手くいくよ」と言われて実践してみると上手く伸ばすことができた。その後は、何回も失敗せず伸ばすことができるようになった。放水体験では放水の勢いに負けて吹っ飛びそうになった。その時も「腰を低くして足をもう少し広げたら体幹が安定して負けることはないよ」と丁寧に教えてもらい実践すると、最初に比べたら放水の勢いに負けないようになっていた。しかしうまく狙ったところにはかず、消防士がいつも相当な訓練とトレーニングをしているんだと実感した。消防学校に行行って感じたことは基礎的なことをしっかりとしていないと何もできないということだ。1年生の時に規律訓練を徹底的に教えてもらったおかげで2年生の時に放水訓練がうまくいったんだと感じた。この体験を生かして1つ1つ段階を踏んで何事にも挑戦し成功させていきたい。

(4) 学んだことと将来について

私は将来の夢がまだ見つかっていない。しかし、将来の夢に関わらず防災は生きていく中で大切なことになっていく。30年以内に南海トラフ巨大地震が起きると言われており、私たちが生きている間に必ず起きると予想されている。その中で防災をしていなかったら被害は尋常じゃないほど大きなものになる。そのため1人でも多くの人が適切な防災をすることにより被害を抑えていきたいと考えている。まず私が伝えたいのは防災バックについてだ。防災バックは災害に備えて作るバックであるが、自分の強みを1つ入れることによって避難所などで人を助けることが可能になる。そうすることで避難所などで起こりやすいストレスでの「災害関連死」というリスクを減らすことができる。次に家の対策についてだ。今は建築基準法により大規模地震でも倒壊を免れる可能性が高くなっている。しかし、家の中が対策されていないと物の下敷きなどになり死に至ることもある。そのためテレビやタンスなどの大きなものは固定する、食器棚の扉は鍵をかけておくなど基本的なことをもう一度見直すべきだと思う。最後に人は思っているよりも簡単に死んでしまうため、やりすぎくらいの防災対策をする必要があるということを伝えてい

きたい。

4 ボランティア

(1) 出前授業

私は高校1年生の頃ボランティアとはほとんど無縁の関係だった。なぜなら、校内募金などの野球部の活動のない日に行われたボランティアしか参加をしてこなかったからだ。そのため、ほとんどのボランティアには参加しなかった。しかし、神陵台中学校出前授業がボランティアの考え方を考えるきっかけになった。神陵台中学校出前授業では防災クロスロードを実施した。最初は何をすればいいのかわからずパートナーに頼りきりだったが、やり方がわかってくると徐々に提案したり意見を出し合ったりすることができた。また、発表の練習の時に「強弱のつけ方ができていない」「緊張していて全然楽しそうに見えない」など色んなところを指摘してもらい、そこからひたすら練習をして本番を迎えた。本番では中学生や先生方が楽しそうに出前授業に参加してくださっていたので成功できたと思った。神陵台中学校出前授業を通して人の前で話す難しさや準備がとても大切ということを知った。そして、それと同時に出前授業が楽しいということに気づいた。この神陵台中学校出前授業を通して多くのことを経験させてもらいもっと色んな出前授業に参加したいと思うようになった。それからは、時間があれば出前授業に参加するようになった。

(2) 募金活動

私は小さい頃から募金活動をしているのを見つけると母に頼んでお金を入れていた。中学生になると中学校で募金活動することを友達から聞き、やってみたいと思い参加した。最初の方は声も出せず、道行く人に全然上手くつたえられなかったが、友達が来て応援してもらうことによってやる気が出て声も出せるようになり、多くの人に募金をしてもらうことができた。その時募金が楽しいと思えるようになり、高校でも募金活動はすると決めていた。高校初めての募金活動は学校の前で行う募金活動だった。高校初めての募金活動で不安でいっぱいだった。そのせいで声も出せずにただ立っているだけになってしまった。その時に先輩から「まねするだけでいいから声出してみよか」と言われ一緒に声を出していった。そのおかげで徐々に1人で声を出せるようになり緊張も無くなっていた。終わる頃にはやり切ったという気持ちでいっぱいだった。2回目の募金活動ではリーダーとして参加した。2回目は垂水駅周辺で活動した。1回目とは違う責任の重さがあり、1回目とは違う緊張感があった。募金活動では普通科の人も参加してくれてとても心強かった。ほとんどの人が募金活動をするのが初めてで、1つ1つ教えながら活動をしていった。そうすると徐々に上手になっていき地域の人に応援されるようになった。募金活動を終わる頃にはみんなの顔に笑顔が多く浮かんでいて、うまくいったなと思いホッとした。2回の募金活動をして感じたことは地域の人への感謝だ。募金活動中多くの応援メッセージや応援の品をくれるなどと様々な形で応援をしていただいた。それにより、より一層頑張ることができた。また教えられる側と教える側を経験して感じたことは教えるためには自分が経験しないと教えることはできないということだ。初めて教える側に回ったときはどのように教えるべきかと悩んでいたが、その時に先輩から教えてもらったことを生かして私も先輩の真似をした。そうすることにより昔の私と同じように上手になっていった。今後教える機会があるのならば自分の経験を基に教えていければ良いなと思った。

(3) ボランティアで得たこと

私が色んなボランティアを通して感じたことは人と人との繋がりだ。出前授業では相手校に機会をいただき授業を行わせてもらった。募金活動では一旦足を止めて募金を行ってもらった。どちらも自分の時間を割いて私たちに使っていただき交流をしてくれたということだ。色んな人と関わることにより人と関わることの楽しさや嬉しさを感じると共に感謝をした。人と関わることは難しく、これからは自分で機会をつくらないといけない。そのためこれからも自分から積極的に交流できる場に足を運びたい。

5 繋ぐ・伝える

私は環境防災科に入るまでは震災・防災については全く触れてこなかった。そのため、阪神・淡路大震災が起こった日にちすら覚えていなかった。そんな私が入学して「語り継ぐ」という言葉を聞くようになった。しかし最初の頃は「震災を経験した人だけがするもの」「私たちがやっても誰も話なんか聞いてくれない」という風に思っていた。そのため色んな人にしてもらった講義や授業の内容は一切口には出さず誰にも得た知識を伝えていなかった。しかし、年々未災者の人が増えていき風化しつつある。環境防災科

の生徒にもっと伝えていってほしいと言われるようになった。そこから私の気持ちも少しずつ変わっていき、家族を助けたい・友達を助けたい・大切な人を助けたいという思いになっていった。そのため多くの人に防災について語り継ぎもう一度周りのことについて見直すように促した。これでもまだ防災を真剣に取り組んでいる人は少ない。多くの人に防災を真剣に取り組んでもらうためには多くの時間と労力が必要だ。多くの人達が防災に真剣に取り組めば震災での被害が少なくなるまで私たちは語り継ぎ、次の世代の人達に繋いでいく。

6 最後に

「語り継ぐ」を書くにあたってこれまでの3年間の思い出を振り返ることができた。1年生の時は防災に全く興味の無いまま入学したため、初めは何を言っているのかわからないこともたくさんあった。また多くの講義や校外学習があり日々レポートに追われていた。しかしこの1年で防災についての知識はたくさんついたと思う。2年生になるとたくさんすることに挑戦するようになった。初めて出前授業を行ったり、募金活動のリーダーになったりと自分を変えてくれるきっかけになった。また授業では心のケアなどの内面的なことについて勉強をした。いくら震災で助かって心も整理ができず社会復帰ができず生活が困難になってしまう。そのため心のケアまでが防災だと知ることができた。3年生でも多くの知識をつけながら新しいことにチャレンジしていき。今まで部活動を言い訳にしていた分、今までできなかったこともどんどんチャレンジしていき。またもっと防災について勉強していき今後の人生に繋げていく。

私たちが生きている間に南海トラフ巨大地震は必ず起きると言われている。防災の知識が無いまま起こると被害は阪神・淡路大震災や東日本大震災を上回る。そうならないためにも語り継ぎ下の世代に伝え、繋げていく。

次へ

藤澤 和

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、私たちが住む神戸のまちで阪神・淡路大震災が起こった。最大震度7、死者6,434名、負傷者43,792名、家屋の全壊104,906棟と、未曾有の被害を受けた。しかし今日、阪神淡路大震災から28年が経ち、この神戸の地で震災を経験したことがないという人は年々増加しつつあることが現状だ。私もそのうちの1人で、震災から9年後に生まれた。現在、兵庫県では4人に3人が阪神・淡路大震災を経験していないといわれている。つまり約7割もの人が未経験ということだ。そして1つ言えることは、その事実を覆すことはできないということだ。しかし、今後、起こりうる災害に備え、過去の災害から学んだ教訓を語り継ぐことが今の私にできることだ。

引用元 「災害と生きる」 株式会社明石スクールユニフォームカンパニー 2019年発効

2 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

私が環境防災科に入学しようと思ったきっかけは2つある。1つ目は小さいころに何気なく見ていたテレビで流れた東日本大震災のニュース映像を見たことだ。とても衝撃的な映像で、幼いながらも大変なことが起こっていると感じたのを覚えている。その映像の中には、自分と同じ年齢くらいの子どもが悲しみ、そして苦しんでいる映像もあった。代わることはできないが、少しでも力になりたいと思った。2つ目は兄の影響だ。私の兄は環境防災科卒業生である。兄が毎日楽しそうに学校生活を送っていることや、実際に被災地を訪問して様々な活動をしているところを近くで見て、私も環境防災科に入りたいと思った。

(2) 入学して

私は環境防災科に入学するまでは防災や減災に関する知識が全くと言っていいほどなかった。しかし防災・減災に無知な私でも高校生活の3年間で多くの知識を身につけることができた。学年ごとに例を挙げて話していくことにする。

まず1年生では大学教授や警察、消防などの外部講師による講義や、校外学習などの実践的・体験的な授業とともに、レポート、発表、ディスカッションなどを通じて基礎的な防災や減災の知識を身につけることができた。2年生では外部講師の先生から六甲山フィールドワークで六甲山の地形や地層について詳しく学んだり、長田まち歩きでは震災当時の長田の状況やその後の教訓を学び、まちづくりについて考えを深めたりもした。また、1年生と2年生の2年に渡って消防学校に体験入校した。基礎である規律訓練からロープ結索や搬送法、煙体験、消火訓練などの本格的なことを学ぶことができた。日々危険と隣り合わせで活動している消防士の偉大さを改めて痛感し、消防士への憧れを抱いた。3年生では、自分自身の夢の実現のために必要な力やどのように防災と関わり続けるかを考え発表し、様々な防災の広げ方や可能性を感じることができた。これらの経験は環境防災科でしか経験できない。とても恵まれた環境で活動してきているからこそ学んだことや経験したことを広めていく必要がある。環境防災科の名前に泥を塗らないよう正しい知識を広めていきたい。そして社会全体が、日本全体が、世界全体が防災・減災を日常の一部として生活する時代を築いていきたい。

3 祖父の話

(1) 地震発生

当時、神戸市西区のマンションに住んでいた。就寝中に「ゴーーー」という音で目が覚めた。今まで聞いたことのない音の次に「ドンッ!」と地から弾かれるような感覚と同時に大きな揺れが祖父を襲った。これまで体験したことのない揺れの大きさだったため、最初は地震だと思わず爆弾を落とされた、近くのがスタンクが爆発したのだと感じた。身動きがとれず、ただひたすら布団に包まることで精一杯だった。

（２）地震後

地震発生後、家の中はぐちゃぐちゃになっていた。台所の食器棚からは食器が飛び出し、割れていた。部屋中のガラスも割れ、床に破片が散らばっていた。外を見ると、早朝にも関わらず多くの人が家から出ていた。祖父も家族と一緒に慌てて外に出たようだ。外に出て、マンションを見るとたくさんのヒビが入っていた。道路には切れたガス管から大量の煙が出ていた。また、水道管がつぶれ、そこから水が溢れていた。

伯祖母とは一緒に暮らしておらず、当時は安否確認する方法がなかったため、家族みんなで伯祖母の元へ車で向かった。伯祖母は新長田に住んでいた。震災直後は停電しており家の中が真っ暗だった。伯祖母のところへ行くために車を使うため、車のカギを探した。視界が悪いながらに床に手を伸ばした。すると、部屋中に散らばっていたガラスの破片が腕に刺さり、手が傷だらけになった。伯祖母の家に向かう道中は、車のスピードをいつもより落としてゆっくり進んだ。車の窓ごしにすれ違う家はほとんど崩壊しており、異様な景色だった。伯祖母は、避難所に行く準備をしており無事だった。

（３）その後の生活

余震が１日に何度も続いた。震度１くらいの地震でもものすごく怖く感じた。マンションが崩れるのではないかという不安があり、３日間車の中で寝た。しかし、エコノミークラス症候群で亡くなる人が出てくるようになり、４日目からは家で寝ることにした。

地震の影響により、水がなかった。水を買いためておくという考えがなかった。道路の水道管が破裂していたため、そこから湧き出ている水をポリタンクに入れて、衣服を洗う水やトイレの水に使用していた。

（４）教訓

大切なものは１ヶ所にまとめ、把握しておく。スリッパなど非常時に自分の体を守るものを用意しておく。震災時にケガをしたことから自分だけではなく、大切な人を守るためにも備えることの必要性を感じた。祖父の家は現在、鍵などの貴重品はすぐに持ち運べる場所にまとめ、スリッパなどを非常時持ち出し袋の中に常に用意してある。些細なことであっても『備える』ということで、命を守るきっかけに繋がるのだと思う。

（５）話を聞いて

災害時による非日常的な生活は多くの人がストレスを抱える。不自由を強いられるということは大変だ。もし私自身が同じような状況に置かれることを想像すると、自分のことで精一杯になり、誰かのために何か行動することができないのではないかと痛感した。人が非常時に誰かのために行動できるのは、自分自身に常に余裕がある状態の人だと私は考えている。そのような人になるためにも、改めて備蓄品の大切さを学ぶことが必要だ。

４ 祖母の話

（１）地震発生

当時、祖母は神戸市西区のマンションの４階に住んでおり、２人の子どもの母だった。就寝中に聞いたことのない「ゴーーー」という音で目が覚めた。今まで聞いたことのない音の次に「ドンッ！」と地から弾かれるような感覚と同時に大きな揺れが祖母を襲った。頭の上にあったテレビが倒れ、頭に当たった。これまでに体験したことのない揺れに驚き、テレビが頭に当たったことにさえ気づかなかった。頭には大きなたんこぶができていた。たった１５秒の揺れがとても長く感じ、怖かった。

（２）地震後

地震発生後、家具の固定を一切していなかったため、家の中はぐちゃぐちゃになっていた。炊飯器がひっくり返り、中のご飯が床に散らばった。外に出ることで頭がいっぱいになっており、ご飯を踏みながら家を出た。ご飯を買うためにそこら中のコンビニエンスストアを回ったが、どの店も食料品は売り切れていた。電気の回復は早かった。食べる物が無かったので、家に帰り先ほど足で踏んだご飯を温めなおして食べたようだ。また、祖母が住んでいたマンションは倒壊しなかったため避難所には行かなかった。マンションの近くにある公園には何か月もの間、仮設の避難テントがたくさん建てられていた。

伯祖母とは一緒に暮らしていなかった。当時は安否確認する物がなかったため、ご飯を持ち、祖母と祖

父の二人で伯祖母の営業している店へ電車に向かって。伯祖母の店に行くには神戸市営地下鉄の上沢駅で下車する必要があったが新長田駅が地震の影響で通行止めになり、3駅前の板宿駅で降りて歩いて向かった。伯祖母の店の倉庫は火事で焼失していたが、店に被害はなく、品が不揃いの中でも営業していたそうだ。伯祖母の安否確認をした後、祖母と祖父は祖母の実家へ向かった。祖母の実家は会下山町の山のほうにあった。向かう途中に、2階建てだったはずの家が地震により潰され、家の下敷きとなり亡くなった方に向けての花束が添えられているのを目にしたそうだ。祖母の実家は大規模半壊し、2階に行く階段は触れるだけでグラグラしていたため、住めるような状態ではなかった。

(3) その後の生活

3日間ほど車中泊をした後に家で寝ることにしたが、数日間はいつ地震が起きてもすぐに避難できるようにパジャマではなく、身動きのとりやすい服を着て生活していた。テレビに映る長田の町は火で覆われ、今まで目にしたことのない姿に恐怖を覚え、NHKで流れる地震速報の音にただひたすらおびえながら、少しの間過ごした。

震災後1番役に立ったことは、お風呂の水を抜き忘れていたことだった。お風呂に溜まっていた水を使用してトイレの排泄物を流すことができた。また、震災後1番困ったことはガスが長い間使えず、家のお風呂に入れなかったことだ。幸いなことに祖母の家族は、祖父の会社でお風呂に入れてもらっていたが、銭湯は人で溢れていたため、入れる状態ではなかったそうだ。

(4) 教訓

心を常に冷静に保つこと。祖母は今までに経験したことがない出来事が立て続けに起きたため、心臓のドキドキが止まらず何もできなかったそうだ。経験したことがないことが突然起こると人はパニック状態に陥る。災害時に臨機応変な対応ができる人になるには、現在学校で行っている避難訓練や防災教育を中途半端な考えで行ってはいけない。また、大切な人が災害時生き抜くためにも、学んだことを共有する大切さを身をもって感じた。

(5) 話を聞いて

私はまだ阪神・淡路大震災のような大きな地震を体験したことがない。しかし、小学6年生のころに1度だけ震度4の地震を経験したことがある。当時は音楽の授業中で、音楽室が4階にあったため、少しの揺れがとても大きく、長いものに感じた。震度4の大きさの地震が震度7ぐらいあるように感じ、死ぬのではないかという恐怖を感じたことを今でも忘れることができない。それを上回る大きな地震が起きたということを聞いて想像ができなかった。怖かった。環境防災科で3年間、多くの災害や防災の勉強をしてきたが、実際に災害が起これるとなると学んできたことを生かせるかどうかわからない。また、環境防災科である私が率先避難者でありたいと発言しているが、もしかしたらパニック状態になり、何もできなくなってしまうのではないかととても不安になった。

5 将来の夢

私の将来の夢はヘアメイクアップアーティストだ。きっかけはヘアアレンジやメイクが上手な母に憧れを抱いたから、という単純なものだ。私はヘアメイクアップアーティストの世界で防災・減災を広めていきたいと考えている。ヘアメイクアップアーティストと防災・減災は一見あまり関連性がないように感じるかもしれないが、私は密に関わっていると思う。例えば災害時だ。災害はいつ起こるかわからないため常に備えておく必要がある。もしヘアメイク中に地震が発生したならば、自分が持っている道具などの危険なものを安全なところに直さなければならない。このように災害発生後のことだけを考えていては防災・減災につながらないと私は考えている。だから災害が発生する前に道具を直す安全な場所を確保するなどの備えをする必要があると思う。私はそのような備えを呼び掛けていけるようなヘアメイクアップアーティストになりたい。

また、ヘアメイクアップアーティストは、時には美容師として勤務することがある。美容室にはシャンプー台があり、水を使用するため、地震が起こると「断水」してしまう恐れがある。その時のために、事前の準備として、シャンプー台1台につき6～8Lの水を常備したいと考えている。なぜ6～8Lかというと6～8Lの水があれば、肩くらいの長さの髪の毛を洗い流すことができるとされているからだ。災害時は命を守ることも大切だがひとりのヘアメイクアップアーティストまたは美容師として、お客様の命はもちろん髪の毛を守ることも使命だと考えている。私の考えが例え一般的でなくても、それを広めてい

く必要があると考えているため、広めていけるような活動をしていきたい。現在の日本は多くの災害が発生しているが、今までの災害で教訓として受け継いできたことを生かしきれていないように感じる。「教訓を生かす」ということは過去の災害で学んだことを生かし被害を最小限にすることだと私は考えている。そうするためには実践的に防災・減災に取り組んでいかなければならない。そこで私はヘアメイクアップアーティストの世界で防災・減災を率先して広め、社会で防災・減災が日常に当たり前にある環境を作っていきたい。

6 語り継ぐ

私は今まで家族の震災の体験を聞く機会は多少あったが、祖父母の話は聞いたことが無く、この原稿「語り継ぐ」を執筆するにあたって初めて祖父母の話を聞いた。授業などでは新長田を中心に学ぶことが多かったため、自分の家の近くの被災状況がわからなかったが、今回話を聞き、今までで一番当時の状況を鮮明にイメージすることができた。今回聞いたことを私の中だけで留まらせてはいけないと思う。震災を体験していない私だけではなにもできない。だからこそたくさんの人に震災の体験談を聞いていく中で教訓を見つけ、次来るかもしれない災害に備えて多くの人に語り継ぎ、少しでも多くの人を災害から守るお手伝いがしたい。

7 最後に

今回の「語り継ぐ」の執筆により阪神・淡路大震災の恐ろしさや、多くのモノを一瞬にして失ってしまう人間の儚さを痛感することができた。また、語り継いでいくことの必要性を強く感じるすることができた。私は「語り継ぐ」の執筆を通してひとりの人間として成長できたように思う。環境防災科では多くの方々に多様な話を聞かせていただいた。環境防災科でしかこのような話を聞かせていただく機会はないと私は思う。そしてこのような話を聞くことのできる環境防災科に入学できたことを誇りに思っている。この環境防災科で過ごした3年間で学んだ様々なことを忘れず、自信をもって語り継いでいきたい。また、将来私に家族ができたとき、悲しい思いをしてほしくないため語り継ぐことを続けていきたい。

次の世代に語り継ぐ

藤田 恭真

1 はじめに

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分に起こった阪神・淡路大震災。発生から28年が経ち、災害経験者の数が少なくなっている。今までなら災害経験者が災害未経験者に災害の教訓や当時の状況、人々の思いなどを語り継ぐことができていたが、これからは災害未経験者が災害未経験者へと語り継ぐ必要があると考えている。そのため、今まで語り継いだものを正確に次の世代に繋げなければならない。今後も、環境防災科で学んだこと、今まで語り継いできたことの意味をしっかりと考えなければいけない。

2 阪神・淡路大震災

(1) 祖母の話

祖母は当時垂水の一軒家に住んでいた。祖母は震災の前日、揺れがあったことを今でも覚えている。震災当日、2階で寝ていた祖母は背中を押された感覚で目を覚ました。また飛行機が近くを飛んでいるような大きな音がし、少しの間恐怖で動けなかった。地震と分かったのは祖父が知らせた後だった。その後1階に行くといほとんどの食器棚が倒れて、食器が割れていた。しかし大きな被害はほとんどなかった。家族の無事を確認すると1本の電話があった。それは私の叔母からの電話であった。しかし、当時は恐怖と焦りのあまり電話を切ってしまった。その後電話が繋がることはなかった。

震災発生日のお昼ごろ、ライフラインが使えなかったため近くのコンビニに買い物に行ったが、他にも多くの人がい何も手に入れることができなかった。何とかスーパーで水などの日用品を手に入れることができたが、少ししか手に入れることができず、家の前にある川の水を汲んでいた。お風呂に入れなかったのもので親戚の家をまわり、入らせてもらっていた。

震災から数日後、灘の友達の家に行った。ほとんどの家がなくなっていた。そこで撤去作業や炊き出しの手伝いなどを行った。

震災当時一番助かったと思うことは親戚から送られてきた物資だった。当時神戸には地震がないと考えていたため、防災や備蓄の準備を全く行っていなかった。そのため食べ物や服などが送られてきたときは本当にうれしかった。困ったことは水がなかったことと連絡が取れなかったことだ。そこで水のありがたさを知ることができた。

(2) 母の話

震災発生時、母は石川県に住んでおり神戸にはいなかった。朝少しの揺れを感じたが特に思うことなく起きた。その後いつも通り学校に行くとクラスの友達が少し騒がしく感じた。理由を聞き、そこで震災があったことを知った。テレビの映像で長田が燃え、黒い煙が多く上がっているのを見て衝撃を受けたことを今でも覚えている。

3 話を聞いて

今までは講師の方々に阪神・淡路大震災のことをお話してもらっていたが、家族の経験を聞くと、今まで聞いたことのない話が多く、改めて震災の恐ろしさを知ることができた。

母は震災当時、神戸に住んでおらず、揺れは少し感じたがその時は何もわからず、テレビやラジオで聞いた阪神・淡路大震災しか知らなかった。今までは遠くても大阪の方の話しか聞いたことがなかったため他府県から見た震災についての話は初めて聞いた。そして、何をしようとしていたのかなどの「結い」の気持ちについて知ることができた。

祖母の話では震災発生時の状況やその後の生活について話してもらった。今までこのようなことはあまり話されたことがなかった。話を聞くと、震災前にしておけばよかった準備や防災など様々なことがあがってきた。その話をしているときは少し辛そうだった。いつも明るい祖母なので、阪神・淡路大震災がどれだけ恐ろしい災害だったのかを改めて実感することができた。

2人の話を聞き、「語り継ぐ」ことの大切さを改めて実感できた。災害ではしんどいことや辛いことの他にも多くの教訓や大事なことがあったということを伝えていきたい。そして災害に詳しい人になろうと思った。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入学したきっかけは、小・中学校の時にに行った募金活動だ。はじめは何となくやっていた募金活動だったが、それを続けていくうちに防災について学んでみたいと思うようになった。それ以外に小学校の頃から教えられていた過去の災害について勉強したいと考えた。そのことを塾の先生に伝えると、環境防災科を勧められた。そこで、防災の知識を学べると思い、この学科に入学しようと思った。

(2) 入学後

この学科に入学した年は、新型コロナウイルスの影響もあり、4月・5月の予定が休校明けの6月に詰め込みになった。その関係ではじめに思ったことは「しんどい」だった。その多くは毎週行われた講義とそのレポートだった。そのため、1年生の最初の頃はボランティアに参加できていなかった。高校で初めて参加したボランティアは1年生の3学期だった。今までやってきたボランティアとは違い、大変なものだった。なぜなら中学生でやってきたものよりも準備が多かったからだ。しかしやっていると達成感を感じるようになった。そして学年が上がるにつれて多くのボランティアに参加するようになった。

ボランティア活動を行っていき、学んだことがある。それは「相手がいるから、受け入れてくれるから活動ができる」ということだ。このことをしっかりと理解し、今後、参加するボランティアでは受け入れてくださる人への感謝を忘れないようにしようと思った。

また、授業を通して多くの知識を学んできた。しかしその知識だけでだけでは全く足りない部分が多い。そんな中で自分が「語り継ぐ」ということを行ってもいいのか考えるようになった。しかし、講師の方に言われた「語り継いで欲しい」と言う言葉で、震災を経験していないからこそできることがあると考えられるようになった。そこから多くの出前授業などに参加し、災害の教訓などを語り継いでいこうと思った。

(3) ボランティア活動

環境防災科に入学して、出前授業や地域の防災訓練など様々な種類のボランティア活動に参加してきた。その中でも出前授業というのは小学校などに訪れて防災について教えるというもので、中学生の頃では考えたことがなかった。相手に教えるということはまず自分自身がそのことについて知っておくことが大切になってくる。そのため事前の準備が大変だった。準備が大変だったため何回かあきらめそうになったことがある。しかし実際に授業を行うと、小学生たちが一生懸命に取り組んでくれる姿をみて非常に大きな達成感を得ることができた。このような活動で「ありがとう。とても勉強になった。このことを家族に話したい」と言われてもっとこの活動が続けたいと思った。

5 夢と防災

(1) きっかけ

私は将来警察官になりたい。警察官の中でも地域課という課に入りたいと考えている。地域課は地域の方にとって一番身近な部署だと思う。私がこの職業に就きたいと考えた理由は2つある。

1つ目は地域の方にとって一番身近な存在で防災を広めやすいと考えたからだ。阪神・淡路大震災や東日本大震災では災害の知識がなく、亡くなった方が多くいる。そんな方を1人でも減らしたい。

2つ目は一生懸命な警察官の姿を見たことだ。私の家族が家出をしたとき、何時間も捜索し、見つかった後も叱るのではなく、次からこのようなことがないように話をしていた。このことを受けて私も人の役に立ち、防災に詳しい警察官になりたいと思った。

(2) 警察官と災害

警察官は災害と深く関わっていると思う。災害時には救出救助や相談対応などの多くの活動に携わる。阪神・淡路大震災では被災者の救出救助、地域住民の避難誘導、行方不明者の捜索活動以外にも緊急輸送路、復興物資輸送路の確保等の交通対策、被災地における各種犯罪防止等のための被災地域集団パトロール隊、避難所緊急パトロール隊及び婦人警察官で編成された「のじぎくパトロール隊」による警戒警備活動等の諸対策等の災害警備活動に当たった。また、兵庫県警察に対する支援のため大阪府警察では、「兵庫県南部地震支援対策本部」を設置して、兵庫県警察に応援派遣された警察官の宿泊所や補給等の支援活動に当たった。しかし、警察官は職務中に命の危険が発生することもある。東日本大震災では住民らを避難させるよう指示した警察官が、「ここからが俺の本当の仕事」と言い残し、無線で指揮をとるため交番

に独り踏みとどまり、津波に飲み込まれたという事例がある。他にも西日本豪雨では災害対応に当たろうとした警察官がなくなっている。これらのことを知り怖いと感じた。けれども、人のために活動する警察官に私はなりたいと思う。

(3) 自分にできること

私は災害時に人の命を守りながら自分自身の命も守れる、そして人の役に立てる警察官になりたいと考えている。そのためには地域の住民同士の関わりが大切になってくると思う。そのため防災訓練に参加するように呼び掛けたいと思う。訓練に参加することで災害時の対応を知ることができ、実際に行動ができるようになる。また参加した人と協力して行うため共助の考えを持つことができる。そのためまずは自分が多くの防災訓練に参加しよう考える。

(4) 大切にしたいこと

私が警察官になり、防災を広めていくにあたって大切にしたいことは、地域の関わりを深くすることとそれを無理にしようとしないうことだ。地域との関わりは繰り返しになるが、災害時の共助を大切にするためだ。もう1つの無理にしようとしないうことは、人に強制させないということだ。強制させると防災が嫌なものになり学ぼうとしなくなる。そのためこの2つのことを大切にしたいと考えている。

6 防災の広め方

現在では様々な防災の広め方がある。その中でいくつか例に出してみる。

防災イベントでは防災紙芝居やスタンプラリー、地元住民による炊き出しなどが行われている。そのため子どもから大人まで楽しみながら防災を学ぶことができる。またそれ以外にも震災時に必要な共助の部分も身につけることができる。町単位で防災の知識を高めることができる。

基礎的な防災訓練はいざというときには欠かせない。そのため現在では様々な種類の訓練が取り組まれている。例を出すと屋上避難訓練、消火器放水訓練、要援護者救出訓練などがある。防災訓練では防災の知識を持った消防士などから指導をしてもらえるため確実な知識を身につけることができる。またその地域ごとにあった訓練を実施することも必要である。

訓練は座学とは違い、体を動かすため記憶に残りやすい。またそれを繰り返すことにより次に活かすことができる。普段から訓練を行っていると、万一想定とは違うことが発生した場合でも応用力が身につく場合もある。

トランシーバーによる情報受伝達訓練は、トランシーバーを使用して、「地域防災拠点」と「自治会本部」と「いっとき避難場所（一時避難場所）」との間で実施する。これを行うと実際の情報伝達の際、スムーズに行うことができる。移動放送設備による住民への情報伝達は、災害時に正確な情報を伝え、人々のパニックを防ぐことができる。これらを実際に防災訓練などで活用している。

7 新型コロナウイルス

私たちが入学したとき、新型コロナウイルス感染症の影響でほとんどのことが制限されていた。ニュースを見ると感染対策を行いながら避難所に来ている方も多く、今までの避難所生活と比べると、明らかに困難なものになっていた。そんな状況でも災害が止まるわけではない。そのため普段の防災にコロナウイルスの対策も取り入れなければいけない。2年生で行った防災バックの作成では多くの人が感染対策を行っていた。このように様々な災害に対応していかなければいけない。

8 最後に

私が「語り継ぐ」を書くにあたって、環境防災科で学んできてよかったと改めて実感できた。「語り継ぐ」を書きながら、今までやってきた様々なことを思い出すことができた。1年生の頃は講義が多くそのたびにレポートが出ていて、これからやっていくことができるかわからなかったが、他の学校では聞くことのできない知識やその人の想いを学ぶことができた。2年生では心のケアなどの精神面のことを学ぶようになった。それにより知識だけを学んでもできないことがあると知ることができた。3年生になり「語り継ぐ」を書き始める前は自分にかけるのかが不安だった。書くにあたって家族の経験を聞き、今まで聞いてきたこととは異なっていたため、今後まだまだ学ばなければならないことがあると分かった。だからこそ被害が大きかった場所ばかりについて学ぶのではなく、被害が小さかった場所についても学んでいこうと感じた。

これから起こるといわれている南海トラフ巨大地震は阪神・淡路大震災の被害よりもはるかに大きいといわれている。しかしだからと言って被害を大きくしていいわけではない。今まで起きた災害の教訓を忘れず、次の災害に生かしていかなければいけない。そのために自分たちが次の世代へと語り継いでいきたい。

3年間の私

藤原 匠

1 3年前の私は・・・

3年前の私は、「防災」という言葉しか知らなかった。理由は自分でも分かっている。「未災者」だからだ。阪神・淡路大震災を経験したことがなく、テレビで初めて知ったような世代に生まれた私は災害の恐ろしさを知らない。つまり防災の大切さを知らない。そんな私のような震災を経験していない世代がこれから次々と増えていく。自然災害大国日本で、これから災害を避けて過ごしていくことはできない。しかし私たちは過去に得た災害から命を守る教訓や経験を周知させていくことができる。そのため、環境防災科で学んだことをこの「語り継ぐ」に執筆していく。

2 阪神淡路大震災

(1) 父の話

当時の父は神戸市から2つ隣の市である加古川市に住んでいた。父は成人式の次の日だったため、疲れており家でゆっくりしていた。地震が来た時には、家がミシーンと鳴り響き、体を守りながら「あ、家つぶれるかも」と直感したそう。それから地震は20～30秒間続いたような体感だった。震源地からある程度離れていたということもあって被害は神戸市に比べると比較的少なかったが、揺れはあったようだ。家具は動き、食器棚は倒れるなど、家の中は被害に遭ったが、父や家族に被害はなかった。

ひと段落して家が落ち着くと、次は職場へと向かった。すると職場では、職場の先輩に長田で暮らしている人がいるため、その人に皆で食料などの救援物資を届けに行こうと誰かが言い出した。父はその意見に賛同し、職場の4人で1台の車に乗り長田まで向かった。長田までの道中は、渋滞が何キロも続いており、道はでこぼこだったため、長田まで行くのにとっても時間がかかった。朝から長田へと向かったにも関わらず、長田に着いたのは夜だった。そして長田に着いたときに目の前に広がる火事を見て驚いたことを今でも鮮明に覚えていると語る。暗いはずの町がオレンジ色に染まっている光景やそこら中の焦げ臭いにおいがとても怖かったそう。戦争のときに爆弾を落とされたらこんな景色になるのかなと漠然と思ったそう。そして何より衝撃的だったことは、町1個分が燃えるということだった。町1個規模で燃えてしまったら消防も機能しないだろうと感じ、「自然の力を目の前にしたら人間はなんて無力な生き物だ」と実感した日だった。幸い先輩は無事だった。

(2) 父話を聞いて

私は父話を聞いて、阪神・淡路大震災を今まで以上に我が事として捉えるようになった。これまでも阪神・淡路大震災には環境防災科として向き合うことが多かった。しかし自分の父が被災していた話を聞くと、とても身近なものに感じた。父と母はそれぞれ加古川市と枚方市に住んでいたため、正直震災とは無縁の家族だと思っていたが、全くそうではなかった。父が当時の記憶や自分の目で見えた景色を28年経った今でも鮮明に覚えているという話を聞いて、震災は人の心に残り続けているということを知った。

そして父話にもあったように自然災害の恐ろしさを改めて実感した。正直今でも町1個分が燃えているという状況を想像することができない。父は爆弾を落とされた後という表現を使っていたが、それくらい壮絶で悲惨な光景だったのだと感じた。また自然災害自体は防ぐことができなくても、事前の備えはできる。近年は南海トラフ巨大地震の発生が危ぶまれている。震災と3年間向き合ってきた私たちにはできることは何か。父話を聞いて、災害後に一人でも多くの命が救えるようにしたいと思うようになった。さらに私は、改めて防災・減災の重要性を周知しようと考えた。

3 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科への入学を決意したのは、中学校の時に音楽の授業で東日本大震災について学習した時のことだった。当時の私は東日本大震災と聞いても津波がすごかったという断片的なことしか知らなかった。しかし音楽の授業の中で当時の地震や津波の映像を見た時、災害について知らなかった自分でもすぐに分かった。それは地震や津波は危険だということだ。さらに私は音楽の授業で印象に残っていることがある。それは震災後、津波で同級生を亡くしたり、遠い避難先から戻ってこなかったりする同級生を

思い在校生が作った「群青」という曲に出会ったことだった。この曲を聞いたときに自分と同じくらいの年齢の子がこんな悲惨な思いを経験していたと知り、自分にも何かできることはないかと考えるようになった。そして環境防災科で防災について学ぶことこそが、自分にできる最大の使命だと感じた。だから入学しようと決意した。

（２） 入学して

私が環境防災科に入学して感じたことは、積極的にならないとすぐクラスメイトに置いてかれるということだった。環境防災科にはさまざまなボランティア活動の募集があった。入学したての私はそんなボランティア活動に自ら参加しようとしなかった。なぜなら勉強や部活動で精一杯だったからだ。しかしそんなある日、考えさせられる出来事があった。それは私が小学生への出前授業に参加した時のことだった。そこで私は衝撃を受けた。それは、私と違いよくボランティアに参加している同じクラスメイトの子が、その出前授業を仕切っていた姿を見た時だった。同じタイミングで入学したはずなのに、ボランティアに参加しなかっただけでここまで「差」が出るのかと実感した。そしてこのままでは、まずいと思うようになった。それからの自分は優先順位をつけながら、勉強、部活動、ボランティア活動全て両立できるように考えて生活するようになった。さらにボランティア活動では、今までとは異なり、より積極的に参加するようになった。ボランティア活動では、普段の授業で学べないようなことをたくさん学んだ。その中でも、人に伝えることの大変さを知ることができたことは、とてもいい経験になったと思う。そして東日本大震災の被災地である東北訪問に行くこともできた。

（３） 東北訪問

東北訪問は、私の中で災害に対する考え方が大きく変わった活動だった。その中でも「大川小学校」に訪れた際は、当時の東日本大震災を体験したような感覚になった。大川小学校では、自然の力で頑丈な校舎があんな形に変形してしまうと思わなかったし、体育倉庫を見ると震災前のいつもの学校生活の様子を示す跡も残っていて胸が苦しくなった。私は大川小学校を初めて見た時、言葉が出なかった。それくらい被害が想像以上で怖かった。そして大川小学校に通う娘を亡くした佐藤敏郎さんが、ここを悲劇の場所と捉えて欲しくない「未来を拓く」場所として知って欲しいと仰っていた。もしも自分だったら娘を亡くした時、精神的ショックで立ち直れないと思う。しかし佐藤敏郎さんは大川小学校を、未来を拓く希望溢れる場所として広めたいと望んでいて素直にすごいなと感じた。私は東北訪問でさまざまな場所を訪れ、たくさんのことを知った。その中には今でも自分の中で処理できないような悲惨な話もある。しかし私は現地へ行ったからこそ知れたことがたくさんあったので、まずは身近な人から話していきたい。

４ 将来の夢

私の将来の夢は消防士だ。消防士を目指すきっかけとなったのは、祖父の影響だった。私の祖父は消防士でレスキュー隊に所属し、隊員に指示を出す役目だった。しかし、祖父は消防士として指示を出す程までの役を任されていたのに一度も私や家族に自慢したことがなかった。私から見た祖父は、高齢になってもいつも冷静で、勤勉で、あいさつや感謝の気持ちを忘れない人だった。そして困っている人を見つけるとすぐに駆け寄って助ける優しい人だった。だから私はそんな祖父のようになりたいと思っている。消防士である祖父の前に「新谷利明」という１人の人として尊敬している。そして私が消防士を志すようになったのは、祖父である新谷利明のようになりたいという気持ちから生まれたのかもしれない。環境防災科に入って「夢と防災」という授業の中で、自分の夢と向き合っているとそのように考えるようになった。私が消防士になったら祖父のように人徳を積み、環境防災科で学んだことを生かしていきたいと思う。

私が消防士になったら意識してやりたいことがある。それは地域の防災イベントである。消火器の使い方や防災グッズなどを紹介すると同時に地域の方々とのコミュニケーションも図りたい。そしてここで大切なのがイベントには小さい子から高齢者まで老若男女の方々に参加してもらうことだ。最近では若者の防災イベント参加率が極端に少ないと言われている。私はその原因として挙げられるのが、災害の恐ろしさを知らないことだと考えている。未災者の人間が次々と増えていき、災害の恐ろしさや防災の大切さを知らない人が増えると思う。そんな人にこの地域防災イベントを通して防災を知ってもらえるようにしたい。そしてそのイベントには阪神・淡路大震災の被災者の方々も来ていると思うので、そこで被災者から未災者へと震災を風化させないためにも語り継ぐ場を設けたい。加えて小学校訪問にも訪れたい。小学生に向けて火の恐ろしさを直接伝えることで、家に帰ってから今日学んだ出来事を家族、おじいちゃんやおばあちゃんに共有してもらい家族単位で火事の予防に備えてもらいたい。それが私の消防士として

できる最大限の防災の広め方だと考えている。

さらに私はレスキュー隊に入る前に救急救命士の資格を取るつもりなので、その知識も生かしていきたい。世間では倒れている人を見つけるとすぐさま心肺蘇生法を行おうとする人はとても少ないと言われている。その原因として挙げられるのが、心肺蘇生法をすることへのハードルの高さだ。どうしても自分が心肺蘇生法をしたことで、要救助者が命を落とすようなことをしてしまったら、と責任を感じて自信を持ってない人が多い。もちろん心肺蘇生法を行うことは、とても難しいことであり、リスクも伴う。だからと言って目の前の要救助者を置き去りにしてしまっていていいのだろうか。私は絶対にしてはいけない行為だと考える。だからこそ私は市民の方々に、いざという時に自信をもって心肺蘇生法を行ってもらえるように、救急救命士として心肺蘇生法を周知していきたい。

5 消防学校

私は神戸市消防学校に2度体験入校させてもらった。この活動は入学前から知っていたので、とても興味深かった。自分の将来の夢である消防士は、どんな訓練をしているのか。訓練の内容だけでなく、消防士の訓練に対する姿勢も知りたかった。実際に体験して気付いたことは、消防士にとって周りとの力を合わせる協調性はとても大切だということだ。それがはっきりと分かったのが規律訓練だった。規律訓練では自分がしんどいから少し手を抜くことは絶対にしてはいけない。周りが一生懸命に頑張っているからこそ、自分も全力で頑張るという訓練だった。規律訓練が自分の中で最もしんどい訓練だったが終わった時にはどの訓練よりも達成感があった。それは皆が皆の為に頑張ったからだと思う。協調性はそうやって鍛えられていくものだなど実感した訓練だった。

そして講義の中で集団行動を行う時に重要なのは、リーダーシップが2割でフォロワーシップが8割であるということを知ったことも印象的だった。この事実を知る前の私は、優れた隊を作るには良いリーダーがいることが一番大切だと考えていた。しかし、優れた隊には、的確な指示を出すリーダーだけでなく、それを信頼して応える隊員がいることで成り立つことを知った。これ以降、私はリーダー性を伸ばすため自らリーダーに志願するようになった。

6 今の私は・・・

今の私は3年前より成長しただろうか。周りからは信頼しているとよく言われるようになった。私自身も3年前よりも信頼されるような人間になれていると思う。なぜなら高校生になり環境防災科に入ってクラスメイトだけでなく、被災者の方々や語り部さんなどたくさんの方々とのコミュニケーションをとっていくうちに、人の話をきちんと最後まで聞くことの大切さを知ったからだ。一般的に考えると、このことは当たり前のことかもしれない。しかし人の話を聞いているときに、すぐに自分の意見を言ってしまう自分からすると、とても大人になったと思う。私は信頼するという言葉の裏には「自分の気持ちを理解してくれる」「自分と同じ立場に立って考えてくれる・寄り添ってくれる」ことを意味していると考えようになった。これからも人に信頼されるような存在になっていけるようにしたい。

7 これからの私は・・・

環境防災科に入学してからは、たくさん未来について考えるようになった。その未来とは高校卒業後の近い未来だけでなく、将来の夢である消防士になった時の自分などの遠い未来も含めてである。そしてどちらの未来についても共通して言えることがある。それは「一人でも多くの人の命を救いたい」という思いの部分である。これから救急救命士の資格取得や公務員試験合格など私にはさまざまな壁があるだろう。もしかしたらそこで合格できなかったり、スランプに陥ったりするかもしれない。しかし根底にある思いの部分は決してブレない自分でありたい。環境防災科で自分の夢と向き合い芯の部分に気づくことができたからこそ。

8 環境防災科の後輩へ

私から伝えたいことは、「今できることを、全力で頑張してほしい」ということだ。他の学校にはない、環境防災科でしかできないこととは何か、一度考えてみてほしい。私は3年生になってそれによりやく気付くことができた。答えは人によって異なるのでこの『語り継ぐ』では書かないことにする。自分で考えて見つけ出してほしい。そして見つけたら自信をもってその答えに対し、全力で取り組んでほしい。

9 新型コロナウイルスと災害

2019 年末に感染者が確認され、恐ろしい速さで世界各国に感染が拡大している新型コロナウイルス。私たちはここ数年、嫌でもこの新型コロナウイルスと向き合いながら過ごした。今まで「日常」と思っていたことが、新型コロナウイルスの影響で、いきなり「非日常」へと変わっていった。新型コロナウイルスは今まで普段通り送っていた生活を容赦なく壊し、人々の命を奪っていく。これは災害にも当てはまることだと考えた。

災害はいつ起こるかわからない。今まで「日常」だと思っていたものを一瞬にして失ってしまうかもしれない。災害を経験したことのない私だったが、新型コロナウイルスを経験し、「非日常」のしんどさ、終わりが見えないことによるストレスや恐怖を体験した。感染が収まったと思えば、第二波、第三波と繰り返す新型コロナウイルスは終わりが無いと思うようになった。これからも変異しながら新型コロナウイルスは猛威を振るう可能性はあるが、逃げるのではなく、災害と同じようにしっかりと向き合っていこうと思う。そして、新型コロナウイルスと最前線で戦う医療従事者の皆様には感謝の気持ちを忘れてはいけない。

10 最後に

私はこの『語り継ぐ』をこれまでお世話になった人や小学校、中学校の時の同級生に読んでもらいたい。これからは阪神・淡路大震災を経験していない世代が社会を担っていく時代になる。そんな時代に私たちのような未災者ながらも震災を風化させないために語り継ぐことを大切にしている存在は、これからの社会にとって貴重だと思う。温故知新という言葉があるように阪神・淡路大震災での教訓は決して風化させてはいけない。最近では南海トラフ巨大地震の発生が危ぶまれている。私たちの語り継ぐという活動が、来るべき南海トラフ巨大地震に備えられるように。そして一人でも多くの人の命を救えるようにしたい。

そして『語り継ぐ』の執筆を通して日々の日常の大切さを改めて実感した。「おはよう、いただきます、ごちそうさまでした、ってきます、ただいま、ありがとう」この当たり前の日常は当たり前ではない。だからこそ日々親や友達に感謝して過ごそうと思う。

語り継ぐ

松浦 幸汰

1 はじめに

私は、環境防災科に入学するまで阪神・淡路大震災について全く知らなかった。小学生の頃、高速道路が倒れている写真を初めて見て衝撃を受けた。中学生の頃、阪神・淡路大震災が起こった1月17日に学校で保護者の方が豚汁を作ってくれてそれを食べた。阪神・淡路大震災といわれたらその2つだけしか思いつくものがなかった。環境防災科で阪神・淡路大震災について学んでいく中で本当に何も知らなかったのだなと思った。私ほどでなくても、阪神・淡路大震災について知らない人が多くいるのではないかと思う。だからこそ、少しでも多くの方が震災について知り過去から学び、自分や大切な人の命を守れるようにならないといけないと思う。私自身も阪神・淡路大震災を経験しておらず、震災についての知識も少ししかなく、有名人でもないため私の文章を読んでもくれる方は少ないと思う。それでも今、読んでくださっている人の震災や災害に対する気持ちなどを少しでも良い方向に変えられたらと思う。

2 阪神・淡路大震災体験談

(1) 父の話

当時、私の父親は西宮市に住んでおり、今の私と同じ高校生だった。隣の部屋で私の叔母が寝ており、1階には私の祖父、祖母が寝ていた。突き上げるような揺れと、長く大きい揺れによって目を覚ました。叔母の部屋のドアが開かなくなっていたが、突き破り救助した。幸いなことに、家族全員がケガもなく、家から避難することができた。父は、自分の自転車で見回りをし、いつも見ている景色が変わっていて、騒然とした空気となっていた。

(2) 祖母の話

祖母は、当時40代で今の父と同じくらいの年齢だった。祖母は、食器などを集めることが好きだったが地震によって食器棚は倒れ、ほとんどの食器が割れて使えなくなってしまった。祖母は叔母に「お母さんが若くて良かった」と言われたことが、とても印象に残っている。祖母が今の年齢で、あの地震をあの場所で受けていたら、助かっていなかったかもしれない。地震後、親戚が車で助けに来てくれた。しかし、親戚はただ助けに来ただけでなく、近所の人にお寿司を買ってきて配ってくれた。当時は何を食べても美味しかったそうだが、特にそのお寿司は美味しかったそうだ。当時は地震なんか来るとも思っていなかったし、もしきたら何をすべきかもわからなかった。だからこそ、今は防災バックなどを作り、少しでも被害を少なくしようとしている。

3 話を聞いて

当時の父は現在の私の年齢と近く、今の父は、当時の祖母と近い年齢である。しかし、今の祖母は70歳を超えており、母は身体障害者だ。祖母の話で、叔母が祖母に言った「お母さんが若くて良かった」という言葉はこれから高齢の祖母と暮らしていくうえで考えていかなければいけない問題だと思う。だからこそ、もっと父と協力していかなければならない。また今は一人暮らしをしている姉とももっと話し合っ、協力し合わないといけないと思った。

親戚が近所の人にお寿司を買ってきて配ったという話を聞き、日頃から優しさを持てる人間になりたいと思った。優しさはどんな人でも、持っていると思うが、周りが見えて実行できる人が優しさを人に提供できる人だと思った。阪神・淡路大震災については、小学校の時から現在の高校3年までいろいろなことを学んできた。しかし、私は震災を体験しておらず、当時の状況というのは当時体験した人にしか分からない。今回聞いた家族の話だけでなく、私は授業などで被災された方の話を聞いてきた。しかし今後はそういった話は聞けなくなってしまう。だからこそ貴重なお話を語り継ぐために自分の意見も交えながら友達などに話していこうと思う。そうすることで、友達も家族やまた違った人に語り継いでいくことができる。

4 環境防災科に入って

(1) きっかけ

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは2つある。1つ目は中学3年生の時に当時の担任の先生

と学年の先生から環境防災科を紹介されたことである。その頃の私は生徒会に入っていて、自分の中で「誰かのために全力を尽くす」というテーマを持っていた。そのため、環境防災科はそれを実行している学科だと思い興味を抱いた。2つ目は、家族の存在である。私の家族には身体障害者がおり、もし災害が起こった時にそういった体や心が不自由な人の命を助けるにはどうすればいいのか学びたかったからである。

(2) 入学後

入学して、すぐに休校になってしまい、学校が始まったのは6月頃だった。私は、しっかりとした夢を持っていなかったが、クラスのほとんどの人が夢を持ち、その夢に向かって努力をしていた。また環境防災科の授業では防災に関わる知識だけでなく、震災当時の状況などを映像や講義で学ぶことも多くあった。正直見ていて、聞いていて心がしんどくなったこともある。だが、人の気持ちを知るにはその人が何を経験し、何を思ったかを知らないといけないうとその時はじめて知った。夢を持っていないことへの焦り、授業を聞くことがしんどい、他にも様々なことが重なりもういいやと投げやりになってしまったときもあった。しかし、自分から逃げているは何も得ることはできない。現実から目を背けず、自分を持つことで新たな道を見つけることができると思う。だからこそ、今を大切に今できることを全力ですることが必要だと、高校3年になった今、やっと分かった。

他にも環境防災科に入って学んだことはたくさんある。その1つが人と話す力である。出前授業やボランティア活動などを通して自分の意見を人前で話す機会というのが増えた。そのおかげで初対面の人と話すのが苦手な私も少しは成長することができた。それを感じたのは、中学時代からの友達とご飯などに行ったときの店員さんとの会話、近所の人との会話など日常生活である。その中で、コミュニケーション能力が高くなったと感じたし、言われるようにもなった。しかし環境防災科での生活で、コミュニケーション能力が高くなったと感じることはほとんどない。それは、周りのクラスメイトが発表やボランティア活動でまた日常生活で高いコミュニケーション能力を発揮しているからだと思う。そんなクラスメイトに頼りっぱなしで高校生活を過ごしてしまったが、そんなクラスメイトがいてくれたからこそ私の人と話すコミュニケーション能力が上がったのだと思う。

5 新型コロナウイルス感染症

私たちの高校生活3年間は新型コロナウイルスと共に生活したといっても過言ではない。入学してすぐに新型コロナウイルスによって休校となり、休校が明けてもなお新型コロナウイルスによって今まで普通にできていたものが出来なくなって生活に多くの支障が出た。もうコロナ禍での過ごし方は慣れてきたが、数年前とは違いどこに行くにしても人との接触を気にするようになった。これから先新型コロナウイルスと共に生活するという事はなくならないと思う。

新型コロナウイルスによって医療従事者の方が大変な重労働をすることになったり、仕事を失ってしまった人がいたり、自由が抑制されて精神的に病んでしまったりする人が急増した。そうした人を支えることができるのは行政と周りの人間だと思う。行政はコロナ禍で仕事を失った人への支援や、新型コロナウイルスに感染してしまった人への支援をもう少し強めてもいいのではないかなと思う。しかし、精神面では行政はどうすることもできないと思う。だからこそ周りの人間ができる限りのサポートをしていくことで最悪のケースというのは免れる可能性が高くなる。

新型コロナウイルスでなくても新たなウイルスによって行動を制限されるということはこれからもあるだろう。そんな時に災害が起きれば、避難したくてもできない人が出てしまい二次災害に繋がりがねない。私の友人は大学から県外に行き一人暮らしを始める。コロナ禍によって近所の方との交流が少なくなった今、災害が起きてしまっても誰も頼れる人がいないという状況になりかねない。このようなご時世だからこそ1人1人の防災意識、知識を高め災害に備えることが重要になってくる。例えば「手洗い、うがい」当たり前のことかもしれないがどんなウイルスからでも自分の身を守ることができる。だからこそ防災バックに手洗い石鹸などを入れておくことも大切なのではないかなと思う。

6 南海トラフ巨大地震

南海トラフ巨大地震と呼ばれるM8～M9の海溝型地震が、30年以内に起こる確率が70～80%であると言われている。また南海トラフ巨大地震による死者の数は、最悪の場合20万人を超える、全壊、焼失する建物は200万棟を超え、経済被害も220兆円にのぼると言われている。

対策としてはいち早く避難することが大切だ。日本は災害が多く、災害に慣れてしまっている人が多く

いる。慣れというのは災害時どのような行動をすれば良いのか分からないまま、前も何もなかったし大丈夫だろうといった根拠のない自信を生んでしまうことが多いと思う。それでは自分の命、大切な人の命を守ることはできない。災害が起こる前からどこに避難してどのような行動をするのか家族や友達などと話し合うこと、家具の固定などをすることが命を守る一番取り組みやすい防災である。内閣府によると、多くの人が早めに避難することで津波の犠牲者はおよそ 30% 少なくなり、建物の耐震化をする世帯が増えれば、建物の倒壊は 40% 減らせるといわれている。

コロナ禍では南海トラフ巨大地震が起きた場合、避難したくてもできない人が出てしまう。そうした状況を打開するためには、先ほども述べたように 1 人 1 人の防災意識を高めるしか方法はないと思う。例えば防災バックの中にアルコール消毒、替えのマスクなどを準備するなど、自分は避難所で何が必要なのか考えることが必要だと思う。そうした意識を多くの人が持つために周りの身近な人たちから伝えていくことが大切である。そうした準備、備えができていない人が多くなった場合、避難したくてもできないという人は少なくなるのではないかなと思う。

『災害と生きる』 出株式会社 明石スクールユニフォームカンパニー

7 夢と防災

今、将来の夢は正直言うとしっかりとは定まっていない。強いて言えば福祉関係の仕事につけば良いかなと思っている。福祉といっても様々な職種があり、どれも誰かのサポートをするものである。私は高校生活で特に家族や担任の先生に迷惑をかけてしまった。今の私は支えられてばかりだ。そんな私が支える側につくためには「自分に厳しくある」ということと「人の気持ちを考える」ということが重要になってくると思う。自分に厳しくあるということとは、日常から意識づけることで変わってくる。福祉関係の職業に就いた後に、環境防災科で学んだ防災を繋げるために、同僚、障害者の方、高齢の方とコミュニケーションを取ること大切になってくる。同僚とは、利用者の方や施設の情報共有はもちろん自分たちの命を守るためにどうするべきか避難訓練などを行い、シュミレーションすることが必要である。障害者の方、高齢の方は、災害が起こった時に中々自分で自分の身を守ることが難しいとは思いますが、周りに防災の大切さを伝えることのできる方は多くいると思う。そんな方と一緒に防災バックやポスターなどを作ることで、防災意識を自分たち自身も周りに伝えることができると思った。

私の家族には身体障害者がいて、支えてくれている人たちは、私たち家族と相談しながら支援のスケジュールなどを立てている。そういったシステムもうまく利用することができると思う。スケジュールなどを立てるときに今家族で困っていること、したいことなど雑談でもいいから家族の方とコミュニケーションを取ることが大切だと思った。私自身が見てきた中で雑談や福祉には関係のない話をもてくださる人は、何か困っていることがあった時に話しやすいし、頼りやすい。そういった関係を築けてくるところから家庭での防災について話を出すことができる。そうすることで家庭での家具の固定や、身体障害者の方が家族でいるときに、家族の人がどのような動きをすればいいのか理解でき、家族全員に命を守ることができる。

8 卒業後

私は卒業後、防災と違うことを学ぼうとしている。しかし、違う分野に進んでも防災の知識は様々な視点があるので生かすことができると考えている。日常生活、学校生活など今とは違う環境で学ぶときにも環境防災科で学んだ知識を生かして防災面でも活躍していきたいと思っている。そして、自分の命と大切な人の命を守っていきたい。

9 最後に

私は、この「語り継ぐ」を作成するにあたって災害の恐ろしさを環境防災科で学んだことについて改めて考えることができた。阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震など小学校、中学校の時から授業を受け、ニュースなどでも見たりしたものがあった。しかし、なぜ阪神・淡路大震災で火災が広範囲で起こってしまったのか、東日本大震災で津波から逃げ遅れてしまった人が多かったのかなど震災の背景を考えたり学んだり、被災地や避難場所ですらどういった気持ち、状況でいたのかなどを環境防災科に入り初めて授業や講義を通して学んだ。初めてそういった背景について知ることによって被災された方の気持ちを少しでも理解することができたと思う。

「災害の恐ろしさ」というのは、私たちの想像を超えてくることにある。どれだけ備えをしても使

用することができなければ意味のないものとなる。しかし備えをしていなければ災害から命を守ること
はできない。だからこそ自分自身の想像を働かせて備えることが必要だと思う。

現在日本はコロナ禍にあり、行動を抑制されている人も多くいる。私も友達と旅行に行きたいと何度も
思った。新型コロナウイルスも災害の一種で、想定を超えてくる。だからこそ自分のできる最大限の対策
をしていく必要がある。

私は、テスト勉強をいつもテストぎりぎりまで徹夜でしている。しかし頭の良い人は毎日時間を決めてし
ている。この違いは余裕の違いだと思う。これは防災にもつながってくる。防災もしていなかったり準備
が不十分だったりすると、被災状況が大きくなってしまう。だからこそ何度も言っているとおり自分ので
きる最大限の防災を、私は勉強していくことが必要である。これから先様々な災害が起こる可能性が高
い。そうしたときに環境防災科で学んだことを生かしていければなと思う。

未来に私が語り継ぐ

松浦 結衣

1 はじめに

1995年1月17日5時46分阪神・淡路大震災が発生し、6434名の尊い命が失われた。私は環境防災科に入学したいと思った時から阪神・淡路大震災など過去に起こった災害について調べ、学んできた。しかし、環境防災科に入学して阪神・淡路大震災を体験された方からお話を聞くたびに、インターネットで調べたり、新聞で見たりするだけの情報ではまだまだ足りていないと痛感させられた。そして「語り継ぐ」ということの大切さに気づかされた。阪神・淡路大震災を経験していない分、多くの方からお話を聞き当時の様子を想像し、更に若い世代に伝えていく。「未来に私が語り継ぐ」という思いで「語り継ぐ」を読んでもほしい。

2 震災当時

(1) 1月17日

震災当時、母は神戸市北区の実家に暮らしていた。「ボン」という何かが爆発したような音が聞こえてきた。「神戸には地震が来ない」といわれていたため地震だとは分からなかった。しかし、その後「ガチャガチャ」と音が鳴り強い揺れを感じ、とっさに布団にもぐった。築年数の古い家に住んでいたためとても強い揺れを感じたようだ。揺れが収まると祖母が2階から震えるように降りてきた。その後、祖父が「テレビがつかないから、車でラジオを聞いてくるわ」と言い外に行った。家に帰ってきたとき「淡路島が震源らしい。この辺は震度6」と言った。

(2) 勤務先に行くために

母は震災前、神戸市東灘区にある透析専門の病院で管理栄養士として勤務していた。透析患者は透析を受けなければ4日でむくんでしまう。そのため、全患者のためにこの病院では透析装置を365日休まずに動かす必要があった。このことを知っていた母は震災後2日目から病院に行こうとした。震災前は新神戸トンネルを抜け三ノ宮駅に行き、そこから病院に向かうという経路だったが、いつも通っていたトンネルは通行止めになりバスも来ない。そして、電話も繋がらず、次第に「忙しいのは医師や看護師で管理栄養士が病院に行って何もすることがない」という思いになり家に帰った。母の住んでいた地域は被害が大きくなかったこともあり、電気が震災後2日目で使えるようになっていた。そのため、テレビを見ることができた。テレビを見ると阪神高速が倒れていて、長田では大きな火災が起きていた。「大変なことになった」と思い、母は3日目の朝からいろいろな方法を使い病院に行くことにした。最寄りの谷上駅から新神戸駅まで動いていた北神急行を使って行き、灘の商店街のガラスを踏みながら歩き、六甲道を越えて病院に行った。母は周りの様子を見ながら歩いていた。大きな地震が起きたとは思えないほど高級住宅街では立派に立ち並ぶ家が連なっていた。しかし古い家が立ち並んでいたところではたくさんの家が壊れてしまっていた。この状況を見て心が苦しくなった。

(3) 勤務先での出来事

病院につくとスタッフは疲れ果てていて、朝からおにぎり1つで休みなく働いている状況だった。そして、いつしかギスギスした雰囲気になってしまっていた。しかし、厨房を見てみるとお米もたくさんあり、冷蔵庫の中にもたくさんの食糧があった。なぜなら、病院が大変だと多くの行政からの支援がありたくさんの食糧が届いていたからだ。それを使って母と調理師で今あるもので料理を作ることにした。それが、とても好評で1週間経つと「クリームシチューがいいな」や「ピラフがいいな」などリクエストが出るようになった。そして、日を重ねていくうちに「病院が大変だ」と多くの行政からの支援もあり全国から食糧が集まり、メニューも幅広くできるようになった。そして、病院のスタッフの様子も活気づいていった。母達は病院のスタッフの食糧問題を解決し、さらにストレスを発散する場所を作るべきではないかと気づいた。母達はストレスを発散する場所として、仕事の合間に誰でも使用できるお茶コーナーを作ることにした。紙コップに名前を書き、コーヒー、紅茶、カップラーメン、お菓子などを食べて好きなだけしゃべってまた仕事に戻るといったところになった。このコーナーは大変喜ばれて、何度も使えるようにラップを皿に敷くというルールができたほどだった。

こうしてみんなで力を合わせ、アイデアを出し、時には笑い飛ばしながら元気を取りもどしていった。

そして、1月17日から2週間後には患者に震災前と同じメニューを提供できるようになった。母は、震災前、仕事の大変さやいろいろなことから病院を辞めようと考えていたそうだった。しかし、震災があり改めて病院で働くことの楽しさや食の大切さに気づき思いとどまった。だから、忘れることのできない人生のターニングポイントになった。

（４） 震災当時の話を聞いて

私は母から震災当時の話を聞き、母のように震災を前向きに考えている人がいることを知った。私は環境防災科で阪神・淡路大震災のことを多くの方から話を聞く機会があった。ほとんどの方のお話は「阪神・淡路大震災＝辛い」ということばかりだった。心が苦しくなったり、辛くなったりした方が多かった。しかし、母は話の最後に「震災があったから、管理栄養士を続けようと思った」と言った。震災は恐怖を感じることも多くあるが、震災をどのようにとらえているかは人それぞれでもっといろいろな人に聞いて学んでいくことが必要だと感じた。

3 環境防災科に入って

（１） きっかけ

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは母からの勧めだった。「舞子高校にこんな学科があるみたい。将来フライトナースになりたいのならこの学科が良いのじゃないか」と勧められた。私は中学生の時、進路選択にギリギリまで悩んでいた。しかし、環境防災科が行っている被災地訪問やネパール訪問、小学生とのハザードマップ作りに心が惹かれ、環境防災科に入りたいと思い始めた。

（２） 東北訪問

私は2年生のときバスで13時間かけ宮城県を訪問した。1年生の夏と2年生の夏に応募をしていたが新型コロナウイルスの影響で行くことができなかった。そのため、3回目の応募でやっと行くことができた。私は特に2日目に訪問した大川小学校と大川小学校の裁判で原告団の団長をされた今野さん夫妻のお話が印象に残っている。今まで写真やテレビなどのニュースで大川小学校のことは見てきた。しかし、直接見てみないと分からない静けさや独特の雰囲気を感じた。私は大川小学校で佐藤敏郎さんという、娘さんをこの学校で亡くされた方にお話を聞いた。佐藤敏郎さんの話の中に「ニュースなどで報道される悲しい思い出だけでなく、そこで作られてきた震災前の楽しい思い出も伝えてほしい」という言葉があった。私は、今までいろいろな形で「語り継ぐ」という活動をしてきたが震災当時にあった悲しい思い出ばかりを語っていたことに気づいた。佐藤敏郎さんの言葉の意味をしっかりとらえ、私なりの言葉で語り継いでいこうと思った。

また2日目の夜に大川小学校の裁判で原告団の団長をされた今野さん夫妻の講話を聞いた。私は「いろいろな辛いことや苦しいことがあったと思うが、一番裁判でつらかったことは何か」と尋ねた。今野さん夫妻は「誹謗中傷が怖かった。殺害予告もあり眠れない日もあった」と教えてくださった。その話を聞き、なぜ誹謗中傷をされないといけないのかと深く失望した。そして、誹謗中傷はこれから先、絶対になくしていかなければならないものだと感じ、今、誹謗中傷という形でストレスの発散をしている人がいるならば止めてほしいと思った。

（３） 芦屋特別支援学校

私は3年間で数多くのボランティアに参加させていただいた。そのなかでも2年生の時に参加した芦屋特別支援学校との交流が印象に残っている。このボランティアは初めて2年生が主体となって活動するボランティアだった。私は準備からどうしたら芦屋特別支援学校の子と仲良くできるかをとても悩んだ。彼らは高校生の心を持っているが、少し理解することが難しい。そのため、わかりやすくするため写真などを持っていく必要があった。写真を選ぶときも、恐怖を感じ取ってしまうのではないかなどたくさんのことを考えて悩んだ。こうやって悩んだときには、今まででだと先輩に助言をもらうことができた。しかし、2年生であるため今度は後輩を引っ張っていかないといけないし、助言もしていかないとはいけなかった。「誰かに助言をもらえばいい」や「誰かに頼ることができる」という考えの自分や、先輩に頼り切りだったことに気づかされた。私はその後もうまく後輩を引っ張ることができず、たくさん先生に指摘を受けた。また、全体としてもうまくいかず、「このボランティアは10年間続けてきたが10年間の中で一番悪い交流会だった」と言われてしまった。私はこの交流会が失敗した原因として後輩と準備する時間が足りていなかったことだと思った。もっと後輩に親身に寄り添い原稿の確認をすべきだったと思うし、

後輩と相談し、何を持っていったら喜んでもらえるだろうともう少し考えるべきだと思った。大きな失敗をしたからこそ、これからの出前授業では準備を丁寧にして、確認をなるべく多くすることの大切さに気づかされた。また、3年生になったときにリベンジをしたいという思いにもなった。

(4) 新型コロナウイルス

私たちは新型コロナウイルスに翻弄された世代だと思う。私たちは入学式後2か月間の休校期間があり、私は同じクラスでは幼馴染ぐらいしか知らなかった。そして、私はマスクで隠された半分の表情を読むことができず苦しんだ。また、どの時も目だけで判断する必要があり名前を覚えることすら苦戦した。また、通常であれば先輩からの部活動紹介があり、どの部活に入るかを決めるがその行事も新型コロナウイルスの感染症予防のため無くなった。

私は、休校期間に新型コロナウイルスのニュースを毎日のように見ていた。新型のウイルスであったため専門家同士でも全然違う意見を言い合っていて、どれを信じたらよいかわからなくなったこともあった。しかし、このウイルスが人をとても苦しめ亡くなってしまう人もいるということが深く分かったのが芸人の志村けんさんの死去だと思う。毎日のようにテレビに出ていた方が亡くなり、国民の考え方がガラッと変わった。それとともに国民全体に悲しみが広がった。私は新型コロナウイルスのニュースの中で医療関係者への誹謗中傷のニュースが印象に残っている。近所の住民からの冷たい目が浴びせられたり、インターネットで叩かれたりする方もいた。私はそのニュースをみてとても心を痛めた。そして、医療関係者の方々は必死に目の前の新型コロナウイルス患者を助けようとし、感染を広げないように努力をされているのに悲しいニュースだと思った。また、そのように人々の考え方を変えてしまう新型コロナウイルスは恐ろしいと思った。

2022年6月8日時点でNHKの特設サイトによると日本全体で約894万人の方が感染し、3万人の方が亡くなられた。たくさんの方が、このウイルスにより命を失われた。自然災害ではないが新型コロナウイルスも一種の災害だと思う。私たちはこの災害で命を失われた方々の分も必死に生きていかなければならないと思うし、命を大切にしていかなければならないと思う。

4 将来の夢

私の将来の夢はフライトナースになることだ。私は小学生のころから小学校の先生や保育士などになりたいという様々な夢があった。学力の面や、その他の面で自分に向いていないと決めつけあきらめてきた。しかし、私のなりたいと思った夢の根源として持っているのが「誰かの役に立つ人間になりたい」ということだ。私は中学生の頃から「誰かの役に立つ仕事」とは命に密接にかかわる病院のスタッフだと思い始めた。そして、私は命の最前線で戦うフライトナースになりたいと思い始めた。フライトナースになるには看護師経験が5年以上かつ救急看護の経験が3年以上必要になる。また、救急看護師としての経験を積みながらACLSプロバイダーなどヘリについての資格も取っていかなければならない。そのため、この夢を叶えることはとても難しいといわれている。フライトナースの仕事内容はフライト要請があるかないかでとても変化する。フライト要請がない日は救急看護師として病院で働き、フライト要請がある日はフライトドクターに同行し行う。限られた医療器具で治療を行う必要があり、とても難しい仕事だ。

しかし、私はこの仕事の一部分で適正があると考えている。それは災害・防災への知識があることだ。私は3年間過去の災害を学び、災害や防災についての知識をつけてきた。フライトナースは大地震や津波、台風、洪水などの災害が起きた時に被災地に医療を提供するという活動も行うので、今までつけてきた知識をいかせられると感じた。高校卒業からフライトナースになるまでに最低でも10年以上の年月が必要のため何も勉強しなければ記憶が薄れてしまうという可能性もある。私は記憶を風化させることが一番いけないことだと思う。だから、日ごろからテレビのニュースを確認し、災害や防災に目を向け続けていきたい。

今までの私は「この仕事は難しいから、違う方面の方が向いている」と家族から言われたり私自身も難しいと感じたりしていたためあきらめてきた。しかし、私はフライトナースになりたいという夢を持ち続けたいと考えている。日本は災害大国と言われていて、いつどのような災害が発生するかはわからない。災害が発生したときに命を救うことができるのは主に医師や看護師だからこそ、私は災害への知識を深めなるべく多くの命を救っていきたい。

5 最後に

私は環境防災科に入り様々な体験ができた。私は人前で話すことが苦手で出前授業で何度も挫折した。

しかし、そのような経験を積んだからこそ後輩が困っているとき、その気持ちを理解することができるようになった。私は舞子高校の環境防災科の志望理由として面接で「フライトナースには周りを見る力が必要だから、ボランティアを通して周りを見ることができる人間になりたい」と言った。その志望理由を完全に達成することができていたら芦屋特別支援学校での失敗はなかったと思う。しかし、周りの人の気持ちを理解できるようになったからこそ人間としてとても大きく成長できたと思う。この3年間で学んだ知識を忘れず私はどのような進路先に行っても様々な方法で未来に語り継いでいきたい。

私は環境防災科に入学し改めて人の命の大切さに気づかされた。1つの災害でどれだけの被害に抑えられるか、またどれだけの命が救われるかを日々考えていくことがとても大切であることが分かった。

「災害を他人ごとにしなさい」という考え方は過去の災害で命を失われた方への最大の追悼になると思う。それゆえ、私たちのように日々防災を学ぶ学科が増えてほしいと思うし、災害を阪神・淡路大震災が発生した日だけに学ぶのではなく、もっと防災の日を増やしていかなければならない。このような考え方に変えることができたことも防災について3年間学んできた成果だと思うし、たくさんの方々から被災体験を聞くことができたからだと思う。そして、今まで私たちに関わってくださった方々にとっても感謝している。

防災に関わること

松若 果歩

1 初めに

阪神・淡路大震災、多くの犠牲者を出した大災害だ。時間が経過するにつれ、風化が進んでいる。この大災害を経験した人は、たくさんいる。そして経験の数はその人の数だけある。環境防災科に入学してから、多くの体験談を聞かせていただいた。この「語り継ぐ」では、私の身近な人の体験談を書く。同じ災害を体験したとしても、1つとして全く同じ体験談はないことを知ってもらいたい。

2 両親の話

私の両親は、震災当時住んでいた場所も体験したことも全く違う。だからこそ、それぞれが震災でどのような体験をしたのか、どのように感じたかなどを知ってもらいたい。

(1) 母の話

震災当時、母は神戸市垂水区に住んでいた。2階の自室で寝ていると、大きな音とともに大きな衝撃があった。最初は「ダンプカーが家に突っ込んできた！」と思ったが、徐々に「いや、これは地震だ」と思うようになった。揺れが続いているときは、ただ布団をかぶることしかできなかったという。地震がおさまると、母は自分の両親・祖父母の安全を確かめようと布団から起き上がった。すると、母の部屋にあった大きな鏡が、倒れて粉々になっていることに気づいた。だが、そんなことに構わず裸足で怪我をすること無く両親と祖父母がいる1階へと降りて行った。両親が家具の下敷きになっているのではないかと心配であったが、幸いなことに母の両親・祖父母ともにけがもなく、全員無事だった。母の両親は、四方八方にある家具の揺れに耐えながら、倒れてこないように手で押さえいていたそう。両親と祖父母の安全確認ができた後に外へ出てみると、パジャマ姿で起きたばかりであろう近所の人達がいた。母の家のすぐ後ろには山があるのだが、その山の向こうから、黒い灰が舞ってきており、空は舞ってくる灰でどんよりとしていた。灰が東側から流れてきていたため、当時の状況を振り返って母は、「須磨のほうも火事がすごかったそうやから、須磨からの灰やったんかもしれへん」と言っている。母の家は、瓦が落ちたり壁にひびが入ったりなど、一部損壊の被害が出た。家の中もぐちゃぐちゃだった。テレビが倒れていたり、落ちた瓦が母の車の上に落ちてきて修理に出す羽目になったりと、被害は家や車にまで及んだ。しかし、ライフラインはすべて通っており、水やガス、電気には困らなかったそう。そのため、家が全壊してしまった親戚が泊まりに来ていたという。

(2) 父の話

震災当時、父は姫路市に住んでいた。その日、(私から見て)祖父が東京に新幹線出張へ行く予定があったため、父は車で自宅から姫路駅へ祖父を送っていた。地震が起きた時も車に乗っていたのだが、不思議と車の中では全く揺れを感じなかったそう。そして何事もなかったかのように祖父を姫路駅へ送って自宅へ帰った。そして、自宅に帰って初めて地震があったことを知った。姫路市は震度4の揺れがあり、近所の人々も揺れで何事かと家の外に飛び出していたそう。当然、神戸で地震があったため新幹線が止まってしまい、祖父は出張に行けなくなってしまった。そしてそのあと、父はもう一度姫路駅へ行き、祖父を迎えに行ったそう。

3 話を聞いて

両親の話の続きになるが、最後に、話し終えた父が「そういえば東の空がなんか赤っぽく光ったような気がするなあ」と言っていた。それを聞いた母が「ええ？こっちは灰で空が黒かったで」と反論していた。この様子を見て、母と父が神戸と姫路で場所が違ったり、被害も体験したことも違ったりするけれど、最近体験したかのように鮮明に覚えていることから、それぞれこの震災に対しての思いがあるように感じた。人生で数回しか体験しないであろう大きな震災だからこそ印象に残っていることもあるだろう。しかし、私が話の内容について質問をした時、あいまいだった答えはあったが、完全に「忘れた」という言葉をインタビューの時に聞かなかった。阪神・淡路大震災のことを大事に思っていないと、最近経験したように鮮明に覚えているということはなかなかないだろう。今回は両親の体験談を聞いたが、機会があれば祖父母や親戚にも震災の話を知りたいと思った。

4 環境防災科に入学したきっかけ

最初のきっかけは、神戸の高校に入学したいという思いだった。自分の能力にあった学校を選ぶこと、通える範囲のうちで遠すぎないことなどで、学校の選択肢はかなり限られた。その中に環境防災科があった。聞いたことがない珍しい学科だと思い調べてみると、災害について学んでいる、阪神・淡路大震災の語り継ぎを行っている、ということがわかった。現在は姫路市に住んでいるが、幼いころには神戸に住んでいたため、阪神・淡路大震災のことはとても身近に感じられた。また、将来なりたい職業が防災や災害に関連していたため、「この学校に入学しよう」と思った。

5 現在の自分にできる防災

(1) 非常用持ち出しポーチ

環境防災科に入学し、様々な知識を得た。その中で、「備えは大事」という言葉を講義や授業で何回も聞いてきた。家に持ち出し用品はあったものの、家族全員が使うことはできないくらいの少ない数しかなかった。何か備えないといけないと思っていた時、防災ポーチを作るという授業があった。ポーチから中身まですべて自分で考えるため、何かと大変なことはあったが無事に完成した。完成した防災ポーチを家に置き、避難するときには必ず持っていこうと目立つところに置いている。

高校2年のある日、普段通り授業を受けていると突然地震が起きた。幸い、何かが壊れたりけがをした人はいなかったものの、実際に体験してみると小さな揺れでも恐怖を感じた。その時、災害はどこで起きるかわからないことを実感した。家に帰り、防災ポーチを見て「家に防災ポーチを置いてても外出しているときに災害が起こったらポーチを持っていくことができない」と考え、ポーチを常に持ち歩こうと考えた。しかし、鞆に入れてみると思った以上にポーチがかさばってしまった。そこで、ストラップ型のポーチに普段から使うものを入れて、それをいつも使っている鞆につけようと思った。それなら鞆に入れる必要はないし、邪魔にもならない。ポーチに入る物の数は少なくなったが、普段でも災害時でも十分使えるポーチが完成した。

私は、災害時だけではなく、普段から活かすことができる防災をすることが大事だと考えている。これからは防災ポーチだけでなく、様々な場面で普段から活かすことのできる防災を取り入れていきたい。

(2) 好きなものと防災

防災教育という言葉を知ると、しっかりした、堅苦しいようなイメージを想像する人が多いだろう。実際、私が小、中学生のときには、防災教育になると緊張感が漂ってみんな黙って話を聞いていた。しかし、私がボランティアに参加してわかったことは、防災は楽しく動きを交えながら勉強することが大事だということだ。私は今まで、出前授業という小学生や小さい子どもに防災学習をするボランティアに何度か参加させていただいた。出前授業では、ただひたすら話を続けるということをしたことはない。どの出前授業でも、必ず動きを入れたり、グループに分かれて話し合いながら授業をしたりと、私が堅苦しいと思っていたイメージとは全く真逆の防災学習だった。実際に教えた小学生や小さい子どもたちは、不安な気持ちを持つことなく楽しく防災を学ぶことができたことで笑顔があふれていた。このことから、楽しく防災を学ぶと緊張感が漂う中で防災学習をするよりも印象に残りやすいということがわかった。そこで私は、防災に自分の好きなものを組み合わせるともっと防災を進んでできるようになるのではないかと考えた。私の好きなものは文房具だ。たくさんの種類の文房具を持っている。その文房具たちを、防災に活かすことはできないか、と考えた。まだ実際に私が文房具を防災に取り入れたことはないが、今まで防災を売りにしている文房具をたくさん見たことがある。防水紙を使ったメモや、水にぬれても壊れにくいペン、台風の時に窓ガラスが割れないようにするための窓に貼るマスキングテープなどがあった。では、日常的に使っている文房具は災害時や防災に使うことはできないか、というとそうではない。防災に向いていないと思われる、日常的に使用している文房具でも防災に活かすことができる。たとえば、筆箱である。私の筆箱の中には、ハサミやサインペン、のり、カラーペンなどが入っている。これらの文房具はいったって普通の文房具なのだが、災害時にはとても重要なアイテムとして使うことができる。ハサミは段ボールやプラスチックの袋があかない時に使うことができ、サインペンは段ボールなどに大きくはっきりと文字を書きたいときに使うことができる。また、シャーペンや消しゴムは、気分転換として絵をかいたり、何かをメモしたいときに使うことができる。このように、好きなものを防災とつなげることで、好きなものの新しい面を発見することができたり、好きなもののことをもっと好きになれたりする。ここで私が言いたいことは、自分の好きなものが何であっても、ちょっとした工夫で防災に活かすことができるということだ。この、普段使っているものを少し工夫することで役立てることができるという考えは、授業

の講義で最も印象に残っている言葉だ。好きなものでなくても、普段使っているものを少し工夫して使おうと思う。

6 避難所での過ごし方 with ペット

私の将来の夢は、高校に入学してから今まで何度も変わってきた。小学生の時から、犬がそばにいる仕事に就きたいと考えており、今までも災害救助犬訓練士、警察犬訓練士など様々な職業に惹かれていた。現在は、盲導犬訓練士になりたいと思っている。

近年、日本では災害が多発しており、避難所生活を余儀なくされる方が多くいる。避難所では、多くの人が共に生活するため、当然何らかのトラブルが発生することが多い。騒音トラブル、プライバシーの問題など、過去の事例を調べてみるとほかにもたくさんの事例がある。中には、ペットのトラブルの事例もある。ペットトラブルの内容としては、鳴き声がうるさい、においが気になる、犬が勝手に歩き回るなどがある。私は、犬に関わる職業に就きたいからこそ、ペットと過ごす避難所生活を少しでも楽にできないかと思った。過去のトラブル事例を見てみると、ほとんどがしつけや飼い主の備え不足だということがわかった。そこで、将来私が盲導犬訓練士になったら、自主的にペットも参加できる防災イベントを開こうと考えている。人だけに限られた防災イベントは今までも多く開かれているが、ペット参加型の防災イベントは聞いたことがない。防災イベントの内容としては、避難所でも日常でも役立つしつけ講座や、犬用持ち出し袋の作成などだ。飼い主もペットも楽しく参加できるような内容にしたい。このような防災イベントがなくても、避難所で生活する時には他の避難している方もいるということを意識して、ペット連れでない人もペット連れの人もお互いに気を使いあって生活することが大切だ。実際、私も犬を飼っているため、犬との避難所生活問題は目を背けられない。最悪の場合、避難所生活におけるトラブルメーカーになりかねない。トラブルメーカーにならないためにも、「自分の備え+ペットの備え」も十分に整えておきたい。

7 震災ごっこ

私は、小さいときによく妹と「震災ごっこ」をしていた。実際に震災ごっこをしていた当時はなんの気なしに、ただ楽しいから、という理由で震災ごっこをしていた。震災ごっこの内容は、小さなドールハウスの人形の家に津波が来る、という設定だったり、大きな地震が来るから避難しようというような内容だったりした。震災ごっこをしていた当時は、何もわからず、またそのように呼ぶことも知らなかった。

環境防災科の授業で、「震災ごっこ」を学習したことがあった。私は最初この言葉を聞いた時、どんなものなのかが全く想像できなかった。また、自分がしていた遊びがそれであるとも思わなかった。この震災ごっこを行う子どもは、実際に自分が被害を受けた子どもに多く、こんなに被害が大きかったんだ、ということを表すためにするのだということを聞いた。私はなぜ「震災ごっこ」をしていたのか、と疑問に思った。私は一度も大きな震災を経験したことがなく、被害を受けたことがない。しばらく考えていると、私が生まれてから、大きな震災が1つあったことを思い出した。それは、「東日本大震災」だ。私は実際に経験していないが、幼稚園児だった私が、幼稚園から家に帰ってくると、ニュースで東日本大震災の津波の映像が流れていたことを思い出した。その映像を母が見て、「あのおじいさん、流される！逃げて！」という言葉で叫んでいたことを覚えている。杖を突いたおじいさんが津波から逃れようとゆっくりと家を出て行ったところだった。津波はおじいさんの遠く離れたところにあったが、おじいさんが逃げる速さと津波が迫ってくる速さを考えると、もう助からない、と思った。この時私は、今、日本国内でこの大きな波が迫ってきて命を奪おうとしているということが想像できなかった。私は不安になりつつも、テレビの津波の映像からなぜか目が離せなくなってしまった。いつの間にか母が叫んでいたおじいさんの姿はなく、代わりに大きな波がこちらに迫ってきていた。「ああ、あのおじいさんは死んでしまったんだ」と、幼いながらも私は思った。今思えば、私は地震を経験していないが、あの津波の映像が流れていた時の私の家のリビングの状況に、自覚はないが恐怖を覚えたのかもしれない。そして、東日本大震災をきっかけに、私は「震災ごっこ」を始めたのだろうと思う。それにつられて、妹も同じように始めた、ということになる。今は私も妹も震災ごっこをしなくなったが、私は東日本大震災の津波の映像を見て、その時に恐怖を覚えたんだ、ということを受け入れながら、これからも過ごしていきたい。

8 最後に

この『語り継ぐ』は、環境防災科生として入学してから今までの締めくくりだと思う。今までの環境防災科の先輩方も、この『語り継ぐ』を執筆してきた。1年生の時から、3年生になると『語り継ぐ』とい

うものを書かなければならないということを聞いてきた。最初それを聞いた時には、「そんなこと私にできるのだろうか」と不安に思っていた。しかし、1年生、2年生、3年生と学年が上がるにつれて「私は今まで多くの震災の経験を聞いてきたから、今度は私が語り継ぐ時だ」と思い始めるようになった。

私たちが環境防災科に入学した際、新型コロナウイルスが流行しており、1学期のほとんどは家で宿題をしたり、自習学習をしたりと、まったくと言っていいほどクラスメイトとかかわりがなかった。また、私は市外から通学するということもあり、全員初対面だったため、宿題や学校のことでわからないことがあると毎回とても不安に思っていた。1年生の6月に、やっと登校することができた時には、想像した通り知っている人が1人もいなかった。もう仲良くしているクラスメイトもいて、この時は、これから3年間同じメンバーで過ごすから早く友達を作りたいと思っていた。しかし、人見知りである私はなかなか自分から話しかけることができず、何日か経っても端の席で、一人で過ごしていた。しかし、ある日のお昼休みに、クラスメイトから、「一緒にお昼ご飯を食べよう」と言われ、初めて会話をするにも関わらず、相手がたくさんしゃべってくれたおかげで楽しく会話することができた。その時、私は3年間、この子と友達として過ごすんだ、ということを実感した。そして、今までずっと仲良く過ごしてきて、その時からずっと友達だ。その友達以外にも、これまでにたくさん友達ができた。私は、新型コロナウイルスが流行しなかったら、もっと早くに友達になれたのに、などと思ったが、新型コロナウイルスが流行したことにより得たことが多かった。

私が思う防災に関わる意味は、第一に自分の身を守るため、第二に大切な人を守ることだと思う。災害時、まず優先的にされるのが、自分の命を守ることだ。まず自分が助からないと、何の行動も起こせないからだ。自分の安全が確認出来たら、そのあとに大切な人の命を守ることができる。私は、そんな人の命を助けることができる防災に関わっていることに誇りを持っている。そのため、これからもなんらかの形で防災に関わりながら過ごしていきたい。

「つないでいく」

柳田 愛実

1 はじめに

私は2004年11月に生まれた。当然、阪神・淡路大震災を経験していない。しかしながら、小学1年生の頃から、毎年1月17日には阪神・淡路大地震について学んできた。初めて当時の被災状況をビデオで見たときには、「家族がいなくなったらどうしよう」と不安になって、泣いてしまったことを今でも覚えている。ビデオで見たような被害を出さないために私にできることは、3年間でたくさんの方から聞かせていただいたお話を、自分事として捉え、それを『語り継ぐ』ことだと考える。災害を経験していない被災者が増えているからこそ、この『語り継ぐ』ということを途切れさせてはならない。

2 阪神・淡路大震災当時の母の話

(1) 当日の朝

激しい揺れにたたき起こされて、死の恐怖を感じた。薄暗い中、外に避難した。神戸市兵庫区に住んでいたため、ビルが燃えていたのが見え、火の粉が飛んできた。近所の人も外に出ていて、車のラジオを大音量で流してくださり、地震発生のニュースを聞いた。しばらくは何が起こっているのか分からず、動揺していたが夜が明けるにつれ、事の重大さが理解できた。

(2) 職場の様子

母は、兵庫区の総合病院で看護助手の仕事をしていた。当日病院に行くと、入院患者さんは大きな混乱はなく、落ち着いていた。病室のテレビや物が床に落ちていた。外来には時間が経つにつれ、ケガをした人がたくさん来院するようになった。病院の玄関に入ってすぐの吹き抜けのある大きなロビーの総合受付には、たくさんの医者が出て、いろいろな場所で負傷して処置してもらうために来た人の長蛇の列ができていた。普段は診察室で1人ずつ診察しているため、その光景は野戦病院のようだと感じた。

お昼過ぎごろ、お父さんに抱かれた小学校低学年くらいの女の子が運ばれてきたが、その後すぐに両親が子供の名前を呼びながら、泣いている声が聞こえた。現実には起きていることが受け入れられず、ショックを受けた。

電気はついてしたが、水は止まっていた。給水車が病院前に来るようになり、病院関係者や近所の人々が並んで水を貰っていた。何度も何度も貰いに行かなければならなかった。食事が作れなかったため、入院患者さんも、始めはパンだけで、その後はお弁当を食べる生活が続いた。電気がついて物資が運ばれてくる病院の外来の廊下には、家に住めなくなった人たちがしばらく住んでいた。

(3) 震災後の生活

母が住む兵庫区の家は、電気は来ていたが水は止まっていた。水は1か月ほど出なかったため、お風呂は週に1回、知り合いの須磨区の家や母の実家に入りに行っていた。お店も空いていなかったし、仕事で買い物に行く時間もなかったため、病院に届くお弁当を毎日毎日食べていた。また、バスや電車が止まっていたため自由に出かけることが難しかった。

少し落ち着いた頃、友人とバスで大阪まで行くと、大阪の人は何不自由なく普通に暮らしていた。神戸の人は皆、リュックを背負って列に並び一生懸命生きていた。大阪がキラキラした色に見えて、神戸がグレーに見えた。

3 阪神・淡路大震災当時の父の話

(1) 当日の朝

当時、父は神戸市北区の実家に住んでいて、すでに働いていた。朝起きると凄い揺れに襲われ、「死んでしまうのではないかと」思った。揺れている時間はそこまで長くなかったが、父の中ではとても長く感じ、横揺れと縦揺れがとても強く、怖かった。

(2) 職場の様子

電気やガスなどが使えなくなったが、北区はそこまで被害が大きくなかったため、地震が発生した日

か、その翌日には復旧していた。そして、地震発生の翌日から父は出勤した。

普段は電車で出勤するが、電車が止まっていたため、しばらくの間は車で出勤していた。普段なら1時間ほどで着く会社には、公共交通機関の乱れの影響で2時間くらいかけて出勤していた。途中で通る道は陥没しているところが多かった。また、会社での毎日の昼食は、缶詰とおにぎり1つずつが配られていた。

(3) 震災後の生活

北区はそこまで被害が大きくなかったことから、父の会社の人や、祖母の友人が父の実家にお風呂に入りに来ていた。

4 父と母の話を聞いて

父と母から話を聞いて1番に思ったことは、勉強することや遊びに行くこと、毎日ご飯を食べていることなどは、決して当たり前ではないということだ。何事もなく生活できている毎日に感謝すると同時に、母の作ったご飯を毎日食べていることや、父と毎日話せていること、すべてに感謝したいと思った。

今まで、父と母に震災当時のことを深く聞いたことがなかった。なぜなら、聞いても「そこまで大きな被害がなかったから…」と言われていたからだ。だが、『語り継ぐ』を書くことになり「それでもいいから話を聞かせてほしい」とお願いすると、真剣に答えてくれた。「大きな被害がなかった」と聞いていたが、私からすれば父と母の体験は大きな被害だと感じた。

地震発生翌日には仕事をしていたと聞いて、自分のことや家族のことで不安だったはずであるにもかかわらず、父も母も強いと思った。もちろん、父と母だけが仕事をしていただけではない。たくさんの人が自分や家族のことは後回しで仕事をしていたことが、当たり前かも知れないが、すごいことだと思った。

父と母が阪神淡路大震災で助かったからこそ、今の自分がいる。毎日何不自由なく生きていることに感謝しながら、これからも生きていきたい。

5 環境防災科

(1) きっかけ

入学しようと思ったきっかけは2つある。1つ目は、中学3年生の夏、オープンハイスクールで環境防災科を見学したときのことだ。私は、先輩方が大勢の人の前で堂々と話をしている姿を見て驚いた。それと同時に、「私も先輩方みたいに、人前で堂々と話せるようになりたい」と思った。

2つ目は、同じ塾に環境防災科に通っている先輩がいたことだ。その先輩に「幼稚園教諭になりたい」という話をしていると、「環境防災科では出前授業をしている」と言って、出前授業について詳しく教えてくれた。子どもと話をしたり、遊んだりすることが好きな私にとって、とても興味深いことだった。

そこから、環境防災科について調べてみると、出前授業のほかにも東北訪問や、募金活動など様々なボランティア活動があることを知った。私は、中学校の頃にボランティア委員に入っていて、人の役に立つことが好きだった。この理由から、環境防災科に入学してもっと人の役に立ちたいと思った。

(2) 入学後

私は無事、舞子高校環境防災科に入学することができた。コロナ禍での制限もありながら、たくさんの出前授業やボランティア活動に積極的に取り組んでいる。その中でも2年生の冬に訪れた東北訪問は特に印象に残っている。本当であれば1年生の夏に行くつもりだったが、新型コロナウイルス感染症の影響で現地に行くことができなかった。2年生になり、新型コロナウイルス感染症も終息することがなく、「東北訪問にはもういけない」と諦めていたが、参加することができた。

ほかにも、たくさんの出前授業に参加した。事前準備から、同級生や先輩、後輩と授業内容を考え、学年や年齢に合わせた授業を行っている。なかなか相手の学校の要望に沿ったいい授業を考えることができず、苦戦することも多かったが、授業時の小学生や中学生が楽しみながら学んでいる姿を見るたびに、「頑張って準備してよかった」という気持ちになれた。

(3) 東北訪問

東日本大震災から11年たった大川小学校を自分の目で見ると、今まで映像で見てきたものは全然違った。当時のままの校舎や机、運動会で使われていた用具など、生徒が当時使っていたものがたくさん残っ

ていて、確かにそこに児童はいたのだと実感した。実際に裏山に登ってみたが、すぐに登れるし、低学年の児童も高学年の児童と手をつなぎながらであれば、すぐに登れていたと思う。裏山から大川小学校を見ながら、佐藤敏郎さんが「学校が生徒の最期の場所になってはならない」と話をしてくれたことが印象に残っている。子どもも先生も毎日普通に学校に通って、普通に授業をして、それまでに避難訓練もしていたのに助からなかった。想定外のことを想像できていなかったからだ。もし、避難訓練をするときに誰かが「ここにも津波が来るかも」と話をしていたら、助かっていた命はあったかもしれない。佐藤さんの言葉で大川小学校の話聞いて、想定外のことにでも対応できるようにしないといけないと深く感じた。大川小学校のような被害を出したくない。私は出前授業などに行かせていただいている。これからも出前授業などの機会でも語り継いでいきたい。

6 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は幼稚園教諭になることだ。子どもが好きで、得意なピアノを活かせる仕事は何だろうと考えていたとき、中学2年生のトライやるウィークがあり、幼稚園に行くことを選んだ。その幼稚園の先生方が、子ども達に対して優しく、笑顔で接している姿を見て、「私も将来、子ども達を笑顔にすることが出来る幼稚園教諭になりたい」という目標を持つようになった。

(2) 防災教育

私は東北訪問で日和幼稚園の話聞いた。当時の日和幼稚園では地震直後、亡くなった5人を含む12人を乗せたワゴン車が幼稚園を出発した。門脇町や南浜町方面に住む7人を門脇小学校の近くで降ろした後、運転手が津波警報に気づき、幼稚園に引き返す途中、津波に巻き込まれてしまったという話だ。私は、高校で防災について学んできた。将来は子ども達が、自分の命を守るための教育の充実や、先生や子ども、保護者の防災への意識の向上を図りたい。そうすることで、地震が発生した時に1人でも多くの命を救えると考えている。私が幼稚園教諭になって見直したいことは2つある。1つ目は避難訓練だ。ただグラウンドに避難するだけではなく、近くに高台があるならそこまで逃げたり、高台へ逃げる必要があるのならば、事前に「地震が発生したら〇〇の高台に逃げます」という連絡を保護者にしたりする必要がある。また、この避難訓練は子ども達だけがするものではない。保護者や先生、地域の人も一緒にすることで、コミュニケーションをとることもでき、地震が発生したときに共助を行うことができる。2つ目は防災かるたや防災絵本を使った防災教育をすることだ。遊びを交えながら防災教育をすることで子ども達の頭に入りやすいのではないかと考えた。また、小さいうちから防災教育をすることで防災について考えることが当たり前になり、子ども達でも自分の命を自分で守ることができるのではないかと考えたからだ。

いつ地震が起きてもいいように、環境防災で学んだことを活かして防災教育とは何か、子ども達の記憶に残る防災教育とは何なのかをこれからも考えていきたい。

(3) これから

私は今まで、防災教育は子どもだけにしておけば十分だと思っていた。だが、日和幼稚園の話や大川小学校の話聞いて、子どもだけが必死に頑張っても無駄なのだと感じた。当時の大川小学校はたくさんの児童や近隣に住む方が「裏山に逃げたほうがいいのではないか」と思っていた。しかし、先生の判断により、子どもたちは不安な中、津波が来る少し前まで待機させられていた。もし避難訓練をする際に、そこまで想定できていたら、もし先生がほかの人の話を聞いていたら、助かった命はたくさんあったはずだ。このような被害を出したくない。同じ環境防災科で学ぶ生徒の中に、私と同じ教諭を目指す仲間がいる。その仲間と協力しながら、どのような避難訓練がいいのか、どのような防災教育をするべきなのかを考えたい。卒業しても協力し合えるような関係を今からも築いていきたい。

7 新型コロナウイルス

私たちの学年は入学する時から新型コロナウイルス感染症が流行していた。だから、みんなと顔を合わせる時期が遅かったし、結局3年間ずっとマスクを着けたまま生活をしている。それが当たり前になってきているが、新型コロナウイルス感染症が流行していなかったらもっとできたことがあった。例えば、地域でのお祭りだ。私が小学生の時、地域のお祭りに高校生が来ていた。その姿を見て、お店屋さんごっこにはまっていたこともあり、「私もしてみたい」と思っていた。そこから、環境防災科に志望することを

決めて、いろいろ調べていく中で、地域でのお祭りに参加できることを知った。そして入学した私は、多聞東地区の地域リーダーになった。先輩や地域の方から、お祭りのことを聞くと、とてもうらやましく思っていた。高校生活の3年間でお祭りに参加することはできないと思う。けれども、地域でのかかわりを大切にしてきたからこそ、卒業してからでも、自分の地域のお祭りや多聞東地区のお祭りにボランティアで参加したい。

8 最後に

私は、阪神・淡路大震災のような大きな災害を体験したことがない。そんな私にできることは、今執筆しているように『語り継ぐ』ことだと思う。舞子高校で行われた震災メモリアル行事で、asari さんが「いろんな人に私の被災体験を話してほしい」と言っていた。今までの私は、「自分が体験したわけではないのに、話しても大丈夫なのだろうか…」という気持ちが少し残っており、出前授業などで話すときに少し心がもやもやしていた。だが、その言葉を聞いて心がほっとした。それと同時に、「もっといろんな人に伝えて、同じような被害を出さないようにしたい」と思った。

今の自分にできる『語り継ぐ』ということ、高校を卒業しても続けていきたい。そして、その話を聞いた人が備えをしたり、大きな災害が起こった時に私の話を思い出してくれたりした時に、私たちが語り継いだ意味があると思う。1人でも多くの人の命を救うために、これからも語り継いでいきたい。

つなぐ

山口 夢摘

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、多くの方の命と日常生活を奪った阪神・淡路大震災。一瞬にして変わってしまったまちの姿。震災を経験していない世代が増えたなか、あの日を忘れないために私たちに何ができるのか。震災を風化させないためにどんなことができるのか。過去の災害を学び、聞いた当時の貴重な話を教訓として語り継ぎたい。

2 垂水区で被災した母の話

最初、夢だと思った。花瓶が倒れてきて、何が起こったか理解できなかった。目が覚めて窓の外を見たがまだ暗く、時計を見るとまだ朝の5時だった。家族の無事を確認し、とりあえず外に出るとみんな出てきて車に乗って避難していた。1時間後、落ち着いたと思いつと空を見ると真っ黒だった。その時は何かわからなかったがあとでニュースをみて煤だということが分かった。

夜になる前にコンビニエンスストアに行くと、今まで見たことがないぐらいの人で溢れていた。食料と必要なものを買って帰った。水道とガスは使えなかったが電気は使えたためご飯はホットプレートを使って準備した。家自体に被害はなく、その日は家族と家で過ごした。何度か余震もありその日は家族全員、同じ部屋で寝た。神戸市西区の知り合いのところは水が出ていたため貰いに行った。お風呂は2日ほど入れず名谷のマンションに住んでいた親戚の人にタンクの水を貰いお風呂に入った。

垂水区では被害がそこまで大きくなかったため3日ほどで水道が復旧した。しかしテレビでは毎日長田のまちのニュースが流れてきて同じ県内で起こったことと思えなくてとても怖かった。

3 母の話をきいて

私の母に話をする前に「あんまり覚えてないかも」と言っていた。しかし、私が思っていた以上に細かく話してくれた。震災を経験していない世代が増えるなか、実際に経験した母からの話はとても貴重なものだと思った。あの日の出来事は忘れたくても忘れられないことなのだった。母の話を聞き、地震による被害は小さくてもたくさん苦労したことを知ることができた。揺れが落ち着いてすぐに食料を確保しにコンビニエンスストアに行く判断をした祖父はすごいと思った。私も祖父のように冷静な判断ができる人になりたいと思った。

また近所の人同士で助け合うことだけが共助だと思い込んでいたが、離れたところに住んでいる人との助け合いも共助だと思った。同じ地域に住んでいるからこそ同じ気持ちを分かり合えるが、少し離れているからこそ自分の住む地域と状況が違い、助け合えることもあると知ることができた。

4 知人Aさんの話

神戸市垂水区に住んでいた。地震がきた瞬間にAさんの母はお風呂を洗い出し、お風呂いっぱい水をためた。マンションだったため地震直後は水が出た。10時にはライフラインがすべて止まった。飲み物の確保をするためにマンションの下にある自動販売機に行くときすでにたくさんの人が並んでいた。並んでいる間に空を見上げると赤と黒の見たことがない空の色だった。

Aさんの母の兄が長田に住んでいたため様子を見に行こうとしたが、火事がひどくようやう行けたのが1週間後だった。1週間たっても火事はまだ続いていた。家は全壊で体育館に避難したそうだ。避難所でご飯をもらうとき、好き嫌いをすると近くにいたおじさんに「もらえるだけありがたいと思え」と怒られた。また、近所の方が集まり生き埋めになってしまった人の救助をしていた。がれきから出そうと手を引っ張ると腕や足がバラバラになった。

Aさんの叔母の様子を見に東灘に行った。家の片づけを手伝ったり、段ボールをはったりした。小学校に行くと食べ物が溢れていた。地震発生から2週間後にやっとお風呂に入れた。それまでは水のいらないシャンプーで体を洗っていた。自衛隊のテントに20人ぐらいが並び1人何分と決められてお風呂に入った。

5 Aさんの話をきいて

私は地震が発生してすぐお風呂に水をためるという判断をしたAさんのお母さんがすごいと思った。

Aさんはお母さんの行動が最初は理解できなかったそうだ。しかし、実際お風呂にためた水のおかげで生活できたそうだ。私も率先して行動できるようになりたいと思った。地震による被害が大きい地域では食料や水の支援がしっかりされていたが、被害がそこまで大きくないところにはあまり支援が行き届いていないことを知った。被害が大きいとニュースや新聞で報道され、支援することができるが、少しの被害だとメディアに取り上げられないため支援することが難しい。それゆえ、私は支援する側のときには、ニュースや新聞などの情報だけでなく、実際に調べ自分の目でみて支援することが大切だと思った。

Aさんの母のお兄さんが体験した長田での出来事をきいて私は頭から離れなかった。実際自分が同じ状況にいたときに落ち着いて救助することはできないと思った。人を助けたいとは思っていても実際に体を動かして人を助けることはすごく勇気がいるものなのだと思った。

また震災後、もともと5千円だったものが1万円で売られたなどかなり物価が上がったそうだ。しかし「買わなければ困るものばかりだったため買うしかなかった」と聞き、もっと被災者の方が生活しやすくなると思った。この阪神・淡路大震災がきっかけで携帯電話が普及したそうだ。

6 環境防災科

環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、幼稚園の頃から地域のイベントなどで環境防災科の方のボランティアをしている姿をみて、「私もこんな風になりたい」と思ったことだった。しかし、環境防災科に入学し、いろいろな方からの講義やたくさんの災害を学ぶなかで、自分の特技を誰かのために活かしたいと思うようになった。

自分には何ができると考えたとき、災害後の心のケアだと思った。私の特技は絵を描くことと弾き語りをすることだ。直接災害に関わることはないが、この特技で少しでも人の役に立つことができると思った。耳が不自由な方には絵で、目が不自由な方には音楽で、震災後の心に大きな傷を負った方を少しでも元気にしたい。

授業内で将来の夢ややりたいことを話す機会が多かったが、最初は自分の夢を話すことに抵抗があった。「もしかしたら否定されるかもしれない」と思うようになってしまったからだ。しかし、クラスみんなから「絶対なれるよ」「一緒に頑張ろう」などの声掛けをもらい自分の夢を話す抵抗がなくなった。災害後被災者の方が一人で抱え込まないでよいようにしっかりと相手の話を聞き、自分が励ましてもらったように人を励ませるような人になりたいと思った。

また、環境防災科に入ってから防災について敏感になった。今までだと家具の配置や持ち出し袋の中身をそこまで確認することはなかったけれど、環境防災科に入ってから動きそうな大きな家具をしっかり固定したり、持ち出し袋の中身がしっかりそろっているか確認したり、非常食の消費期限が過ぎていないかを確認をしたりするようになった。最近では便利なグッズも増えているため持ち出し袋の中身を入れ替えたり、最小限に減らしたりと定期的に確認し、災害時少しでも快適に過ごせるように準備している。

防災も重要だが、減災も同じぐらい重要だと思った。減災とはある程度の災害を想定したうえで被害を少しでも減らすことだ。災害を「0」にすることができないからこそ減災が大切だと思った。また、防波堤などのハード面ではなく、避難訓練などのソフト面を中心にしていく必要があると思った。例えば、防災教育を普及し防災・減災をもっと身近なものにする必要があると考えた。

7 夢と防災

私は将来、デザイン関係の仕事に就きたいと考えている。デザイン関係の仕事に就こうと思った理由の1つは出前授業で、相手に伝わるように絵を描いたり文字の色を考えたりするうちに、デザインに関わった仕事に就きたいと思うようになった。はじめは写真でも伝えることはできると思った。しかし、出前授業に行き自分より年下の小さい子に私が見てもかなりショッキングな写真を見せて大丈夫か、防災を学ぶための機会なのに恐怖心や、トラウマを与えてしまうかもしれないと考えるようになった。

そこでイラストを用いて小さい子に恐怖心や、トラウマを与えずに伝えたいことだけを簡単に伝える方法を用いようと思った。また、イラストを描くときに「まずどこを一番に伝えるか」、「伝えたいか」を考えるため、自分でも災害をよく知っておく必要がある。そのために、自分自身で学びながら人に伝えていきたい。写真をそのままイラストにしても意味がないため、イラストを描くためにもっと技術をあげたい。また、震災前には防災訓練や持ち出し袋の中身などをポスターにイラストを描いて多くの方に防災に少しでも興味をもってもらえるようなデザインを目標にしたい。

震災後は、心のケアや語り継ぐ活動などたくさんのことができる。例えば震災後、心に大きな傷を負った方にほっこりするような絵を描きながらコミュニケーションをとることで、なかなか人には言えな

ったことが言えてすっきりすることがある。また、避難所では小さい子と一緒に絵描きをすることでお母さんがゆっくり休む時間を作ることができる。過去にあった震災を風化させないためにイラストや漫画にして伝えることができる。

災害との直接的な関わりはないが防災に関わっていくことはできると思った。また、職業では災害と直接関わりはなくても地域に住む者として全く関係がないわけではないので、環境防災科に入ってから学んだことをいかしたいと思った。地域のことになると大切なのは自分一人で行動するのではなく地域の問題として市民の方と意見を交換することだと思った。阪神・淡路大震災のときは、公助ではなく自助や共助で助かった人が多かったため自助、共助の大切さも広めていきたい。

8 ボランティア

(1) 募金活動

募金活動ではただ「募金お願いします」というのではなく、事前に調べ被災地の状況なども説明した。学校名や何のために使うかを明白にすることでいろいろな方が募金に興味を持ってくれた。「募金お願いします」の声が小さいと歩いている人はチラッと見るだけで募金をしないけれど、大きな声で元気よく言うことでたくさんの方が募金してくれた。

最初は、駅前で大きな声を出すことが恥ずかしかったけれど募金をしてくれた方から「頑張ってるね」と励ましの言葉をもらい、もっと頑張ろうと思えた。募金活動をしてみて、募金活動はお互いに支えあってこそできることなのだと思う。

(2) 出前授業

1年生で行った出前授業は緊張してうまく話せないことが多く、実際に人に伝えるという大変さを知り、最初は反省点ばかりだった。大事なことを相手に伝えるためにはまず自分が知識をつけること、そして理解を深め自分の言葉でわかりやすく表現することが大切だと感じた。

また、相手の年齢に応じた話し方、内容が大切だと思った。小学生が相手の出前授業では話すだけでなく、わかりやすくイラストを描いたポスターを用いたり、クイズで楽しく学べるようにしたりといろいろな工夫を入れた。授業が終わった後に「わかりやすかった」「楽しく学べた」と言ってもらい、次も頑張ろうと思えた。

9 新型コロナウイルス

私たちは入学してからすぐ新型コロナウイルスによる感染症の拡大を抑えるため学校が休校になった。最初の1週間は学校に行かなくていいという喜びがあった。しかし、テレビから聞こえてくる感染者が増えたニュース、少しずつ延びていく休校期間に少しずつ不安を感じた。友達に会いたくても会えない、遊びに行きたくても行けないという状況を初めて体験した。6月中旬頃から学校が再開されいつもの日常に戻ったと思ったが隣の席の人とは1m開けたり、昼食は前を向いて無言で食べたりいろいろなことが制限され元の生活に戻ったとは言えなかった。あらためていつも過ごしている日常が当たり前なことではないのだと感じさせられた。

新型コロナウイルス感染拡大が心配されるなかでの避難所の運営は大変だ。3密を避けたり間隔をあけたりとただでさえ人が集まる避難所では難しいことばかりだ。また、他県からボランティアがかけつけることも厳しくなり復旧や復興も遅れる。新型コロナウイルスは私たちの生活様式を大きく変えた。しかし、新型コロナウイルスは悪いことだけではない。インターネットを使い、いろいろな方と交流ができるようになったり、家にいる時間が増えたため家族と話す機会が増えたりした。私は休校期間にいろいろなことに挑戦し新しい趣味を見つけることができた。新型コロナウイルスは災害と一緒に悪い面だけでなく良い面もあることを知った。マイナスの面だけを考えるのではなくプラスの面を考える大切さを知った。

10 感想

私は『語り継ぐ』を執筆する機会がなければ、母が震災当時どのようなことをしてどんな気持ちだったのか知ることができなかった。被害は小さくとも28年たった今でも記憶に残るぐらい人々に大きな影響を与えたのだと改めて考えさせられた。私は阪神・淡路大震災を経験していないが震災を風化させないために過去の教訓を忘れず震災を知らない世代に伝えていくことの大切さを知った。

初めは震災を経験していない自分が語り継ぐことに違和感があったが、経験者からの貴重な話を語り

継いでいくことは大切なことだと思った。震災のことをひとりひとりが知ることで他人事を自分ごとに考え、より防災、減災に取り組めると思った。まずは防災に興味を持ってもらうことが大切だと思った。情報社会である現代ではいろいろなことは調べるとすぐに出てきてとても便利だがその情報が本当に正しいとは限らない。デマやフェイクニュースがまわっていることがあり間違った知識をつけないために情報を見極める必要がある。災害時は多くの情報が必要になる。間違った情報に翻弄されないように情報発信には気を配りたい。

私は、卒業したら人のつながりやコミュニケーションを大切にしたい。将来の夢を実現させるためには、まず人の話を聞きたい。自分一人では何もできないため、人とのつながりや、コミュニケーションを大切にしたい。そのためには、今からいろいろなボランティアや地域のイベントに進んで参加し、いろいろな年齢の人と初対面でもしっかりと話せるようになりたい。また、障害のある方や外国人、高齢者など災害時に災害弱者といわれる方とのコミュニケーションをとりたいと思った。日本語がわからない、耳が聞こえない方とのコミュニケーションは難しいが自分の特技である「イラストを描く」という特技をいかして、災害時に災害弱者の方だけが避難に遅れてしまうということを減らしたい。

未災者にできること

山村 俊介

1 はじめに

今から 28 年前の 1995 年 1 月 17 日 5 時 46 分に未曾有の大地震が神戸を襲った。私はその大地震を経験していない。私は小学生のころに初めて阪神・淡路大震災のことを知った。その時は、まだ地震について関心があり無く、まさか自分が舞子高校の環境防災科に入るとは思いもしていなかった。震災を経験していない若い世代が関心を持たないと震災の記憶は風化していく一方だ。それに加え、近いうちに南海トラフ巨大地震という巨大地震も発生すると言われている。だからこそ、これ以上同じことを起こさないためにわたしは未来へと語り継いでいく必要があると思う。

2 阪神・淡路大震災当時の話

(1) 母の話

母は当時 24 歳で看護師として働き始めて 3 年目だった。自宅は JR 塩屋駅から徒歩 3 分ほどの古いハイツに独り暮らしをしていた。たまたま休みの日だった母はいつものように寝ていると初めはゆっくりとした揺れで目が覚めた。するとすぐに大きな揺れがきて、上から下に投げつけられるような感覚があった。それと同時に大きな音がした。おそらく地震の影響で起きた何かだろう。幸い怪我は無く、台所に行くと、大鍋の中に入っていたかす汁が床に散乱していた。そして冷蔵庫は横倒しになり、リビングではシャンデリアのガラスが割れていた。床にガラスが散乱していたので母は靴を履いて家の中を歩いた。母は地震を経験したことがなく、その時も地震だと思っておらず、地崩れか何かだと思っていた。外に出ると隣に住んでいた大家さんが出てきてくれて、無事を喜んだ。大家さんの家は古い洋館のような造りでステンドグラスの窓は全て割れ、壁は一面剥がれていた。とりあえず買い物に行かなければと思った母は外に出ると、家の横が異様に明るいことに気づいた。それは家の横にあったブロック塀がすべて下の道に倒れていたからだった。下の道に駐車していた車はブロック塀でボコボコにへこんでいた。家に戻ったのは朝の 8 時頃で、母の父（祖父）から安否の電話がかかってきた。

その後は仕事も休みなので家の掃除をして、ガスが通っていないのでカセットコンロでお湯を沸かし、カップヌードルを食べた。その時にカセットコンロのありがたみを知った。独り暮らしでは情報がなく、とにかく不安だった。その日はあまり救急車も走らず、町にはガスの匂いが漂い、異様に静かで不穏な空気だった。次の日は仕事があり、勤めていた須磨の病院に行こうとしたが電車も動いていないので隣人に自転車を借りて須磨の病院に行くことにした。通勤の途中の道は家がたくさん倒れておりすさまじい光景だった。

病院につくと、そこは怪我や避難してきた人であふれていた。病院はボイラー室が壊れており、暖房も使用できないので、最低限の電気だけを使っていた。職場に行くと同僚の人たちはとても感謝してくれた。無事の連絡もなく、とても心配していたという。着替えもできないのでダウンとジーパンで仕事をした。ちょうどその時は地震から 24 時間ぐらい経過しており、そこからはまるで医療の戦場だった。昼を担架代わりにして亡くなっている方に家族が縋り付きながら助けてくれと言っている人や、全身ガラスだらけの人などたくさんの人に出会った。生き埋めになって命は助かったけれど、骨折など骨に怪我を負った人が多かった。入口は自動ドアではなかったので処置中に窓をノックされて「病院はやってますか？」と聞いてくる人もいた。病床も限られているので、患者さんが溢れてくるとリハビリ室に移動した。リハビリ室の隣のバスルームは遺体安置所にされ、すでに亡くなった方が運びこまれていた。運ばれた人数は 40 人ほどに及んだ。母は独り暮らしで独身であり、身の周りに怪我した人もおらず直接の心配はなかったが、職場では家族が亡くなった人もいて、仕事ができる看護師だけで仕事をひたすらまわした。

地震から 3 日目の日に潰れた家から 80 代のおばあさんが救出された。脱水症状を起こしていたが、意識ははっきりしていた。その潰れた家の前で、おばあさんの息子たちが焚火をして「お母さんはもう死んだんやろなあ」という話をしていたのをおばあさんは全部聞いていたという。「まだ生きているのに吊いしてくれたわ」とおばあさんは笑っていた。

病院では調理室が使えないので簡易的な栄養ドリンクを何人かで分け合うなどの日常が続いた。そんな日が続く中、明石に住んでいる方などが差し入れをしてくれた。和歌山の漁師さんも船でタオルなどの支援物資を運んでくれて、海鮮丼のようなものも届けてくれた。母はボランティアにとっても感謝をした。

ある日、母はフランスの新聞記者にインタビューを受けた。何が足りないかと新聞記者に聞かれ、人手も薬も足りないし、最小限の治療しかできないと答えた。須磨消防から次々とけが人の受け入れの電話が来るが、断われる状況でもないので全て受けていた。

また違う日の救出活動では若いお母さんの足の上に屋根がのしかかり、足が切断されて亡くなっていた。幸い5歳ほどの子どもは助かっていて、「お母さんは？」と聞くので母は「いるよ」と言った。子どもがオレンジジュースを飲みたいと言うので口を濡らす程度に飲ませてあげると、途端に安心して意識を失った。プロパンガスのおかげで調理室の使用が可能になり、おかゆなど簡単なものしか作れなかったけれど温かいごはんにありつけたのはとてもありがたかった。怒涛の1週間だったがそのなかでも余震が何回も続いた。母は32時間働いて8時間睡眠を取り、また32時間働くという繰り返しを4か月続けた。そのうち生き埋めが原因で亡くなってしまう方などの数は落ち着いたけれど、持病を持っている方で薬がなくなってくるため、病気が悪化していく人が多くいた。肺炎になる方や、喘息がひどくなったりする人もいた。そういったことが春の3月ぐらいまで続いた。4月になると次は自殺をする人が増えてきた。母は自分にできることならば基本的になんでもしようと考えていた。

(2) 父の話

震災当時、父は大学生で実家（神戸市垂水区）に住んでいた。実家の2階でいつものように寝ていた父は、突然誰かに激しく体ごとゆすられていると思ったらしく、飛び起きた。しかし、揺れ自体はあまり長く続かなかった気がした。父の家は幸い激しい損壊も無く、家族全員が無事だった。しかし、食器棚は倒れていて、家の中は乱雑としていた。状況を理解できていなかった父は大学のテスト前だったこともあり、いつものように大学に行こうとすると祖父に「電車なんか動いてないよ」と言われた。幸運にもテレビが点いたので、ニュースを見て初めて事の重大さを感じた。

テレビではどのチャンネルでも地震のことを報道していた。それがちょうど昼頃のことだった。あまり被害が激しい地域ではなかったが、車で5分も走れば倒壊している家もたくさんあった。西宮北口駅あたりからは電車が動いているという噂を聞き、祖父に倒壊した家が少ない道を選びながら、車で西宮北口駅まで送ってもらった。そこからは電車が動いていたので、大阪の大学でテストを受けた。大阪の大学はいつもとなにも変わらずに授業を行っていて、父はすこし憤りを覚えた。1週間ほどはずっと地震を報道していた。テストを受けた後は電車も当然動いていないので大阪の曾祖父の家に1か月ほど居候していた。

3 話を聞いて

私は今回初めて両親の震災体験を聞いた。今までの環境防災科での活動でたくさんの人の震災体験を聞いてきたけれど、自分の両親の震災体験を聞くのは何か不思議な感覚があった。今まで一緒に暮らしてきて何も思わなかったけれど自分の両親もあの阪神・淡路大震災を経験していると考えるとあまり信じられなかった。しかし、話を聞くと今まで聞いてきたどの震災体験よりも当時の様子を想像することができた。

母は看護師としての目線から当時の様子を語ってくれた。母から聞く話は自分が思っていたものより数倍苦しいもので生々しかった。それと同時にそんな状況でも休むことなく人を助け続けた母や医療従事者を改めて尊敬した。母の話から備えをしてもそれを超える被害が起こる可能性もあるので予測を立てて備えをすることの重要性を感じた。また、備えを超える被害がでってしまったときにこそボランティアが必要だと思った。助けられる命は助けられたのに、その後の支援物資などの問題で持病が悪化し、亡くなってしまう方や、精神的に追い詰められて自殺をしてしまう方が地震から時間が経つにつれて増えてくることはこれから考えていく必要があると感じた。一度助かった命が、地震後にもなくなってしまうほど地震が私たちに与えた影響は大きいのだなと思った。

父は大学生の視点から話をしてくれた。父の家はあまり損壊がなく家族全員無傷だったけれど、そのことがどれほどありがたいことだったか母の話聞いてからとてもよく分かった。父は電車が西宮北口駅あたりから動いているという情報を得ることができたから大学に行けたが、その情報を得ることができていなかったら当たり前だが大学には行けていなかった。災害時では素早い情報収集と、その情報が嘘か本当か見極める力が必要だと思った。神戸は地震で大変なことになっているのに、大阪の大学では通常どおりの授業が行われていて、父は少し憤りを感じたという話を聞いて、普通のことかもしれないけれど私にもその気持ちは少しわかる気がした。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、大きく分けて2つある。1つ目は兄の影響だ。環境防災科の15期生として卒業した兄からは、環境防災科の話をたくさん聞いてきた。ボランティアの話や舞子祭の話、友達の話などそれはどれも楽しそうなものばかりだった。ちょうど進路に迷っていた私はそんな楽しそうな兄の姿を見て、私も舞子高校の環境防災科に入りたいなと思った。

2つ目は、ボランティア活動など環境防災科でしか学べないことがたくさんあると思い、それらは社会に出た際の大きな財産になると考えたからだ。災害時にはもちろん、環境防災科で得た知識を生かして何をするべきかが明確に判断できるようになり、ボランティア活動にも3年間の経験で積極的に参加することができるようになると思った。社会にでて仕事をする時には3年間で培った自主性が役に立つと考えた。また、自分の長所に自信がなかった私は環境防災科に入るとボランティア活動などを通して自分の新たな長所を見つけられるのではないかと思い、舞子高校の環境防災科に入学した。

(2) ボランティア活動

私は中学の時からあまり人前に立つことは得意ではなかった。私が参加してきたボランティア活動は、防災ジュニアリーダーなどのような表にたってみんなを引っ張っていくようなものもあれば、避難訓練の運営や地域のイベントの準備などの裏方の仕事もやってきた。その両方のボランティア活動を経験することで新たに気付いたことが2つある。

1つ目は表に立つ仕事が全てではないということだ。環境防災科の先生の「みんなを引っ張っていくのは表に立つ人間だけの仕事ではない」という言葉があった。私自身その言葉を聞いたのがボランティアにあまり参加していなかった時だったので、その言葉の意味がきちんと理解できていなかった。しかし、表に立つ仕事と裏方として頑張る仕事を体験して、その言葉の意味がようやく理解できた。どちらか一方だけが頑張っているようでは決して良いボランティアはできない。私はそう確信した。

2つ目はどんなに計画を立てて準備をしてもイレギュラーは起こるということだ。学校での避難訓練運営の際に私たちは避難訓練を計画していた。自分たちでチェックをしあって、環境防災科の先生にも了承をもらい、誰もが完璧だと思っていた。しかし、避難訓練を実施する日になり、いざ実施をすると私たちのクラスが放送の待機命令の前に避難行動を行ってしまった。私たちは計画と違うことが突然起こったので、一瞬パニックになりかけた。しかし、みんながその場で連絡をしあって臨機応変に対応することができた。様々な講義を受けて何事にもイレギュラーはつきものだと言われていたが、自分で体験してようやく実感がわいた。イレギュラーは予想できるものではないし、起こらないようにするのも難しい。イレギュラーも計画のうちに入れて考えることや、臨機応変に物事をとらえられるように力をつけるのが必要だと思った。

5 夢と防災

私の将来の夢は医療の道に進むことだ。そのような夢を持つようになったきっかけは2つある。

1つ目は母の影響だ。自分のやりたいことが定まらず進路に悩んでいた時、母から看護の道に進んでみたらどうだろうと提案を受けた。初めはあまり興味が湧かなかったが、調べていくうちに看護の中にも色々な道があると知り、少し興味を持つことができた。

2つ目はコロナ禍での医療従事者の活躍だ。以前まではテレビの報道などで医療従事者の活躍をたまに見る程度だったが、コロナ禍の影響で頻繁に見るようになり、その姿がとてもしっかりとしたものだった。私自身もそういった姿に憧れて看護の道を目指し始めた。

夢と防災についての関わりはとても密接なものだと思う。母から話を聞いて、看護師は被災者救助の面ではとても大事な存在なのだと感じた。例えば、学校などの避難訓練はよく聞くが、病院での避難訓練はあまり聞かないので病院での避難訓練の実施などを考えたいと思っている。病院では体に障害を持っている方や精神的な問題を抱えている患者さんがいる。そのため、学校の避難訓練みたいにスムーズには進まないと思う。だからこそ、避難訓練を実施する必要がある、病院だからこそその工夫が必要になってくると考えている。近い将来南海トラフ巨大地震が起きると言われているが、南海トラフ巨大地震が起きた時も当然だが医療従事者が必要になってくるだろう。南海トラフ巨大地震はいつ起きるかわからないけれど、自分にできる備えはたくさんあると思うので、できることから1つずつ取り組みたいと考えている。

6 最後に

私は今回の「語り継ぐ」を通して、語り継ぐことの意味を再確認することができた。語り継ぐことが大切な理由は1つだと私は考えている。

それは震災の風化を防ぐことだ。どんなに被害が大きかった災害でも語り継ぐ人間がいなければ風化してしまう。震災の記憶が風化してしまうと震災を知らない世代が災害を経験したときに大きな被害を受けてしまい、同じことの繰り返しになってしまう。それを防ぐために語り継ぐことは必要だと思う。両親の震災体験を聞き、自分の3年間を振り返ると、より自分のなかで語り継ぐ気持ちが強くなった。私は環境防災科に入学したばかりの頃はあまり防災に興味がなく何事にも無関心だったが、不思議なことに今は防災に興味を持つことができている。ボランティアにも積極的に参加し、自分でも自発性が育ったと実感している。それが入学前と大きな違いだと考えている。震災を経験していない世代に語り継いでいくといっても、そもそも私たちが未災者では何もすることがないと思っていたが、私たちが震災について知ろうとする姿勢に意味があり、その姿勢を下の世代に見せるだけでも意味があると思った。これから環境防災科を卒業しても災害について学ぶことを忘れずに暮らしていきたいと思う。

過去から未来へ

山本 翔一

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、このとき神戸の街が一瞬にして豹変したことを、私たちは知らない。この大災害から28年という年月が経とうとしている。私たちはこの大災害から9年後に生まれた世代である。そのため、この災害がどのような爪痕を残していったのかも知らない。28年は私にとっては長いように感じる。しかし、この時代の中では、ほんの一部の出来事でしかない。その28年の中で、神戸の街は大きく進化、発展し、震災の面影はどこにも見当たらない。

神戸の街に住んでいる人の半数は、この阪神・淡路大震災を経験していないという。そのため、だんだんと震災の記憶が風化されていく。環境防災科で多くの震災の状況を学ぶことができた。そして、防災・減災の大切さを知ることができた。だからこそ、私たちが震災を知らない人たち、経験していない人たちに繋いで、語り継いでいきたいと思う。

2 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入学しようと思ったきっかけは、中学2年生の時に経験した豪雨災害である。私の母は六甲アイランドにある自動車教習所に勤務していた。その豪雨の日は朝から雨風が強く、波も高かった。母はその日は会社を休んでいたためその豪雨には巻き込まれなかったが、母の会社は高潮や朝から降り続いた豪雨の影響で浸水してしまった。その時に母から見せてもらった写真は今でも頭の中に残っている。そのときから私は防災について少しずつ興味持つようになった。そしてこの舞子高校に環境防災科があることを知り、人と違うことをすることが好きだった私は入学することを決めた。

(2) 入学して

環境防災科に入学してからの3年間はとても大変だったが充実していたと思う。ボランティア活動、勉強といった多くのことが初めてだった。特にその中で私が印象に残っている授業がある。それは3年生の時の「Active 防災Ⅱ」の授業だ。私はその中で自分の夢を見つけることができた。この授業を受けるまでは、私は夢がなかった。私はただ単に、ほかの人と違う勉強がしたくて環境防災科に入った。そんな時にこの授業で夢を見つけることができた。だからこそ私に目標を与えてくれた授業だ。

また、環境防災科は3年間クラスが変わらない。これは、ほかのクラスにはないことだ。これは私にとってはとてもいいことだったと思う。なぜなら、絆が深まり、いろいろな行事を通して団結力が強くなった。災害時は団結力が大事になると考えている。だからこそ団結力というものを大事にしたい。

(3) 新型コロナウイルス感染症

私は新型コロナウイルス感染症による影響によって、新しい防災を見つけることができたと思う。入学してすぐに新型コロナウイルス感染症の影響で休校になり、ボランティア活動も制限されながらこの3年間を過ごしてきた。そのボランティア活動が制限される中、東北訪問も時期を変えて行われた。このように新型コロナウイルス感染症にはマイナスのイメージが強いだろう。しかし、考え方を変えればプラスなこともある。新型コロナウイルス感染症があったからこそ知ることができるものだってある。その1つとして災害時の避難生活を挙げるとしよう。

想像してほしい。実際に感染症が流行している中、東日本大震災のような大規模災害が発生したとする。そのような災害が起きると、多くの方が近くの避難所に避難することだろう。しかし、世の中には感染症が流行している。避難するのに感染症が怖いという人もいるだろう。そのような状況になったときはどうすべきなのか考えることができる、いい機会になったのではと思う。その中で私は分散避難というものをひとつの案として挙げる。私が考える分散避難とは、車で避難した人は車と体育館の2つを、1日ずつ交互に移動して避難生活を送ってもらい、徒歩で避難してきた人には教室に分かれて密にならないように避難生活をしてもらうというものだ。そこで、「なぜ車で避難してきた人は体育館と車を移動しないといけないのか」という疑問が起きるだろう。その理由を話していこう。

過去に熊本地震が起きたことは知っているだろうか。熊本地震では、車で避難する人が多くいた。車の避難生活は同じような体勢が長時間続く。長時間同じ体勢を続けることで血の巡りが悪くなり、エコノ

ミークラス症候群を引き起こしてしまう。熊本地震ではそのエコノミークラス症候群で亡くなる方が多くいた。

このように、エコノミークラス症候群などの二次災害で亡くなる方も多いことから、二次災害の被害は防ぐことができると考えた。私はこのような二次被害を出さないために、提案した分散避難をまずは地域に広めていきたい。

（４） ボランティア活動

私はこの環境防災科に入って、多くのボランティア活動に参加した。その中で私が一番感じたことは、環境防災科と地域との関りが深いということだ。

これは私が多聞東地域の防災訓練に参加した時の話だ。その防災訓練は、地域の方が中心に開催しているもので、その地域に住んでいる方たちが自主的に参加している。そのように地域を挙げて防災に取り組み、そこに環境防災科の生徒が参加して、舞子高校と地域が団結して防災力を高めあっていくということに私は魅力を感じた。

また、私は多くの出前授業に参加した。そこでは、自分たちが得た知識を広げる活動を行った。そこで私は、自分が得た知識を復習するとともに、伝える大切さも知ることができた。だからこそ、この「語り継ぐ」という意味を知ることができ、繋いでいきたいと思うようになった。

３ 阪神・淡路大震災

（１） 母の話

母は神戸市西区の自宅に住んでいた。１月１７日午前５時４６分、「ドンッ」という音とともに、下から突き飛ばされた感覚が母を襲った。大きな揺れとともに、テレビや本棚が母の寝ている上を飛び越えていった。母はその日、なぜかはわからないが、頭の向きをいつもと反対にして寝ていた。地震が起き、いつも頭を置いている場所を見ると、そこには自分の上を飛び越えていったテレビや本棚、そして近くにある筆筒が積み重なっていた。そのため、母は奇跡、いや偶然にも頭を反対にして寝ていたおかげで助かったのだ。もし仮に母が頭をいつもと同じようにして寝ていたら、母は亡くなっていたかもしれないという。

（２） 普通の考えを失った日

母は当時、私からすると祖父、祖母、そして母の３人で暮らしていた。その当時は祖父がまだ仕事をしていたため、祖父はすぐに家を出ないといけないといったことになった。祖父の仕事は鉄道の整備士で、当時は JR の鷹取工場に勤務していた。母は祖父を明石駅まで送ることになった。しかし、地震の影響で道路に亀裂が入り、通常なら 15 分で行けるところが、45 分ほどかかってしまった。祖父は明石駅に着いたが、駅のシャッターが閉まっております中には入ることができなかった。そして外に出て線路の様子を見てみると、線路がうねるように曲がっていた。これでは会社に行けないと思い祖父は、自宅に帰るために迎えの電話しようと近くの公衆電話に向かい、そこで電話をかけた。しかし、電話はつながらない。周りを見てみると、祖父と同じように電話をしたいと思っている人が 4、5 人いた。何度も電話をしたが祖父は諦めて、近くにいた人の車に乗せてもらい、家に帰ることにした。その道中は人生で一番とっていいほど大変だったそうだ。地震の影響で亀裂が入った道路、倒壊した家屋が車を妨害する。そして車の渋滞。これらのことが重なって、30 分で家に帰れるはずの道が 2、3 時間かかった。そして、祖父は私にこう教えてくれた。「あの日だけは普通の考えを失った」私はこの言葉をいつになっても忘れることはないだろう。

（３） 父の話

父は当時中学 3 年生だった。自宅も神戸市西区にあり、地震が発生したときはまだ寝ていたようだ。地震が起き、気がついた時には大きな揺れが父の家を襲っていた。父が感じたことは、大きな巨人が家を横に揺らしているようだったという。それ以降はあまりにパニックでそこまで覚えていないという。

（４） 消防団に駆り出された祖父

父方の祖父だが、その祖父は地域の消防団に所属していた。そして、地震発生当日の夜には消防団の招集がかかり、出動することになった。出動先は長田の火災現場だったそうだ。そこで長田の住民の救助活動を行っていたそうだ。そして、朝救助に行っては、夜に帰ってきて、また次の朝には出動する。このような生活が約 3 日～4 日続いたそうだ。

(5) 両親が大変だったこと

両親に阪神・淡路大震災の中で何が一番大変だったのかと聞くと、考える暇もなく「水の確保」が一番大変だったと答えてくれた。しかし、両親とも住んでいた場所が恵まれていたそうだ。まずは母のほうから話していこう。

母は当時、白水という神戸市西区の端のほうに住んでいた。地震が起き水道が止まってしまい、水がないといった状況だが、近くに川が流れており、その川の水がきれいだったため、飲み水にはできないが、お風呂には入れていたそうだ。水を沸かすのに必要だったガスは止まっているが、母の実家はプロパンガスを使用していたため、ガスに困ることはなかったという。

父の実家は母の実家がある白水の隣の地域、赤羽というところにあった。そして実家の前に当時は水源地といういわゆる浄水場のような施設があった。震災発生直後に、水源地のスタッフが水源地の栓を開けてくれたようで水はすぐに手に入るような状況になった。父の実家も、その当時はプロパンガスを使用していたため、お風呂の水を沸かすことには困らなかったという。

両親とも水が大変だったと言っていたが、ほかのライフラインは大丈夫だったのかと聞くと、電気には困ったが、水に比べるとまだ大丈夫だと言っていた。

4 話を聞いて

私は両親の話を聞いて、実際に地震が起きると何が起きているのか、今どのような状況なのかがわからなくなるのだと思った。私は生まれてきてから阪神・淡路大震災のような大きな地震を体験したことがない。体験したからこそ伝えていくことのできる部分は多くある。そのほかにも、母方の祖父が会社に行くために明石駅に向かったが、線路が右に左にとうねるように曲がっていたという話も聞いた。そして普段なら30分で帰れるはずの道が、2、3時間かかったことに驚いた。このことから、私は地震がおきたら普段どおりという言葉が一瞬にしてなくなってしまうことに気づいた。そして、普段どおりの生活に少しでも近づけるように対策しておく必要があると改めて感じることができた。

5 自分の夢

私は将来になりたい職業はない。やりたいことがなく、自分の思うように過ごしてきてここまで来た。しかし、この環境防災科に入学して、1つの夢を見つけることができた。それは、地域の消防団に入ることだ。なぜ消防士ではなく、消防団なのか、そう思った人もいるだろう。それは父の影響が大きかった。私の父は消防団に所属しており、幼いころからその姿を見て育ってきた。私はそんな父に憧れを抱いてきた。紺色の服にオレンジの文字で「KOBE」そう書かれた服に袖を通してみたいと思うようになった。

そんな父にあこがれを抱いているが、消防団は職業ではない。消防団に所属している人はみな、本業をしながら消防団の活動をしている。私の父だってそうだ。私の父の本業は車の整備士をしながら大手ガソリンスタンドの接客をしている。本業もして、消防団の活動もする。しんどいと思う人も多いだろう。しかし、私はあこがれている父を超えたい。父にできることなら私だってできる。そう思っている。だからこそ、私は消防団に入って父をも超える団員になりたいと思っている。

6 自分の好きなことと防災

私は人と話すことが好きだ。環境防災科に入って、発表やグループワークをする機会が多くなった。発表やグループワークを通して、自分の好きなこと特技を見つけることができた。2年生の時に「Active 防災Ⅰ」の授業で、自分の長所を活かした防災バッグを作る機会があった。私はもちろん長所にコミュニケーション力というものを挙げた。そのバッグの中にはシャボン玉、ホワイトボード、風船など、子どもたちだけでなく、耳の聞こえにくい人ともコミュニケーションをとれるように工夫した。

このコミュニケーション力、時には短所とも捉えられることがある。人と話す中で、「馴れ馴れしい」そう言われたことだってある。しかし、私はこのことについて短所だとは思ったことがない。なぜならこのコミュニケーション力は絶対に災害時に役に立つと思うからだ。この環境防災科に入って私は、災害が人々にもたらす混乱について知った。避難しなければいけない状況で、どこに避難するのがいいのか、このようなことは誰も教えてくれない。その時に私は、自分のこの特技を活かして、地域の人たちに避難場所や避難経路を指示できる人になりたい。また、私の住んでいる地域は高齢者が多く住んでいる。その中で私のような高校生がお年寄りと一緒に避難することで、東日本大震災で起こった「釜石の奇跡」と言われた出来事をつないでくことができる。

私は消防士や警察官のように直接自分の手で人を助けることはできない。しかし、特技を活かして一つ

でも多くの命を助けることはできる。だからこそ、私はこの環境防災科で防災を学んだことをもっと自分のものにして、災害時に活かせるようになりたいと思う。

7 最後に

私はこの「語り継ぐ」の執筆にあたって、自分の過去の3年間を振り返ることができた。その中で私は多くの災害を学ぶことができた。阪神・淡路大震災は昔からなじみのある言葉だが、この環境防災科に入学するまでは、私の中では単なる出来事にしか過ぎなかった。「災害」その言葉は私には関係ないと、中学の時はそう感じていた。神戸という町に生まれた私は、阪神・淡路大震災のような悲惨な災害を繰り返さないようにしたいと思っていた。はじめは防災に興味などはなく、知識も乏しかった。このような防災に無知な私が、「語り継ぐ存在」になってもよいのだろうか。入学から1年間はそう思い続けてきた。しかし、学んでいく中でなってもよいのかではなく、ならないといけないのだと思うようになった。多くの被災された方の話を聞いていく中で、いつかはこの人たちも伝えることができなくなっていく。そう考えるうちに自然とこの思いが浮かび上がってきた。はじめは環境防災科に入学して後悔していた私は、今となっては、誇りに思っている。特に、祖父が自慢してくれることが一番入学してよかったと思っている。防災に無知なこと、それは誰だって同じことだと気づくことができた。その無知なことをそのままにせず、1人でも多くの方が防災のことを少しでも知ってもらえたら幸いだ。そして、今後起きる大災害による被害が少しでも減ることを願っている。だからこそ、私たちが自分なりの言葉で多くの人に繋いでいかなければならないのだ。そしてこの「語り継ぐ」を読んだ方も自分なりの言葉で繋いでいってほしい。

行動してみる

山本 陽輝

1 はじめに

阪神・淡路大震災から28年を迎えようとしている。震災を経験していない私たちは何をしたらいいのだろうか。環境防災科も20周年を迎えた。阪神・淡路大震災で学んだ教訓を活かし、それを次の世代につなぐのが私たち環境防災科の役目であり使命である。私も経験者の話を聞いてそれを発信することはできる。経験してなくても、その方の思いや経験を尊重すれば必ず思いはつながるはずだと私は考える。そのためにこの「語り継ぐ」はあると思う。

災害が発生して物が壊れたり、人の命がなくなったりするという事は元々知っていたが、環境防災科で学んできて、心の支援などの災害後という視点まで持つことができた。災害というものは、多くのことが関わりあって起こるものということを環境防災科の学びで知ることができた。

今、我々は生きている。それが一番の幸せであるということは忘れてはいけない大切なことである。そのことを忘れず今という時間を大切に、生活していきたいと思う。

2 環境防災科

(1) きっかけ

私がこの環境防災科に入学したきっかけは2つある。1つ目は、父が防災関係の仕事をしていて災害の話をよく耳にしていたことである。2つ目は私が幼稚園児の時にテレビで、東日本大震災の津波の様子を見て、自分には何ができるかと、当時、幼稚園児の私でも考えたことから防災について学びたいと思ったことである。

私は小学生の時から毎年1月になると、防災教育を受けていて、今もなおはっきり覚えている先生の話がある。阪神・淡路大震災の時その先生は長田に住んでいて、地震後何とか自宅から近くの公園に避難した。その時に上空に多くのヘリコプターが飛んでいて、そのブーンというヘリコプターが飛ぶ音がとても耳に残っているそうだ。その音がトラウマになっていて、ヘリコプターの音が聞こえると震災を思い出してしまうという話を小学2年の時に聞いた。その話が衝撃的で、日常で聞く音にも敏感に感じさせる震災の恐怖さをここで理解した。

中学生になると阪神・淡路大震災の時の自身の経験を話してくださる先生もいた。それに加えて実際に環境防災科の先輩方が来てくださって中学生にもできる防災について教えてくれた。高校生が非常用持ち出し袋の説明や地震が来た時の行動などについてパワーポイントを使って教えてくれた。この時に分かりやすく説明している先輩方が頼もしく見えて、私もこのメンバーの一員となって防災を学びたいと強く思った。この出来事が環境防災科に入学しようと決めた決定打となった。

(2) 出前授業から学んだこと

環境防災科に入学して、1年生の時から授業の一環として出前授業に行かせていただく機会も多く、色々な経験を積んできた。最初に経験したのは、小学生に防災を教えるというもので、液状化現象や三角巾を使っての応急処置の仕方を教えた。また2年生の時にも、減災という視点から出前授業を行ったこともあった。数々の出前授業で一番苦労したのは、準備だ。今まで主に小学生に向けて授業をしてきて毎回教えるテーマも違えば、教える相手が小学校3年生や6年生のように、学年も違う。当然授業中に使う表現も変わってくるし、色んな場面で工夫をしないといけないことが苦労した点である。授業では、間違った情報やあいまいな情報を伝えると混乱を招くため、準備ではかなり詳しく知識を蓄えた。

出前授業で私にとって、一番プラスな面は先ほども書いた通り、授業を行わせていただくうえで自分の知識をより増やすことができる点だ。発信者である私たちも授業を通してより知識を吸収することができたので、双方において貴重な経験を積むことができた。また私たちも、話を伝えるときに反応してくれる児童がたくさんいて、その時にやりがいを感じた。出前授業はかなり貴重な経験で、得るものが多かった。

(3) 1.17 震災メモリアル行事

舞子高校では、毎年1月17日が近づくと震災メモリアル行事が行われる。様々な学校の方々や他校のジュニアリーダーの高校生が舞子高校に集って全体会や分科会を行う。私は、全体会で齋藤先生が話され

たある言葉がとても印象に残っている。それは、「恩送り」という言葉である。恩返しとは、自分が相手にされたことをその相手に返すことだが、それに対して恩送りとは、自分がされたことを相手に返すのではなく、その他の人に恩を送るということである。恩送りができる人は、優しい人にきつとなれるという話を聞いて、私も恩送りができる人になりたいとこの話から感じた。

また私は、高校2年生の時に西脇工業高校を紹介する分科会の司会をやらせていただいた。舞子高校で学んでいる防災と西脇工業高校での技術を合体させて、1つの防災グッズを作成していこうとしていることを学んだ。

(4) 消防学校を通して

環境防災科では、1、2年生で神戸市消防学校に行かせていただく。これは市民のリーダー力を育成することを目的としたものである。1年生の時は、煙体験や、VRによる災害体験を行った。また、規律訓練を通して、クラスの力が1つになった気がした。2年生の時は1年生の経験を踏まえ、放水訓練など実際に道具を扱わせていただく活動を行った。私は消防関係に就こうとは考えてはいなかったが、私たちのために熱心に指導してくださった指導員の皆さんの対応や肉体はとても頼もしく見え、模範にしたい存在になった。

私は、2年生に行ったときにセンター長さんに言われた言葉がとても印象に残っている。それは「組織で重要なのは2割のリーダーシップと、リーダーを周囲の人が支える8割のフォロワーシップである」というものだ。リーダーのみが頑張っても当然物事はうまくいかない。むしろリーダー以外の人が積極的に行動しないといけないという話だった。私はリーダーになることも当然あるが、フォロワーにあたるのがほとんどなので、リーダーを支えられるような人員になりたいと感じた。

3 阪神・淡路大震災当時の話

(1) 父の話

父は、当時高校1年生で但馬地域の築40年以上もの木造建築の家に家族で住んでいた。普段は2階に部屋がありそこで寝ていたというが、その日は連休明けということもあり、1階の和室で寝ていたという。そして、午前5時46分に地震が襲う。その揺れで目が覚めた父は、感じたこともない揺れに衝撃を受けた。「ギンギン」と家がきしむような音がして、「真面目につぶれるかも・・・」と思った。高校生だった父は、とっさに毛布で体を隠したそう。但馬地域は震度5を記録したが、幸い家族や、近所からはこの地震によって亡くなった方はおらず、大きな被害を受けたということもなかったそう。その後午前7時頃にテレビをつけると、火事の映像や、家が倒壊している様子が放送されていた。それを見てようやく状況がつかめた。同じ兵庫県での被害とあって衝撃的だったという。父が通っていた高校はその日、臨時休校になり家で待機していた。父は当時を振り返って、当時は日本でも今ほどの防災意識は持っておらず、ボランティアや人のために何かしようという発想はそもそも頭にはなかったという。父の言葉からいうと、「他人事」だと思ったそう。この震災から防災と人との関わりを考え始め、ボランティア元年という言葉ができたと言った。

(2) 母の話

母も、若干場所は違うが、父と同じく但馬地域に住んでいて、当時高校2年生だった。震災の朝、チラチラと雪が降っていてとても寒い朝だった。当時家には、祖父、曾祖母、そして4人兄弟が住んでいて、私の母は4人兄弟の次女だった。母が住んでいた地域も震度5を記録し、幸い母の家やその近所の家も被害は受けなかったそうだが、家族全員が衝撃を受けたという。揺れで目が覚めた母は、そこから寝るのが怖くなった。その日に高校から連絡もなく、授業があるのか分からなかった。とりあえず高校に向かってみると、いつもと同様に授業は行われた。その日に、友達と学校で会えて安心したという。予定通り授業は行われたが、授業中に何度も震度2、3の余震が発生した。そして学校から帰宅し、テレビで阪神高速が崩れている様子や、火事の映像を見て衝撃的だったという。当時は、父もそうだったがテレビでしか情報がつかめなかったため、家族全員が不安な気持ちでテレビの映像をずっと見ていた。

4 震災当時の話を聞いて

父と母は、今の私とほぼ同じ年齢の時に阪神・淡路大震災を経験している。私は高校生として今生活していて抱えている悩みや、色々考えることもたくさんあり、今までの人生で一番苦労していることを実感している。私の両親も同じ高校生の時にこの地震が発生し、ただでさえ多感な時期であるのに地震の不安

もまじっていてもとてもストレスも溜まったのだらうと今の私と置き換えてみて感じた。また、2人の話から阪神・淡路大震災までは地震についてはあまり考えておらず、地震は人生のなかで起こらないものだと思っていたほど防災意識が低く他人事だと思っていたことを感じた。この阪神・淡路大震災からボランティア活動も活発化したこと、人々の防災への考え方や行動が大きく変化したことを話から感じた。また、但馬では正直被害はなかったのも、あまり揺れは起こらなかったのではと思ってしまった自分もいたが、大きな誤解で場所は違うが、大きな揺れを観測したことも理解した。

5 夢と防災

私の将来の夢は、公務員の職に就くことである。公務員といっても様々だが県職員や市職員になりたいと考えている。きっかけは、父が防災関係の仕事を一時期して主にフェニックス共済の対応をしていたことだ。東日本大震災の年の6月に現地に行ってボランティア活動を行ったという。そんな父の話を聞き、防災に関心をもち、この環境防災科で学びその知識を大人になっても活かしたいと思い、この職業に就きたいと思った。

兵庫県は、阪神・淡路大震災から得た教訓をもとに災害対応を行っている。例えば、阪神・淡路大震災の時に困ったことは、県と企業との連携がうまくいかなかったため、救援物資がほしい時に手に入らなかったことだ。そのため、現在では普段から県と企業との連携を行っている。また、24時間対応できるように兵庫県庁の近くに宿舎を設置し、緊急時にすぐ対応できるように対策を行っている。

しかし、この激動の時代に、温暖化による豪雨災害や、今後高確率で発生するであろう南海トラフ地震などの巨大地震、そして今もなお流行中の新型コロナウイルス、これが3つ同時に発生すると日本はどうなってしまうのか。おそらく現状で考えると大きな被害をもたらすだろう。しかし、これからの時代はそういう事態も十分考えられる。今から社会を担う私たちがこの事態に対応しないといけないかもしれない。ここで私たちがやらないといけないことは、できることから始めることだ。例えば、今の段階で災害の備えができていくかのように小さなことでいいから、できることはきちんとできるようになって、それを積み重ねられると先ほどのような例には対応できる力を持つと私は思う。大事なことは、職業問わず若者がいかに使命感をもって社会と向き合うかにかかっていると私は考える。

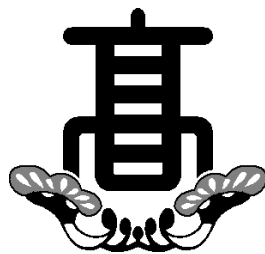
6 私の好きなこと

私は、お笑いが大好きである。小さい頃から笑うことが大好きで、よくテレビでも漫才やコントを見ていた。なぜ、今お笑いが好きだと主張したかという、自分の好きな事や趣味は、災害時になっても活かせるということを伝えたかったからだ。私はお笑いが好きという例をあげたが、例えば、野球が好き、音楽を聞くのが好きなどなんでも構わない。要は、自分自身が好きなことというのは、言い換えると自分の強みであるともいえるだろう。私の例でいうと、笑うということは脳を活発化し、幸せホルモンが分泌されて、プラス思考になることが報告されている。別の例でいうと、マッサージが得意な人がいれば避難所生活でストレスを抱えている方の肩をほぐしてあげることができるだろう。さらに肩をほぐす際に軽い世間話をしながら、徐々にほぐしていくと初対面の方でも緊張がほぐれて、肩も温まるそうだ。おそらく読者の方々も一つは趣味や好きな事はあるだろうし、緊急時にもそれらは使える場面は十分あると思うので、自分の強みを大切にしてほしいと思った。

7 最後に

「語り継ぐ」の作成にあたって、もし自分が1995年1月17日の午前5時46分に生きていたとしたら、自分のことしか考えられないと思う。それ以上に、何も考えられず放心状態になっていたと思う。いかに阪神・淡路大震災が恐ろしい出来事だったか、この「語り継ぐ」の執筆にあたって身に染みて感じた。しかし私たちは、この経験が無駄にせず今からの世代に活かしていかなければならない。現時点でもライフラインの対策や、避難所の設備など様々な対策がなされている。では自分事と置き換えてあなた自身、備えはできているだろうか。タイトルにもあるようにまずは行動しなければ何も結果は起こらないし、行動しなければ見えないこともたくさんある。これは私が今まで生きてきたわずかな経験からでもいえることだ。私は、神戸の街が大好きで、きれいな海や大きくそびえたつ六甲山など、神戸には良いところがいっぱいだ。そんな神戸を絶対に壊されたくない。みんなが大好きなあの風景を二度と崩されたくない私は強く思う。南海トラフ巨大地震が来るかもしれないといわれている現在、いくら社会全体が対策を練っていても個人が行動しないと無駄になると思う。これは防災のみならず何事にも置き換えることは可能で、自分自身でアクションを起こすことが自分のためにもなるし、実はそれが社会に貢献するというこ

とにも繋がってくると私は信じている。ぜひ、この「語り継ぐ」を一読していただいた皆さんには、今日からでも何でもいいので行動を起こしてほしいと思う。また当たり前の生活は当たり前ではないということを理解してほしいと思う。朝に家族や友達、先生に挨拶をしたりみんなと話したり、部活や仕事をするということは奇跡であるということ。つまり、普段の生活は当たり前ではないということだ。いつ災害に襲われるかわからないし、家族や大事な人が亡くなってしまうかもしれない。だからこそ普段から毎日の生活は、かけがえのない時間であるということを第一に考えてほしい。



兵庫県立舞子高等学校

〒655 - 0004 神戸市垂水区学が丘3丁目2番

Tel : 078 - 783 - 5151 Fax : 078 - 783 - 5152